

令和2年度

実 践 集 録

主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組(2期目)

(1年次/3年計画)

高知県立日高特別支援学校

は じ め に

特別支援学校学習指導要領が、今年度から小学部において完全実施となりました。そして、来年度からは中学部において完全実施となり、令和4年度からは高等部において学年進行で完全実施となっていきます。私たち教職員は、順次実施されていく学習指導要領に基づいて、児童生徒の資質・能力の育成に関する3つの柱「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を意識した授業づくりが求められるとともに、3つの観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」で児童生徒の学習評価を行っていかねばなりません。

本校においては、新学習指導要領実施以前から「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」を校内研究のテーマとして、第1期実践研究として平成29年から3年間にわたり取組を行ってきました。今年度は、第2期の実践研究1年目の取組ということで、本校における「主体的学び」「対話的学び」「深い学び」を改めて整理し、新たな項目・内容を「学習過程分析表(2020)」に落とし込み、それを活用して授業づくりを行ってきました。

今年度はさらに、本校独自様式である「学習指導略案」を作成し、研究授業及び公開授業で活用してきました。この「学習指導略案」には、前年度に作成した「学習過程分析表(2019)」に記載してあった「注目してほしい学習活動」や「注目してほしい児童生徒の評価」の項目を組み込むと同時に、学習指導要領及び「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点をどのように取り入れて授業づくりを行っているのが明示されています。この「学習指導略案」及び「学習過程分析表(2020)」を授業づくりの際に活用していくことで、学習指導要領や「主体的・対話的で深い学び」をしっかりと意識した授業づくりが行えるようになりました。また、授業後の事後協議において、ポイントを絞って協議が行えるように、「事後協議シート(2020)」を作成し、研究授業後の事後協議に活用してきました。

本校では、来年度から「個別の指導計画」等の作成及び評価において、学習指導要領で求められている評価の3つの観点「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に基づき、作成・評価を行っていきます。そのための前哨戦として、今年度、作成・活用してきた「学習指導略案」における学習指導要領との関連付けが生かされてくるものと期待しています。

今年度活用してきた「学習過程分析表(2020)」は、全ての教科において活用できる段階にこぎつけることができましたが、まだまだ改良の余地が残されています。さらに使い勝手の良いツールになるよう、研究部を中心として、全ての教職員が携わりながら研究を重ねていきたいと思えます。

最後になりましたが、校内研修において貴重なご指導、ご助言をいただいた、高知県立大学教授 石山貴章 先生をはじめ、関係の皆さまに厚くお礼申し上げますとともに、この実践集録の編集を担当された研究部の先生方のご労苦に深く感謝申し上げます。

令和3年3月

高知県立日高特別支援学校長 利岡 徳重

《目 次》

はじめに

I	本年度の教育	1
II	校内研究の取組	3
III	小学部の研究	14
	A組	
	B組	
	C組	
	D組	
	E組	
IV	中学部の研究	90
	1年：	
	2年：	
	3年：	
V	高等部の研究	163
	1年：	
	2年：	
	3年：	
VI	寄宿舎の研究	271
VII	本年度の研究のまとめ	285

I 本年度の教育

1 校訓

明るく、正しく、たくましく

2 教育方針

子どもの学ぶ楽しさや、生きる喜びを育てる教育を通して、教育目標を達成する。

3 教育目標

- (1) 児童生徒一人一人の能力・適性に応じた教育活動を充実させる。
- (2) 児童生徒の自立する力をつけ、社会参加に向けての適応力を高める。
- (3) 家庭や地域、関係機関と連携し、安全で安心できる学校づくりを進める。

4 目指す学校像

- 子どもたちが楽しく学べる学校
- 保護者が安心して子どもを任せられる学校
- 地域にとってなくてはならない存在の学校
- 教職員一人一人が力を発揮できる学校

5 重点取組項目と具体的方策

- (1) 専門性の向上 ＜主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業改善＞
 - ア 「主体的、対話的で深い学び」の視点に基づいた研究授業を年間2回実施するとともに、公開授業を全教師、年間1回以上実施する。
 - イ 「授業改善チーム」を編制し、研究授業及び公開授業の参観、授業後の授業研究協議を行うことで、授業づくり・授業改善に取り組む。
 - ウ 学習過程分析表等の活用とその改善に取り組む。
 - エ 外部専門家と連携し、専門的な知識・技能の向上を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の検証を行う。
- (2) キャリア教育の充実 ＜キャリア教育の推進及び進路指導の充実＞
 - ア キャリア発達段階表や就労アセスメントシートを活用し、児童生徒のより適切な実態把握及び評価を行い、系統性のある一貫した指導につなげていく。
 - イ 小学部段階から各地域の福祉サービスに関する情報を収集するとともに、保護者への情報提供を積極的に行い、保護者と情報共有しながら進路に関する意識を高める。
 - ウ 構築したアフターケア体制を関係機関との連携により推進し、本校独自スタイルとして定着させる。
 - エ 進路学習会の計画的実施及び生徒の就労に対する意識・意欲を高めるための生徒による各事業所等の施設見学を実施する。
- (3) 障害者スポーツ・生涯スポーツの推進
 - ア 体育の授業に障害者スポーツの競技種目を積極的に導入し、生涯スポーツへの興味・関心を高める。
 - イ 地域の総合型スポーツクラブとの連携した取組を進め、様々な競技を知ること、地域の総合型スポーツクラブ等の利用につなげていく。
 - ウ 保護者や関係者への理解啓発を行い、休日における「総合型地域スポーツクラブ」の利用を促進する。

エ 各種運動、スポーツ大会に積極的に参加し、社会性や豊かな人間性を育み、共生社会の実現を目指す。

(4) 働き方改革

ア 各分掌部において、業務の平準化を意識した業務分担を行う。

イ 各分掌部・委員会での業務内容の点検を行い、改善に努める。

ウ 学校行事等の企画・実施に当たり、複数の部署が連携して取り組むなどして、業務の軽減を図る。

エ 夏期一斉学校閉庁日の完全実施に向けて、準備を進める。

Ⅱ 校内研究の取組

【令和２年度の研究テーマ】

「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」（２期目）

（１年次）／３年計画

１ 令和元年度までの研究成果と課題

令和元年度は、「学習過程分析表」を更に充実、活用し、「主体的・対話的で深い学び」について前年度の成果をもとに「生活単元学習」の授業研究を行った。授業において学習評価を行い生徒の変容について記録・分析し、その効果を検討した。

取組内容として、まず、学習過程分析表(2019)の充実・改善を行った。「生活単元学習」だけではなく、他の「教科」に対応できるように項目・内容を検討した。事後協議における分析・評価の焦点化を考え、児童生徒の学習の変容に着目し、項目を検討した。また、事後協議のあり方についても検討した。授業づくり・授業改善については、「研究授業(各学部１名：管理職が指定)」２回／年実施をした。また、「授業改善チーム」を編成し、管理職、学部主事、研究部等が授業を参観し、評価やアドバイスをを行った。

元年度の成果としては、「学習過程分析表(2019)」を活用し、授業づくりを行うことによって、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について学習活動を整理して考えることができるようになり、さらに、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点が学習活動に含まれているかチェックできるようになった。「学習過程分析表」は、本来は生活単元学習の授業改善で作成したものではあったが、他の教科等でも活用できる内容になってきた。このことがさらに、「学習過程分析表（2020）」への改編につながることであった。「学習過程分析表（2019）」には、①「注目してほしい学習活動」、②「注目してほしい児童生徒の評価」の項目が追加され、授業の焦点化及び児童生徒の学習の変容の確認が図られるようになった。

群馬大学の霜田教授の助言に基づき、「事後協議シート(2019：仮)」の作成を行った。さらに協議の焦点化と時間の有効活用を図るために、「事後協議シート（2020）」の作成に着手することができた。

事後協議の場に「授業改善チーム」が加わって、事後協議を実施することで、小・中・高の教師の立場から意見交換を行うことができた。

２ 令和２年度の研究の取組

令和２年度は、「生活単元学習」、「作業学習」、「教科」において「学習過程分析表」を活用し、授業づくり・授業改善を行った。「学習過程分析表」を『「主体的・対話的で深い学び」の充実に向けた授業改善の視点（ポイント）』ととらえ、授業づくり・授業改善のためのツールとして活用することで、効果的な授業改善につながり、児童生徒が豊かな学習活動を展開できるのかについて検証を行った。「学習過程分析表(2019)」の見直しをして、「新・学習過程分析表(2020)」を作成し、活用した。「生活単元学習」以外の「作業学習」や「教科」でも活用できるのか検証を行った。

「学習指導案」から、新しい「学習指導略案」の様式を作成した。「学習指導要領」、「新・学習過程分析表(2020)」とのつながりを明示した。また、学習過程分析表の①「注目してほしい学習活動」、②「注目してほしい児童生徒の評価」の項目を新しい「学習指導略案」に移し、授業の焦点化を図り、児童生徒の学習の変容の確認を分かりやすくした。

事後協議における分析・評価については、限られた時間内での効果的な事後協議のあり方を検討し、限られた時間内で実施できる「事後協議シート（2020）」を作成し、活用した。新学習指導略案

の①「注目してほしい学習活動」、②「注目してほしい児童生徒の評価」の項目を盛り込み、授業者と参観者との双方の評価を事後協議で確認し合える形とした。

今年度は、高知県立大学石山教授の助言に基づき、「新・学習過程分析表(2020)」、「学習指導略案」、「事後協議シート(2020)」を各学部の研究授業で活用することを通して、日高特別支援学校としてどのように「主体的・対話的で深い学び」の視点から学習過程を改善し、日々の授業につなげていくのか学校全体で共通理解を深めることができた。

しかし一方で、課題についても意見が出され、特に分析表をより効果的に活用するために各項目を改善していく必要性等に関する意見が多く寄せられた。

研究のプロセス(日高特別支援学校)



図1 高知県立大学石山教授の本校の研究プロセス第1回校内研究会資料(令和2年6月12日)

研究のプロセス, Ver.2(日高特別支援学校)

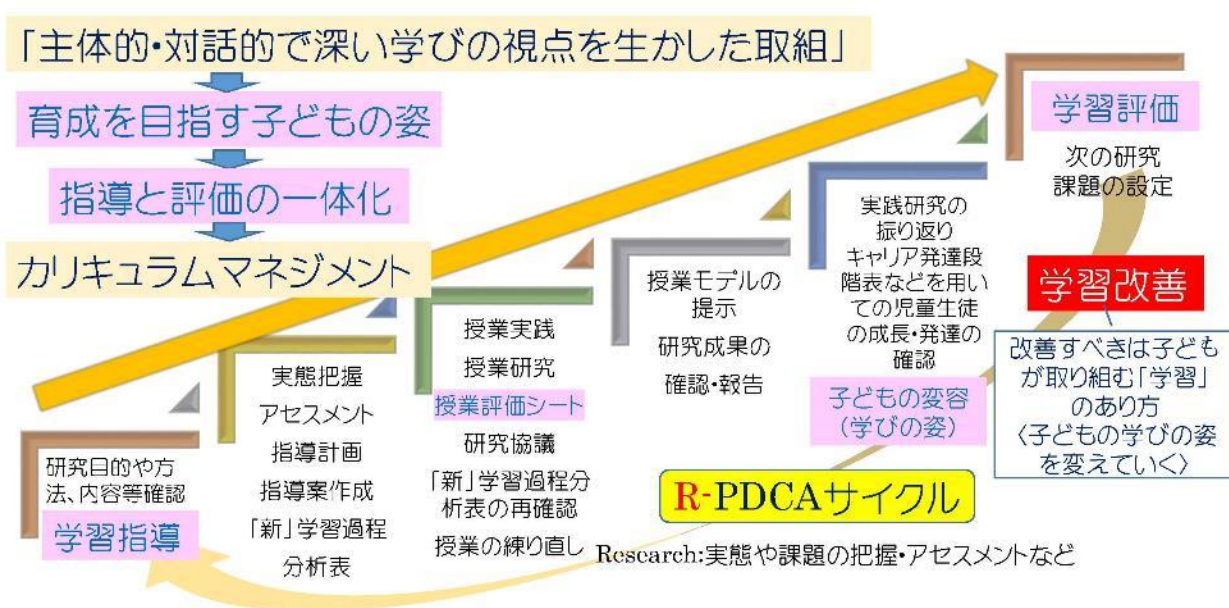


図2 高知県立大学石山教授の本校の研究プロセス第5回校内研究会資料(令和2年12月25日)

3 令和2年度の校内研究方針

(1) 校内研究の目的

「日々の学習活動に『主体的・対話的で深い学び』の視点を効果的に位置付け、授業改善につなげることにより、児童生徒が豊かな学習活動を展開できる」との仮説をもとに、授業分析・評価ツールの作成・改善等を通して、教職員の専門性の向上を図る。

(2) 取組内容

ア 学部・寄宿舍ごとの研究テーマ設定

昨年度と同様に全校テーマを受けて、学部・寄宿舍ごとに以下のようにテーマを設定し、研究活動に取り組む。

- ・小学部：子どもの主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組～よりよい支援や教材の工夫をめざして～
- ・中学部：主体的・対話的で深い学びの視点を生かした生活力を育てる取組
- ・高等部：主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習
- ・寄宿舍：主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組

イ 校内研修会及び学部研の実施

年間を通して、表1のように校内研修会及び学部研を計画し研究活動を進める。

表1 校内研修会及び学部研 年間計画

月	日	研修内容
4	中旬	学部研究テーマ等の協議
5	30	学部・寄宿舍ごとのテーマ・研修計画締切
6	12	第1回校内研修会 講演「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」 講師：高知県立大学 石山貴章 教授
7	31	第2回校内研修会 人権研修会 ・講演「高知市子ども家庭支援センターの業務、要対協の役割や虐待の具体例」 講師：高知市市役所こども未来部 子ども家庭支援センター 子ども家庭相談担当係長 永野 尊士 氏 主任 和田 昭恵 氏
8	5	第3回校内研修会 特別支援学校教育課程研究集会 高知県教育委員会 ・講演：「全教科の学習を考えよう～学習指導要領の改訂を受けて～」 講師：高知県立大学 石山貴章 教授
12	11	第4回校内研修会 高等部公開授業研究会
12	25	第5回校内研修会 講演「指導と評価の一体化に向けて」 ～「見方・考え方」「観点別学習状況の評価」「評価規準」の観点から～ 講師：高知県立大学 石山貴章 教授
1	6	第6回校内研修会 人権研修会 ・講演「いじめ問題の基礎知識と学校の対応の留意点」 講師：中西・高野法律事務所 弁護士 高野 亜紀 氏 小川法律事務所 弁護士 小川 敦史 氏
2	26	第7回校内研修会 (研究のまとめと寄宿舍の実践報告会) 講師：高知県立大学 石山貴章 教授

※学部・寄宿舍ごとの研究日は月1回を目途に実施。詳細は各部署の研究経過・研究計画参照。

ウ 研究・公開授業の実施

各学部で研究授業（年２回）及び公開授業（年１回）以上を実施する。なお、研究授業を担当する教員は管理職との協議により決定する。

研究・公開授業では、「新・学習過程分析表(2020)」や新しい「学習指導略案」、「事後協議用シート(2020)」を活用するとともに、学部ごとに事後協議を実施し、以後の授業改善につなげていく。

エ 学習過程分析表の改善

研究・公開授業で活用する学習過程分析表について改善を行い、表２の様式を作成した。

改善にあたっては、昨年度の実践集録において、各学部から出された意見をもとに項目追加及び内容の見直しを行った。

また、事後協議における話し合いでテーマの焦点化及び授業評価につながるよう「注目してほしい学習活動」、「注目してほしい児童生徒の評価」の欄を新しい「学習指導略案」に移した。

オ 事後協議の実施

先に述べた研究・公開授業で事後協議を実施し、教職員間の共通理解を深めるとともに以後の授業改善につなげていく。

実施にあたっては、第１回校内研修会において講師である高知県立大学の石山貴章教授より指導・助言いただいた図１、図２、図３の内容をもとに、小学部から高等部まで基本的な流れを統一して取り組む。

表2 新・学習過程分析表（2020）（学習指導略案添付資料）

I 主体的な学び	
1 学習活動への展開構成	①物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ②自ら考え、活動する場面設定 ③自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容に係る選択肢の提示等)
2 見通しを高める。	①動作補助を含む身体的支援 ②視覚情報による支援（手順表や見本、ジェスチャー等） ③音声言語による支援
3 興味・関心を高める題材及び活動設定	
4 興味・関心を高める教材教具の活用	
II 対話的な学び	
1 モノと関わり、活動につなげる。	①タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ②プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
2 他者に情報を伝え活動につなげる。	①コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ②質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
3 他者からの情報を活動につなげる	①周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似たりして活動する。 ②他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ③他者の良さや失敗を自分の活動に生かす。 ④他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
4 仲間と活動する。	①仲間と同じ活動の中で自分の役割を行う。 ②それぞれの役割を行う。
5 活動を評価する。	①活動を振り返り、自己評価する。 ②他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
III 深い学び	
1 学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。	①様々な情報の中から、自分が必要とするものを選び、学習活動に生かすことができる。 (他人の意見に耳を傾け、従来の自分のやり方を修正しながらより良い方向に活動を展開することができる。) ②学んだ知識を日々の学習活動のいろいろな場面で関連づけていくことができる。
2 学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。	①学校の様々な授業で学んだことを学校以外の場面で身に付けた知識・技能を自分で判断して活用できる。 (様々な生活の場面の中で自分自身の考えでいいものを選び活用できる。) ②学校以外の場面で、自分の思いや考えを周りの人に伝えたり、自ら進んで問題点を見出し、解決策を考えたりすることができる。

表3 学習指導略案

令和2年度 ○○学習指導略案

教科・領域名		授業者	○○ ○○
学部・学年・組	部 年 組 グループ	対象 児童生徒数	○○人
日 時	令和2年○月○日 (○) ○時間目 (○○:○○~○○:○○)	場 所	部 室
単元名			
本時の目標	・ ・ ・		
学習指導要領 との関連	■ ○○部学習指導要領 ・ ・ ■		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 分			
展開 分			
まとめ 分			

注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
研究協議における意見・アドバイス			

事後協議用シート

表4 事後協議用シート（2020）

授業者：〇〇 〇〇		単元名：〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇		
注目してほしい学習活動				
例 展 開 ○	うまく学習できていた 様子（付箋：青色）	学習でつまづいていた 様子（付箋：赤色）	学習のつまづきの改善 案（付箋：緑色）	感想 （付箋：黄色）
例 ま と め ○	うまく学習できていた 様子（付箋：青色）	学習でつまづいていた 様子（付箋：赤色）	学習のつまづきの改善 案（付箋：緑色）	感想 （付箋：黄色）
注目してほしい児童生徒の評価				
目標達成度		改善に向けたアドバイス等		
児童又 は生徒○				
児童又 は生徒○				
授業者へ一言（意見、アドバイス、エール など）				

Ⅲ 小学部の研究

研究テーマ「子どもの主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組

～よりよい支援や教材の工夫をめざして～」

1 はじめに

昨年度、小学部では研究テーマを「子どもの主体的・対話的で深い学びをつくる授業づくり～評価を生かした振り返り～」と設定し、生活単元学習での研究・実践を推進した。その方法として、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点を活用し、授業における児童の変容を客観的に評価する方法として、「授業者（MT・ST）による評価」「参観者による評価」「児童自身による評価」の三つの評価をツールとして活用し、事後協議を行うことができた。

昨年度の成果として生活単元学習の授業では、どの学年も活動の中で自己選択、自己決定の場面を設定したことで、児童の自ら考え活動する場面が増えてきた。また、慣れない活動でも繰り返し取り組むことで知識や技能を習得することができることを改めて確認することができた。

その一方で、事後協議では授業で設定した目標がどれだけ達成できたのか、目標を達成するために必要な教師のよりよい支援や手順書、教材の工夫、視覚支援の活用をどのように検討し捉えていくのか課題として残った。

そこで、本年度の研究テーマを「子どもの主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組～よりよい支援や教材の工夫をめざして～」と設定し、一人一人の児童に応じた教師の支援や手順書、教材等の工夫、視覚支援を生かした授業づくりに取り組むことにした。

また、今年度は「生活単元学習」の他に「教科」においても授業研究に取り組み、新しく導入された学習指導略案を活用し、さらに改善された学習過程分析表を用いて、授業づくりや事後協議を行い、授業改善に取り組んでいく。

2 研究経過

（１）研究内容

ア 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点から、目標を達成するための手立てを検討する。

イ 手立てが有効であったか、目標が達成できたか等の分析を行い、以後の授業改善につなげる。

（２）研究方法

ア 新しい学習指導略案を使って年２回の研究授業及び年１回以上の公開授業を行う。

イ 「生活単元学習」の他に「教科」においても教師の支援や手順書、教材等の工夫、視覚支援を生かし、よりよい支援や教材の工夫をめざした授業づくりに取り組む。

ウ 学習指導略案に設定された注目してほしい学習活動や児童の評価等の欄を活用し、事後協議における検討ポイントを明確化する。

エ 事後協議では、指導略案の注目してほしい児童を中心に、手立てが有効であったか、目標が達成されたか検討・評価する。

オ 実践集録の作成を通して日々の授業実践につながる、研究授業や公開授業、事後協議、学習指導略案、学習過程分析表等の検討を進める。

(3) 研究計画

ほぼ月1回設定されている学部研を研究の柱とし、研究授業や公開授業、事後協議を行い、実践集録の作成を行う。

月日	研修内容
5/8	・本年度の研究テーマの検討
6/1	・年間の研究計画の確認
6/8	・研究テーマの決定
6/19	・D組研究授業
9/12	・クラス研(公開授業準備)
10/6	・クラス研(公開授業準備)
11/20	・D組研究授業
12/1	・実践集録について
1/12	・実践集録原稿読み合わせ・検討
2/5	・本年度の反省並びに来年度の方向性の検討
3/2	・児童の実態把握並びに引き継ぎ資料として「キャリア発達段階表(2020)」「新しい教育課程と学習活動Q&A」「高知大学附属特別支援学校 成長の記録」を活用

3 研究授業研

(1) はじめに

本学級は小学部5年生の男子児童4名で構成されている。児童の実態としては、こだわりや衝動性などが見られ学習に集中できないことがある。日常生活においては、指示待ちであったり、遊びに夢中になり次の活動に移れないなどの課題があるが、スケジュールカードを示したり、タイマーを活用することで見通しをもって活動することができる。コミュニケーション面では、全員に発語があり、簡単な要求を言葉で伝えたり、言語指示で行動したりすることができる。休み時間にダンスを全員で踊ったり、iPadのアプリで盛り上がったりするなど児童同士の関わりが増え、言葉でのコミュニケーションの場面も見られるようになってきている。

適切な人との関わり方をテーマにしながら生活単元学習に取り組むことを通して、他者への気付きや関わりができるように経験を重ねたいと考えた。

ア 第1回目 生活単元学習「育てた野菜を販売しよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

販売学習については、今年度初めての活動となる。昨年度のなつまつりの出店でゲームの受付係や野菜の販売係になった児童は、挨拶をしたりお金を受け取ったりした経験があるが、金銭の取り扱いの経験が少なく、実生活に結び付いていないことが課題である。

また、自分から挨拶したり、話しかけたりすることができる児童もいるが、話す時の声の大きさや人との距離感については課題がある。

b つけたい力

単元の目標として、

- ・声の大きさや姿勢に気を付けて、販売することができる。(「知識及び技能」)
- ・金銭の扱いに慣れ、金銭の大切さや必要性が分かる。(「知識及び技能」)
- ・できたことや頑張ったことを発表することができる。(「思考力・判断力・表現力等」)
- ・自分の役割に取り組み、友達と協力して活動することができる。(「学びに向かう力、人間性等」)

以上4つの目標を設定した。

本単元では、4月に植えたジャガイモを収穫し、販売活動を行う。そして、販売して得たお金で、お菓子を買って打ち上げパーティーを行うという流れを体験的に学べるように設定した。自分たちで育てた野菜を商品とすることで意欲的に取り組むことや、販売の準備を自分たちで行い、販売、接客まで一連の活動に繰り返し取り組むことで、見通しをもって取り組めるようにする。挨拶や販売時のやりとりで他者と関わる機会をつくったり、お金のやりとりなどの経験を積んだりすることができるようにした。また、算数や国語の学習でも、本単元と関連付けた学習に取り組んでいく。販売時に必要な金種やお金の数え方、個数の数え方の学習は算数でも関連付けて行う。また、声の大きさや丁寧な言葉遣い、話す時の姿勢などは国語の学習でも行い、日常に置いてもその都度意識できるような声掛けを行っていきたい。教科学習で基本的な学習に取り組み、その力を生活単元学習の販売学習や買い物学習などで般化できるようにしていきたい。

そして、単元の最後には、販売で得たお金で好きなお菓子を買ってパーティーの中で食べる。楽しい活動を最後に迎えることで達成感を得ることができるようにするとともに、将来の職業や余暇活動へとつながる経験も積むように設定した。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

販売練習の動画を見て、良いと思ってところで○印のプレートを上げて、声の大きさや姿勢に気を付けて接客することができたかをみんなで確認し、次の販売活動に生かすことをねらいとした。振り返りの時には、振り返りシートを活用し、目標を達成できたか確認し、自分のできたことや友達の頑張っ

たところを発表できるようにした。

b 児童への配慮

児童への支援は、徐々に減らしていくことを意識し、自分たちで考えて主体的に活動ができるようにしたいと考えた。そして、小さなことでも成功すればその都度評価して、望ましい行動や活動を理解・強化したり、達成感や自己肯定感を高め、自ら考え、行動できることをねらいとした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったか

「知識・技能」の観点では、声の大きさや姿勢に気を付けて、練習や販売活動をしようとする様子が見られた。また、金銭の大切さや必要性に気付き、個別学習での算数のお金の学習にも意欲的に取り組むようになった。

「思考・判断・表現」の観点では、ペアの活動を通して、児童同士が助け合っている様子が見られた。また、○印のプレートや振り返りシートの活用で自己評価や他者評価につなげることができた。

「主体的に学習に取り組む態度」の観点では、楽しい活動が最後にあることで、見通しをもって意欲的に取り組み、達成感を得ることができた。

さらに、販売学習に取り組む中で、馴染みのある先生以外との関わりを体験することができたことや、休み時間などに他のクラスの先生に「じゃがいも買ってください」と売り込む児童がいたことなど、深い学びにつながったと感じた。

(エ) さらによい授業にするために何が必要か

a 主体的な学びの視点から

活動内容を精選し、必要に応じて手順書やイラストなどの視覚支援、声掛けなどを行うが、徐々に支援を減らしていく。また、繰り返し取り組むことで見通しをもってできるように取り組んでいきたいと考える。

b 対話的な学びの視点から

振り返りシートは、イラストで分かりやすく示したものであったが、自分が行った活動の評価であるということと結びついていない児童がいたので、より分かりやすいイラストを提示するなど、工夫・改善が必要だと感じた。児童の実態に合った教材・教具の工夫・改善を随時行っていきたい。

c 深い学びの視点から

さらに少ない支援で児童自ら活動できるように場面設定するなど、児童が主体的に活動できる授業づくりに取り組んでいきたい。

また、日常生活でもその場に応じた声の大きさや態度ができた時には称賛し、人との正しい接し方が一般化できるように取り組んでいきたい。



写真1 前時の振り返り

写真2 グループ練習

写真3 模擬練習（発表）

(オ) 実践例

令和2年度 小学部D組 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名		生活単元学習	授業者	MT (T1) ST 1名
学部・学年・組		小学部5年D組	対象 児童生徒数	4名
日 時		令和2年6月19日(金) 3時間目(10:50～11:35)	場 所	小学部D組教室
単元名		「育てた野菜を販売しよう～お店の練習をしよう～」		
本時の目標		・声の大きさや姿勢に気を付けて、販売の練習をすることができる。 ・できたことや頑張ったことを発表することができる。		
学習指導要領との関連		■ 小学部学習指導要領 ・生活科 2段階 オ 人との関わり(ア)、2段階 カ 役割 (ア) ・国語 1段階 A 聞くこと・話すこと イ、ウ ・算数 2段階 A 数と計算 ① ■ 自立活動 3 人間関係の形成(1)～(4) 6 コミュニケーション(1)～(5)		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 「おみせのれんしゅうをしよう」スケジュールを確認する。 3 本時の目標を知る。 『おおきなこえやよいしせいで、れんしゅうしよう』		・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・スケジュールのボードを提示し、流れを伝える。 ・ホワイトボードに目標を掲示する。 ・①声の大きさ、②姿勢の2つのポイントを確認する。	
展開 30分	4 前時の販売練習の動画を見て振り返る。 5 販売練習をする。 ・2グループに分かれて行う。 Aグループ(児童A、児童B) Bグループ(児童C、児童D) ・グループごとに販売の模擬練習をする。 (Aグループから行う)		・それぞれのポイントを視覚的に示したものや動きの手本を見せて伝える。 ・途中で動画を止めてポイントを確認できるようにし、いいと思ったらプレートを上げるように促す。 ・終わりの時間を伝え、タイマーで示す。 ・できるだけ自分たちで練習できるよう見守り、必要な場面だけ声掛けや指差しの支援を行う。 ・タイマーで終わりを知らせる。 ・実施する順番を伝え、前に出るよう声掛けをする。	
まとめ 10分	6 振り返りをする。 ・振り返りシートを記入する。 ・感想を発表する。 ・目標が達成できたか確認する。 7 終わりの挨拶をする。		・実施していないグループの児童は模擬練習の様子を見るよう声掛けをする。 ・2つのポイントが達成できたか、振り返りシートに○を記入する。 ・頑張ったところを発表するよう声掛けをする。 ・本時の目標が達成できたかを確認する。 ・次回は販売をすることを知らせ、次回の学習への期待感をもたせる。	
注目してほしい学習活動				

学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 5 販売練習をする。 ・2グループに分かれて行う。		・話し方の手本を示したり、ポイントを事前に確認したりする。必要に応じて接客の流れやせりふを視覚的に示した手順書を示したり、声掛けや指差して支援したりするが、できるだけ自分たちで練習できるように見守る。	主 2－①②③ 3 対 3－①
まとめ 6 振り返りをする。 ・感想を発表する。		・振り返りシートの記入の際、2つのポイントができたか確認しておき、発表につながるようにする。言葉が出てこない時には、振り返りシートを提示したり、言い始めの言葉などを一緒に言ったりする。また、児童 A には、友達の良かったところも発表できるように、問いかけをして促す。	主 1－① 対 1－② 対 5－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童 B	・相手の方を向いて大きな声で話したり、商品を渡したりすることができたか。	声の強弱はあったが、大きな声を出そうとしている様子が見られ、練習の効果を感じることができた。商品は片手で渡していたので、次回は両手で渡すことを目標にする。	B
児童 A	・友達の練習について声の大きさや姿勢など、良かったところを発表することができたか。	友達の様子をきちんと見ることができ、自分のことだけでなく、友達についての感想も発表することができていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
「知識・技能」の観点では、声の大きさや姿勢に気を付けて、練習や販売活動をしようとする様子が見られた。また、金銭の大切さや必要性に気付き、個別学習での算数でのお金の学習にも意欲的に取り組むようになった。「思考・判断・表現」の観点では、ペアの活動を通して、児童同士が助け合っている様子が見られた。また、○印のプレートや振り返りシートの活用で自己評価や他者評価につなげることができた。「主体的に学習に取り組む態度」の観点では、楽しい活動が最後にあることで、見通しをもって意欲的に取り組み、達成感を得ることができた。 さらに、販売学習に取り組む中で、馴染みのある先生以外との関わりを体験することができたことや、休み時間などに他のクラスの先生に「じゃがいも買ってください」と売り込む児童がいたことなど、深い学びにつながったと感じました。			
研究協議における意見・アドバイス			
できるだけ一律にならないような教材と細かく振り分けた内容など、個々の発達に合わせた丁寧な指導内容があればよいのではないか。さらに少ない支援で児童自ら活動できるように場面設定するなど、児童が主体的に活動できる授業づくりに取り組んでいけばよいのではないかなど、意見・アドバイスがあった。			

イ 第2回目 生活単元学習「作って販売しよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

販売学習については、1学期に「畑の野菜を販売しよう」で、初めて取り組んだ。声の大きさや姿勢に気を付けて、練習や販売活動をしたり、金銭を扱う経験をする中で、個別学習の算数でのお金の学習にも意欲的に取り組むようになった。また、ペアの活動を通して、児童同士が助け合ったり、○印のプレートや振り返りシートの活用で自己評価や他者評価につなげることができた児童もいた。そして、販売して稼いだお金で好きな物を買うという一連の流れの中で、見通しをもって意欲的に取り組み、達成感を得ることができた。

商品を製作することは初めての取組となるが、毎月のカレンダー作りや季節の壁面飾りの共同作品作りでは、手順書や見本を見て、作品を作ることに取り組んでいる。

本単元では、さらに教師の支援を減らし、自ら気づき行動し、友達と協力して役割を果たすことができるようにしていきたいと考える。

b つけたい力

単元の目標として、

- ・声の大きさや話す速さに気を付けて、丁寧な言葉遣いで販売することができる。（「知識及び技能」）
- ・金銭の扱いに慣れ、金銭の大切さや必要性が分かる。（「知識及び技能」）
- ・飾りや塗る色を選び、クリスマスツリーを丁寧に作ることができる。（「知識及び技能」）
- ・教師の援助を求めながら、販売の練習に取り組んだり、友達と協力して役割を果たしたりすることができる。（「思考力・判断力・表現力等」）
- ・友達と協力して、校内で販売活動を行うことができる。（「学びに向かう力、人間性等」）

以上4つの目標を設定した。

本単元では、松ぼっくりで作ったクリスマスツリーを製作して、販売活動を行う。そして、販売して得たお金で、お菓子を買って打ち上げパーティーを行うという流れを体験的に学べるように設定した。自分たちで商品を製作することで意欲的に取り組むことや、販売の準備を自分たちで行い、販売、接客まで一連の活動に繰り返し取り組むことで、主体的に取り組めるようにした。

対話的な学びとして、ペアでの販売練習を繰り返すことや、振り返りでの自己評価・他者評価、挨拶や販売時のやりとりで他者と関わる機会をつくったり、お金のやりとりなどの経験を積んだりすることができるように設定した。

深い学びとして、販売の準備から練習、販売、打ち上げパーティーと一連の活動を通して、知識・技能が習得でき、自ら考え、友達と協力して活動できる場面が増えることをねらいとした。

そして、単元の最後には、販売で得たお金で好きなお菓子を買ってパーティーの中で食べる。自分たちで制作したものを売って販売し、稼いだお金で好きな物を買うという一連の流れの中で、お金をもれえる喜びや働くことの目的につなげていけるように設定した。

さらに、自分たちが製作した物品を購入してもらえる際に、「ありがとう」と言ってもらえることで感謝される喜びを感じ、次の活動への意欲につながることや、将来働くことの糧にしていけるような経験ができるようにしていきたいと考えた。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

進行役がスケジュールに沿って進行し、自分たちで活動する場面を設定した。また、販売練習の動画を見て、声の大きさや姿勢に気を付けて接客することができたかをみんなで確認し、次の販売活動に生かす。自己評価、他者評価をしやすいように○印のプレートを活用したり、振り返りの時には、振り返りシートを活用し、目標を達成できたかを確認する。

b 児童への配慮

児童への支援は徐々に減らしていくことを意識し、自分たちで考えて主体的に活動できるようにする。

一連の活動の中で友達の様子に気付き、協力して活動できるような支援を行う。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったか

「知識・技能」の観点では、声の大きさや言葉遣い、姿勢に気を付けて、練習や販売活動をしようとしていた。個々の実態は違うが、練習を重ねるごとによくなってきた。また、金銭の大切さや必要性に気付き、金銭のやりとりができた。

「思考・判断・表現」の観点では、ペアの活動を通して、児童同士が助け合うことができた。言い始めの言葉が出てこない児童にペアの児童がせりふを伝えてあげたり、商品を落とした時にかごに戻してあげたりしていた。○印のプレートや振り返りシートの活用で自己評価や他者評価につなげることができた児童もいた。

「主体的に学習に取り組む態度」の観点では、友達と協力して、校内で販売活動を行うことができた。お金の確認を助け合ったり、職員室での販売では手分けして販売を行うことができた。

（エ）さらにより授業にするために何が必要か

a 主体的な学びの視点から

活動内容を精選し、必要に応じて手順書やイラストなどの視覚支援、声掛けなどを行うが、徐々に支援を減らしていく。繰り返し取り組むことで見通しをもってできるように取り組むことを継続して行いたい。

b 対話的な学びの視点から

ペアや全体での活動を通して、友達と関わりながら活動したり、友達の活動に注目して他者評価につながるような活動の場を設定するなど継続して取り組んでいきたい。

c 深い学びの視点から

さらに少ない支援で児童自ら活動できるように場面設定するなど、友達と協力して主体的に活動できる授業づくりに取り組んでいきたい。

そして、お互いが声を掛け合って助け合おうとするような場面設定や声掛けの支援を継続して行い、日常生活でも友達との関わりが増えていくことを期待したい。



写真4 前時の振り返り



写真5 模擬練習（発表）



写真6 板書



写真7 ○印プレート

写真8 練習用かご

（オ）実践例

教科・領域名		生活単元学習	授業者	MT (T1) ST 1名
学部・学年・組		小学部 5年D組	対象 児童生徒数	4名
日 時		令和2年11月20日(金) 3時間目(10:50～11:35)	場 所	小学部D組教室
単元名		「作って販売しよう～お店の練習をしよう～」		
本時の目標		・丁寧な言葉遣いや適切な態度で、販売の練習をすることができる。 ・教師の援助を求めながら、販売の練習に取り組んだり、友達と協力して役割を果たしたりすることができる。		
学習指導要領との関連		■ 小学部学習指導要領 ・生活科 2段階 オ 人との関わり(ア)、2段階 カ 役割 (ア) 2段階 手伝い・仕事(ア) ■自立活動 3 人間関係の形成(1)(2) 6 コミュニケーション(1)(2)(5)		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 「おみせのれんしゅうをしよう」 ・スケジュールを確認する。 3 本時の目標を知る。 『こえのおおきさ ことばづかい しせいに きをつけて れんしゅうをしよう』		・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・スケジュールのボードを提示し、流れを伝える。 ・ホワイトボードに目標を掲示する。 ・①声の大きさ、②言葉遣い、③姿勢の3つのポイントを確認する。	
展開 30分	4 前時の販売練習の動画を見て振り返る。 5 販売練習をする。 ・2グループに分かれて行う。 Aグループ(児童A、児童C) Bグループ(児童B、児童D) ・グループごとに販売の模擬練習をする。 (Aグループから行う)		・それぞれのポイントを視覚的に示したものや動きの手本を見せて伝える。 ・児童Aに、前に出て司会をするように伝える。 ・途中で動画を止めてポイントを確認し、いいと思ったらプレートを上げるように促す。 ・児童Aは、上がったプレートの数を数えてみんなに伝えるように声掛けをする。 ・どこが良かったのか、前回と比べてどうだったかを問い掛ける。 ・終わりの時間を伝え、タイマーで示す。 ・できるだけ自分たちで練習できるよう見守り、必要な場面だけ声掛けや指差しの支援を行う。 ・実施していないグループの児童は模擬練習の様子を見るよう声掛けをする。	
まとめ 10分	6 振り返りをする。 ・振り返りシートを記入する。 ・感想を発表する。 ・目標が達成できたか確認する。 7 終わりの挨拶をする。		・3つのポイントが達成できたか、振り返りシートに記入する。 ・頑張ったところを発表するよう声掛けをする。 ・本時の目標が達成できたかを確認する。 ・次回は販売をすることを知らせ、次回の学習への期待感がもてるようにする。	
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話

		的で深い学びの視点
展開4 前時の販売練習の動画を見て振り返る。	販売練習の動画を見て、声の大きさや言葉遣い、姿勢に気を付けて接客することができたかをみんなで確認し、次の販売活動に生かすことをねらいとする。教師が見本を示したり、手順書を活用したりするが、進行役を児童が行うようにし、スケジュール表に沿って自分たちで活動する場面を設定する。	主 1-① 対 1-② 対 5-①②
展開5 販売練習をする。	終わりの時間を伝え、タイマーで示す。話し方の手本を示したり、ポイントを事前に確認したりする。必要に応じて、声掛けや指差しで支援を行うが、できるだけ自分たちで練習できるよう見守るようにし、友達同士が助け合えるように、必要に応じて声掛けをして促す。	主 2-①②③ 3 対 3-①②

注目してほしい児童生徒の評価

児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童A	・○印のプレートを数えてみんなに伝えたり、スケジュール表に沿って司会することができている。	自分の役割が分かり、スケジュール表に沿って司会したり、前時での振り返りの場面でもは、○印のプレートを数えたり、主体的に活動することができた。	A
児童B	・「～です。」や挨拶を言ったり、両手で商品を渡したりすることができている。	せりふを覚えて言うことができた。大きな声で挨拶ができ、商品を両手で渡すことができた。	A

【評価基準】A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。

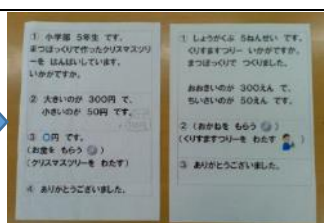
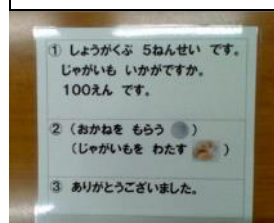
授業の振り返り(授業者の反省)

進行役を児童に任せながら、必要に応じて教師が問い掛けたり、促したりする声掛けが必要だと感じた。児童の意欲や友達同士助け合うことを大切にしながら、授業づくりをしていくことを継続していきたいと考える。また、感想文を書くことに時間がかかったので、簡潔な例文を示したり書くスペースを狭くするなど、教材・教具の改善にも取り組んでいきたい。

研究協議における意見・アドバイス

本時の目標に置いた3つのことについて、子どもたちが目標を意識した手立て(活動のポイント)を視覚的に示した掲示物や動きの手本)を示せており、目標を十分達成できたと評価できる。また、「誰のどんな点が良かったのか」を動画を見ながら振り返る方法は、子どもたちが「動画のどのような点を見るのか」の視点が分かり、子どもたち同士が対話し、評価し合うことを通して、判断する「思考力・判断力・表現力」を高めることができた。

販売時だけでなく、日常生活において、「○○です。」「ありがとうございました。」と丁寧な言葉遣いができた時、その都度褒めていく(強化していく)ことが大事になる。できれば、みんなの前で褒めてあげることが自信になり、定着していける(深い学び)と考える。販売したクリスマスツリーを買ってくれた人が、「よくできているね」と評価し、喜んでくれると自己有用感の高まりになっていく。次への励み(深い学び)になる。



（3）まとめ

ア 2回の研究授業の実践（児童の学びの姿）を通して

1回目の研究協議でいただいた意見やアドバイスを、2回目の授業に取り入れ、授業改善を行った。2回目の授業研究では、進行役を児童が行うなど、より児童が主体的に活動できる場面を設定した。必要に応じて教師が問い掛けたり、促したりする声掛けは必要だが、進行役の児童は、意欲的に見通しをもって活動することができた。また、友達との関わりの中で、教師からの支援ではなく、友達同士で助け合って活動できる場面も増えてきている。販売に関しても、「買ってもらえるかな。」「きれいって言ってもらえるかな。」と言ったり、商品を丁寧に作ってラッピングしたり、販売練習を繰り返し取り組んだり、他者との関係に興味をもちながら活動でき始めてきている。

授業の中でねらいとしてきたことは、販売時だけでなく日常生活においても「○○です。」「ありがとうございました。」と丁寧な言葉遣いのできた時、その都度褒めて強化していきたい。みんなの前で称賛されることが自信になり、定着していけること（深い学び）へつながっていくと考える。そして、販売したクリスマスツリーを買ってくれた人が、「きれいだね。」「よくできているね。」と評価し、喜んでくれることで自己有用感が高まり、次への励み（深い学び）へとつながるような授業づくりをしていきたいと考える。

イ 新学習過程分析表を使ってみて

注目してほしい学習活動にポイントを絞ることで、授業のねらいを明確にすることができ、研究協議を行う時に分かりやすかったのではないかな。また、ポイントを絞って評価をすることで授業改善に生かすことができた。そして、学習過程分析表を活用することにより、主体的・対話的で深い学びの観点をしっかり確認して授業づくりをすることができた。

4 公開授業研

（1）公開授業1

ア 国語科・算数科『『できた！』がふえるっていいね』

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

対象児童2名は、小学部第1学年の学級（男子5名、女子2名）に在籍する男子2名である。2名ともに、知的障害に加え自閉症を併せ有している。そのため、見通しがもてないことや普段と違うことに対して、抵抗したりパニックを起こすことがある。

児童Aは、簡単な決まりや、今おかれている状況の理解はある程度できるが、自分から積極的に行動することが難しかったり、わざと違う言動をとったりすることがある。また、友達の好ましくない言動の真似をしたり、周囲からの働きかけに対応できず、場に応じた言動がとれず固まってしまう様子が見られる。その際、声掛けや手本を示すと、簡単な言葉で自分の要求を伝えたり、場面に応じた行動をとることができる場合もある。「読む」ことは、平仮名はほぼ読むことができる。

「書く」ことは、自分の名前を書くことができるが、書き順の間違いや書き抜きなどがある。「かず」については、10までの数を唱えることはできる。

児童Bは、簡単な指示を理解したり、一度経験したことは、大枠で理解し行動することはできるが、自分の思いが強いときには、すぐに場に応じた行動をとることができなかったり、大声で叫んだり、相手につかみかかろうとすることがある。自分の要求は、簡単な言葉や単語を発したり、行動することで伝えることができることもある。日常生活でよく用いる物の名称や場所は理解しているものが多い。文字への理解や関心は乏しい。絵本は、好きなキャラクターの本以外はあまり興味を示さない。

b つけたい力

2名ともに、見通しをもつことができる活動には、落ち着いて取り組める力を付けたい。そのうえで、支援を受けながらも、自分たちで考え学習を進めていこうとする姿勢や、周り（友達）を見て自分は今どうすべきかに気付く力を身に付けてほしい。同時に、自身の活動の一つずつ確認しながら確実にこなそうとする態度も身に付けてほしい。

また、今後、多くの人と関わりながら生きていく児童にとって、「大切な力」となる基本的な挨拶や、場面に応じた言葉を発することができるようになってほしい。

さらに、「余暇の過ごし方」として、「本を読む楽しさ」を感じてもらえたらとも考えている。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

やるべき学習内容が分かるよう各自のホワイトボードを準備し、学習内容を書いたカードを掲示、終了すれば自分で外し確認していく活動を取り入れた。(写真①)

手を動かす（ジオボード、数を数えてモールを枠に入れる等）活動を取り入れ、活動への意欲や意識の継続をはかるようにした。

集中して学習に取り組む時間をできるだけ確保するため、途中でGボールに

乗ってリラックスしながら好きな本を読むという5分間の休憩を取り入れた。

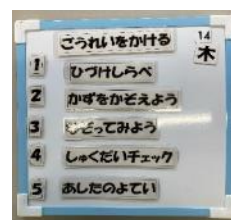
b 児童への配慮

周囲からの刺激を減らすために、カーテンや衝立等で学習環境を整えた。(写真②)

学習教材を自分たちで準備できるよう、学習課題が入ったかごをひとまとめに運ぶことができる棚を作成した。(写真③)

学習内容を書いたカードと、課題の入ったかごをひとまとめにして児童の前に提示できるようにした。

さらに、外したカードを入れるかごも横に

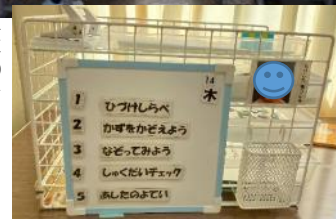


写真①↑

写真②↓



写真③
←
写真④
→



取り付けた。(写真④)

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

授業開始のチャイムが鳴ると、声掛けがなくても、自分たちで個別の学習環境を整えることがほぼできるようになってきた。開始時と終了時には担当児童がハンドベルを鳴らし号令を掛けているが、2名ともに、はっきりとした言葉で号令掛けや挨拶をし、課題が終わるごとの報告も自分からできるようになってきている。プリントをファイルに綴じる活動は、指示がなくても自分たちでできている。筆記具の正しい持ち方も、意識して書くようになってきている。

児童Aは、「読む」ことは、平仮名・片仮名はほぼ読むことができ、簡単な絵本は7割程度自分で読むことができる。また、曜日等、目にする機会が多くある漢字も読むことができる。「書く」こ

とは、書き順の間違いや字の大きさのふぞろいはあるが、平仮名は9割、片仮名は5割程度書くことができる。書くことへの意欲が増し、休み時間にも目にした単語を視写したり、友達の名前を書いたりして過ごすこともある。「かず」については、10までの数字に具体物を対応させることはできる。また、二桁の数を順番に表記することはできる。間違えた場合も教師の「あれ？」という言葉に自ら数え直し、間違いを正す様子が見られている。

児童Bは、「読む」ことは難しいが、少しずつ文字を意識し始め、好きな絵本の文字を一文字ずつ指で押さえ、教師に読むよう要求することが多くなってきた。「書く」ことは、なぞり書きの段階である。自分の名前は、1～2文字書き抜かることはあるが、平仮名で書くことができる。

2名ともに、絵本の読み聞かせは、繰り返し取り組む中で好きな学習になったようで、気に入った場面やフレーズが出てくると、笑顔になったり、自分でも声を発したりして楽しむ様子がよく見られる。休み時間にも、好きな本を抱えて読んでほしいと要求してきたり、自分で絵本を広げている時間が多くなっている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

現在は、課題を示したカードの順に、教師が課題の入ったかごを児童の前に提示しているが、今後はカードとかごを照らし合わせて自分たちで課題をこなしていくようにしたい。また、授業最後の課題として、明日の時間割を個人のホワイトボードにカードを貼って整えているが、児童の実態に合わせて、「書く」要素をさらに増やしたり、持ち物等も記入できるような様式を整えていきたい。絵本についても、児童の「読みたい」気持ちをさらに広げることができるような絵本を探し続けたい。

b 対話的な学びの視点から

現在は教師対児童のやり取りでの学習しか行えていないが、今後は、お店屋さんごっこなど児童がやり取りする場面を設定したり、ゲームをする中で関わりをもっていくような学習を組んでいきたい。

c 深い学びの視点から

現在も、学校での学習内容を復習する宿題プリントを作成し、繰り返し確認できるようにしているが、今後はさらに、児童たちにとって身近な言葉や物の名前を取り入れたり、動作を表す簡単な文章や、挨拶等を読み書きする学習を取り入れることで、実際の生活場面においても有効な「使えるツール」を増やしていきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

児童の実態に即した学習内容や活動を組み立てていくうえで、「3つの学び」との関わりについて整理して考えていく手立てとして有効であった。

(カ) 実践例

令和２年度 国語科・算数科学習指導略案

教科・領域名		国語・算数		授業者		MT	
学部・学年・組		小学部 1 年 A 組		対象児童生徒数		2 名	
日 時		令和 2 年 11 月 16 日（月） 3 時間目（10：50～11：35）		場 所		小学部 A 組教室	
単元名		「できた！」がふえるっていいね					
本時の目標		・学習の始まりと終わりが分かり、それに適した言動をとることができる。 ・支援具を用いた筆記具で正しい持ち方を意識しながら文字を書くことができる。 ・数量や図形に気付き算数の学習に関心を持って取り組もうとすることができる。 ・絵本の読み聞かせに注目し、本の世界を楽しむことができる。					
学習指導要領との関連		■小学部学習指導要領 ・国語科 1・2 段階〔知・技〕アイ 1・2 段階〔思・判・表〕A 聞く・話すーアイ B 書くーイ C 読むーアエ ・算数科 1 段階〔知・技〕A 数量の基礎 B 数と計算 2 段階〔知・技〕A 数と計算 1 段階〔思・判・表〕C 図形イ 1 段階〔学びに向かう力〕A 数量の基礎 ■自立活動 心理的な安定（2）人間関係の形成（1） 身体の動き（5）コミュニケーション					
時間	学習活動			手立て、留意点			
導入 5 分 展開 35 分 まとめ 5 分	1 机やいす、個別学習用のかごを準備する。 2 G ボールをとってくる。 3 始めの挨拶をする。 4 本時の学習内容を知る。 5 課題に取り組む。 ・日付調べ ・宿題チェック ・算数プリント ・ジオボード ・手作り教材 6 休憩する。（5 分） ・G ボールを楽しんだり、好きな本を選んで読む 7 課題に取り組む。 ・国語プリント ・絵本鑑賞 8 終わりの挨拶をする。 9 片付けをする。			・学習が始まることを伝え、言葉掛けや、指差しで準備を促す。 ・他のクラスの迷惑にならないよう静かに運ぶことを伝える。 ・号令担当の児童にベルを手渡し、号令を掛けるよう促す。 ・ホワイトボードに学習内容を掲示し、指差しで示しながら、学習内容を伝える。 ・できるだけ少ない支援で、学習に取り組んだり、次の学習へと進めるよう、児童の様子を細かく観察し、対応する。 ・要求や依頼がある言動が見られたときは、その場に応じた言葉や態度を伝え、適切な言動がとれるよう導く。 ・学習が終わるごとに学習項目のカードを外すことを確認する。 ・他の児童の学習の妨げにならないよう配慮する。 ・タイマーで、休憩の終わりを伝える。 ・「5 課題に取り組む」と同様。 ・MT に注目するよう声掛けをする。 ・号令担当の児童にベルを手渡し、号令を掛けるよう促す。 ・指定の場所に片付けができるよう、必要に応じ、声掛けや指差し等の支援を行う。			
注目してほしい学習活動							
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント				重視した主体的・対話的	

		で深い学びの視点		
展開 5 「課題に取り組む」 ～宿題チェック～		・必ず「宿題チェック」の時間を設け、自身の学習の積み重ねが見えるようファイリングをしている。できるだけ少ない支援で活動できるよう、パンチ用の赤い目印を付けたり、意欲的な活動のため「できたねシール」を貼るようにしている。 ・学習の見通しがもちやすいよう、ボードに学習項目を提示、終わると本人が外し次の学習へと進めるようにしている。		主 1－①③ 2－② 対 2－② 対 5
展開 5 「課題に取り組む」		・プリント学習では、シールを貼ったり、支援具を付けた鉛筆を用いることで、手指の巧緻性を高め、正しい持ち方に近づけるようにしている。 ・ジオボードやモール玉を用いる教材を使うことで、手の動きを取り入れ、活動への意欲や意識の継続をねらっている。		主 4 対 2－② 深 1－②
注目してほしい児童生徒の評価				
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析		目標 達成度
児童 A	・支援具を用い正しい持ち方を意識しながら文字を書くことができる。 ・10までの数に気付き、おはじきを枠に入れることができる。	・少し凹凸のある簡単な支援具だけで、正しい持ち方を意識し、文字を書くことができていた。 ・間違えることなくおはじきを枠に入れることができ、さらに、「できました」の報告も自分からすることができていた。		A
児童 B	・絵本の読み聞かせに注目し、場面に応じた発言や動きで楽しさを表現することができる。 ・3までの数に気付き、同じ数だけのシールを貼ったり、モールを枠に入れることができる。	・最初から最後まで、絵本の読み聞かせに集中することができ、気に入った場面では笑顔になったり、フレーズを声に出すなどして楽しさを表現することができていた。 ・数字と、○を組み合わせた部分は正しくシール貼りやモール入れができたが、数字だけの支援の枠には、教師の声掛けや指差しが必要であった。		B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。				
授業の振り返り(授業者の反省)				
・児童2名は、参観者に気を取られることもなく、普段通りの様子で学習に取り組むことができていた。 「宿題チェック」の活動は、毎回の個別学習で取り組んでいるため、ほぼ指示や支援がなくても一定の活動を行うことができていた。そのうえ、シールを貼る位置や、活動をよりスムーズに行うための動きの工夫など、自分たちで考えて行動する様子も見られ、成長を感じることができた。				
研究協議における意見・アドバイス				
・見える化を基盤に据えた構造的な授業づくりがなされていた。そのことにより、2名の児童に分かりよい見通しのある活動が保障されていた。 ・途中で、5分間の休憩があり、Gボールに乗って、リラックスしながら好きな本を読める楽しみが、休憩後の活動意欲に結びついていた。 ・「宿題チェック」の活動で、パンチ穴をあける目印が付けてあり、それを確認しながら一人でファイルに綴じていく活動は、これからにつながる大事な活動（キャリア教育）だと感じた。				

ア 生活単元学習「おもちゃを作ってあそぼう ～ころころ・ふわふわ・ぴよんぴよん～」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部1年A組は、男子5名女子2名の計7名のクラスである。大半の児童が自閉症を併せ有しており、見通しがもちにくい場面や自分の思いと違う場面で不安定さや衝動的な行動が見られる。少しずつできるようになってきているが、順番や役割などのルールに気付いて友達と一緒に活動すること、準備や片付けまで時間一杯取り組むこと、身近な人に適切な言葉や絵カードでやりたい活動を選んで意思を伝えることに課題がある。

b つけたい力

この単元の第3次「風船のおもちゃを作って遊ぼう」では、風船にシールやビニールテープを貼ったり顔を描いたりして、3つの風船おもちゃを作る。手順書を活用して主体的に取り組み、文具の使用を通して手指の操作性を高めるようにしたい。制作活動の中では、好きな色を選んだり、手伝ってほしいことや頑張った所を簡単な言葉や身振りで伝えたりできるようにしたい。また、本時のおもちゃで遊ぶ活動では、3つの中から言葉やカードへの指差しでおもちゃを選んで伝えることができるようにしたい。遊ぶときには、順番や役割に気を付けて活動できるように視覚支援や声掛けをし、タイマーで終わりに気付いて友達と交替することや、順番が来るまで座って待つこと、自分の番になると気付いて遊び始めることなど、主体的に活動できるようにしたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

教材については、おもちゃの道具に児童の好きなキャラクターのイラストを使い、児童により興味を持てるようにした。また、体を動かして遊ぶことが好きなため、風船クッションを2つ準備してダイナミックに遊べるようにし、児童がより主体的に取り組めるようにした。導入では、前回の風船おもちゃで遊ぶ写真を提示し、本時の学習内容への関心や期待感を高めることにした。また、選んだおもちゃの道具を友達と一緒に準備する場面を設定した。おもちゃの遊び方についての話では、イラストカードを提示して伝え、各コーナーの目に付く所にカードを置くようにした(写真①)。準備する道具の置き場所や、上履きの置き場所に写真カードを提示し(写真②)、少ない支援で活動できるようにした。遊ぶときは、BGMで楽しい雰囲気づくりをし、風船が箱に入った時や的に当たった時などに児童と楽しさを共有するようにした。また、選んだおもちゃで一定時間遊んだら、次に遊びたいおもちゃを選ぶようにし、選択の場面を増やした。役割の場面では、風船的当てと風船バスケットで、遊んだ児童が次に待っている児童に入った数を伝えて、聞いた児童がその友達の得点の花丸カードを貼ることにし、友達との関わりや数を数えるなどの活動にもつなげるようにした。活動の終わりには、おもちゃやマットなどをみんなで片付けて、時間一杯取り組めるようにした。

b 児童への配慮

活動の流れでは、待つことが苦手な児童もいるため、準備をするとすぐに遊べるように、遊び方の説明は準備の前に行った。また、遊ぶときの順番や交替の場面では、児童に応じて間接的な声掛けや指差しなどで支援を行い、気付きや自分からの動きにつなげるようにした。





遊び方のルール（写真①）

おもちゃや上履きの置き場所（写真②）

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

おもちゃを選ぶ場面では、ほとんどの児童が遊びたいおもちゃを指差しや言葉で伝えることができるようになってきた。遊ぶ場面では、自分の順番でないときに遊ぼうとすることはまだ見られるが、取組の積み重ねによって、待機場所のマットに座って順番を待つことができるようになってきた。待機場所の「すわってまつ」「あそぶ」などの視覚支援や順番の写真カードへの指差しや、間接的な声掛けにより、自分から順番に気付いて遊び始める児童や、友達の番が終わると自分から移動して遊び始める児童も見られた。風船クッションでは、2つのクッションに挟まれている感覚を楽しみ、自分なりの楽しみ方を見つけていた児童も見られた。また、風船クッションの終わりのタイマーが鳴るとスムーズに下りる児童が見られるようになるなど、ルールを守って活動することが増えてきた。風船バスケットと風船的当てでは、声掛けや指差しなどの支援によって、遊んだ児童が入った数を次の児童に伝えたり、友達の得点の花丸カードを貼ったりすることができた。風船バスケットでは、児童に応じて投げる位置を変えることで、手にした物を放すまで時間がかかりがちだった児童が、ボールを箱にスムーズに入れることができた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

児童がより少ない支援で活動できるように、きめ細かい視覚支援や道具の工夫が必要である。おもちゃの準備の説明では、準備物のカードを提示したが、他の道具を取りに行った児童もあり、分かりにくかったため、個々に道具のカードを渡すようにするとよい。的当てでは、ボールが小さめの物で、当たりにくい場面が見られたため、大きいボールも準備するとよい。

b 対話的な学びの視点から

おもちゃのコーナーによっては、順番待ちをする児童がいなくて友達との関わりが少なくなった児童もいたため、おもちゃの選択肢を2つに絞ってもよかった。今後も、友達の活動に注目して得点をつける、友達と一緒に準備や片付けに取り組むなど、役割を行うことを継続していきたい。活動の振り返りについては、児童により分かりやすくなるように動画の活用や、児童に応じて感想の選択肢を増やすなどが課題である。

c 深い学びの視点から

おもちゃの選択場面を2回設定し、一定時間同じおもちゃで遊ぶようにしたが、実際の遊園地ではその都度チケットをやりとりしていることを考えて、次回からはおもちゃのカードのチケットで選択して、おもちゃのコーナーにいる教師に渡すようにしたい。選んだおもちゃのコーナーで遊んだら、次のおもちゃを選択するようにすると、選択の機会も増え、活動もより分かりやすくなると思われる。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの視点が学習活動のどの場面に含まれているかを確認することができ、具体的な支援方法や教材の工夫を整理することにつながった。今回の学習活動では主体的な学びと対話的な学びの視点が中心となった。学習したことを生かして自分なりに工夫して活動できるような場面を設定するなど、深い学びの視点も考慮して取り組んで行く必要がある。

（カ）実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT、ST 5名
学部・学年・組	小学部1年A組	対象 児童生徒数	7人
日時	令和2年10月23日(金) 2時間目(9:55~10:40)	場所	小学部A組教室
単元名	「おもちゃを作ってあそぼう ～ころころ・ふわふわ・ぴよんぴよん～」		
本時の目標	・遊びたい風船のおもちゃをカードへの指差しや言葉で伝え、選ぶことができる。 ・友達と一緒におもちゃの準備をしたり、順番や役割などのルールに気を付けて遊んだりすることができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 ・生活科 1・2段階 エ遊び (ア)(イ) ・生活科 1・2段階 オ人との関わり (ア)(イ) ・生活科 1・2段階 カ役割 (ア)(イ) ■ 自立活動 4 環境の把握 6 コミュニケーション(1)～(4)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始まりの挨拶をする。	・挨拶のカードを提示し、号令の声掛けをする。	
展開 35分	2 本時の学習内容を知る。	・風船おもちゃで遊ぶ写真を提示し、選んで遊ぶことを伝える。	
	3 遊びたい風船のおもちゃを選ぶ。	・おもちゃの写真カードへの指差しや言葉で伝えるようにする。	
	4 遊び方などについての話を聞く	・遊び方を簡単に伝え、待つ児童は座って友達の様子を見る、的あてとバスケットでは次の人が花丸カードを貼るなどについてイラストも提示して伝える。	
	5 風船のおもちゃの準備をする。 ・風船的あて・・・的の風船を紙皿の上に置く ・風船バスケット・・・バスケットの箱と風船ボールの箱を置く ・風船クッションを置く	・選んだおもちゃのコーナーを友達と一緒に準備するように写真カードを提示して伝える。	
まとめ 5分	6 選んだおもちゃで遊ぶ。 ・風船的あて(一人5回投げる) ・風船バスケット(一人5回投げる) ・風船クッション(クッションに一人ずつ乗りタイマーで交代する) ・タイマーを聞いて一旦終わり、次に遊びたいおもちゃを選択し、交代して遊ぶ。	・遊ぶ際はBGMをかけて楽しい雰囲気をつくる。児童に応じて指差しや声掛けなどの支援をし、風船が入ったときや的に当たったときなどに児童と楽しさを共有する。 ・自分の順番や役割に気付いて活動できるように、児童に応じて写真カードへの指差しや間接的な声掛けをして支援する。	
	7 振り返りをする。	・おもちゃのカードの選択や言葉で発表できるように支援する。	
	8 終わりの挨拶をする。	・友達と一緒に道具を片付けるように声掛けをする。	
	9 片付けをする。		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開4 「風船のおもちゃの準備をする」		・これまでの学習でも全員で道具の準備や片付けに取り組んできており、この単元の中でもできるように取り組む。より主体的に取り組めるように、各自が選んだおもちゃの道具を友達と一緒に準備することにした。各コーナーにおもちゃの写真の看板と設置場所の目印を設置しておき、児童がそれを見てその場所に置けるようにする。	主―1① 2② 対―3①
展開6 「選んだおもちゃで遊ぶ」		・順番や役割に気を付けて活動できるように、遊ぶ前にイラストを提示して伝えておき、各コーナーの目に付く所に遊び方や順番のカードを置く。待機場所にも役割等のイラストを提示し、児童に応じて間接的な声掛けや指差しで支援をし、少ない支援で活動できるようにする。また、BGMや声掛けで楽しい雰囲気づくりをし、児童の活動をほめたり、楽しさを共有したりする。	主―1① 2②③ 対―1① 2① 3①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童C	・おもちゃの道具を決まった場所に準備し、回数や順番のルールを守って、遊ぶことができる。	準備は、初めは他の道具を取りに行っていて、声掛けが必要だった。準備の際に道具の写真カードを渡しておけばより分かりやすかった。また、待機場所の視覚支援に気付いて、順番や回数のルールを守って遊ぶことができた。	B
児童E	・教師と一緒におもちゃの道具を準備し、自分の順番になると遊ぼうとすることができる。	準備は、声掛けと指差しの支援で教師と一緒に行った。待機場所の視覚支援や写真カードへの指差しや、間接的な声掛けにより、自分から動いて遊ぶことができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
前回とほぼ同じ学習活動の流れで取り組んだため、落ち着いて取り組めた児童が多かった。ほとんどの児童が、遊びたいおもちゃを指差しや言葉で伝えることができた。3つのおもちゃから選ぶ設定としたため、おもちゃによっては一人の所があり、友達と一緒に遊ぶ場面が少ない児童もいたため、おもちゃは2つでもよかったかもしれないと感じた。選んだおもちゃを準備できるように説明のときに道具のカードを提示したが、分かりにくかったため、個々に道具のカードを渡すようにすればよかった。			
研究協議における意見・アドバイス			
導入で、前回の学習の写真を提示することで、児童が写真に注目して活動への期待感や意欲につながることができていた。おもちゃの選択の場面では、意思を伝えることがはっきりしてきた。遊ぶ場面では、タイマーが鳴ったら自分で終わりに気付いて待機場所に座ることができた児童もおり、ルールを守って活動することができていた。また、2つの風船クッションの間に挟まれている感覚を楽しみ、自分なりの楽しみ方を見つけていた児童も見られた。的あてでは、ボールが小さめの物だったので、当たりにくい場面もあり、大きいボールがあってもよかった。風船バスケットでは、児童に合わせて近くから入れるようにして、風船が入ると喜び、意欲的に取り組む様子が見られた。			

ア 生活単元学習「おもちゃをつくってあそぼう～ころころ・ふわふわ・ぴよんぴよん～」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部1年A組は、男子5名、女子2名の計7名のクラスである。コミュニケーションに関しては、適切な言葉で要求を伝えたり、絵カードや写真を選択して意思表示をしたりすることが増えてきている。鉛筆やはさみなどの文具の使用については、個々の課題があり、少ない支援でできる児童もいれば、教師が手を添えて一緒に使用する児童もいる。友達との関わりに関しては、休み時間に追いかけてこをしたり、一緒におもちゃで遊んで物の貸し借りをしたりする場面も増えてきている。一方、自分の思いを優先して順番やルールが守れないこともある。

b つけたい力

本学級の児童は、おもちゃで遊ぶことに興味・関心が高く、活動に意欲的に取り組みやすいため、本単元では、ビー玉、ゴム、風船、ビニール袋でおもちゃを作って遊ぶように設定する。その中で、コミュニケーション力、手指の巧緻性、友達との関わり方を身に付けていきたい。制作場面を取り入れ、手指の巧緻性に対する個々の課題に取り組んだり、自分で色や形を工夫して制作できるようにしたりしたい。また、要求を伝えたり、発表したりする力も身に付けたい。遊びの場面では、転がる・伸びる・膨らむなどの特性を生かしたおもちゃで遊び、児童の好奇心を引き出しつつ、友達と一緒に活動する中で適切な関わり方を身に付けたい。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

制作の場面では、できるだけ自分で手順を確認しながら取り組めるように、色・ナンバリング・絵（写真）・平仮名を工夫しためくり式の手順書を使用した。また、提示の仕方としては、説明する際にはパワーポイントで提示し、制作の際には児童の手元に手順書と黒板に大きめの手順書の二つを提示した。いずれも同じ手順書にしておき、児童が混乱しないようにしている。説明をする際には、児童の注目をできるだけ高めたいため、紙媒体よりも注目が集まりやすいパワーポイントを使用した。この手順書は、色の順番、絵（写真）の順番、ナンバーの順番など、様々な視点から手順が分かるようになっている。

遊びの場面では、遊園地などで遊ぶことに般化できるように、チケットで遊びたいおもちゃを選択して列に並び、順番が来たら係の教師に遊びたいおもちゃのチケットを指差ししたり、言葉や身振りで伝えたりするように設定した。その際には、「お願いします」と言葉や身振りなどで伝えてから遊ぶように設定し、うちの言葉カード（イラスト付き）で伝えることを促した。



手順書（パワーポイント）



パズルマットでの構造化



実際の様子

b 児童への配慮

言葉や文字だけではイメージすることが難しいため、絵や写真など視覚支援を多く取り入れた。おもちゃを作るときには好きな色を選択したり、遊びたいおもちゃを選択したりする場面を設定しており、実物や絵（写真）カードを多く用いて提示した。多くの中から選択することが難しい児童には、児

童の好きなものの2つに絞って提示するようにした。

児童が学習への見通しをもちやすくするために、授業の始めにはスケジュールボードを使用した。おもちゃで遊ぶ際、時間に制限があるものには、交代するタイミングがわかりやすいようにタイムタイマーを使用した。個数に制限があるものには、決まった個数だけ準備しておき、無くなったら交代できるようにして、できるだけ自分で終わりに気付くことができるようにした。

遊ぶときに待つ順番が分かるように、一人ずつにマットを使用したり、ホワイトボードに児童の写真カードを並べて示したりするなど、場の構造化を図った。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

制作の場面では、自分で手順書を確認して取り組む姿が見られるようになった。手順書の絵(写真)を見て次の活動に気付いたり、終わったら手順書をめくって次にすることを確認したりしていた。また、手順書を見て、どの文房具が必要かを考えて選ぶこともできていた。また、必要なものを教師に伝える時に、必要な物が何かを分かったうえで「○○をください」とスムーズに伝えることができてきている児童もいる。

遊びの場面では、複数の中から選択することが難しかった児童が、複数の中から遊びたいおもちゃを選択することができていた。また、自分の順番に気付いて、前の人が終わったら遊ぼうと準備をする姿や、タイマーが鳴ったのに気付いて、遊ぶときにおもちゃの所にいる教師にチケットを見せることができるようになってきた。教師の声掛けで「お願いします」と挨拶する児童も見られた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

おもちゃの遊び方や遊ぶ楽しさが分かったり、どのようなおもちゃが完成するのか見通しをもったりすることによって、さらに主体的に活動に取り組むことができるようになると考える。そのために、導入の部分で完成形のおもちゃを見たり、実際に遊ぶ様子や動画を見たりする活動を取り入れていく。

また、興味・関心が高いほど主体的に活動できると感じたため、好きなキャラクターを用いたり、より実態に合ったおもちゃを作ったりすることができる教材を扱うようにする。

b 対話的な学びの視点から

児童の作っている様子や工夫している様子を取り上げ、児童が友達の活動の様子を見る機会を取り入れていく。そうすることで、図画工作科の視点からも、友達の作品を鑑賞することにつながったり、様々なアイデアに触れて創造性につながっていったりする。

また、遊びの部分で、順番を待ったり交代したりすることはあったが、加えて次の友達に遊ぶおもちゃを渡すなどの活動も取り入れることで、友達との関わりが増え、対話的な学びにつながっていきけるのではないかと考える。

c 深い学びの視点から

合わせる教科等を3つに絞っていたが、児童の様子から他の教科の目標もねらっていけるのではないかと感じるがあった。授業を計画していくうえで、児童によってねらえる教科や目標も見定めておくことで、より深い学びにつながっていくのではないかと感じた。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

小学部1年生の生活単元学習で活用するとすると、段階的に難しいと感じる項目が多く感じられた。そのため、活用する部分に偏りがあり、全体を活用できるまでにはいたらなかった。項目を具体的にしたり、様々な発達段階に合う項目があったりすると、全体で活用できたのではないかと感じる。

(カ) 実践例(指導略案)添付

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名		生活単元学習	授業者	MT ST 5名
学部・学年・組		小学部 1年 A組	対象 児童生徒数	7人
日 時		令和2年11月18日 (水) 3時間目 (10:50～ 11:35)	場 所	小学部 A組教室
単元名		「おもちゃを作ってあそぼう～ころころ・ふわふわ・ぴよんぴよん～」		
本時の目標		・遊びたいおもちゃを決め、遊ぶ順番が来た時にチケットを指差ししたり「お願いします」と言葉で伝えたりすることができる。 ・選んだおもちゃでルールや順番に気を付けて遊ぶことができる。 ・言葉や身振りなどで頑張ったり楽しかったりしたおもちゃを発表することができる。		
学習指導要領 との関連		■ 小学部学習指導要領 ・生活科 1・2段階 エ 遊び (ア) (イ) オ 人とかかわり (ア) (イ) ケ きまり (ア) (イ) ・国語科 1段階 A 聞くこと話すこと ウ 2段階 A 聞くこと話すこと エ ・自立活動 6 コミュニケーション		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 10分	1 始まりの挨拶をする。 2 本時の学習を知る。		・挨拶カードを提示し、号令の声掛けをする。 ・前回の授業の様子を写真で見せ、何のおもちゃでどのように遊ぶのかを思い出せるようにする。	
展開 25分	3 遊び方を聞く。 4 チケットをもらって、遊びたいおもちゃを選ぶ。 5 準備をする。		・チケットを見せてから遊ぶ流れを実際にやってみせる。 ・遊ぶおもちゃの写真やイラストを見せ、選ぶときに分かりやすいようにする。	
	6 選んだおもちゃで遊ぶ。 ・ビー玉転がし ・風船クッション ・風船バスケット ※一回遊ぶごとに、次に遊びたいおもちゃをSTと確認する。		・選んだおもちゃを準備するように写真カードで示す。 【全体】遊ぶ順番が来たら、係の先生に遊びたいおもちゃのチケットを見せたり、言葉で伝えたりしてから遊ぶようにする。遊び終わったら、次に遊ぶおもちゃの列に並んで順番を待つ。【ビー玉転がし】一回につき、一人5個までビー玉を転がすことができる。【風船クッション】靴を脱いで遊ぶようにし、一人1分ずつで交代する。1分は、タイマーで計り、終わりが分かりやすいようにする。【風船バスケット】一回につき、一人5回まで投げるができる。次に待っている人は、前の人のスコアの数だけ花丸を貼る。	
まとめ 10分	7 頑張ったことや楽しかったことを発表する。 8 終わりの挨拶をする。 9 片付けをする。		・発表の手順や発表の言葉が分かるように、発表カードの裏にも手順と発表の言葉を色分けして書いておく。 ・挨拶カードを提示し、号令の声掛けをする。 ・片付けるおもちゃの名前を伝えるようにする。	
注目してほしい学習活動				

学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
6 選んだおもちゃで遊ぶ		遊園地などで遊ぶことに般化できるように、チケットで遊びたいものを選択し、意思表示ができるようにしている。また、今回から「お願いします」という言葉を係の人に伝えることができるように練習したいと考え、うちわで言葉カードを示すようにする。言葉で伝えることが可能な児童は、文字を見せたり最初の言葉を伝えたりするなど ST が個々に応じて支援を行う。それが難しい児童は、指差しや身振りで伝えることができるように ST が支援を行う。	I 1-② -③ II 2-①
7 頑張ったことや楽しかったことを発表をする		発表は定型文を使って頑張ったことを発表できるように練習しており、今回から「頑張った」「楽しかった」の2種類から選択して発表できるようにする。発表ボードの表には定型文とイラスト、裏には発表手順と定型文とイラストがあり、それをもって発表できるようにする。学習活動6のポイントと同様に、言葉や指差し、身振りで発表できるよう、個々に応じて支援をする。	II 5-①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童M	写真カードやタイマーなどで、遊ぶ順番に気付いて遊ぶことができる。教師と一緒に身振りや言葉で発表することができる。	風船クッションが好きで、選んで遊んでいた。ホワイトボードに示している写真カードの順番や、タイマーの音を手掛かりに、自分の番が来たら立って準備をする姿が見られた。また、遊んでいたタイマーが鳴った時に、音が聞こえたら、遊びをやめる姿も見られた。発表の際には、「がんばりました」の語尾を言うことや身振りができた。	A
児童F	遊ぶ順番が来た時に、言葉で遊ぶおもちゃや「よろしくお願いします」と伝えることができる。手順を見て、言葉で頑張ったことや楽しかったことを発表することができる。	係の先生がお手本を示しながらではあったが、「よろしくお願いします」と言って、遊ぶことができた。発表では、始めと終わりの号令や発表ボードの文字を読みながら、言葉で発表することができた。発表の手順に関しては、最近し始めたばかりである。そのため、号令をし忘れるなど不慣れな部分もあったが、声を掛けると順番に気を付けて行うことができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
繰り返し行っているため、児童のできることが増えたり、ルールや順番を守ることが定着してきている。教師の人数を考えて人員配置の工夫を行うことで、より児童の活動の質が上がるのではないかと感じることもあった。残り時間を全体に知らせることで、STも工夫しやすくなったと感じた。			
研究協議における意見・アドバイス			
説明をする際に、できる限り実物を使用して説明をする方が、児童に伝わりやすい。チケットを見せることは、将来遊園地で遊ぶときなどにつながる活動になりよかった。ビー玉転がしのおもちゃでは、最後のコーナーに鉄琴があるが、ずれてしまったときに自分で上手に工夫しているところがよかった。			

(1) 公開授業4

ア 国語・算数「国語と算数の学習に取り組んでみよう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

本児は、体を動かすことが好きで、休み時間等、教師や友達と楽しく関わり合いながら活動的

に過ごすことを好む児童であり、コミュニケーションにおいても、教師や友達に知っている単語や二語文程度の言葉で伝えることができる。机上学習では、活動時間が長くなったり、自分の思い通りの取組ができないと途中で集中が切れてしまい、学習内容とは関係がないことをやってみたり、時には離席してしまう場面も見られる。個別学習では、これまでの学習の積み重ねにより、授業の始まりと終わりに道具の準備や片付けが進んでできたり、一つの課題を終えると「できました」の報告がはっきりと言えるようになったり、また、教師とハイタッチをして喜びを表現することで達成感を感じながら落ち着いた学習活動が行えるようになってきている。

しかし、まだ小学部低学年段階ということで、国語に関しては、平仮名の認識が不十分であり、読み書きとともに課題が見られる。算数に関しては、1 から 10 までの数唱や同じ形や絵柄同士のマッチングは正確にできるものの、数の理解の基礎である物の集まりと数詞との対応の理解が不十分であるといえる。

b つけたい力

今回の単元では、これまでと同様に、児童自身で授業の道具の準備と片付けを行い、また、児童自身で号令を掛けるよう促していくことで、授業の始まりと終わりを感じながら、自ら気持ちの切り替えができる態度が身に付くようにしたい。また、授業初めに、本時で取り組む課題の内容が分かるようにホワイトボードでスケジュールを提示し教師と一緒に確認を行い、課題が終わるごとに項目を外すよう促していくことで、学習を見通せるようにしていきたい。

平仮名の認識については不十分であるため、身の回りの物の名称と平仮名片仮名も文字とが一致して認識でき、発音できるようになったり、また、平仮名のなぞり書きを通して、平仮名を書くことができる力を身に付けていきたい。算数に関しては、1 から 5 までの具体物の集まりと数詞との対応が分かるよう支援していきたいと考える。

また、学習の区切りとして一つの課題が終わった時には「できました」と報告することができたり、絵本の読み聞かせでは、イラストを見て、教師との質問形式での対話を通して、平仮名の物の名前を連想していけるよう支援していきたいと考える。

次に、算数課題では、プリント教材で学習した後に、5 個のビー玉を操作しながら数詞と合わせていく体験的な学習に応用していくことで発展的に数の理解につなげていきたいと考える。また、補助具を活用しながら鉛筆の正しい持ち方を身に付けたり、自分や友達の名前や好きなキャラクターの名前のなぞり書きの練習を通して、今後、最終的になぞりがなくても文字を書くことができる力につなげていきたいと考える。鉛筆以外にマーカーペンも扱うことで、書くことに親しみがもてるように、また、具体物の操作では、スプーンを用いて、鉛筆を持つ際の手指の巧緻性にもつなげていきたいと考えている。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

まずは、学習課題全体に見通しがもてるように、写真やイラストを用いたホワイトボードを提示し、その都度、本児と一緒に確認することで、これから取り組む課題の内容が分かり意識付けを図れるようにした。※①

次に、身近にある物のイラストと、平仮名や片仮名文字のカードとのマッチングでは、本児の関心の高い生活用品や好きな遊具等に関するイラストを選びマッチングに取り組んできた。イラストをマジックテープで貼り付けて一致させていくことで、達成感を感じたり、活動的な教材になるようにと教材を選択した。※②

1 から 5 までの数と数詞に関する線つなぎでは、鉛筆以外に、書くことへの関心を高めるための意

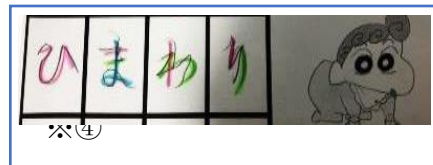
図としてサインペンを扱うようにした。その後で、1から5までのビー玉入れを通して、紙媒体から体験的な学習に発展できるよう教材を工夫した。※③

名前のなぞり書きでは、書き順の提示を数字よりも色で示した方が、本児にとって簡潔で分かりやすいと考え工夫した。※④

※①



※②



※③



ｂ 児童への配慮

本児は、日頃から、適切でないことでも自分の思うやり方で取り組もうとするこだわりが強く、自分の意に沿わないと違う行動をしてしまう面がある。本授業を通して、示した書き順と異なる書き方をしてみたり、鉛筆の補助具の位置が気になるのか、度々付け直したり、別の課題を選んで取り組もうとする等の行動が見られていた。しかし、本児の自分の思うようにやってみたいという思いは自立心の芽生えにもつながることであり、また、気持ちの切り替えにもつながると感じ、授業内に行う課題は最後まで取り組むようにしたうえで、本児の気持ちに寄り合いながらの支援を心掛けてきた。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

授業の始まりには、チャイムの前に、教師からの声掛けがなくても自ら教材を取りに行き、着席して待つ等、意欲的に頑張ろうとする態度が身に付いてきた。

平仮名文字の書き取りに関して、「し」「ん」「の」等の一続きの文字は、なぞりがなくても文字としての形になってきた。他にも「ま」「は」の下最後の結びもなぞりがいない状態で上手に書けるようになった。

今後も継続した学習が必要であるが、ビー玉を使った1から5までの数の集まりの理解や、1個から5個までの数の集まりと数詞との対応が定着しつつある。間違えても正しく入れ直すことができる。数詞の読みも正しく言えるようになった。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

周囲の友達の様子に気を取られてしまう場面があるので、衝立等で囲み集中できる環境づくりを今後検討していきたい。

b 対話的な学びの視点から

今後、プリント教材での書く以外にも、貼ることや入れると等の活動的な学習教材も検討していきたい。

c 深い学びの視点から

興味、関心を引き出すために、iPadの書き順や数の学習アプリ等の活用も今後検討していきたい。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点から各項目で整理されているので、事後評価の際に、分析しやすいと感じた。

（カ）実践例

令和2年度 国語科・算数科学習指導略案

教科・領域名		国語・算数	授業者	MT
学部・学年・組		小学部 1 年 A 組	対象 児童生徒数	1 人
日 時		令和 2 年 12 月 7 日（月） 3 時間目（10：50～11：35）	場 所	小学部 A 組教室
単元名		国語と算数の学習に取り組んでみよう！		
本時の目標		・身の回りの物の絵と平仮名、片仮名文字のマッチングが正しくできる。 ・1 から 5 までの数と物の対応ができる。 ・なぞり線に合わせて平仮名文字を書いたり、正しく文字を順に並べることができる。 ・絵本に出てくるイラストと平仮名を見ながら物の名称を正しく発音することができる。		
学習指導要領 との関連		■ 小学部学習指導要領 ・国語科 1，2 段階〔知・技〕 ア イ 1，2 段階〔思・判・表〕 A 聞くこと・話すこと ア イ B 書くこと ア イ C 読むこと ア イ ・算数科 1 段階〔知・技〕 B 数と計算 ア ■ 自立活動 心理的な安定（1）人間関係の形成（1）コミュニケーション（1）		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5 分	1 机を移動し、個別学習用のケースを準備する。		・声掛けで授業の始まりとともに、学習環境の構築を促す。	
展開 3 5 分	2 始まりの挨拶をする。		・児童に、姿勢を正して号令をかけるよう促す。	
	3 本時の学習内容を確認する。		・ホワイトボードで今日の課題について確認する。	
	4 個別学習に取り組む		・一つの課題が終わると、ホワイトボードの項目を外して先の見通しがもてるようにしていく。	
	①国算課題 ・平仮名片仮名文字のカードと身の回りの物の絵カードとのマッチング		・マッチングで分からない時は、物に関するヒントを与えながら正解を導けるように支援していく。	
	②算数課題 ・1 から 5 までの線結び（鉛筆、マーカー） ・1 から 5 までのビー玉入れ（同種、別種）		・線で結ぶ対象の物同士や平仮名の書き順は始点にペンで色を付けて結ぶ物や書き始めを意識できるようにしていく。	
まとめ 5 分	③国語課題 ・自分や友達、好きなキャラクターの名前のなぞり書き ・平仮名カードの並び替え		・書き練習の時に、正しい鉛筆の持ち方は補助具の活用や MT が手を添えながら書くことで支援を行っていく。	
	④絵本の鑑賞		・一つの課題が終わるとハイタッチをして達成感を感じられるように支援していく。	
	5 終わりの挨拶			
6 後片付けをする。				
注目してほしい学習活動				
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント			重視した主体的・対話的で深い学びの視点

児童 A	・学習の始まりと終わり、次の課題への見通しがもてるようホワイトボードで掲示し、一緒に確認していくようにしている。 ・一つの課題が終わると、「できました」の報告ができるよう、言い始めを教師が合図しながら促していく。 ・プリント教材では、キャラクターのシールを貼ったり、一つの課題が終わると、教師とハイタッチをしながら称賛することで、学習意欲や達成感につなげられるようにしている。 ・平仮名のなぞりでは、書き始めを色ペンで印をつけ、書き順に気を付けて練習ができるようにしている。 ・1 から 5 までの線結びでは、鉛筆以外のマーカーペンも使用することでいろいろな筆記用具を活用し、書くことに親しめるようにしている。 ・1 から 5 までのビー玉入れでは、正しく入れ終わった後で、各部屋に数字カードと一緒に貼って、数と個数が一致できるように支援している。また、ビー玉を運ぶ際には、ゴム製のピンセットで運び、鉛筆を持つ際に必要な指の巧緻性につなげられるようにしている。	主 1－①③ 4 対 1－② 2－② 5－②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
児童 A	・身の回りの物の絵と平仮名、片仮名表記の名称を一致させることができる。また、それらを正しく発音することができる。 ・平仮名のなぞりの線を意識しながら書くことができる。 ・ケース内の 1 から 5 までの各部屋に適した数量のビー玉を種類に関係なく正しく入れることができる。	・本児にとって、興味関心の高い学習課題であり、間違えずに正しく貼り付けることができていた。発音も平仮名、片仮名表記を見ながら正しく言えた。 ・補助具の活用にも慣れて、筆圧も濃く、平仮名のなぞり線の上を書くことができた。集中が切れてくると線の上をはみ出すこともあったが、自分や友達、キャラクターの名前を書くことができた。「し」「く」「つ」等、一続きの文字はなぞりがなくても字体とした形になってきた。	A
			B
		・色違いのビー玉でも、各部屋にビー玉の個数分を正確に入れることができた。また、手指操作の誤りで、入れ間違えても自分で気付いて入れ直すことができていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
これまでの授業の中でも集中力の持続に課題は見られていたが、集団の中でも周囲に左右されず学習できる力も大切だと考え、また、休憩後に再度、学習へ戻るという気持ちの切り替えの難しさを想定し、時間内での継続した個別学習に取り組んできた。しかし、当初に比べ周囲の様子に左右されずに個別課題に取り組めるようになってきたが、より集中した状態で学習効果上げていくためには、衝立等を活用し集中できる環境の中で学習を行ったり、途中、タイマー等で時間を設定し、休憩を挟みながら気持ちの切り替えにつながるような学習環境を提供していくことも必要であると感じた。			
研究協議における意見・アドバイス			
自己の学習に集中して取り組めるように、環境の構造化とワークシステムを活用することで、教師から学ぶ課題（個別課題）と一人でできる学習（自立課題）とのバランスを保ちながら学習を提供できたら良い、主体的で深い学びの視点からも大切なポイントである。また、学習内容を一貫性のあるものにしていくために、教材の提示の仕方についても、アドバイスをいただいた。			

（１）公開授業５

ア 国語・算数科

「形合わせや、絵合わせができるようになるう。」

「日用品や学習用品の名前がわかるようになろう。」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

小学部1年A組の対象男子児童は、一日の日課を、見通しを持って過ごすことができるように、声掛けや絵カードを用いて取り組んでいる。休み時間には友達が遊んでいるのを見て、一緒に遊びたいという意思を示したり、友達の内輪の中に入っていこうとすることが増えてきた。また、自分でやろうとしていたことが、うまくできない時には、手を引いて「やって欲しい」という気持ちも伝えられるようになってきている。物に固執することがあり、物を渡すことや取ることの動作に時間がかかる。授業中は、自分の興味のある活動は取り組めるようになっているが、自分の思いと違う活動では、離席するなど集中力が途切れる時がある。

国語科では、身近な物の名前を言った時に視線を向けたり、指差しすることができるように取り組んでいる。日用品や学習用品は、名前を言うと、写真カードの中から選び、手渡しできるようになってきつつある。

算数科においては、色や形などの違いに気が付き、分別することができるように取り組んでいる。

○△□は、色と形により分別できるようになってきている。絵合わせパズルは、ピースの断面が直線であれば合わせることができつつある。

b つけたい力

国語科では、日用品や学習用品の名前を言うと写真カードの中から選び、手渡しできるようにしていきたい。

絵本の読み聞かせをしていく中で、自分から好きな絵本を指差しして選ぶことができるようにしていきたい。

算数科では6ピース程の絵合わせパズルができるようにしていきたい。色や形の名前を言うと、決められた場所に分別できるようにしていきたい。

絵合わせパズルは、ピースの断面が直線でない時にも、うまく合わすことができるように取り組んでいきたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

言葉や説明だけではなく、絵や写真など視覚支援ツールを取り入れた。パズルで使う絵は、読み聞かせをする絵本の中に登場する食べ物や動物とし、絵本の内容と重なるようにした(写真①)。

日用品や学習用品の絵や写真は日頃よく使うものとし、生活と結び付けられるようにした(写真②)。

○△□の形合わせでは、○は赤・△は青、□は緑色とし、色と形を同じにして分別できるように工夫した(写真③)。

物の受け渡しに時間がかかるため、カードの片付けや受け渡しを練習する場面を設定した。



写真① パズル

写真② 日用品や学用品

写真③ ○△□の形合わせ

授業の始まりと終わりを大事にしている。課題への取り組みを急がず、学習への準備や挨拶がきちんとできてから取り組を始めるようにする。終わりも、姿勢を正し号令をかけた後、課題を指定の場所に片付けて終わるようにした。

b 児童への配慮

気持ちを切り替えて授業に臨めるようにするために、好きな絵本を先に読み聞かせするなど落ち着いた雰囲気を作ってから、学習内容に取り組むようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

課題の入ったかごを自分で準備できるようになり、姿勢を正し挨拶をしてから落ち着いて取り組めるようになってきた。終わりも、姿勢を正し号令を掛けた後、課題を指定の場所に片付けて終われるようになった。

○△□の形合わせでは、色や形の名前を言った後で、ケース内に分別できるようになってきている。また、ミスをして指摘すれば置き直すこともできた。

絵合わせに関しては、上下や左右の組み合わせだけでなく、カードを回転させて合わすこともできるようになってきている。

日用品や学習用品の写真や絵カードの中から、名前を言うと、カードを選び手渡しできるようになった。

絵本を並べると、好きな絵本を選んで、「読んで欲しい」という気持ちを伝えられるようになってきている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

- ・学習内容の順番を確認して見通しをもちやすくするために、導入時の課題掲示をわかりやすくする。
- ・絵合わせに関しては、2ピースのパズルを一組でやっているが、パズルを置く位置を工夫し枚数も増やして組み合わせることができるようにする。
- ・○△□の形合わせは、○は赤・△は青、□は緑色とし、色と形を同じにして分別できるようにしたが、色と形を同じ色にして形だけでマッチングできるようにしていく。
- ・日用品や学習用品の写真や絵カードを更に増やし内言語も増やしていく。

b 対話的な学びの視点から

- ・気持ちを切り替えて授業に臨めるようにするために、好きな絵本を読み聞かせするなど落ち着いた雰囲気を作ってから、学習内容に取り組むようにしていく。
- ・日用品や学習用品は、生活と結び付けられるようにするために。写真だけではなくできるだけ具体物で確認するようにしていく。
- ・カードを選んだ時には、「これは何をするときを使うものか」とか、話をしてから受け取るようにする。

c 深い学びの視点から

- ・カードを選択したり、片付けたり手渡しすることで、ケース内への移動や受け渡しがスムーズにできるようにする。
- ・日用品や学習用品の種類を増やして、生活に結び付けていくようにする。
- ・日用品や学習用品の名前を覚えて、品物の準備や片付けができるようにする。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

主体的な学び、対話的な学び、深い学びの具体例が示され参考になった。ただ学習活動と3つの学びの視点が合っているのか迷いもあった。

(カ) 実践例

教科・領域名	国語・算数	授業者	MT
学部・学年・組	小学部 1年 A組	対象 児童生徒数	1名
日時	令和2年12月7日(月) 3時間目(10:50~11:35)	場所	小学部A組教室
単元名	「形合わせや、絵合わせができるようになろう。」 「日用品や学習用品の名前がわかるようになろう。」		
本時の目標	・○△□の形合わせができる ・日用品や学習用品の名前がわかり、カードの手渡しができる。 ・好きな絵本を指差しで選ぶことができる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・国語科 1段階〔知・技〕ア 1段階〔思・判・表〕A聞く・話す ア ・算数科 1段階〔知・技〕C図形 ア 1段階〔思・判・表〕C図形 イ ■自立活動 心理的な安定(1) 人間関係の形成(1) コミュニケーション(1)(2)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分 展開 35分	1 机やいすを移動し、個別学習用のかごを準備する。 個別学習用のかごを運ぶ。 2 始めの挨拶をする。 3 本時の学習内容を知る。 4 課題に取り組む。 ・カレンダー 日付調べ ・○△□の形合わせ ・絵合わせパズル ・日用品や学習用品の名前の確認 ・絵本の読み聞かせ	・個別の学習が始まることを伝え、一緒に行動し準備をしていく。 ・かごの中の物を落とさないように慎重に運べるように支援する。 ・号令をかけて姿勢を正し、「はじめましょう」で礼をするようにする。 ・机の前に課題を掲示し、指差しで示しながら、学習内容に見通しを持てるようにする。 ・月日・曜日を確認し、カレンダーに印をつけシールを貼れるように導く。 ・形と色を言ってカードを渡し、ケース内に分別できるように導く。 ・分断された絵を見て、上下や左右を合わせられるようにパズルを置く位置を考慮し、成功するように導く。 ・名前を言うと、写真カードを選んで手渡しできるように導く。 ・好きな絵本を選んで読み聞かせをしていく。	
まとめ 5分	5 終わりの挨拶をする。 6 片付けをする。	・学習が終わるごとに課題のカードを外して終わりを確認する。 ・号令をかけて姿勢を正し、「終わりましょう」で礼をするようにする。 ・指定の場所に片付けができるよう声掛けし、慎重に運べるように支援する。	

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深

		い学びの視点		
展開 4 「課題に取り組む」 絵合わせパズル		・ 2 枚の絵を組み合わせると、どんな絵になるか想像させる。 ・ 上下や左右の組み合わせから、カードを回転させて合わせられるようにパズルを置く位置をかえて成功するように導く。		主 1－①② 2－② 対 1－①
展開 4 「課題に取り組む」 ○△□の形合わせ 日用品や学習用品 の名前の確認		・ ○△□の形合わせは、形と色を言ってカードを渡し、ケース内に分別できるように導いている。 ・ 日用品や学習用品の名前を確認した後、品物の名前を言いカードを手渡しできるように導いている。 ・ カードを手渡しすることで、ケース内への移動や受け渡しのスムーズな動作を目指している。		主 1－②③ 2－② 対 1－① 深 1－②
注目してほしい児童生徒の評価				
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析		目標 達成度
児童 A	・ ○△□の形合わせができる ・ 日用品や学習用品の名前がわかり、カードの手渡しができる。 ・ 好きな絵本を指差しで選ぶことができる。	・ ○△□の形合わせでは、形と色を言った後で、ケース内に分別できるようになってきた。		B
		・ 日用品や学習用品の写真カードの中から、名前言くと、写真カードを選び手渡しできるようになった。		A
		・ 絵本を並べると、好きな絵本を選んで、「読んでください」という仕草が見られるようになった。		A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。				
授業の振り返り(授業者の反省)				
・ 導入時の準備を手伝い過ぎた。もう少し主体性をもたせるべきであった。 ・ 学習内容を提示した時に、絵が気になり課題への取り組みが遅れた。 ・ 課題への取り組みは、形合わせの時にミスすることがあったが、説明すれば正解へ導くことができた。 ミスする前に正解へ導かねばならなかった。 ・ 絵合わせパズルは、置く位置を工夫することにより、カードを回転させて合わせられることができた。				
研究協議における意見・アドバイス				
・ 学習環境を構造化していくことが重要である。 ・ 授業の始まりと終わりを分かるようにし、見通しを持てるようにすることが大事である。 ・ 課題の表示については、簡潔に書くようにする。 ・ 課題が簡単すぎたのではないという指摘があった。 ・ ○△□の形合わせは、色と形を同じ色にして形だけでマッチングできるようにする。 ・ 絵合わせパズルは、数種類ならべて合わすことができるようにする。 ・ Aさんの内言語を、更に日常生活の中に増やしていけるようにする。				

(1) 公開授業 6

ア 国語科・算数科：「落ち着いて学習をしよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部1年A組の対象女子児童は席にじっとしていることが苦手で集中の持続が難しい。聴覚過敏があるため、大きい音がすると耳を両手でふさぎ、イライラして他害行為や教室から飛び出すなど衝動的な行動が見られる。日々の学習を繰り返すことで、学習時に着座できる時間も日によってだが、少しずつ長くなってきた。気持ちの切り替えのために、始まる前に「ボードの課題が終わったら、お楽しみ（前日にやりたいことを確認）をするよ。」と話したり、前回花丸がたくさんついて頑張った話をしたりすると、落ち着いて学習に取り組むことが増えてきた。国語では、あ〜んまでの平仮名表を見せると「難しい。」と言って横を向いていた。鉛筆は握ることも嫌がり、プリントを渡すとなぐり書きをして終わっていた。算数では、1から20まで読むことができた。具体物を同じ数だけ並べるように伝えると席を離れることが多くあった。

b つけたい力

個別学習で、あいさつを大きな声で、はっきりとできるように身に付ける。

国語では、平仮名の読み書きの上達を通して、身の回りの名前が分かり、日課の見通しや朝の会での役割の理解につなげる。姿勢を正して一つ一つの文字を丁寧に書く学習態度を身に付ける。

算数では、数と具体物のマッチング（写真③）は1〜3まではできるようになってきた。興味のある具体物等を活用して、4〜10までの具体物とのマッチングができる力を身に付けたい。数字の色と具体物の色を合わせることができる。具体物の色や形、大きさが変わっても合わせることができる力を身に付ける。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

マイナスの発言ではなく、良いところを具体的に話し、児童のモチベーションを上げる声掛けを心掛けている。気が散らないように、場の構造化として、ほかの児童に背を向けた机配置にしている。授業の見通しをもちやすくするために、ボードに書いた課題（写真①）が終わるごとに課題（学習項目）の提示を消している。プリント（写真②）が終わるごとに「できました。」と教師に伝えるようにし、頑張ったねスタンプやよく書けているところに花丸を書いて自信につながるようにしている。

b 児童への配慮

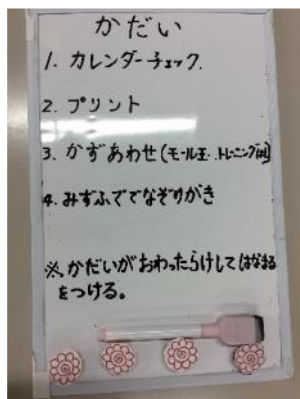
- ・聴覚過敏があるため声の大きさに気を付けている。
- ・興味を好きなキャラクター等を使って教材づくりをしている。
- ・前に出て発表することが苦手なので自信をつけるために、始まりと終わりの挨拶から大きな声ではっきりと言う、取り組みをしている。
- ・教材を作る時、絵や写真等を使って視覚支援をしたり、はっきりした色を使ったり、数字を色で分けたり、文字を書くときは分かりやすいように単語や短文にして文字に慣れていくようにする。
- ・児童のその日の状態を見ながら、プリントの枚数を調整したり、ボードの課題を入れ替えたりする。
- ・児童の落ち着きがないときは、一旦場所を変えクールダウンをして落ち着いてから学習に取り組む。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

個別学習が始まる前に、机の向きを変えたり、課題の入った籠を自分で準備したりすると、席に着き落ち着いて学習をすることができるようになってきた。個別学習の挨拶の役割に取り組むと、最初は小さな声だったが繰り返すうちに、はっきりと「姿勢、礼」「個別の時間始めましょう。終わりました。」と言えるようになってきた。

国語では、自分の名前に興味をもち、ポスターや絵本等で探すようになり、鉛筆や筆で書こうとする意欲がでてきた。また、なぞり書きの段階だが、プリントをした後、裏面に「自分で書く」と言って、名前を言いながら書くようになってきた。「難しい」と言うときは、「先生一緒に書いて。」と言って書くこともできるようになってきた。水筆を使ってのなぞり書き（写真④）は好きで、落ち着いて

丁寧に書くことが増えてきた。



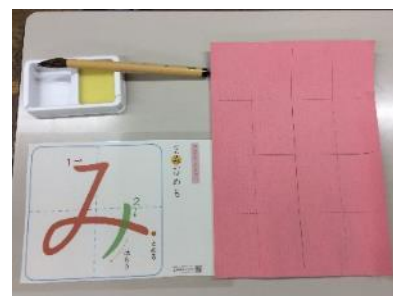
写真①



写真②



写真③



写真④

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

国語では、自分の名前のなぞり書きを、「自分で書く」と言って書くようになってきたが、気分　にむらがある。同じプリントだけでは飽きるので、名前だけではなく、塗り絵を加えて気分を変える。集中が途切れないように、好きなキャラクター等を取り入れた教材や良いところを褒める声掛けをして意欲につなげていく。

算数では、数と具体物を色別のモル玉（写真③）を使って行っている。1～3までできているので次に1～10までの数と具体物にモル玉を使って引き続き取り組み、繰り返すことで身に付いて自信につなげていく。

b 対話的な学びの視点から

児童の実態を踏まえその日の様子を見ながら、児童が「難しい、できない」と言った時「あと1枚頑張ってみよう。」とか、学習内容を入れ替えたりしてコミュニケーションを取りながら、時間一杯取り組めるように言葉掛けを行う。

他の教師の教材やアドバイスを参考に、児童の実態に応じた教材作りにおいて、視覚支援ツールや手先を使った教材等も作る。

c 深い学びの視点から

個別学習では、始まりと終わりの挨拶をすることで、朝や帰りの挨拶等も友達や教師等に自然　にできるように支援していく。

学習の終わりに振り返りをしていなかったなので、自分の思いを話せる力を身に付けていくために振り返りの場面を設定する。

算数ではモル玉を使った数合わせの時、トレーニング箸（写真③）を使ってお箸の持ち方につなげて実生活に生かせるようにしていく。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

- ・段階分けするときに分ける基準が難しいところがあった。
- ・新学習過程分析表を使って、授業内容や教材等のチェックをすることができた。

(カ) 実践例

令和2年度 国語科・算数科学習指導略案

教科・領域名	国語・算数	授業者	MT
学部・学年・	小学部 1年 A組	対象	1名

組		児童生徒数	
日 時	令和2年12月14日（月） 3時間目（10：50～11：35）	場 所	小学部1年A組教室
単元名	落ち着いて学習をしよう		
本時の目標	・ 始まりと終わりの挨拶をすることができる。 ・ 姿勢に気をつけて、筆記用具を正しく持ち文字に興味をもって書くことができる。 ・ 1～5までの具体物を同じ数だけ選ぶことができる。 ・ 形や色、大きさの違いに気付き選択することができる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・国語科 2段階〔知・技〕イー（ウ）―① 2段階〔思・判・表〕A聞く・話す ウ ・算数科 2段階〔知・技〕A数と計算 ア 2段階〔思・判・表〕A数と計算 イ 2段階〔学びに向かう力〕A数と計算 ウ ■自立活動 心理的な安定（1） 人間関係の形成（3） コミュニケーション（1）（2）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 机やいすを移動し、個別学習用のかごを準備する。 2 始めの挨拶をする。	・ 個別の学習が始まることを伝え、声掛けで準備を促す。 ・ 号令を掛けて姿勢を正し、一緒に「はじめましょう」と声を出して、礼をするようにする。 ・ 机の前に課題を掲示し、指差しで示しながら、学習内容に見通しがもてるようにする。 ・ 月日・曜日を確認し、カレンダーに○を鉛筆でつけ、シールを貼るように伝える。 ・ プリントの課題では、丁寧に書くように声掛けしたり児童の様子を見ながら一緒に書いたりして、できたら好きなスタンプやシールをプリントに貼るように支援する。 ・ トレーニング箸を使って数の横に数えながら同じ数だけモールを入れ、「できました。」と伝えるように支援する。 ・ 水筆のなぞり書きでは、水遊びが好きなので、塗り絵にならないように用紙の交換を早く行う。 ・ 集中力が持続しにくいので、児童が好きな教材を組み入れる。	
展開 35分	3 本時の学習内容を知る。 4 課題に取り組む。 ・ カレンダー日付調べ ・ 国語・算数プリント ・ 算数教材 ・ 水筆でなぞり書き ・ お楽しみをする。		
まとめ 5分	5 終わりの挨拶をする。 6 片付けをする。		
		・ 号令を掛けて姿勢を正し、「終わりました」で一緒に声を出して、礼をするようにする。 ・ 指定の場所に片付けができるよう声掛けし、慎重に運べるように支援する。	

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点

展開 4 「課題に取り組む」		・学習の見通しがもちやすいように学習項目を書き、終わるごとに消し、確認できるようにしている。 ・プリントは終わったあと、穴あけとファイリングを自分で行い、できたことを確認し自信につなげるように支援している。	主 1－②③ 2－③ 4 対 1－② 5
展開 4 「課題に取り組む」		・プリント学習では、課題を終わらすことができたなら、シールやスタンプがあることを伝え、学習に楽しい気持ちで取り組めるようにしている。 ・トレーニング箸とモール玉で数合わせの教材を使い、集中して学習することをねらっている。	主 1－②③ 2－③ 対 1－② 深 1－②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
児童A	・文字に興味をもち自分の名前を鉛筆や水筆等を使って落ち着いて書くことができる。 ・1～5までの数に気付き、同じ数だけのモール玉を枠に入れることができる。	・文字に興味をもち始め、ポスターや絵本等に自分の平仮名があると指差して「○があった。○はどこにある？」と楽しく見つける様子が見られてきた。なぞり書きも好きな字、書きやすい字はなぞるようになった。ほかの字は教師と一緒に書き、繰り返しながら書けるようにする。 ・1～3までの数合わせは、合う確率が高くなってきた。繰り返し1～10に増やしていくようにする。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・45分の授業を計画的にできていなかったのが不安だったが、最後まで席を離れることはなかった。 ・プリントの名前書きで、児童の書きたい気持ちをくんで裏面を使って書いた。その後プリントの名前を書く場所を再確認させた方がよかった。 ・周囲の音等気になるので、パーテーションを使った方がよいかもしれないと思った。 ・数合わせでは、間違ったらその時やり直しをすると分かりやすくなった。 ・できたプリントに穴を開けてファイルする所までできなかった。(次回まとめてやった。)			
研究協議における意見・アドバイス			
・情緒面、多動面の課題の多いAさんに懸命に向き合っていることに敬意を表します。 ・なぞり書きの学習では鉛筆等の持ち方で次第に適切な持ち方が定着されてきていると思います。左手は紙を押さえることの指導が必要です。両手の操作性を指導してあげてください。 ・国・算の2段階は目標が高すぎるので、1段階で良いのではないかと。 ・数と具体物との線つなぎでシールを活用するのは、意欲につながってよい。 ・声掛けの時、否定形ではなく「○○したらしようね。」等と次へ意欲をもてる声掛けに気を付ける。 ・筆の持ち方と鉛筆の持ち方の違いを教える。 ・ボードの課題を一つ一つ終わるごとに確認しながら、児童が消すのは見通しがもててよい。			

(1) 公開授業7

ア 生活単元学習「お米を作ろう～昔の米作りを知ろう～」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童（生徒）の実態

小学部2年B組は、男子3名、女子1名の計4名のクラスである。この中には、口頭の指示が通るが集中力が持続しない児童、口頭だけでは難しいが視覚支援教材を用いたりモデリングを受けたりすると理解しやすい児童、生活全般を通して支援が必要な児童などが在籍しており、実態には幅がある。そのため、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要となっている。

児童の多くは生活経験が少なく、自分たちが日々食べているご飯がどのようにして作られているかを知らない状況である。また、一人で遊ぶことや制作時に自分の力だけで作り上げることに慣れており、友達に対する声掛けや協力して取り組む気持ちがほとんど見られないといった実態がある。

b つけたい力

本単元では、昔の米作りで使っていた道具を活用しながら、田植えから育てた稲を友達と協力して脱穀、精米することを目標に設定した。その中で、ペア学習を通して友達への関心を増やし、友達と目標に向かって頑張る気持ちを高めたい。生活単元学習において教科・領域を関連させながら、自分たちの力で大好きなご飯ができるまでの工程を知り、友達と協力して目標に向かうこと、経験を増やすこと、日々食べているお米を知ることなどにつなげたいと考える。

この単元では、1学期の田植え、2学期の稲刈り、はざかけなど米作りの基礎を体験した後、現在は機械で行っている脱穀や精米の工程を、昔の米作りの道具（千歯こき・唐箕など）を使って取り組む。学習の前半では米作りに関する絵本の読み聞かせを行い、絵本に注目して聞いたり、米作りに関する知識を思い出したりすることを大事にしている。学習の展開では、実際の道具を使用しながら、稲の脱穀や粃摺り、精米を行う。この際、二人一組のペアで取り組むことで、一緒に作業をしている友達を知り、お互い道具を使うときと支えるときで代わり合いながら、協力して作業を行うことを目的としている。また、友達に対して「交代して」「どうぞ」などの声掛けを行うことで、コミュニケーション力の向上も目指したい。

こうした学習活動の中で、体験を通して米作りの基礎を学びながら、友達と協力し、助け合う気持ちを育てたい。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

- ・視覚支援が有効なため、見通しがもてるようにパワーポイントで学習の流れや写真での振り返りを行った。
- ・視覚支援を用いた簡単なクイズを行い、楽しみながら米作りを学ぶことで、集中力の持続に留意した。（大型テレビを使用し、視覚情報を優位に得ることができるよう心掛けた。）
- ・擬音語や擬態語、絵や写真が多い絵本または食育本を選び、絵本が見やすい位置、長くなり過ぎない、声に抑揚をつけるなどに留意しながら読み聞かせを行った。
- ・実際のお米を見て触ることで、目指すゴールの確認を行った。
- ・米作りの道具を使う体験では、二人一組にすることで、友達と協力して取り組む機会を取り入れ、友達への声掛けや関心などを増やすことができるように心掛けた。
- ・タイムタイマーを使用することで、最後まで頑張る力の持続を促した。
- ・脱穀は千歯こき、粃摺りはすり鉢とボール、粃の選別は唐箕、精米は瓶と棒など、昔の道具を使用することで、実際に一つ一つ体験しながらお米作りを行うことができるようにした。
- ・学習場所を、教室と中庭にして動きを多く取り入れたことで、集中力の持続を促した。





絵本・食育本

千歯こきで脱穀

中庭での作業

二人一組での作業

b 児童への配慮

・主体的に学ぶことができるよう、興味・関心のある道具を使用した。道具を安全に使用できるよう、補助者が児童の手をプロンプトしたり声掛けしたりすることに留意した。

・対話的に学ぶことができるよう、ペア学習を取り入れた。

・深い学びに繋げるために、苗から育てて作ったお米を実際に炊いて食べ、生活に般化させるイメージをもつことができるよう、視覚支援や声掛けを行った。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

・絵本の読み聞かせに親しみ、言葉でのやり取りを聞いたり、伝えようとしたりすることが増えた。

【学びに向かう力・人間性】

・身の回りの自然（米作り）について関心をもつこと、知ることができた。【知識及び技能】

・友達や教師からの「代わりましょう」「どうぞ」など話し掛けに注目したり、応じて答えたりすることが増えた。また、道具の使い方や友達との交替の仕方などに関する簡単な指示や説明を聞き、その指示等に応じた行動をすることができた。【思考力・判断力・表現力等】

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

・実物を使用する際、提示している教材（道具）が複数にならないよう、次の活動に移るときには前の教材を児童から見えない位置に片付け、注目させたいものに集中できるよう配慮する。

・児童の個々の実態に応じて、導入時のみでなく、ゴールを明確にし（白いお米を提示するなど）、やる気や集中力を持続させられるようにする。

・児童が達成感をもつことができるよう、少ない量を確実に終わらせるようにする。また、作業内容を詰め込み過ぎないようにして、目標の焦点化に重点を置く。

b 対話的な学びの視点から

・作業時のペアを交替し、友達への関わりを広げるようにする。

・授業の展開を録画し、作業で友達とやり取りしながら協力できていたかを自分たちで確かめられる機会をもつようにする。

c 深い学びの視点から

・ゴールを再度明確にし、ゴールに近づくためにはどうしたらいいのかを考える時間をとるようにする。（作業をもう少し長く頑張る、もっと友達と協力するなど）

・友達と協力して作ったお米で何を作るか考えることや、お米が様々な料理に変化することを視覚支援にて伝え、いろいろなものを作りたいという意欲につなげられるようにする。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

主体的な学び、対話的な学び、深い学びの観点を明確に分類しているため、アクティブ・ラーニングの視点を大切にしながら授業づくりを行う意識をもつことができた。一方、項目が決められているため、児童の実態によっては、主体的な学びのみが多くなり、対話的な学びと深い学びの観点が希薄になる懸念がある。対話的な学びでは「教職員や地域の人との対話や関わり」、深い学びでは「自分からの発信、興味や発声の広がり」などに関する項目があると良いのではないかと考える。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	小学部2年B組	対象 児童生徒数	4人
日 時	令和2年10月23日（金） 2・3時間目（9：55～11：35）	場 所	小学部B組教室 教室前の中庭
単元名	お米を作ろう ～昔の米作りを知ろう～		
本時の目標	・ 昔の米作りの道具に触れながら、安全に作業を行うことができる。 ・ 友達と交代したり協力したりしながら、脱穀などを行うことができる。 ・ 読み聞かせに注目して聞くことができる。		
学習指導要領 との関連	■小学部学習指導要領 ・ 生活科 1段階 2段階 サ 生命・自然（ア）（イ） ・ 国語科 1段階 〔思考力, 判断力, 表現力等〕 A聞くこと・話すことアイ 2段階 イ内容〔知識及び技能〕 ア(ア)(イ)(ウ) 〔思考力, 判断力, 表現力等〕 A聞くこと・話すことアイウエ ■自立活動 2 心理的な安定（2） 4 環境の把握（5） 6 コミュニケーション（2）（5）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 10分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。	・ MT に注目できるように声掛けする。 ・ PowerPoint で、これまでの学習を確認し、本日のスケジュールを伝える。	
展開 60分	3 絵本を読む。 4 稲の脱穀を行う。 ・ 千歯こきを使って脱穀する。 ・ 粃を触った後、ボウルに集める。 5 粃摺りを行う。 ・ すり鉢とボールを使ってこする。 ～休み時間～ 6 お米の選別を行う。 ・ 唐箕（とうみ）を使い粃と粃殻を選別する。 7 精米を行う。 ・ 二人一組になる。 ・ 瓶と棒を使って精米する。	・ 絵本が見える位置に移動する。 ・ それぞれの作業前に MT が手本を示してやり方を伝え、安全に留意しながら行う。 ・ 粃に触って感触を楽しんだ後、協力しながらボウルに入れるようにする。 ・ 粃をいれすぎないように注意する。 ・ 友達と交代しながら行うようにする。 ・ 様子を見ながら休み時間をとる。	
まとめ 10分	8 後片付けをする。 9 学習を振り返る。 10 終わりの挨拶をする。	・ ハンドルをゆっくり回す等、注意点を伝えた後取り組むようにする。 ・ ペアを作り、友達と協力して行う意識を高められるようにする。 ・ タイマーで活動の終わりを伝える。長く設定しすぎないようにする。 ・ 協力して片付けを行う。 ・ 頑張ったところを発表する。 ・ MT がそれぞれを評価する。 ・ 次時の予告をし、期待感を高める。	
注目してほしい学習活動			

学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開4「稲の脱穀を行う」		・初めて使う農機具だが、MTの話と手本に注目して見聞きした後、安全に使うことを心掛ける。その後自分たちで脱穀した粳に触れる等など主体的な活動を通して、感触や匂いを存分に味わえるようにしたい。友達と協力して粳を集める場面では、できるだけ支援の手は少なくする。	主 1-①② 2-①②③ 4 対 3-①② 4-①②
展開5「粳摺りを行う」		・手本に注目できるよう声掛けする。児童が行う場面では、できるだけ支援の手を外し、一人で体験できるように留意する。友達と交代する場面では、「どうぞ」「ありがとう」のやり取りを促すことで、場に応じたやり取りを身に付け、コミュニケーションの力を高められるようにしたい。	主 1-①②③ 2-① 3 対 1-①②③ 4-①② 深 1-② 2-②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
児童C	・稲や粳に触れ、感触を楽しんだり発声したりしながら、主体的に取り組むことができる。	自分から手を伸ばし、稲や粳に触れることができ、声も出ていた。笑顔は少なかったが、粳摺りでは、すり鉢を入れた段ボールで振動を感じたり、すり鉢の中身に集中して見たりすることができた。精米時は、棒を一人で動かし、主体的に活動することができた。	B
児童D	・友達に声を掛けて交代したり協力したりしながら、最後まで作業を行うことができる。	タイムタイマーを見て、終了の合図が鳴るまで粳摺りや精米の作業を頑張ることができた。自分から友達に声掛けすることはほぼなかったが、教師の声掛けを聞き、友達に声掛けし交代することができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・STと協力して安全に作業を行うことができたが、回転を生じる唐箕では、巻き込まれないように、より注意を払うことが大切であったと感じる。また、作業内容が盛りだくさんであったと思う。 ・ペア学習を通して友達との関わりを増やすことができて良かったが、ペアを固定したため、ペア以外の友達との関わりが少ない結果となった。 ・絵本の読み聞かせは、集中して聞くことができたが、絵の明確さ(コントラスト)が低かったため、今後は全児童がより見やすい絵本の精選に尽力したい。			
研究協議における意見・アドバイス			
・千歯こきは、使用後は安全に留意しながら横に片付けた方が良かった。また、稲を数本か扇状にしてこくと、粳が稲から外れるのが明確に分かり、達成感につながったのではないかと。 ・ゴールを明確にするため、お米のサンプルを置いていた方が良かった。また、振り返りの視覚支援(写真)は、黒板の上方ではなく下方に貼った方が見やすい。 ・タイムタイマーの使用が良かった。また、単調にならない活動設定ができており良かった。 ・作業時のダイナミックな動きや、体の使い方や力の入れ方の違いなどがあり良かった。 ・粳摺りと精米は作業台(机)が高かった。児童がやすいよう場の環境を整えることが大切である。 ・児童Cに関して、どのようなときにどのような発声があるか、記録をとって分類し、判断することが大切である。			

(1) 公開授業8

ア 生活単元学習「ハロウィンのお菓子作りをしよう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部2年B組は、男子3名（A、B、D）、女子1名（C）、計4名のクラスである。実態としては、A、B、Dについては、言葉でコミュニケーションを取ることができ、Dは会話が、A、Bは覚えている単語を言ったり、日常生活でよく使う挨拶や依頼をしたりすることができる。3名とも自閉症を併せ有し、文字やイラスト等を入れたスケジュールや活動内容を明示することが有効で、活動に見通しをもつことができる。また、活動の手順を実際に見せたり、動画で示したり、手順書で示したりすることで、スムーズに活動できることが多い。Cについては、喃語を発することができ、名前を呼ばれたり、返事を求められたりしたときには、手を挙げたり発声することで応えたりできることがある。斜視のため、見え方への配慮の他、教師の手添えや支持、支援具や補助具の活用等が活動に際しては有効である。

b つけたい力

児童の課題として、慣れない活動に対しては見通しが立たなかったり、自信がなかったりすることから、主体的に活動に取り組む意欲が乏しいこと、生活経験が少ないこと、学習によって得た知識・技能が断片的になりがちで実際の生活の場で応用されにくいことが挙げられる。そこで本単元では、児童が好きな活動である調理を取り入れることで、意欲をもって主体的に取り組むことができるようにすること、「作ったものを食べる」という具体的な学習を通して、生活経験を積むことができるようにすること、身近な食材や調理器具の扱いに慣れることで家庭等の実際の生活場面への般化をすることを目標に取り組んだ。また、Cについては、感触遊び的な活動を通し、様々な感覚を刺激できるようにした。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

教材として、ハロウィンの時期だったこともあり、調理をするという楽しみに加えて、ハロウィンの由来を動画で見せ、カボチャのお菓子を食べる意味を意識できるようにして、意欲の向上をねらった。また、児童が完成図をイメージできるように調理の1回目の導入では、教師が作った実物の提示と手順動画を見せてから取り組むようにした。また、活動に際しては、工程毎に準備する調理道具と活動内容を写真入りで記した自立式で、めくっていける形の手順書を用意して、自分で確認して作業を進めることができるようにした。

机の配置は、隣の児童の活動が見えるように横並びとした。

調理器具及び材料は、基本的には各児童の机の前にもう一台机を並べ、その上に配置することで、道具等を置くスペースと、調理をするスペースを分けて、活動をしやすくなるようにした。

また、Cにとって感触遊び的に活動に参加できるようにクッキーを手やすすり棒で潰したり、それとバターを袋に入れてもみ合わせたり、ミキサーを使って振動を感じながら目の前で材料が混ざり合う様子を見たりすることができる活動を設定した。道具自体も、特にCへの補助を想定して、持ちやすい形のすり棒や握るだけで割卵できる割卵器、小型のハンドミキサー等を用意した。

さらに、同じ内容の調理を、期間を開けずに2回繰り返すように設定することで、知識・技能の定着と、般化へつなげることができるようにした。



(↑準備物と活動内容を示した手順書) (↑握りやすい形状のすり棒) (↑小型ハンドミキサー)

b 児童への配慮

教師の説明や発言は最小限にし、活動する時間を多くとり、できる限り自分で考えたり、工程を進めたりすることができるようにした。戸惑う様子が見られた場合には支援を依頼するよう声掛けしたり、手順書を確認したりするようにし、最小限の支援を心掛けた。

Bについては、1回目は、手順書を自分でめくり進めて行くことが難しい様子が見られたため、一枚一枚教師と確認しながら進めて行くようにした。Cについては、S Tが適宜、道具を支持したり、手添えしたりして活動を補助するようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

好きな内容であったこともあり、どの児童も高い意欲をもって、集中して取り組むことができた。また、体験的な活動を通して、手順書を見て道具を揃えたり、調理器具を適切に扱ったりすることができる等、実践的な知識・技能の定着が見られた。さらに、2回同じ内容の調理を行ったことで、自分で考えて活動する様子や、一人でできる活動を増やすことができる等、今後、般化へとつながるであろう様子も見ることができた。具体的に児童それぞれで見ると、Aについては、手順を間違えて教師に指摘を受けることはあったが、気持ちを崩すことなく最後まで取り組むことができた。Bも集中力を維持して取り組むことができ、クッキーを潰したり、材料をほぼ均等にカップに振り分けたりすること等が一人でできた。Cについては、綿棒を握ったり、ハンドミキサーを持ったりすることを自分でできた場面があったり、自分の作業によく目を向けることができたDについては、おおむね一人で手順書を見て活動を進めたり、難しいところは支援を求めたりすることもできた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

本単元では、児童が好きな活動を設定することで、高い意欲をもち、自発的に行動する様子が多く見られたように思う。今後も興味・関心の高い題材を取り入れ、様々な経験を積み自信や自己肯定感を高め、いろいろなことにチャレンジする姿勢を引き出せるようにしていきたい。

他方、今回の単元で、Aについては、手順動画と手順書の両方を用意した1回目と、手順書だけで取り組んだ2回目を比べると、1回目の方がミスなく、一人でできる部分が多かったことから、手順書を自分で活用できるようになるまで、A児には手順動画を用意する等、成功体験を多く積むことができるよう授業づくりをしていきたい。

b 対話的な学びの視点から

自分から支援を求めることができる児童もいたが、コミュニケーションに課題がある児童が多いため、挨拶や報告、支援の依頼等を自分からできるように今後も継続して取り組んでいきたい。その都度の指摘はもちろんのこと、日頃から挨拶等を自分からできる関係づくりや環境づくりも引き続き行い、できたときは即時に取り上げて評価して意識できるようにしていきたい。

c 深い学びの視点から

1回目より2回目の方が、手順書を自分で確認して活動する様子や、できることが増えている様子が見られた児童が多かったので、今後も繰り返し取り組む活動を設定することで、知識や技能を習得し、自ら考え活動できる場を増やしていき、実際の生活の中でも生かせるようにしていきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

学習過程分析表を活用することで、活動がどの要素に結びついているのか、また、どの部分が不足しているのかを確認することができ、授業の流れを整理しながら計画を立てることができた。

上記したように計画を立てる際には非常に有効であるものと実感するが、これを定量評価する仕組みができれば、客観性をもつ、より充実したPDCAサイクルができるのではないかと思う。

(カ) 実践例

令和2年度生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	小学部2年B組	対象 児童生徒数	4人
日 時	令和2年10月30日（金） 2時間目（9：55～10：40）	場 所	小学部B組教室
単元名	ハロウィンのお菓子作りをしよう！		
本時の目標	・手順書を見たり、教師の支援を受けたりしてお菓子を作ることができる		
学習指導要領 との関連	■小学部学習指導要領 ・国語科 1～3段階 C 読むこと ウ ・生活科 1段階 オ 人との関わり(イ)、コ 社会の仕組みと公共施設 2段階 オ 人との関わり(ア)、キ 手伝い・仕事(ア)(イ) 3段階 キ 手伝い・仕事(ア)(イ) ■自立活動 ・3 人間関係の形成(1) ・6 コミュニケーション(1)、(2)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 挨拶	・授業前に児童の机の前に、もう一台机を並べ、手順書や、必要な調理器具等を置いて、そこから自分で取ることができるようにする。 ・机は感染症対策のため、向かい合わせない。	
展開 35分	2 本時のめあての確認 かぞくにハロウィンのおかしをつくらう！	1：大きな声で挨拶できれば即時評価する。挨拶できていない児童がいれば、個別に挨拶する。 2：めあては児童に馴染みのある、「がんばること」として提示する。 3：ホワイトボードに流れ（イラストと平仮名文字を併記した印刷物）を提示する。	
	3 本時の流れの確認 2時間目に生地作り、3時間目に焼成と試食、ラッピングをすることを確認する。 ※メッセージカードを28日に作り終えていない児童はメッセージカードを完成させることを確認する。	4 ・手順書は、工程ごとに赤枠に準備物、青枠に活動内容を写真と平仮名文字を入れた印刷物を写真立て型アルバムに入れる。 ・28日水曜日の調理の様子を踏まえ、最小の支援で児童が活動できるようにすることを意識して取り組む。	
	4 生地作り ・身支度、手洗いと、マスクの正しい着用を確認してから取りかかる。 ・児童A、Dは手順書をできる限り自分で確認して調理を進めることに取り組む。 ・児童Bは教師が手順書の写真やイラストを指差ししたり、声掛けしたりして調理を進めることに取り組む。 ・児童Cは、教師の手添え等を受けながら、割卵器やハンドミキサー等の器具の取り扱いにも挑戦する。	・できたことに対しては即時評価する。（声掛け、ハイタッチ等） ・児童の活動の様子を適宜タブレット型端末で撮影する。	
まとめ 5分	5 本時の振り返り ・タブレット型端末で撮影した児童の活動の様子を確認し、お互いの活動を見合う。	5：画像や映像を見ながら、適宜評価する。 6：次々の活動をイラストと平仮名文字を併記した印刷物を見せながら確認する。 7：大きな声で挨拶できれば即時評価する。挨拶できていない児童がいれば、個別に挨拶する。	
	6 次時の流れの確認		
	7 挨拶		
注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で

		深い学びの視点	
展開「4生地作り」	・工程毎にページ分けした手順書を作成し、各ページで準備物と活動内容を写真と平仮名文字を入れる視覚支援を行い、支援なしに、あるいは最小の支援で児童が活動できるようにする。	主－1－② 主－2－②、主－3 対－1－② 対－2－①・②	
展開「4生地作り」	・児童が自分で活動できるように使用する器具等を使いやすいものにする。児童の実態に応じて、割卵器やハンドミキサーも使用する。	主－1－① 主－4	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童A	手順書を見て自分で菓子づくりを進めることができる。分からないことがあったときには、教師に助けを求めることができる。	手順書を確認せずに活動を進めようとする（牛乳を違うタイミングで投入しようとする）ことがあった。また確認が不十分でミスが出た（クッキーを投入するボウルを間違えた）ことがあった。助けを求めるのは、本時ではできなかった。	C
児童C	クッキーを手で割る感触を得たり、ハンドミキサーを使った際の振動や材料が混ざっていく様子を見たりして、発声や注視等、活動に意欲を示すことができる。	活動に意欲的に参加することができていた。（麺棒でクッキーをつぶす、ハンドミキサーを持つ等）ハンドミキサーについては、自分から手を伸ばす場面もあった。自分の作業にもよく目を向けることができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・食えること、作ることが好きな児童が多いことから、どの児童も意欲的に活動する様子が見られた。 ・活動前に手順動画の確認を入れると良かった。特に児童Aについては、手順動画と手順書の両方を確認した前時では、手順を覚え、手順書を活用する様子が見られたが、手順動画を見なかった今回では、手順書の確認が抜かった工程で、手順を間違えることが何度かあった。 ・視覚的に使い分ける観点から、耐熱ボウルと金属ボウルを分けていたが、電子レンジを使う工程で金属製ボウルを使おうとする児童がいたので、電子レンジを使用する活動がある場合には、特に必要なければ全て耐熱ボウルでそろえ、色等で分ける等すると良いのではないかと感じた。			
研究協議における意見・アドバイス			
・実態の違う4人が同じ作業をする時の手立てが細やかであった。手順を示した動画を見せる等の支援が良かった。 ・児童Bについて、器具や材料名が分からず、戸惑う場面はあったが、手順書を教師と一枚ずつ確認することで、準備物を用意することができた。ジップ付きの袋に入っているバターが混ざっていたクッキーをボウルにうつす場面で、苦労している様子が見られた。 ・児童Cについて小型ハンドミキサーや持ちやすい形状のすりこぎが用意されたことで、持ちやすく、児童も意欲をもって活動する様子が見られた。 ・手紙を渡す相手について、「家族」としていたが、より具体的に誰にプレゼントするか意識付けしても良かった。			

(1) 公開授業9

ア 音楽科「音楽で楽しく体を動かそう」

(ア) うな力をつけさせたいか

a

歌詞を

できる

中に

分に

きる



ること

実態の

ルに課

い様子

うので、



に合った学習活動を準備する必要があると考える。

b つけたい力

上記の実態を踏まえ、児童が興味をもちそうな打楽器を使用したり、演奏の速度を変えて身体表現の活動をしたりすることで、集中して学習する力を養いたい。

音楽を愛好することで、生涯にわたり生活を豊かなものにすることができると考える。テレビ番組やコマーシャルでもクラシック音楽が使われていることが多く、それが既習曲や親しめる楽曲であれば、日常生活の小さな楽しみにつながるのではないかと考える。小学部低学年では、流行に左右されないクラシックにも触れる機会を設けることで、様々な楽曲に親しみをもつきっかけになればと思う。

また、好きな音色や楽器の音を見付ける鑑賞に関する技能だけでなく、教師や友達と一緒に歌う技能、曲の一部を模唱する技能、自分の歌声に注意を向けて歌う技能、音楽に合わせて体を動かす技能などの力をつけたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

好きな音色や楽器の音を見付ける技能、教師や友達と一緒に歌う技能、曲の一部を模唱する技能、自分の歌声に注意を向けて歌う技能、音楽に合わせて体を動かす技能などの力をつけるために、興味を抱くことのできる教材を精選し楽曲に親しみをもたせることや、様々な活動を取り入れることで実態に大きな違いのある児童がお互いに認め合いながら深く学んでいけるよう工夫した。

例えば、自分の歌声に注意を向けて歌う技能を養うために、マスク着用で小さな声でも歌唱の達成感を味わえるよう、マイクを使用した。その際、エタノールで消毒したペーパーをマイクに被せ、児童毎にペーパーを取替え感染予防に努めた。

『虫の声』では、実際の虫の鳴き声を視聴することで、歌詞に出てくる擬音語のイメージをもちやすくしながら曲の一部を模唱する技能を身に付けさせるよう工夫した。また、児童が虫のイラストを探す活動やホワイトボードを配る活動を取り入れることで、歌唱だけでなく友達を意識することや、他者とのコミュニケーションの基礎的能力を養う配慮を行った。

音楽に合わせて体を動かす技能を養うために、『しろくまのジェンカ』では教師も一緒に全員で前後にジャンプすることで、予想以上に楽しむことができた。

b 児童（生徒）への配慮

虫のイラストを探す児童 歌詞の擬音語を楽しく学習 全員が鳴らせるベルハーモニー

を上手に活用することを目的に、学習活動や、イラストと合ったカードを用いると同時に児童の学習カードを曲名毎に示し、全員に発表の機会を設けた。『しろくまのジェンカ』ではジャンプの進行方向を示す赤い養生テープを床に貼り、視覚支援を行った。その際、実態の違いに合わせて学習活動の幅を大きくし、学習意欲を高めるよう教材や使用楽器の精選に努めた。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

前年度は、音楽の授業自体に対する意欲が低く、歌唱等も積極的に参加しなかった児童が、興味のある楽曲が取り上げられ歌える自信ができてくると、友達の前で、堂々と歌唱することができるようになった。また、年度当初は活動に十分に参加できない児童が複数名見られたが、様々な打楽器やICT機器の活用、授業の流れをイラストで示すなどの視覚支援の充実を図ることで、離席も減り、意欲的に学習に取り組むことができるようになってきた。さらに、授業では授業規律を守ることができるよう、始業時には、約束事をカードにイラストで示し、それを確認してから取り組むようにした。毎回取り組むことで、児童の中には約束事の文言を覚えて教師がカードを提示する前に口に出す様子も見られ、落ち着いて学習に取り組むこともできるようになり、授業規律を守ることができる児童も増えてきた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

「やりたい！」と手を挙げる児童に、更に高い表現や鑑賞の技能を伸ばしていく。また、「できた！」を増やし「やりたい！」につながるよう、伴奏等を調節して成功体験を重ねていく必要がある。

b 対話的な学びの視点から

友達や身近な教師の演奏を聴くことや、一生懸命に演奏する姿を見ることで、友達を認め友達に認めてもらいたいという心情を育て、その意欲が、リズムや旋律を味わい斉唱から合唱や輪唱へと学習の幅が広がっていくのではないかと考える。

c 深い学びの視点から

歌唱や器楽を友達や保護者の前で発表することを通して自己肯定感を高め、規律やマナーを守ることのできる心情を育てていく。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

学習活動を予想する段階で、これらの項目は参考になるものも多くあるが、支援度の高い小学部の児童には当てはまらないものもあった。

特に、Ⅲ深い学びについての項目は、もう少し幅広い実態の児童にも当てはまるように改善できればと思う。

（カ）実践例

令和2年度 音楽科学習指導略案

教科・領域名	音楽	授業者	MT ST 9名
学部・学年・組	小学部1年A組 2年B組	対象 児童生徒数	11人
日時	令和2年10月15日(木) 2時間目(9:55~10:40)	場所	プレイルーム
単元名	音楽で楽しく体を動かそう		
本時の目標	- 音や音楽を感じて体を動かしたり、声や器楽の音を出したりする。 - 音や音楽を聴いて、自分なりの楽しさを見つけようとする。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 音楽科 2段階 A表現 ア(ア)(ウ)㊦㊧㊨ エ(ウ) ㊩ B鑑賞 ア(イ) ■自立活動 3 人間関係の形成(1) 6 コミュニケーション(1)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 2分	1 集合曲『ラデツキー行進曲』 聴きながら、学習の始まりを待つ。 『はじまるよはじまるよ』 手遊びをしながら学習の姿勢をとる。	絵カードに沿って説明する。	
展開 15分	2 始めのあいさつをする。 学習の流れを知る。 自分がどの曲で発表するのか知る。 3 歌唱『虫の声』 動画を視聴しながら歌う。 虫のイラストを見たり、虫の声を聞いたりする。 虫のイラストを探す。 全員で歌い、代表者が虫の声の箇所を歌う。	★クールダウンが必要な場合は、適宜対応をお願いします。 - 学習の各場面で、前で発表する児童を予告し写真カードで示すことで、見通しがもてるようにする。 - 小さい声で歌えるように、マイクを使用する。 - 見つけたカードを貼る台紙を用意する。	
5分	4 身体表現『ラジオ体操』 伴奏に合わせて、体操する。	- 伴奏に合わせてイラストを動かすことで、体の動きの見本を示す。 - STは、児童の実態に合わせた支援をお願いします。	
5分	5 身体表現『しろくまのジェンカ』 歌いながら、両足跳びをする。		
10分	6 鑑賞『カノン』 リコーダーの演奏を聴く。 7 器楽『カノン』 2拍(2分音符)を手拍子で練習する。		
まとめ 3分	ベルハーモニーで1フレーズずつ演奏する。 8 ふりかえり発表をする。 9 終わりのあいさつをする。	絵カードの中から選ぶことができるよう準備する。	

注目してほしい学習活動

学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開「①歌唱：楽曲の虫の声の箇所を歌う」		『虫の声』の範唱動画を視聴したりカードを探したりする活動を取り入れることで、楽曲への親しみがもてるように工夫した。また、実際の虫の鳴き声を視聴したり、分かりやすい言葉で説明したりすることで、鳴き声の部分の歌唱に意欲がもてる。	主－１－①②、３、４ 対－３－①、５－①
展開「④器楽：ベルハーモニーで１フレーズずつ演奏する」		新しい楽器を使用することで、演奏する意欲がもてるようにした。また、２分音符を演奏する際には、クラビノーバの伴奏を児童の演奏に合わせることで、児童に達成感を味わわせるように工夫した。	主－１－①②、２－② ３、４ 対－３－①、４－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童D	・『虫の声』の声色を工夫して正しい音程で歌うことができたか。 ・楽曲に親しみを抱くことができてきたか。	動画で視聴した虫の鳴き声を参考にして自分なりに声色を工夫したり、歌詞の擬音語を楽しんだりしながら正しい音程で歌うことができた。自分で工夫して歌うことで、楽曲に親しみを抱くことができた。	A
児童A	・『カノン』の第一主題を、少ない支援で演奏することができたか。 ・友達の演奏を聴き、タイミングを見計らって鳴らすことができたか。	ベルハーモニーを２分音符で演奏する際に、ややタイミングが早い所もあったが、階名唱による支援のみで鳴らすことができた。また、友達の演奏を聴き、良いタイミングで鳴らすことができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者反省)			
専門性の高い教科である音楽を、楽しみながら学習できるように工夫して行っている。また、歌唱では大きい声のみを求めるのではなく、力みのない発声で楽曲に合った歌い方を味わえる力を付けることで、生活を豊かなものにすることができる。 本単元では、児童が興味をもてる活動を取り入れ、楽しみながら楽曲に親しめたように思う。実際の虫の鳴き声を視聴したり、身近な教師の生演奏を聴いたりすることで、自分で演奏したいという意欲を育むことができた。また、STの協力で、充実した授業ができたことを感謝している。			
研究協議における意見・アドバイス			
・多様な学習活動が盛り込まれており、実態に合った活動で学習に参加することができていた。 ・『虫の声』の学習で、教場内の虫のイラストを児童が探してホワイトボードに貼る活動では、見つけたイラストについて評価したらよかった。 ・クラシック教材として取り上げていたが、児童が親しみやすい方法で演奏に参加できていた。			

ア 生活単元学習「紙と遊ぼう②」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

本学級は男子2名、女子1名で構成されており、うち2名は自閉症を、1名は聴覚障害を併せ有している。また、医療的ケアが必要な児童もおり、実態は様々である。コミュニケーション面では、全員発語はないが、簡単な声掛けに応じることができる。聴覚障害の児童については、簡単な手話やイラストカードで対応している。

本学級の児童は比較的障害が重く、トランポリンやブランコ、水遊びなどの全身を使った活動を好む。反面、土や粘土などに触れることに抵抗感を示したり、手のひらでの操作にぎこちなさを感じさせたりするなど手指への刺激に弱さが見られ、感覚刺激を取り入れた取り組みを行うことも必要な学級であると考ええる。今年度は、体を大きく使った活動が思うようにできないため、年間を通して紙を中心素材とした感触遊びに取り組むこととした。本単元では、手作りの紙粘土で自由に遊んだ後、児童の実態に合わせて握ったり丸めたりしてお団子を作り、秋の風景の壁面飾りとして仕上げ活動の成果が確認できるようにした。

b つけたい力

本単元では、牛乳パックをミキサーでかくはんしてパルプを作り、のりを混ぜて手作りした紙粘土で感触遊びをする。紙粘土で自由に遊ぶ中で触れることへの抵抗感をなくし、感触を楽しめるようになり素材に対して主体的に働きかける力を高めたい。更に手本を見たり、支援を受けたりしながら握ったり、丸めたりして形を作る経験もさせたい。その中で模倣したり、自分で考えて活動したりすることができるようになることもねらいたい。紙粘土を作る工程や作品を仕上げる場面では、手順書や経験をもとに自分からミキサーのスイッチを押す、パルプにのりを入れるなどの活動が主体的にできるようになってほしいと考えている。活動の結果が壁面飾りとなることで作る喜びも感じてほしい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

本学級の児童は視覚支援に頼るところが大きい。そのため授業に見通しがもてるようスケジュールカードでその時間の活動を伝え、終わったものから取り外すようにした。

紙粘土を作る過程では、作業ごとに手順書を置いて活動を提示するとともに、工程が一方方向へ流れるようにセッティングした。また、集中力が途切れないよう、ミキサーでのかくはんなど児童の興味を引く活動に時間をかけ、他の工程や困難と思われる作業は教師が補うようにした。

感触遊びや作品に仕上げる活動では、活動の見通しがもてるようミニサイズの見本を提示するが、児童の主体的な動きを尊重することを心掛けた。模倣ができる児童に対しては、丸める動作をしっかりと見せたり、手を取って支援したりするようにもした。手順書については全体提示できる物と手元用の物を準備したが、児童の様子から2回目以降は手元用のみとし、いつでも確認できるようにした。



(手順書1)



(手順書2)



(学習の様子)



b 児童への配慮

ミキサーでかくはんする活動は全員が興味を示した。そこで声掛けや支援をできるだけ減らし、児童自ら活動しようとする動きをゆっくり待つようにした。ミキサーをかける回数は時間や児童の興味や集中度を見ながら変更しマイナスのイメージが残らないように心掛けた。

感触遊びでは、自由に遊ぶ時間を確保し、楽しんでいい時間と作る時間を分けることで、活動が分か

りやすくなるようにした。また、活動意欲の持続を図るため、形はいびつでも活動できたこと自体をその場で評価するようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

紙粘土作りでは、紙破りのような普通の遊びを取り入れたり、音や回る様子が楽しいミキサーを使用したりすることで、活動に興味・関心をもち取り組むことができた。特に、B児は規制されることなく紙破りをすることができ、楽しく活動することができた。また、繰り返しの活動の中で、全員が工程を覚え手順書に頼らず活動できる場面が増え、活動を楽しみに順番を待つこともできた。感触遊びでは、のりを混ぜた感触にも抵抗がなくなり、自ら触れようとする様子が見られるようになった。A児は感触遊びに集中することで紙粘土を口に入れることなく活動したり、丸める動作を模倣しようとしていたりすることができた。C児は見本や手順書を確認して作り意識が高まり、紙粘土を丸めることが上達した。全員が紙粘土を作って遊ぶ、作品にする全ての工程に関わることで見通しをもって活動することができるようになった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

今年度はめくり式の手順書を使う機会が多く、児童も使い慣れてきたと感じている。本単元の紙粘土作りの手順書は、確認しやすかったものの提示の仕方によっては見にくくなってしまった。学習内容によって手順書の仕様は変更する必要があるが、できるだけ使い慣れたものを使用し、より分かりやすく工夫して児童が見通しをもって主体的に活動できるようにしていきたい。

今回の紙粘土での活動は児童の興味を引く内容になり、自ら活動する姿が多く見られた。紙粘土の感触を不快に感じている様子を見せた児童も繰り返し取り組んだり、無理強いせず見守ったりすることで自ら活動する様子が見られるようになっていった。今後も児童の気持ちに寄り添い、興味・関心をもてる取り組みを工夫していきたい。また自己選択、自己決定の場面を作っていきたい。

b 対話的な学びの視点から

本学級は活動中に児童から教師に支援を求めたり、活動を確認したりする行動が難しい児童が多い。そのため活動の中に児童から教師に働きかける必要のある活動を仕掛ける必要があると考える。また、児童同士のやり取りや、仲間と一緒に活動し自分の役割を果たせるような活動も今後取り組んでいきたい。

これまで作品作りの際には、できるだけ発表の場面を作るようにしてきた。児童の実態からすれば難しい活動ではあるが、今後も発表により活動の振り返りの機会を作り、伝える経験ができるようにしていきたい。

c 深い学びの視点から

視覚情報の提示が大切な児童たちであり、振り返りの際にはできるだけ画像や動画を活用し、自分たちの活動を視覚的に確認できるようにすることで本時の学習の定着を図り、次の活動への意欲につなげていきたい。また、児童の実態に添った活動内容を準備したり、単元間につながりをもたせたりすることで、学習したことを応用できる場面を増やしていきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

新学習過程分析表を確認し記入することで、授業を主体的・対話的で深い学びの視点で考えることができた。新学習過程分析表自体コンパクトにまとまっていて確認しやすかった。深い学びについては、本学級は主体的な学びと重複する部分もあるのではないかと感じた。今後もクラスで検討していきたい。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名		生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組		小学部4年C組	対象 児童生徒数	3人
日 時		令和2年9月23日（水） 3時間目（10：50～11：35）	場 所	小学部C組教室
単元名		紙で遊ぼう②～秋の壁面飾り作り～		
本時の目標		・紙粘土で遊んだり、見本を参考に丸めたり、握ったりして形を作ったりすることができる。		
学習指導要領との関連		■小学部学習指導要領 ・図画工作 1段階 A表現（ア）〔共通事項〕（ア）自立活動 ■自立活動 4 環境の把握（1）（2） 5 身体の動き（5） 6 コミュニケーション（1）（2）（4）		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5分	2時間目：牛乳パックでパルプを作る。 1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。		・MTに注目できるように支援する。 ・イラストカードでスケジュールを伝える。 ・完成見本を提示する。	
展開 33分	3 紙粘土を作って、遊ぶ。 ・パルプにのりを混ぜて、こねる。 ・自由に遊んだり、形を作ったりする。		・手元にも手順書を準備する。 ・紙コップの糊は全てパルプに混ぜ、追加分は教師が量を調整する。 ・自由に感触を楽しむ時間をもった後、A児、C児には丸めたり、伸ばしたりして形を作るよう声掛けをしたり、見本を見せたりする。 ・タイマーで活動の終わりを知らせる。 ・手順書を入れ替え、ぶどうの台紙を配って活動の切り替えをする。	
まとめ 7分	4 ぶどうを作る。 ・台紙に、紙粘土を丸めて貼る。 ・4房作る。 5 片付けをする。 6 発表する。 7 終わりの挨拶をする。		・手本と写真で出来上がりがイメージできるようにする。 ・4房できたら終わることを伝える。 ・A児、C児には手本を見せたり、手を取って動作を伝えたりして、丸める動作ができるよう支援する。B児について主体的な動きを尊重しながら、教師と一緒に取り組む。 ・終わった児童から片付けをする。 ・教師と一緒に頑張った点を発表する。 ・MTがそれぞれを評価する。 ・次時の予告をする。	
注目してほしい学習活動				

学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 3 「紙粘土を作って、遊ぶ」		・牛乳パックをミキサーにかけて自分たちで作ったパルプにのりを混ぜて紙粘土を作り感触遊びをする。短時間であるが自由の遊ぶことで制限されることなく感触を楽しむ時間とする。いろいろに変化する素材に対して主体的に働きかける力を高めたい。	主 2－②③ 3 対 1－①
展開 4 「ぶどうを作る」		・見本を見せ、何を作るのかを示す。これまでの活動の中で丸めて形を作ることを意識でき始めた児童もあり、引き続き手本を見せたり、手添えをしたりして形を作れるよう支援を行う。形を作ることが難しい児童に対しては、手本を示したり、声掛けをしたりしながらも児童の主体的な活動を優先する。	主 1－② 2－①②③ 3 対 1－①③ 深 1－②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童A	・手本を見て、丸めて形を作ろうとすることができる。	・感触遊びは十分にできたが、作る活動への切り替えが上手いかず、感触遊びから抜け出すことができにくかった。前は手の上で伸ばして丸めていたが、本時は手本への注目度も薄く、伸ばすのみになった。左手の動きを支援すると少し丸めようとする動きが見られた。	C
児童C	・見本や手順書を見て、丸めて形を作ることができる。 ・出来上がりをMTに報告することができる。	・見本や手本をよく見ていて、手順書通り作ろうとすることができた。丸めた紙粘土を写真と同じ場所に置いたり、パルプがないことを教師に伝えたりすることができた。	A
		・参観者を意識しすぎ、自分からの報告は難しかった。MTの促しによって伝えることができた。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・手順書を全体用と個人用を準備したことで、まとまりがなくなり、かえって分かりにくくなった。 ・紙粘土を丸める際の手本の示し方がまずく、手本への注目度が低かった。そのためA児は丸めることへの意欲が少なくなった。B児にはもっと自由に取り組ませたかった。 ・紙粘土での感触遊びについては、全員が意欲的に楽しく取り組むことができた。一人の活動でなく教師との関わりも見られた。 ・「遊び」から「作る」への移行はもっと自然な流れにしたほうが良かったかもしれないが、C児には切り替えたことが意欲につながった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・手元に手順書を準備したことで確認しながら活動する様子が見られた。大きな手順書は提示の仕方によって見にくくなる。 ・紙粘土を自分たちで作った上での作品作りがよかった。紙粘土の素材で遊ぶ時間が確保され楽しく活動することができた。絵の具では経験できない活動だった。 ・牛乳パックのフィルムをはがす際、パッケージ側のフィルムを残しておいたことで、パルプが牛乳パックでできていることが分かったのではないかな。 ・ミキサーは児童の興味をそそる道具だった。特にB児が集中して活動できた。			

(1) 公開授業 11

ア 生活単元学習「みんなの好きなキャラクターを作品にしよう」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部4年生は男子2名、女子1名の学級である。そのうち2名は自閉症を、1名は聴覚障害をあわせ有している。また、医療的ケアが必要な児童もいる。全員発語がなく、生活全般で写真や絵カードなどの視覚支援を受けて活動している。また、個別の指導計画において、コミュニケーションについての目標を立てて取り組んでいる。

視覚支援から活動を読み取ったり、絵カードを使って教師とやりとりしたりすることに慣れてきた一方で、児童同士のやりとりには課題がある。学級の中では実態として場面設定が難しかったため、今年度は教職員や5年生との交流を通して取り組んできた。

1学期は野菜を育てて良心市を開き、そのチラシを教職員に配って宣伝する活動に取り組んだ。2学期には5年生との合同学習に取り組み、簡単なゲーム、買い物、調理、宿泊学習などを一緒に楽しむことができた。これらの学習の中で、相手の顔写真や、やりとりするときの動きなどを視覚支援で示すことで、相手を意識して自分から関わろうとする姿が見られるようになってきた。本単元はさらに対象を広げ、小学部の児童との交流を通して取り組んだ。

b つけたい力

本単元は、小学部生活科の学習指導要領の「人との関わり」、「役割」の内容を中心とし、道徳、自立活動を合わせた生活単元学習である。他者とやりとりをしたり、役割を果たしたりする活動を通し、やりとりの手段や場面に応じた接し方を知ったり、友達と協同する良さや楽しさを味わったりすることをねらいとしている。

題材として大型絵本の作成、発表に取り組んだ。小学部の児童たちが好きなアニメのキャラクターについてアンケートを取り、絵本『おめんです』をアレンジして制作し、クリスマス会の出し物として発表を行った。アンケート用紙の受け渡しを通して、他学級の児童とのやりとり場面を設定した。好きなキャラクターという題材は児童の興味・関心が高く、スムーズなやりとりが望める。また、友達の好きなものを知ったり、それが同じという共通点を見付けたりすることができ、より友達を意識するきっかけにもなると考えた。

さらに学習成果が発表できるように出し物にした。他者に認められることで、達成感や自己肯定感につながることを期待できる。他学級の児童にとっても自身の意見が反映されていることで喜びを感じ、発表者である本学級の児童への関心が高まることを期待できる。発表後は廊下に掲示することで、友達と一緒に遊ぶことにも期待している。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

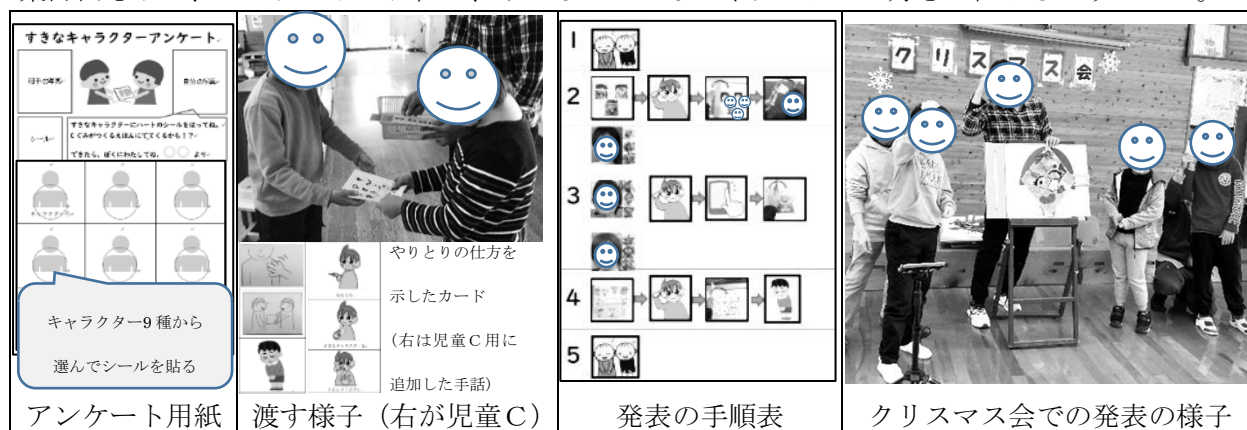
前段階として、朝の会で、絵本『おめんです』をアレンジして読み聞かせをした。本学級の児童が好きなキャラクターが登場するようにして、楽しさを味わってから、今度は自分たちでこの絵本を作ること伝え、見通しがもてるようにした。

キャラクターは、事前に学級担任に児童の好きなものを聞いておき、それを基に精選してアンケート用紙や集計表を制作した。用紙には相手の児童の写真を貼り、相手を探して手渡せるようにした。また、返信も可能であれば本学級の児童が受け取れるように用紙に記した。

大型絵本の制作については、図画工作科を主とした別単元で取り組んだ。校内や学校周辺の山道の落ち葉や木の実を拾い集め、お面の材料として使用した。全12ページを制作し、完成したページは適時朝の会で読み聞かせをして、発表練習までに慣れ親しむようにした。

クリスマス会での発表では、ナレーションは教師が行い、児童ができる活動で構成した。「お面をかぶっているのは『だぁ〜れ?』」のナレーションに合わせてポーズをしたり、ページをめくったり、iPadのアプリを使ってキャラクターのヒントになる曲をかけたりする活動を設定した。絵本の最後のページに

は集計表も示し、アンケートのお礼と、みんながどんなキャラクターが好きか伝わるようにした。



b 児童への配慮

それぞれの活動で視覚支援を行いながら、教師が示したり、手添えをしたりして練習に取り組んだ。アンケート配布や発表の場面では、教師が言葉を添えたり、C児が主体的に行えるように手話も取り入れたりしている。そうすることで相手に意図が伝わるとともに、言葉や手話と、自分が行う役割や動作が結び付き、スムーズに活動できることも期待した。

また、発表では意欲的に取り組めるように、それぞれの児童が好きなキャラクターを担当できるようにしたり、iPad を操作してキャラクターの曲を流せるようにしたりして取り組んだ。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

単元を通して、小学部の児童と交流し、友達同士でのやりとりを経験することができた。発表後、廊下に掲示した作品を他学級の児童が見に来たり、「貸してください」と声を掛けてくれたりすることもあり、やりとりをするきっかけにもなった。児童が自ら他学級の教師や児童に作品を見せに行く場面も見られ、自信や自己肯定感、友達への興味・関心にもつながっていることが感じられた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

児童の興味・関心の高いものを題材にして意欲を引き出し、課題に取り組めたと思う。今回の発表の中での活動は、教師がそばで支援することを前提に設定した。視覚支援を活用して、自分だけでもできる発表活動も設定していきたい。また、そのためにも手順書などの視覚支援の充実と工夫や、それらを読み取って活用する力の育成に継続して取り組んでいきたい。

b 対話的な学びの視点から

本学級の中だけではやりとり場面の設定が難しかったが、他の学級に協力してもらうことで無理なく設定することができた。今後もこのような学習形態でも取り組んでいきたい。また、この経験を生かして、学級内でも児童同士のやりとりが増えていくように取り組んでいきたい。

c 深い学びの視点から

良心市でのチラシ配りや、5年生との合同学習の経験が深い学びとして本時でも生かされ、見通しにもつながっていることを感じた。これまでの学習を関連付けることや、段階的、発展的な活動を意識して授業作りに取り組んでいきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

授業改善の指標、検討材料となった。これに加えて学習指導要領を参照し、目標や活動を考えて授業作りに取り組んでいきたい。深い学びについては、本時だけでは実現が難しいことを感じた。単元全体を通してねらったり、別単元とも関連付けたりしながら、実現を目指していきたい。

(カ) 実践例(指導略案)添付

令和2年度 小学部C組 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名		生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組		小学部4年C組	対象 児童生徒数	3人
日 時		令和2年12月14日(月) 3時間目 (10:50～11:35)	場 所	小学部C組教室
単元名		みんなの好きなキャラクターを作品にしよう ～作った大型絵本の発表練習をしよう～		
本時の目標		・クリスマス会での発表に向け、自分の役割や動きが分かり、作品の発表練習に取り組むことができる。 【思考力・判断力・表現力等】		
学習指導要領との関連		■ 小学部学習指導要領 ・生活科 第1、第2段階 オ 人との関わり(イ) カ 役割(ア)(イ) ・特別の教科 道徳 A [希望と勇気, 努力と強い意志] [第1学年及び第2学年] ■ 自立活動 3 人間関係の形成 (1)(4) 6 コミュニケーション (1)(2)		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 10分	1 始めの挨拶をする。		・MTが発表の手本を見せる。 ・事前に、朝の会などで教師が作品の読み聞かせをし、慣れるようにする。 ・これまでに自分が制作したページを発表し、役割に見通しがもちやすいようにする。 ・発表の流れや、①～④の動きが分かるように、イラストで示す。 ・発表は、それぞれの担当教師が声掛けや指差しなどの支援をしながら取り組む。 ・iPadのアプリ『ドロップトーク』を使用する。 ・時間があれば、通し練習も行う。 ・動画を撮影し、振り返りで活用する。 ・MTが良かった点を褒める。 ・単元カレンダーを示し、発表当日までの予定を伝える。	
展開 30分	2 本時の学習内容を知る。			
	3 発表の手本を見る。			
	4 役割や動きを確認しながら、発表練習をする。			
まとめ 5分	※衣装のお面を付ける。 1 姿勢、礼（発表します） 2 ①～④を順番に行う。 ①ページを担当する児童が絵本の横に立つ。 ②教師の合図に合わせて、全員で「かぶっているのは『だぁ～れ?』」のポーズをする。 ③iPadを使用し、そのページを担当する児童が、ページと同じ写真をタップして、ヒントの曲を流す。 ④お面のページをめくる。 3 集計表を見せ、お辞儀や手話をしてアンケートに協力してくれたお礼を伝える。 4 姿勢、礼（発表を終わります）			
	5 振り返る。			
	6 次時の予定を知る。			
	7 終わりの挨拶をする。			
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点

4 役割や動きを確認しながら、発表練習をする。	本単元では、他者とやりとりをしたり、役割を果たしたりする活動を通し、やりとりの手段や場面に応じた接し方を知ったり、協同する良さや楽しさを味わったりすることをねらいとしている。 これまで制作のある授業では、前に出て発表することに取り組んでいる。今回も制作したものを発表することで、役割への見通しや、作品への愛着につながることを期待している。 また、どの児童も、簡単な身振りを模倣したり、iPad をタッチして操作したり、絵本のページをめくったりすることができ、そのことを生かして発表できるように活動を設定した。	主 3 対 3－①② 4－①②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童 A	役割や動きを知り、教師と一緒に取り組むことができたか。	教師の指差しや声掛けの支援を受けて、それぞれの動きを行うことができた。回数を重ねるごとに、「だぁ～れ？（ポーズ）」、「（ページを）めくる」、といった声掛けを理解し、スムーズに行うことができた。	A
児童 C	役割や動きが分かり、主体的に取り組むことができたか。	教師の手本や、発表の手順表を見て、役割や動きはよく理解できており、スムーズに取り組むことができた。初回であることや、参観者がいたことで恥ずかしさが見られた。教師に目線を送り、これで合っているのかと確認をすることが多かった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・発表時の動きについては、実態に応じた設定ができたと思う。（だぁ～れのポーズ、ページをめくる、iPad の操作） ・iPad の操作は全員が意欲的だったため、今後も取り入れていきたい。 ・一覧式で作った発表の手順表は、児童と補助者に伝わるように作成できたと思う。これまでめくり式が多かったため、活動に応じて一覧式も取り入れていきたい。 ・立ち位置や支援については、活動中の児童の様子に応じて変えていこうと考えていたが、その場で円滑に指示ができず、授業が停滞する場面があった。もっと具体的に想定しておき、補助者にも相談できていれば良かった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・児童ができる活動を発表に生かしている。題材も面白く、意欲を引き出せている。昨年度も絵本を題材に大型絵本を作って発表しており、その経験が意欲や見通しにつながっている。 ・恥ずかしさが見られたため、もっと楽しんで取り組めるような雰囲気作りをしてはどうか。 ・補助者の役割や、児童への支援についての確認不足があり、補助者が戸惑う場面があった。必要に応じて、補助者と事前の打ち合わせをしておく必要がある。			

(1) 公開授業 12

ア 生活単元学習「12月のカレンダーを作ろう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

本学級は、小学部4年生の男子2名と女子1名で構成されており、そのうち2名は自閉症を、1名は聴覚障害を併せ有している。また、医療的ケアが必要な児童もおり、実態は様々であり、3名の障害の実態には幅がある。コミュニケーション面では、全員発語はないが、簡単な声掛けに応じることができる。聴覚障害の児童については、簡単な手話やジェスチャー、イラストカードで支援している。

一人一人が授業の中で、写真やイラストとどれが同じものであるかという、マッチングを行っており、手順書の写真と教師が準備したパーツが、色や形を見てマッチングできる。

名前を書くときには、手本を見ながら一人で名前書きができる児童と、手を添えてなぞり書きを促せばできる児童がいる。

のりを付け、場所を決めて指定すれば、それを貼りつけることができる。これまでの経験から、手順書と見比べながら、手順書と同じように作ることができる児童がいる。

b つけたい力

今回は教師がパーツをあらかじめ用意し、手順書を活用して、位置を確認しながら、形の大きさや、色を確かめながら順番通りにはっていく、このことを通して、バランス、目と手の協応、見通しなどを、身近な材料を使って製作活動をする中で目標とした。児童が日ごろの学習活動の中で行っている、指示したものと同じものを選択するという、マッチングを使用した。さらに、綿を触った感触を楽しみながら、それを平面の作品の中に貼りつけていくことで見たサンタの画像に近づくことを理解する。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

クリスマスイメージして、関心を高めるために「クリスマスシャンシャン」（子供用クリスマスソング）の映像を見せた。順番通りに並べていくことで完成するという、プロセスを認識してもらうために、手順書の写真を一つの作業につき、一枚を用意した。手にのりが付着して集中力が低下しないためにも、また、綿を貼りやすくするために、両面テープを使用した。毎日カレンダーに貼って使い慣れている、丸シールを材料として使うことで、作業がスムーズに行えるようにした。児童がパーツを貼りやすくするために、貼る位置に鉛筆で、配置が分かるようにパーツの形をあらかじめ書いておいた。



【12月カレンダー】



【手順書】



【9月カレンダー制作の様子】

b 児童への配慮

前回のカレンダー作りは、はさみを使い輪郭線に沿って切り、形を整えることを行った。線にそって切り取ることが難しかったために、今回は教師があらかじめ切ったパーツを準備した。指示した線の枠に貼っていくことができるように下絵を台紙に記入しておいた。また、のりをパーツの裏全体に付ける

のではなく、のりを付ける部分のみに鉛筆で目印を書いて、範囲を限定した。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

ツリー用のパーツは形が似すぎており、大きさや色の違いだけでは判別しづらかったが、サンタクロースのパーツは、それぞれの色や形が異なっていたので、教師が「ここを見てください。」と貼る位置等を指しながら支援すれば、下絵の形と教師の支援により、指定の箇所に貼りつけることができた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

主体的な活動を引き出すために、どのように活動するか分かりやすいように、写真入り手順書を使って、視覚的支援で作業の見通しをもてるようにした。今回は、パーツの数が多すぎたために、手順書の写真の数が多くなってしまった。結果的に手順書のファイルの容量を超えてしまい、本来ならば1ページめくると、次の写真が見えるのであるが、ページの後ろも見なくてはならず、どうしたらよいのかを分からなくしてしまった。一人で順序立てて進めていくためにはパーツの違いがより明確になる工夫をし、かつパーツの数を少なくして、自発的にマッチングができるようにしなければならなかったと感じた。

b 対話的な学びの視点から

完成した作品を最初に提示することで、取り組みへの見通しをもちやすくし、制作意欲につなげる。カレンダー作りにおいて手順書を繰り返し活用することで、活動内容をそこから読み取り、順番に制作していく。また制作中に、友達がどのように取り組んでいるかを見ることができる場面を設定するなど、お互いが制作活動を刺激することも必要であった。また、制作風景を撮影したり、動画を見せながら一人一人の児童が頑張っている場面を褒める取り組みを行っていく必要がある。

c 深い学びの視点から

完成した作品について頑張った点や苦労した点を、友達の前で発表することで、作品に対する思いや考えを友達に伝える活動は今後も必要であると考え。また、児童によってはそれを聞くことにより他人との違いに気が付き、やり方などを修正して、これからの学習につなげることができるようになることを期待したい。

（オ）「新」学習過程分析表を使ってみて

今回は、手順書の活用により「主体的な学び」が中心で、「対話的な学び」は、人との対話ではなく、手順書という物との対話が中心であった。

「新」学習過程分析表は、行った授業を見直す上ではとても役に立つ。今回の「12月のカレンダーを作ろう！」の授業は児童の実態において、すべての項目を盛り込めていないことに気付かされた。分析表はⅠ主体的な学び、Ⅱ対話的な学び、Ⅲ深い学び がどのように配慮されていたかどうかをチェックする助けになり、これからの授業の改善ツールとして役に立つと思う。

（カ）実践例

令和2年度 小学部C組 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
--------	--------	-----	-------------

学部・学年・組		小学部 4 年 C 組	対象 児童生徒数	3 人
日 時		令和 2 年 11 月 30 日（月曜日） 3 時間目（10：50～11：35）	場 所	小学部 C 組教室
単元名		12 月のカレンダーを作ろう！		
本時の目標		・手順書を活用して、位置を確認しながら、パーツを順番通りに貼っていくことができる。		
学習指導要領 との関連		■ 小学部学習指導要領 ・図画工作 1 段階 A 表現（イ）〔共通事項〕（ア） ・算数 1 段階 C 図形 ア イ ・国語 1 段階 B 書くこと イ ■ 自立活動 4 環境の把握（2）（5） 6 コミュニケーション（1）（2）		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5 分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。		・MTに注目できるよう、支援する。 ・イラスト付きのスケジュールを提示する。 ・季節感がイメージできるようにクリスマスの動画を見せる。 ・手順書の活用ができるように必要に応じて、声掛けや、指差しをして支援する。	
展開 35 分	3 12 月のカレンダーを作る。 ・クリスマスツリーのパーツを貼る。 ・サンタのパーツを貼る。 ・オーナメント(丸シール)を貼る。 ・教師に要求をし、「ツリーの雪」と「サンタの髭」の位置に両面テープを貼ってもらい、綿をちぎって貼る。 ・カレンダーに名前を書き、貼る。		・のりを塗る箇所や、パーツの貼り付ける位置が分かるように鉛筆で線を引いておく。 ・両面テープを貼る際には、教師とのやり取り場面を設定する。手順書に要求するときの身振りを示したり、着脱できる「手伝って」の絵カードを貼っておいたりして、児童の実態に応じた表現で教師に要求できるようにする。	
まとめ 5 分	4 作品を提出し、道具を片付ける。 5 発表する。 6 終わりの挨拶をする。		・一人ずつ前に出る。作品を見せながら、頑張ったところを指差しやジェスチャーで発表できるように促す。担当した教師が補足する。 （可能なら ipad で動画を撮影し、撮影した活動の様子を見せながら、良かったところを褒める）	
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点

展開 3 12 月カレンダーを作る ① 「クリスマスツリー」を貼る。 ② 「サンタクロース」を貼る。		・写真やイラストのあるめくり式の手順書を準備する。また、1 ページにつき 1 パーツを貼るように提示する。 ・異なる大きさの三角形を、手順書と下絵を見ながら、貼る位置を確認して、下から順番に貼りクリスマスツリーを完成させる。 ・サンタクロースを、顔、あごひげ、帽子、口ひげ、口、目の順番に貼り、形を整える。 ・丸シールでオーナメントを表現し、また綿を使い、感触を楽しみながら、立体感を出す。 ・クリスマスツリーやサンタクロースを作ることによって、季節感を感じてもらいたい。	主 2－②③, 3 対 1-②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
児童 A	・教師と一緒に手順書を活用して、作品を完成させることができる。	教師と一緒に手順書を確認しながら作品を作ることができた。手順書がのページが多く、複雑だったため、集中を継続することが難しかった。	B
児童 C	・手順書を活用して、順番に貼り合わせ、完成させることができる。	手順書通りに進めることはできたが、パーツが多すぎ、時間が少し足りなかった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
ツリーの三角形が多すぎた。5 個→3 個にしておくべきであった。形や大きさを見て選んでいるのではなく、パーツの色で選んでいた。同じものを 3 つにしておく工夫が必要であった。 サンタクロースは異なるパーツで、ツリーより見つけやすかった。手順書の枚数（ページ数）が多すぎ、長すぎたため見づらくなった。そのため、児童一人一人が前に出て、頑張った点や苦労した点などを発表してもらう時間が無くなった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・三角形が多すぎて探すパーツが分かりにくく、配置の工夫が必要であった。また、手順書の写真が多くなり、いつも使っているケースに収納できなくなった。そのため、表と裏の両方に写真を入れることとなり、児童が使ったことのない初めての経験となり、大きく戸惑わせてしまった。 ・児童が教師にコミュニケーションをとるための、「手伝って」の絵カードを扱いやすくするために、マジックテープにして要求しやすい工夫が必要であった。			

(1) 公開授業 13

ア 生活単元学習（宿泊学習を使用～夕食づくり練習～）

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部5年D組の児童は、男子児童4名で構成されている。昨年度1名の転校生を迎え単独学級になったクラスである。児童の実態としては、こだわりや衝動性などが見られ学習に集中できないことがある。日常生活においては、本人の中で定着したことは一人で活動ができる児童も多い。しかし、指示待ちであったり、遊びに夢中になり次の活動に移れなかったり、一つのことに集中できないなどの課題がある児童もいる。コミュニケーション面では、全員に発語があり、簡単な要求を言葉で伝えたり、言語指示で行動したりすることができる。

また、全員が食べることが大好きなため、調理学習に対する興味、関心が高く、主体的に活動に取り組むことができるクラスである。宿泊学習の晩飯のカレーライスで4年生と一緒に作ることを知り、4年生に作り方などを教えてあげたいという気持ちも強いことから、学習意欲が高まっていると感じられた。

b つけたい力

今回の単元では以下のような指導計画を立てた。料理長はスケジュールを見て次の活動を伝えたり、手順書をめくって他の友達に指示を出したりすること。料理長の指示を聞いて必要な物を考えて準備すること。友達の動きを見て自分のやるべき活動を考えるといった学習に取り組むことなどである。展開では、自分の切る野菜を見て使う調理器具を選択して安全に取り扱う。手順書や見本を見て同じ手順や大きさに切る。困った場合には教師に援助を求める力も身に付けたい。以上のことを踏まえて、教師の援助なしでも、スケジュールを確認して児童達が自ら運営できる力、指示を聞いて自分で動く力、困った場合には援助を求めることができるコミュニケーション力といった、自発的に動いていける力を身に付けるように設定した。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

各児童が主体的に取り組むことができるように、授業ごとに料理長（司会・進行）を設定した。料理長から調理の手順や、各児童の担当を発表してもらうことで、教師が関与せずに児童が自ら運営できるように工夫した。道具の準備では、教師が足りていない道具を指示するのではなく、できるだけ自分で準備ができるように見守り、支援が必要な場面では、他の児童が足りていない道具に気が付くように声を掛けるなど工夫した。一人一人が役割を持つことで、消極的な児童も参加できるよう工夫した。



写真1 手順書①



写真2 手順書②

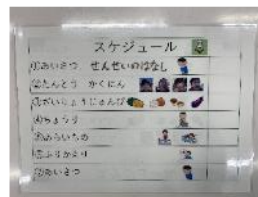


写真3 スケジュール表



写真4 振り返りシート



写真5 料理長マーク



写真6 本日の料理長 指名

b 児童への配慮

視覚情報を手掛かりに活動の内容を理解している児童がいるため、手順書を準備した。手順書の画像をできるだけ大きく用いることで、視覚的に理解しやすいように配慮した。また、児童が自発的に気が付いて動けるように、関わりがもてるように声掛けは教師からではなく友達から掛けれる

ように配慮した。児童の作業能力に幅があるため、作業能力に応じて手添えや声掛けなど、教師の介入度を配慮した。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

授業の進行役をやることで自信が付き、他の授業での進行役や朝の会や帰りの会の進行も主体的に取り組めるようになった。

道具の準備の場面では、困っている友達に気が付いて優しくやることを教えてあげる場面が見られた。普段の学校生活においても、困っている友達がいる場合には、生徒同士で解決しようと話しかけるようになった。また、自分たちで声を掛け合い活動しようとする場面が多く見られるようになった。

困った場合には、教師が声を掛けるまで固まっているのではなく、援助を求めるようになった。また、友達の動きを見て自分の行動を選択するようになった。

包丁の扱いにも慣れ、宿泊学習でも安全に調理する姿が見られた。また、気になる料理のレシピをメモして、「家で作る」と言っていた児童も見られ、深い学びにつながったと感じた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒の興味、関心を引き出すために、事前学習で自分たちが作りたいものの調べ学習を行い、自分たちで作るものを選択していきたい。その際に、調べ学習をする料理などは、自分たちが畑で育てた野菜を使える料理にするなど、関連付けさせていきたい。

計量や個数の指定、文章での指示なども授業の中に取り入れ、個別での国語、算数などの学習を般化して、生徒自身が主体的に取り組めるようにできれば良かった。

b 対話的な学びの視点から

他者の活動を見る場面が多かったため、振り返りの中に他者に対する評価等も入れていく必要がある。

ペアが固定であったため、授業ごとに変更して児童同士の関わりを増やしたら良かった。生徒同士で話し合いの場面を設け、自分たちでペアを決めても良かった。

c 深い学びの視点から

野菜を切っている場面などを動画に撮り、包丁の使い方や手順書通りに切れているかなど、ICTを用いて客観的に自分が切っている場面を見ることができ振り返りも行ったら良かった。

振り返りシートは全員統一するのではなく、実態に応じて分けるべきだった。文章が書ける児童の振り返りシートもシールを貼る形だったので、自分で○を書いたり、文章を書くことができる振り返りシートを使えば良かった。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

具体的に文章で示してもらっているため、指導案作成の際にとっても参考になった。

普段何気なく指導している場面が、3観点のうちのどこに位置づけされるのか気が付くきっかけになった。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT
--------	--------	-----	----

学部・学年・組		小学部 5年 D組	対象 児童生徒数	4名
日 時		令和2年10月9日（金） 2. 3時間目（9：55～11：35）	場 所	小学部D組教室
単元名		宿泊学習を使用～夕食づくり練習～		
本時の目標		・調理で使うものが分かり、正しく一人で準備することができる。 ・調理の工程や食材の切り方などの視覚支援から活動を読み取って取り組むことができる。 ・自分の役割を丁寧に果たし、共同で料理を作ることができる。		
学習指導要領との関連		■ 小学部学習指導要領 ・生活 2段階 キ 手伝い・仕事 （イ） ・算数 1段階 C測定 ア ■自立活動 ・2心理的な安定（2） ・3人間関係の形成（1） 4環境の把握（1） ・6コミュニケーション（5）		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 7分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 本時の目標を確認する。 ・先生の話聞く・安全に気を付ける ・見本と同じに形に切る 3 役割を確認する。 進行役（A児）が手順を伝える。 活動の進行役（A児）が担当を発表する。 A児（しいたけ、たまねぎ）C児（なす） B児（ウィンナー、ピーマン）D児（カボチャ）		・姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・スケジュール表を提示する。 ・調理での目標を質問する。 ・ホワイトボードに目標を提示する。 ・本時の料理長（A児）を発表し、進行してもらう。	
展開 70分	4 材料を準備する。 自分の机に必要なものを準備する。 （まな板、ボール、手順書、野菜） 5 調理をする。 野菜を切る→レンジで温める（A児） →炒める（D児）→水を入れる（B児） →ルーを入れる（C児）→まぜる ※切った野菜の形を確認する。 公開授業はここまでとする。		・できるだけ自分たちで準備ができるように見守り、必要な場面では、他の児童が気付く声掛けの支援を行う。 ・安全に配慮して、包丁を使えるよう、必要に応じて、声掛けや手添えの支援を行う。 ・まぜる際には、手袋を着用する。 ・まな板に見本と切ったのを並べ、同じように切れているか評価する。 ・タイマーで終わりを知らせる。 ・順番に洗い物をする。	
まとめ 13分	6 休憩を取る（10分） 7 洗い物をする。 8 振り返りをする。 ・振り返り表にシールを貼る。 ・振り返りを発表する。 9 終わりの挨拶をする。		・本時の目標が達成できたか確認する。 ・次回の予告をし期待感をもてるようにする。 ・姿勢を整えるよう声掛けをする。	
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点

展開 4 「材料を準備する」	・自分で調理に必要な材料や調理用具を考えて準備する。友達の行動を見て、自分で今やらないといけないことが分かり活動する。準備物が足りていない場合などは、教師が本人に伝えるのではなく、友達が気づき教えてあげることができる場面を作るようにしたい。	主 1－② 対 2－② 3－①②④ 4－① 深 1－①	
展開 5 「調理する」 野菜を切る	・手順書を見て、自分の野菜の切り方を確認し切るようにする。野菜の置き方など切りづらい場合には、自分で工夫して置き方を考えられる声掛けを行い、児童が主体的に活動できるようにしたい。友達や自分が切った野菜を見て、見本と同じに切れているか評価する。	主 1－② 2－② 3 対 3－④ 4－① 5－①②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
児童 A	・進行役として、流れや役割を全体に伝えることができたか。 ・手順書を確認して、見本と同じ形に切ることができたか。	料理長として、意欲的に授業を進めようとする姿が見られた。また、困っている友達に気が付き助けてあげることができた。 切る作業の時には、見本と手順書をよく見て同じ形に切ることができた。友達の切った野菜も同じ形に切れているか等、評価することができていた。	A
児童 C	・周りを見て、調理で必要な道具や野菜を準備することができたか。 ・手順書を確認して、見本と同じ形に切ることができたか。	周りの様子を見てすぐに行動に移すことはできなかったが、友達の掛け声で行動することができた。 切る作業の時には、見本と手順書をよく見て同じ形に切ることができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
教師の介入を少なく、児童の活動時間を長く取れるように本単元では、料理長を設けた。児童たちも自分たちで授業が進められる、自分が先生役をできる場面があるということで、意欲的に取り組んでいた。視覚支援教材や振り返りシートなども自分たちで見て、理解して活動に取り組めるように、イラストは大きく、切る部分には赤の線を入れるなど誰が見ても活動ができるような教材を準備した。しかし、振り返りシートは文章を書ける児童も、シールを貼るだけと簡単な物になっていたため、生徒の発表の場を潰してしまっていたと考える。そのため、実態に応じた手順書や振り返りシートを準備するべきであると考えた。			
研究協議における意見・アドバイス			
手順書などの視覚支援教材が児童もよく見て活用しており、継続的に使っていってほしい。児童一人一人の実態に合わせて、手順書など中身を分けてもいいのではないかと。(イラストだけ、イラスト＋文字など)料理長(司会進行役)を設けることで、児童だけでの活動が増え、意欲的に取り組むことにつながっていた。コロナ対策のため、交代で混ぜるなどの活動時間は減ってしまったが、活動を個別に分けて役割を与えることで、一人一人の活動時間を確保できていた。児童が役割を理解して、自分で考えて動くことができていたので、これからも継続してこういった授業に取り組んでいければよい。			

(1) 公開授業 14

ア 生活単元学習「雑巾作り」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

6年E組は男子5名のクラスである。うち1名は発語がなく自分の思いをカードやサインで伝えられているが、4名は単語や言葉で伝えることができている。全員が簡単な指示やスケジュールを手掛かりにしたり話を聞いたりして見通しをもって、自ら行動できるようになっている。しかし、人との関わり方に課題があり、教師や友達に自分から関わろうとする様子があまり見られない児童もいる。そのため、日常生活や授業の中で「〇〇先生、できました。」や「〇〇をください。」「〇〇へ行ってきます。」「ただいま。」などの決まったやり取りを繰り返し行い、児童が教師や友達とコミュニケーションをとる場面を設定している。

本学級では、児童の実態を把握して①「運動する習慣をつけ、体力をつける。」②「自分で考えて行動することができる。」③「学校や身近な社会のきまりを守る。」④「友達と集団で取り組む力を高める。」の4つを学級目標に掲げて様々な学習を行ってきた。

生活単元学習では、集団の中で児童が関わり合いながら共に学び、協力したり考えたりして、いろいろな経験ができるように取り組んできた。今では、どの学習も全員が時間一杯、集中して活動に向かうことができるようになっている。

b つけたい力

「雑巾作り」の単元では、縫う活動を通して『印を見て、針を上から下から順に刺す』ことを目標に14時間を計画した。導入では、身に付けている洋服やボタン、ファスナー、エプロン、三角巾、袋、雑巾や台拭きなどが「縫ったものである」ということを児童たちに話し、破れていたなら縫わないといけなく、そして縫うためには針と糸が必要であることを伝えた。5名の児童は、様々な制作活動を行うことで細かい活動も時間一杯取り組むことができるようになってきた。そこで、今回は思い切って針と糸を使って、日々の拭き掃除で使う自分の雑巾作りにチャレンジすることを考えた。針と糸は児童が初めて使う裁縫道具であるが、一針一針印を見て縫うことを何度も繰り返すことで集中して根気強く取り組む力、手指の操作性を高める力をつけたいと考えてこの単元を設定した。また、困ったときは自分で考えたり工夫したり、「手伝ってください」など人と関わるコミュニケーションの力も身に付けたいと学習を重ねた。

時間をかけて一つの作品を仕上げることは自信や達成感が生まれるだけでなく、完成した自分の雑巾を使うことで、ものを大切にする気持ちや主体的に掃除や手伝いをしようとする気持ちに繋がることを目指した。中学部では、毎週2回の作業学習がスタートする。その前段階として今回つけた力を少しずつ発揮できることを期待したい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

どの授業でも児童が安全で集中して学習や活動することができるためには環境設定が大切であると考えられる。そのためにも前の黒板は授業に必要な提示物のみにして児童が教師の話や提示物に集中できるようにしている。

対象の児童たちには、視覚支援が効果的であるため、毎回行う授業の活動内容について、**1 テレ**
ビを見る **2 ぞうきんを縫う** **3 休けい** **4 ぞうきんを縫う** **5 あと片づけ** **6 感想発表**とホワイトボードに番号と文字にイラストを加えて提示した。次に、児童の実態には幅があるため、教材は個々の実態に合ったものを準備して少しずつ内容を高めていくようスモールステップで進めていった。単元最初の1時間では、縫い方（針の刺し方）を、動画（教師が実演しているもの）で分かりやすく提示した。ポイントになる部分は説明を簡潔に入れて繰り返し流した。初めは、破れにくい和紙にパンチで穴を開けて、先が丸い太い毛糸の閉じ針と中細の毛糸を使って上から下からと交互に針を通す練習を行った。そして、毎回完成した見本と「印を見て針を通す」目標を提示して本時のねらいを意識することができるようにした。練習を重ねて間違えずに縫うことができるようになると、児童によっては縫い針をやや小さくして布団針に変えたり、毛糸は細糸に変えたりした。また、今回の「雑巾作り」の

単元では、縫うことや「手伝ってください」「〇〇をください」「できました」のお願いや報告、後片付けや感想発表などの活動内容を取り入れたり、完成した雑巾で拭き掃除を行ったりすることから自立活動や国語、生活科の教科との関連性を意識して授業に取り組んだ。

b 児童への配慮

できるだけ声掛けを少なくして自分で縫うことができるよう、児童C、Dには1対1で教師が支援を行い、A、B、Eは一人で取り組むことを伝えて机を配置した。教材は個々の実態に合わせて

パンチの穴の大きさや針目の数、縫い目の大きさ、針の太さや長さ、デザインなどにも配慮し、布は、折った2枚がずれないように両面テープで貼り合わせた。また、提示した見本や言葉掛けなども個々の児童に合ったものを準備したり行ったりした。



児童A



児童A



児童E



児童E

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

本単元「雑巾作り」を通して、まず縫うことの楽しさを知ることができたと思う。また、友達の作品を見て縫い目の模様や糸の色などにも関心をもって見ることができていた。児童たちは、初めての学習でも教師の話に手順書や動画、見本などの視覚支援教材を活用することでスムーズに取り組むことができるようになってきた。毎回、本時の目標を設定したこともよかったと思う。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

本単元では、裁縫を通して縫うことだけではなく、自分がどのような縫い目模様の雑巾にしたいのか、糸の配色はどうしたいのかななどを自分で決めてきた。自己選択をする場面を設定することは大切であると感じた。

b 対話的な学びの視点から

5名の児童は、チャイムやタイマーなどの合図を聞いて行動に移すことができるようになってきた。しかし、本時の振り返りで行う目標や感想発表では、児童によっては3～4枚のイラストを提示しているが、毎回同じであったり友達が出したものと同じであったりするため課題が残る。そのため、言葉を引き出しながらそれに合ったイラストを提示するなどの工夫をしなければならない。

c 深い学びの視点から

振り返りは時間に余裕をもち、児童が実際に活動している動画などを見せることでイメージをもちやすくしたり個々の児童に合った言葉掛けをしたり、感想の内容を引き出していくことが必要であると考えた。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

新学習過程分析表には、授業の中で児童に目標とする力をつけるための言葉掛けや支援の方法、教材の提示や工夫をするうえで参考になった。また、注目してほしい児童に焦点を当てて協議を進めることができたと感じている。

(カ) 実践例(指導略案)添付

令和2年度 小学部E組 生活単元学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	小学部6年E組	対象 児童生徒数	5名
日 時	令和2年12月4日(金) 2時間目(9:55~10:40)	場 所	小学部6年E組教室
単元名	「雑巾を作ろう」		
本時の目標	・印を見て上から下から順に針を刺すことができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 ・生活科 3段階 カ 役割(ア)(イ) キ 手伝い仕事(ア) ・国語 3段階 A 聞くこと・話すこと イ、オ ■ 自立活動 5 身体の動き(5) 6 コミュニケーション(5)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 7分	1 始めの挨拶をする。(日直) 2 本時の学習内容を知る。 雑巾を縫う→後片付け→感想発表 3 本時の目標を知る。 『印を見て上から下から順に針を刺す』 4 前回作ったものを見て振り返る。	・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・スケジュールのボードを提示し、学習の流れを伝える。 ・ホワイトボードに目標を掲示する。	
展開 36分	5 縫う。 ・児童は指ぬきをする。 ・児童B、Eは自分で針に糸を通す。	・前回作ったものを提示する。 ・縫う場所が分かるよう印を付ける。縫い目が分かるように色糸を使う。	
まとめ 1分	6 終わりの挨拶をする。(日直)	・自分の席に戻って取り掛かる。その際、終わりの時間をタイマーで示すことを伝える。 ・針に気を付けるよう伝える。 ・玉止めは予めしておく。 ・児童A、B、Eはできるだけ一人で取り組むよう伝えて見守ったり必要な場面だけ声掛けや指差しの支援を行ったりする。C、Dは教師と一緒に行う。 ・縫い終わったら報告することを伝える。 ・タイマーで終わりを知らせる。 ・児童AとBが発表。Bはイラストを使う。 ・本時の目標が達成できたかを確認する。 ・休憩に入ることを話し、次のチャイムが鳴ったら席に着くよう伝える。	
		・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開6縫う。		・本時の目標が意識できるよう必要に応じて声掛けをしたり見本を見せたりする。 ・できるだけ自分で取り組むよう見守るが、児童によってはポイントを支援する。	主 1－② 2－②③ 3 対 1－① 2－② 5－① 深 1－②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童A	・説明を聞いたり見本を見たりして、一人で落ち着いて取り組むことができたか。 ・印を見て上から下から順に針を刺すことができたか。	・針に通した糸を1本取りで行ったが、自分で針穴の部分で糸を結んで抜けないよう工夫をしていた。穴を見て、上から下からと交互に糸がもつれないように引き抜いて縫う工程は苦戦する場面もあったが時間いっぱい最後まで取り組むことができた。	B
児童E	・説明を聞いたり見本を見たりして静かに取り組むことができたか。 ・印を見て上から下から順に針を刺すことができたか。	・布団針に刺し子用の糸を使って取り組んだ。針目を1cm 間隔にして薄いハンドタオルを2重にしたものを縫った。指ぬきをはめて、印を見落とすことなく縫うことができていた。Eは、玉結びや玉止め、糸切りハサミで糸を斜めに切ることなどにも取り組むようにする。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
糸が足りなくなると、MTが気付いて糸を切って渡していたが、児童から足りなくなったことを伝えるようにすること、また、1本取りで縫う場合に糸が針から抜けないように持つこと（持ち方）を動画で丁寧に伝えるべきであったと反省した。雑巾作りは2時間続きの生活単元学習として週2回（計4時間）取り組んでおり、1月末まで行うよう計画しているので、今後それらの活動場面を設定する。			
研究協議における意見・アドバイス			
中学部に向けて「雑巾作り」として裁縫に取り組んだことはよかった。研究協議では、糸切バサミを使うことを経験させてはどうか、という意見が出た。児童たちは、できるだけ一人で取り組むように支援を行い、声掛けは最小限にしていたこともよかったと思う。今後、練習を重ねながら自分の雑巾が完成することで物を大切にする気持ちや丁寧に拭き掃除をしようとする気持ちに繋がっていくのではないかと。また、児童BとEは所々すくい縫いが見られているので、どんどん上手になっていくように思う。などの感想をいただいた。			

(1) 公開授業 15

ア 生活単元学習「12月のカレンダー作り！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部6年E組は、男子児童5名のクラスである。簡単な言葉で相手に自分の気持ちを伝えることのできる児童は4名、発語がないが自分の気持ちや思いをカードやサインで伝える児童が1名いる。5名とも言葉の指示やスケジュール表を手掛かりにしたり、人の話を聞いたりして見通しをもち、自ら考えて行動できるようになってきた。

人との関わり方では、教師や友達に自分から関わろうとする様子があまり見られない児童がいたが、現在は、教師や友達に関わる場面が増えてきている。引き続き、授業の中で「〇〇ができました。」「〇〇をください。」や「自分の気持ちを伝えるカード」等を使っての決まったやりとりを繰り返し行い、児童が教師や友達とコミュニケーションを取る場面を設けている。

生活単元学習のカレンダー作りでは、その月の行事を確認し、教師の説明を聞いて手順書を確認しながら児童の実態に合わせて色々な素材を使って制作することに取り組んでいる。

制作活動については、今年は毎月のカレンダー作りや牛乳パックを使って椅子を作る経験を重ねている。毎時間、手順書を見ながら、時間一杯取り組むことを大切にしている。どの児童ものり、はさみ、マジックなど、一通りの道具の用途が分かり取り組むことができている。

道具の扱い方については、はさみで線の上を切ることができ、スティックのりや筆を使ってのり付けできる児童や、一方では、はさみの使用が苦手な児童や、スティックのりを使って塗る時やマジックを使って字を書いたりする時にも教師の支援が必要な児童もいる。

また、児童によっては、スティックのりを使用する際の手の力加減やのりをつけすぎる等課題があり、指の巧緻性に課題がある。

簡単な指示や手順書であれば自分で取り組める児童もいるが、教師の支援がないと見通しがもてずに次の活動に取り組むまでに時間がかかる児童もいる。そのため、パワーポイントを使っての説明や児童の実態に応じて手順書などを工夫しながら活動することを大切にしている。

b つけたい力

本単元では12月の行事を知り、季節に合ったカレンダーを制作する。カレンダー作りでは、クリスマスツリーとサンタのブーツの飾り作りに取り組んだ。パワーポイントの説明や見本を見てから制作活動の手順を読み取って、主体的に活動できる力をつけたいと考え設定した。

また、クリスマスツリーやサンタのブーツの飾り作りも自分で考えて材料の色画用紙の色を選び、自分のできる方法で作品を完成させる力を身に付けてほしい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

カレンダー作りは、季節単元として毎月取り組んでいる。最初にパワーポイントで、その月の行事や花や食べ物を知り、楽しく学習することに心がけた。また、授業の始めに、今日作るカレンダーの見本を具体的に示し、見通しをもって活動に取り組めるようにした。クリスマスツリーの色画用紙の木の色は黄色、橙色、桃色、サンタのブーツの色画用紙の色も、黄緑色、水色、赤色のそれぞれ3種類を用意し、この中から自分の好きな色を一つ選ぶ活動を取り入れ自己選択、自己決定の場面を設けた。授業中は、絶えず注意を払い、児童の活動の様子を見て、必要に応じて見本を示したり、声掛けや指差しをして活動が止まらないようにした。

b 児童への配慮

プレゼンの手順書の中に作り方の写真を用い、授業内容を視覚的に理解できるように配慮した。また、制作進度が遅い児童には、困っている点を確認し、声掛けをして不安にならないようにした。色画用紙をはさみでクリスマスツリーの形に切る時も、児童の実態に合わせて最初からツリーの

形に全部切るものと、一部分の直線だけ切ったら完成するものと2種類用意した。スティックのりより、筆を使ってのり付けした方がよい児童には、筆を用意した。制作活動に時間がかかる児童のクリスマスの飾りや、サンタのくつにのりで貼る方法ではなく、のり付けに時間のかかる児童には、あらかじめ一部の飾りやサンタのくつに両面テープを貼っておき、テープを剥がして貼る方法にした。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

月の行事が分かり、カレンダー作りを通して季節（月）の花や食べ物を知ることができた。また、貼り付けの際に、大量にのりを使うことが少なくなってきた。はさみの使い方を繰り返し取り組んだことにより、はさみの苦手な児童も教師の少しの支援で直線を切ることができるようになった。

どの児童も分からない時には、再度、手順書や見本を見て、作り方を確認し取り組むことが増えてきた。中には自分で考えて発想したことを具体的な形として工夫して表現したり、友達の作品から感じ取ったよさを言葉に出して友達の作品をほめたりする児童も出てきた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

パワーポイントの説明は、分かりにくく「見本の作品をよく見せてください。」という児童がいた。児童に提示する情報量を整理し、もっと分かりやすいシンプルな手順書を用意し提示していく必要がある。そうすることにより、主体的な活動の場面を多く用意することができる。

作り方がわからない時に、教師に再度、質問することも大切だが、友達の作り方をよく見て真似て活動する児童がいた。この活動は児童の主体的な活動を高める上で、とても大切である。

b 対話的な学びの視点から

支援度の高い児童には、困っている時に授業中席から近い友達の作品を見るように促したが、教師の用意した見本の作品を見るが多かった。自分の席から遠い友達の作品を見るのが難しいため、時々上手にできている児童の作品を前で紹介する機会を設定していく必要がある。そうすることにより、対話的な場面が生まれることが期待できる。

c 深い学びの視点から

授業の振り返りの場面を確保することができなかった。お互いに友達の作品を見て感想を言い合う振り返りの場面を十分に取っていく必要がある。そうすることで深い学びにつながってくるものと考え。

パワーポイントの説明によって授業の内容が理解できる児童たちであり、振り返り際にはできるだけ振り返りの写真や動画を見る場面の時間を十分に確保し、自分たちの学習活動を確認できるように、次の学習活動へとつなげていきたい。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

新学習過程分析表は、3つの観点から各項目で整理されているので、記入しやすく、授業を主体的・対話的で深い学びの視点で考えることができ、事後評価の際に、分析しやすいと感じた。



写真①



写真②



写真③



写真④

児童が工夫したクリスマスの飾り(写真①～④)

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	小学部6年E組	対象 児童生徒数	5人
日時	令和2年11月30日(月) 3時間目(10:50~11:35)	場所	小学部6年E組教室
単元名	12月のカレンダー作り		
本時の目標	・12月の行事が分かり、話をよく聞いてクリスマスのカレンダーを作ることができる。 ・クリスマス飾りのパーツの色を選び、形に沿って切ったり、自分で考えて貼ったりすることができる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・図画工作科 3段階 A表現 B鑑賞 ■自立活動 6 コミュニケーション(1)～(4)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。	・MTに注目できるように、STが支援する。 ・スケジュールを提示し、見通しがもてるようにする。 ・テレビの前に椅子を持って集合する。ピンクのテープの前に出ないように伝える。 ・見本、手順書を使用する。 ・それぞれの児童のかごに3種類の色のサンタのブーツやツリー、星や雪の飾りを用意する。 ・必要な場面だけ声掛けや指差しの支援を行う。 ・各児童の実態に応じた支援を行う。 ・一人一人前に出て、頑張ったところを発表できるように促し、良かったところを褒める。 ・次時の活動を伝え、次時の見通しや意欲につなげる。 ・姿勢に注目させ、号令の声掛けをする。	
展開 30分	2 本時の学習内容を知る。		
	3 12月の行事のスライドを見る。 (各行事の実施日を知る。)		
	4 カレンダーの飾りを作る。 ・担当教師と一緒に見本、手順書を活用して取り組む。 ①作るサンタのブーツやツリーの色を選ぶ。 ②サンタのブーツやツリーを組み立てる。 (のりや両面テープを使って貼る。) ③台紙の上部に貼る。 ⑤星や雪の飾りを貼る。 ⑥名前を書く。		
まとめ 10分	5 発表をする。		
	6 次回の予定を確認する。		
	7 終わりの挨拶をする。		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
4 カレンダーの飾りを作る。		・各児童がパワーポイントの説明や見本を見ながら考えて、クリスマスツリーやサンタのブーツの飾りを台紙に貼ることができたか。	主－１－②、３、４ 対－３－①③
5 発表をする。		・友達の作品を紹介しながら各児童に問いかけを行ったりしながら感想を引き出す。	対－５－①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童C	・選んだパーツを線に沿って切り、自分で決めた位置に貼ることができたか。 ・友達の作品を見て、感想を言うことができたか。	・クリスマスツリーやサンタのブーツの飾りを自分で考えて決めた位置に丁寧に貼ることができた。 ・３つの雪の結晶の飾りを重ねて貼る等、自分で考えて工夫した飾りつけを行うことができた。 ・友達の作品を見て感想を言う場面では、時間がない中で、一言精一杯友達の作品の感想を気持ちを込めて言うことができた。	B
児童D	・見本を見ながらパーツを、自分の好きな場所に貼ることができたか。 ・最後まで、落ち着いて活動することができたか。	・見本を見ながら、自分で考えて貼ることができていた。クリスマスツリーは、すぐに自分で決めて貼ることができたが、サンタのブーツは、なかなか貼る場所が決まらなかったため、教師の誘導が必要であった。しばらく考えて教師が指した場所に貼ることができた。 ・授業態度は、最後まで落ち着いて活動することができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・今まで、ずっと制作活動に取り組んできているので、パワーポイントでの作り方の説明や工程写真の提示と見本だけで、ある程度作ることができると思っていたが、作り方の手順を理解し一人で制作を進めることが難しい児童が多く、導入の説明を再度行った。説明を再度行ったために、児童に説明する時間が長くなり、本来の必要最小限の説明に留めることができなくなってしまった。 ・個に応じて工夫をした分かりやすい手順書の準備をしなければならないと反省した。			
研究協議における意見・アドバイス			
・前の黒板に授業に必要な提示物のみを示して、児童が教師の話や提示物に集中できるようにしたら児童に分かりやすかったのではないかな。 ・サンタのブーツの形は、児童にとってイメージしにくいので、例えば、サンタクロースやトナカイのように、児童に分かりやすいものにすればよかったのではないかな。 ・友達の作品を見て、感想を言う児童が当日、休んだために、別の児童になったが、その児童に対する感想を言う手立て、支援が不十分であった。当初考えていた児童が休むことも考えて、授業の準備が必要ではなかったか。 ・友達の作品を見て感想を言う場面では、時間がなくなり、教師主導の発表となってしまった。大切な場面であるので、少々時間がオーバーしても児童の感想を言う場面を取ったらよかったのではないかな。			

(1) 公開授業 16

ア 生活単元学習「クリスマス会に向けてオーナメントを作ろう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童の実態

小学部6年E組は男子5名のクラスである。5名共、簡単な声掛けや指示を聞いたり、手順書を見たりしながら落ち着いて活動することができている。しかし、手指の細かな作業が苦手な児童やこだわりが強く気持ちが不安定になると切り替えに時間を要する児童がいるため、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要となっている。

本学級には家庭生活において、興味のあるタブレット機器などは積極的に扱っているがはさみや定規などの道具を自分から扱う機会が少ない児童が多く、手先を見て細かな作業が苦手な児童がいる。その他の児童の中には、日常生活の様々な場面でこだわりが強くなることで行動が止まったり気持ちが不安定になったりしてしまうといった状況である。しかし、作業が苦手な児童には手添えなどで支援をしたり継続的に取り組んだりすることで道具を扱うことができる力がある。こだわりが強い児童には、活動に見通しがもてるようにすることで落ち着いて活動することができる。制作活動を通して、道具の使い方を知ったり手指の巧緻性が向上したり、気持ちが不安定になることなく落ち着いて活動できたりするのではないかと考えて本単元を設定した。

b つけたい力

今回の単元では、粘土を平らにし、型抜きすると完成するオーナメントと5等分したストローに糸を通し星形にして完成するオーナメントを作りたいと考えて指導計画を立てた。本時の粘土を使ったオーナメント作りでは、粘土の色を赤、青、黄色とし、一色を選ぶようにする。型抜きについては、各6種類の型の中から好きな形を選び、取り組むようにした。のべ棒を使用する際にどのくらいの力で押せば平らになるのか、どのように型抜きを使用すれば綺麗に形を作ることができるかなど、使用する道具への力加減や使い方などを知ってほしいと考えた。また、粘土を平らにしたり、型抜きをしたりすることで粘土の形が変化していく様子を見て、発声や表情などで感情を表わし、活動に意欲を示してほしいと考えた。ストローのオーナメント作りも同様である。ストローが星形に変化していく様子を見て、活動に対しての意欲や感情を表現する児童たちに注目した。また、手順を動画視聴や実演で見通しをもちやすくし、実態に応じて手順書を示すことで、最小の支援で児童が活動できるようにする。もし作業中に分からないことがあったり失敗したりしても、児童から支援を求めてくるまでは待つ姿勢をとり、自分で考える力を身に付けることを目指した。成功体験に重点を置いた指導を行い、自発的な行動ができる力を身に付けるようにする。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

ホワイトボードにスケジュールを掲示したり、手順の動画をしたりして、授業の流れや作業への見通しがもてるようにした。児童の実態に応じて、手順書を配布するようにした。動画を視聴する際には視力が弱い児童がいるため、全員テレビ前に座るようにする。また、動画を停止し、細かな説明などを行った。

準備や片付け、作業などは自発的に行動するよう最低限な声掛けを意識した。粘土の形が平らに変化したり型抜きができたりした際には、活動への意欲や感情を表現できるような声掛けや称賛をするようにした。

導入部分で制作中は自分で考え工夫して活動するよう伝え、困ったり分からなかったりした際には、自ら支援を求めるようあらかじめ伝えておく。また、型抜きの貸し借りをしても良いことにするが、借りたい時は自分から友達に相談するように伝えた。

b 児童への配慮

テレビ前にテープでラインを引き、整列しやすいようにした。手順書は画像を多く使用し、平仮

名表記で作成することで授業内容を視覚的に理解できるよう配慮した。型抜きの上側には赤色を付けて、上下が分かるようにした。また、粘土版の上に物が散乱しないように型抜きやひもを通すためのピンなどは小分けし作業しやすいようにした。粘土は手に付きにくい素材の物を使用した、粘土板に付いたときにクリアファイルを使って、形を崩さず取るように配慮した。

感想発表では、発声が困難な児童、発音が不明瞭な児童のため、「難しかった」「楽しかった」「簡単だった」という3パターンを平仮名明記イラスト付きの視覚支援から選んで感想が発表できるように配慮した。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

のべ棒や型抜きなどの道具の使い方を理解し、集中して取り組めるようになった。また、自分で形を考えることで児童の意欲が増し、また称賛されることで自分なりの発声や表情で感情を表現できるようになった。準備や片付けでは、友達の様子を見て自発的な行動が見られた。導入であらかじめ話をすることで、困った際に支援を待つのではなく自分から質問したり支援を求めたりすることができるようになった。



（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

動画ではなく、実演の方が雰囲気なども感じ取り見通しをもちやすかったのではないかと感じた。粘土を平らにする際には、割りばしなどを使用した均等の厚さに平らにできるような支援具を実態に応じて準備する。形が分かりにくい型抜きがあったため、分かりやすい簡単な形の型抜きを使用すれば良かった。

b 対話的な学びの視点から

新型コロナウイルス対策のため、児童同士距離を空けての活動になった。近い席の児童とは作品を見たり、型抜きの貸し借りを行ったりすることができたが、遠い席の児童とはそのような活動を行えなかった。途中で各児童の作品を紹介したり見せ合ったりする場面を設定し、制作中もクラス全体で対話的な学びを展開できるようにする。

c 深い学びの視点から

「オーナメント」という言葉ではなく、「かざり作り」という单元名の方が、児童にとって身近で理解しやすかったのではないかと考えた。

2時間続きで制作時間を設け、自分で〇個作るといった目標を決めたり、模様を考えたりする時間を増やした方が良かった。

（オ）新学習過程分析表を使って

分析表を使うことで主体的な学び、対話的な学び、深い学びが、どのような学びなのかを確認することで、意識して指導することができた。項目別に具体例などがあれば、さらにイメージしやすいものになるのではないかと考えた。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	小学部 6年 E組	対象 児童生徒数	5人
日 時	令和2年12月9日(水) 3時間目(10:50~11:35)	場 所	小学部6年E組教室
単元名	クリスマス会に向けてオーナメントを作ろう！		
本時の目標	・自分で色や型を選んだり、模様を考えたりしてオーナメントを作ることができる。		
学習指導要領 との関連	■小学部学習指導要領 ・生活 オ 人との関わり 2段階(ア) ・国語 A聞くこと・話すこと 3段階 オ ・図画工作 A表現 2段階 ア (イ) ■自立活動 ・人間関係の形成 (1) ・心理的な安定 (1) ・コミュニケーション (1)(2)(3)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 はじめの挨拶をする 2 本時の学習内容を知る ・先生の話聞く。 3 本時の目標を確認 「粘土を平らにして、型抜きをする！」	・姿勢を正すよう声掛けをする。 ・ホワイトボードに目標や本時の流れを提示する。	
展開 35分	4 オーナメントづくり ① 手順の動画視聴。児童Dには手順書を配布する。 ② 各児童粘土の色を決める。 ③ のべ棒を使って、粘土を平らにする。 ④ 粘土に型抜きをする。(模様をつけたいと希望がある児童にはヘラ等を使用し模様づけを行う) ※早く終わった児童は後片付けをする。	・児童Dは教師と一緒にやる。 ・のべ棒を使うことが難しい児童はローラーを使用する。 ・必要な場面だけ声掛けや指差し、手添え等で支援を行う。 ・できたことに対しては声掛けなどで評価していく。	
まとめ 5分	5 本時の振り返り ・出来上がった作品を見て、感想を発表する。 6 次時の予定を確認 7 おわりの挨拶	・児童BCDにはイラストを使用し、自分なりに発表するよう促す。 ・姿勢を正すよう声掛けをする。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4 オーナメントづくり		- 準備や後片付けをする際には、友達の様子や手順書を見て気づき、自ら準備や片付けができるような声掛けを行う。 - のべ棒を使用して粘土を伸ばす活動、型抜き活動で支援なし、あるいは最小の支援で児童が活動できるよう手順の動画で見通しを持てるようにする。必要な場合に手順書を見たり、教師に支援を求めたりするよう促す。	主— 1－② 2－② 3 対— 1－① 3－① ②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
児童A	見本や動画を見て自分でオーナメントづくりを進め、分からないことがあれば、教師に支援を求めることができたか。	・動画を見ることで見通しをもって活動ができていた。ひもを通すピンを付けるときに付け方の間違いに気づくことができず、教師の声掛けが必要な場面があった。手順書でピンの付け方を確認することで間違いに気づき、正しく付けることができた。	B
児童C	器具を使用することで粘土の形が変化する様子を見て、発声や表情などで感情を表わし、活動に意欲を示すことができたか。	・粘土の形が変化すると、笑ったり、自分なりの発声で教師に形を伝えたりすることができていた。自分で選んだ型抜きで完成した時の喜びを発声や表情で感情を表し、活動に意欲を示すことができていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
- 導入のクリスマス会に向けてオーナメントを制作することの説明が不十分であった。児童からどのように完成するのか分からない、どのように飾り付けがされるのか分からないなどの感想があったので、パワーポイントなどを用いて具体的に説明ができたなら良かった。スケジュールを掲示しているホワイトボードの裏面に見本を掲示し、反転させて見本を見せることにした。見本を見せた後、スケジュールの掲示している面に戻したため、児童は完成したオーナメントをイメージしながら制作できなかったのではないかと考える。完成をイメージしながら制作に取り組めるよう見本が常に見えるところに掲示するなどの工夫をすれば良かった。 - 導入が短くなったのと、残りの制作時間も短いと感じたため2時間の制作時間を設定すれば良かった。 - 粘土を平らにする際、力を加えすぎることによって粘土が薄くなって紐を通すピンを刺すことが困難になる児童がいた。粘土の厚さが均等になるよう割りばし等を使った支援具を準備すれば良かった。			
研究協議における意見・アドバイス			
- 単元名を「オーナメントを作ろう」という言葉ではなく、「かざりを作ろう」などの方が児童にとって分かりやすくイメージしやすかったのではないかな。 - 粘土の厚さが薄くなりすぎていた児童もいたため、児童の実態に応じて、厚さが一定になる支援具を使用すれば良かったのではないかな。教材教具を活用することで成功体験を増やし、継続した活動の中で支援を減らしたり教具を使用せずに制作したりするようになると良いのではないかな。 - 今回の単元の場合は、手順を動画で視聴するのではなく、実演で見せる方が雰囲気、力加減などを感じ取ることができたのではないかな。 - クリスマス会に向けての制作について具体的に説明があれば、イメージしやすいのではないかとアドバイスをいただいた。			

4 おわりに

(1) 実践を通して

今年度小学部では、「子どもの主体的・対話的で深い学びの観点を生かした取組～よりよい支援や教材の工夫を目指して～」を研究テーマに、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点を活用し、よりよい授業改善に向けて実践に取り組んだ。

昨年度の課題は、「授業で設定した目標がどれだけ達成できたのか」、「目標を達成するために必要な教師のよりよい支援や手順書、教材の工夫、視覚支援の活用をどのように検討し捉えていくのか」であった。

授業の中では、視覚支援を有効に活用し、個に応じた声掛けや手順書、教材等の工夫をして見通しがもてるようにした。パワーポイントで学習の流れの説明や写真や動画での振り返りを行う中で、授業における設定したねらいがどれだけ達成できたのか、目標達成度について確認することもできた。

児童が主体的に対話的に学ぶための様々な支援が考えられ、実践されたことで、学習環境を工夫することで見通しをもって活動することができるようになってきている。また、動画や手順書、写真カードなどの視覚支援を児童一人一人の実態に合った形で提示することや声掛けや補助がなくても自分ですることがわかったり、自分の気持ちを伝えたりして、一人でできる活動が増えてきている。さらに、教材の工夫や改善によって、自分で考え、判断したり、分からない時は教師に質問したり、友達の取り組む様子を見て自主的に活動する場面が増え、教師のよりよい支援や手順書、教材の工夫、視覚支援の活用を確認することができた。

また、「生活単元学習」の他に「教科」においても教師の支援や手順書、教材等の工夫、視覚支援を生かし、よりよい支援や教材の工夫を目指した授業づくりに取り組むことができた。新しく導入された学習指導略案の注目してほしい学習活動や児童の評価等の欄を活用し、事後協議における検討ポイントを明確化したことにより、学習指導略案の注目してほしい児童を中心に、手立てが有効であったか、目標が達成されたのか検討し評価することができた。

来年度から児童一人1台のICT機器の導入に向けて、教師のICT機器操作やアプリ活用のスキルアップ、教師間での情報共有や協力が必要となり、ICT機器を習慣的、継続的に使うことで、児童の様々なICT活用能力を育成していくことも取組をしなければならない。また、日々の授業の中で、よりよい支援を目指して児童の実態や授業のねらいに応じた機器の使用を検討することも今後の課題である。

(2) 学習過程分析表の改善に向けて

3つの観点が各項目別に整理されている学習過程分析表の活用により、事後評価の際に、どの学習活動がどの項目なのかを確認することができた。

小学部の学習活動では主体的な学びと対話的な学びが中心となる授業が多かったので児童の実態によっては、主体的な学びと対話的な学びのみが多くなり、深い学びの観点が少なくなることもあった。具体的な支援方法や教材の工夫をすることにより、今まで学習したことを自分なりに生かして活動できるような場面を設定するなどして深い学びの視点も考慮した活動を取り入れていく必要がある。

来年度は、学習過程分析表の深い学びの項目に、深い学びとして捉えることのできる達成可能な項目の検討を今後も継続していく必要があると考える。

Ⅳ 中学部の研究

研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした生活力を育てる取組」

1 はじめに

昨年度、中学部では研究テーマを「主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組（2年次）」と設定し、各学年において「生活単元学習」での研究と実践を推進した。そこでは、新しい学習過程分析表を活用することによって、注目してほしい学習活動や生徒の評価等を中心に手立てが有効であったのか、目標が達成できたのか等を事後協議において確認することができ、教師側の指導のポイントも明確にすることができた。また、生活単元学習の授業を通して、他の作業学習や教科学習（国語、数学等）、日常生活の場面でも「応用」「般化」ができたという願いを込めて授業に取り組んできた。

本年度は、研究テーマを「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした生活力を育てる取組」と設定し、代表者による研究授業と主指導者全員による公開授業を実施し、「全教科」での授業実践と研究に取り組むこととした。新しい様式の学習指導略案と昨年度の反省をもとに改善された新学習過程分析表を活用することにより、生活力を育てるための授業づくりに取り組み、事後協議を実施して授業改善に取り組んでいく。

2 研究経過

（1）研究内容

- ア 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点から、目標を達成するための手立てを検討する。
- イ 授業実践から計画し、手立てが有効であったか、目標が達成できたか等の分析を行い、課題や改善点を明確にする。

（2）研究方法

- ア 新しい様式の学習指導略案と新学習過程分析表を用いて、全教科を対象に年2回の研究授業及び年1回以上の公開授業を行う。
- イ 学部の代表者による研究授業（年間2回）では、「授業改善チーム」の参観を継続するとともに、授業をビデオ撮りしたものを事後協議に活用し、協議を行う。
- ウ 主指導者全員が学習指導略案、新学習過程分析表を使用した公開授業を実施し、事後協議まで行う。普段の授業においても定着させていく（略案で年間1回以上）。
- エ 外部専門家の招へい…指導・助言、「主体的・対話的で深い学び」の検証を行う。
- オ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

（3）研究計画

- ア 学部研究日を月1回設定する。
- イ 研修の日程

月日	研修内容
5/8	本年度の年間研究計画等の協議
6/5	学部研究テーマの検討及び決定
7/7	学部研(研究授業及び公開授業に関する説明、準備等)

7 / 8	研究授業①中学部 3 年生 実施
7 / 28	学部会にて実践集録の書き方の説明等
7 / 31	アセスメント①の実施「キャリア発達段階表(2020 改訂版)」
9 / 8	学部研(研究授業及び公開授業に関する説明、準備等)
10 / 6	学部研(研究授業及び公開授業に関する説明)及び教材準備等
11 / 13	学部研(研究授業及び公開授業に関する打ち合わせ、確認)及び教材準備等
11 / 25	研究授業②中学部 3 年生 実施
12 / 1	実践集録についての確認
1 / 12	実践集録の進捗状況確認等
2 / 5	本年度の反省並びに来年度の方向性の検討
3 / 2	アセスメント②の実施「キャリア発達段階表(2020 改訂版)」

3 研究授業研

(1) はじめに

ア 取組にあたり

本学年は、男子4名、女子3名で構成されている。生徒の中には自閉症やダウン症の生徒が含まれていて、生徒の実態や発達段階には差があり、見本の文章を見て、写し書きができる生徒から、手順書を見た上で、自分で文章を考え書くことができる生徒まで様々である。

学習中の様子や態度は、教師の説明や友達の発表を聞くことや、順番を待つことが苦手で、見通しが立たないと離席をする者、大声を出したり、手や足で物音をたててしまう者、自分の考えをもっている、自発的に発表することに消極的になってしまう者、また、挙手なしで自分の考えを話してしまう者などの課題が見られる。このような学年の実態から、友達や周りの人の存在、自他の良さに気づき、協調性をもって人と関わる力をつけていくことを大切に学習に取り組んできた。

そこで、生活単元学習の中で学年農園づくりをテーマに、まず土づくりから取り組んだ。その後、野菜の成長を観察日記に記したり、収穫時には、収穫日記に記したり、収穫した野菜の個数を種類ごとに収穫表にその個数分シールを貼ったり、野菜の長さや重さを計測したりすることで、販売学習に向けて意欲が向上していけるようにした。また、国語や数学で取り組んだ学習内容を今回の生活単元学習で取り組むことで、知識が般化し、身に付くのではないかと考えた。

イ 単元計画

学年農園づくりをテーマとした生活単元学習の単元の実施時期及び詳細は以下のとおりである。

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	実践事例Ⅰ				実践事例Ⅱ					
										

[実践事例Ⅰ] 単元名：学年農園をつくろう1 (全31時間)

- ・土づくりをして、うねをつくろう・・・2時間
- ・看板をつくろう・・・1時間
- ・野菜の苗を植えよう・・・1時間
- ・観察日記を書こう・・・10時間
- ・野菜の成長に必要な作業を覚えよう・・・4時間
- ・野菜を収穫しよう・・・3時間
- ・収穫日記を書こう (本時2/3)・・・3時間
- ・野菜を販売しよう・・・6時間
- ・振り返りをしよう・・・1時間

[実践事例Ⅱ] 単元名：学年農園をつくろう2 (全27時間)

- ・土づくりをして、うねをつくろう・・・2時間
- ・看板をつくろう・・・1時間
- ・野菜の苗を植えよう・・・1時間
- ・観察日記を書こう・・・12時間
- ・野菜の成長に必要な作業を覚えよう・・・3時間
- ・野菜を収穫しよう・・・3時間
- ・収穫日記を書こう (本時1/2)・・・2時間
- ・野菜を販売しよう・・・2時間
- ・振り返りをしよう・・・1時間

(2) 研究授業

ア 第1回目 生活単元学習「学年農園をつくろう1（収穫日記を書こう）」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

- ・積極的に自分の意見が言える生徒もいるが、指示待ちになったり、大勢の場では、自分の力を発揮することができない生徒もいる。
- ・日常生活や学習においては、待つのが苦手な生徒がおり、その際、離席や手足で物音を立ててしまうことがある。
- ・コミュニケーション面では、全生徒がほぼ言語指示で行動することができる。

b つけたい力

「知識及び技能」

- ・農園づくりを通じて、野菜の成長に必要なものについて知ることができる。

「思考力・判断力・表現力等」

- ・収穫した野菜の数を正確に数えたり、今日の学習の振り返りを文章にすることができる。
- ・学習したことを自分の表現方法で発表することができる。

「学びに向かう力・人間性等」

- ・自分の順番を待ったり、仲間と一緒に行動したり、自分の役割を果たすことを意識しながら取り組むことができる。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

☆生徒一人一人の待ち時間を少なくしたこと。

b 生徒への配慮

- ・生徒自らが、黒板の前の自分の名前が貼られたかごから、必要なものを取りようにしたこと。
- ・収穫日記を書き終えた生徒には、野菜収穫表に自分の収穫した野菜の数量分のシールを貼りに行くよう声掛けしたこと。
- ・待つのが苦手な生徒には、授業内の課題が終わったことを確認した後、授業に関する別の課題を用意したこと。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

- ・担当の野菜を決めて取り組んだことで、数を正確に数えることに課題のある生徒は、自分の担当している野菜という意識をもって数えることができた。
- ・毎回、1時間目：野菜収穫、2時間目：収穫日記というように、授業の流れをパターン化することで、見通しをもって学習に取り組むことができた。
- ・文章を書く際、語彙数を増やすことを課題にしている生徒の中には、見本の例文を参考に、野菜の数量を比較することや次回の収穫量を予想する文を書くことができた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

今回の学年農園づくりの取り組みの経過を、事前に生徒が作ったカレンダー記していくことで、最初の土づくりから種まき、その後の収穫まで関心をもって学習していくことにつながった。しかし、野菜を販売して売り上げたお金が、学期末のおつかれさま会のお菓子代や飲み物代になることがもう少し、視覚的に分かりやすいようにしていく必要があったと感じた。

今後、生徒の実態の細かな変化に気づき、その上で、より実態に合った教材・教具を準備していくことが大切である。

b 対話的な学びの視点から

前時に収穫した自分の担当の野菜を数えて、その数だけ黒板に事前に用意している野菜の色の掲

示物を貼りにいき、正しい数字を個数の数字を書くことができ、それを生徒みんなで共有した後、収穫日記にピーマン、ナス、シシトウ、ミニトマト、トマトの記入欄にそれぞれの個数の数字を書くことができた。生徒によっては、感想を書く際、見本の文章をそのまま、書き写すだけになってしまっていたため、今後はワークシートの内容に、感想の言葉を複数から選ぶことができるような仕組みを取り入れ、生徒の思いが少しでも表現できるようにしていきたい。

c 深い学びの視点から

授業で学習したことを教室前の廊下、掲示板に貼ることで、学習後も思い出すきっかけをつくり、そのことで、国語や数学等の他の学習に生かすことにもつながればと考え、今回の取り組みに至った。

しかし、取り組み後、十分な振り返り学習ができなかったこともあり、掲示した学習内容を生徒自身が振り返り、課題点を意識するということまでいかなかった。

そのため、次回は、国語、数学での学習時に、生活単元学習での課題点を明確にした上で、そのことを生徒に意識させながら学習に取り組んでいくことが大切であると感じた。

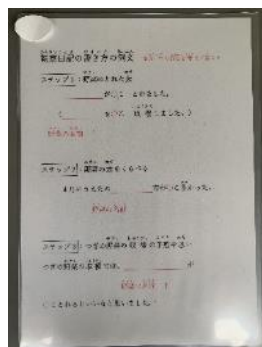
また、日々の授業を細かく振り返り、課題点を見つけたうえで、S Tとの連携をスムーズにしていくことで、深い学びにつながる学習につなげていくようにしたい。



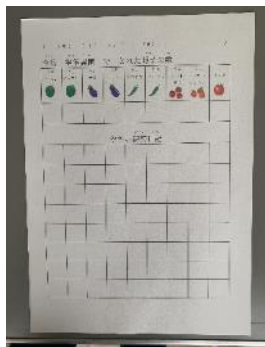
生徒Aがワークシートに書いている様子



生徒Dがワークシートに書いている様子



生徒A 手順書



ワークシート



生徒D 文章見本



ワークシート

(才) 実践事例Ⅰ

令和２年度 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 3名
学部・学年・組	中学部 3年 A組	対象 児童生徒数	7人
日時	令和2年7月8日(水) 2時間目(9:55~10:40)	場所	中学部 3A 教室
単元名	「学年農園をつくろう」		
本時の目標	・収穫した野菜の数を種類ごとに数えることができる。 ・収穫の内容を文章のかたちにすることができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 ・算数科 2段階 A数と計算 ア イ ■ 中学部学習指導要領 ・国語科 1段階 B書くこと ア 2段階 A聞くこと・話すこと エ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。	・正しい姿勢ができていないか確認する。	
	2 前時の振り返りと本時の流れを確認する。	・収穫してきた野菜を各生徒に確認する。	
	3 本時の目標を確認する。	・教師が読んだ後、復唱するよう声掛けする。	
	4 前時に自分が収穫した野菜の収穫量を確認する。	・自分の机の上にある野菜入れの中の野菜の数量を確認した後、黒板に数を表記しに来るよう促す。	
展開 30分	5 ワークシートに収穫した野菜の数をそれぞれ数えて書く。	・正しく記入ができていないか確認する。	
	6 ワークシートに収穫した野菜について文章を書く。	・各自が見本を参考にしながら、書けているか確認する。	
	7 書いた文章を発表する。	・時間を見て、発表人数を調整する。	
	8 本時の振り返りと次時の流れを説明する。		
まとめ 10分	・野菜収穫表にシールを貼る。	・自分が収穫した野菜の数だけ貼ることを確認する。	
	9 終わりの挨拶をする。		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開5 ワークシートに収穫した野菜の数をそれぞれ数えて書く		野菜(具体物)と数字のマッチングを目標にしている生徒に対しては、具体物を数えるごとにその数だけ数字を覆った丸をペンでなぞる、もしくは色鉛筆で塗った後、数字で書くというルールを設ける。	主―1① 主―2② 対―1②
展開6 ワークシートに収穫した野菜について文章を書く。		文章を書く上で語彙数を増やすことを目標にしている生徒に対しては、 ステップ1 数量に関する内容 ステップ2 4月と5月に栽培した野菜の収穫量の比較 ステップ3 次回の収穫量の予想を立てるというように例文を段階別に分け、 ステップ1 が書けると ステップ2 ➡ 3 というようにしていくことで文章を書く力の向上につなげる。	主―2② 対―1②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	文章を書く際、見本の例文を参考にして、複数の文章を書くことができる。	見本のステップ1、2、3の文章の書き方の例文を参考にして、自分の収穫した5月のシントウの数や次回の収穫数の予想する内容の文章を書くことができた。	A
生徒D	収穫した野菜の数だけ数字を覆った丸を色鉛筆で塗り、正確に数字を書くことができる。	自分の収穫したピーマンの数量分、黒板に表記した後、それぞれの野菜の種類ごとに色鉛筆で正確な数塗ることができた。数字も正確に書くことができた。	A
【評価基準】A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
最初に目標の確認を終えに出して言うことを生徒に促すことを忘れてしまったが、その後、生徒各々が収穫した野菜を数えた後、黒板の前に用意した生徒各々の名前が表記したかごから必要なものを取りルールを設けたことで、数量、数字を黒板に掲示したり、収穫日記を書く際の用紙と見本をとったり、収穫表に貼るシールをとったりする際に、待ち時間なしでスムーズに行うことができた。時間に余裕ができたことで、生徒一人一人の発表時間を十分に確保することができた。 生徒が収穫表にシールを貼る際、貼る場所を間違えてしまったり、正確に貼れていないことがあったため、必ずSTと一緒にいき、シールが正確に貼れているか確認してもらうようにした。今後は、日ごろの国語科の学習で語彙数を増やす取り組みを行うことで、野菜収穫日記を書く際に文章力を少しでも向上できるようにしていく。			
研究協議における意見・アドバイス			
生徒によっては、収穫日記を書くという授業は、ハードルが高いのではという意見がでた。また、今回の授業を受けて、その後、販売学習にどのように生かしていくか、またどのような授業を計画しているかという質問を受けた。			

イ 第2回目 生活単元学習「学年農園をつくろう2（収穫日記を書こう）」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

- ・自分から感想や意見を言うことができる生徒もいるが、大勢の場では、自分の力を十分に発揮することができない生徒もいる。
- ・日常生活や学習においては、待つのが苦手な生徒がおり、その際、離席や手足で物音を立ててしまうことがある。
- ・コミュニケーション面では、全生徒がほぼ言語指示で行動することができるが、相手に自分の思いを正確に伝えることに課題のある生徒、言葉を話すことができないため、発表時にタブレットのドロップトークを使う生徒もいる。

b つけたい力

「知識及び技能」

- ・農園づくりを通じて、野菜の成長に必要なものについて知ることができる。

「思考力・判断力・表現力等」

- ・収穫した野菜の長さや重さをはかり、数字に表したり、今日の学習の振り返りを文章にすることができる。
- ・学習したことを自分の表現方法で発表することができる。

「学びに向かう力・人間性等」

- ・教師の説明や仲間の発表を聞いたり、周囲の動きを見て行動したり、自分の役割を果たすことを意識し取り組むことができる。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

- ・生徒一人一人が、スムーズに学習課題に取り掛かることができるようにしたことである。具体的には、事前に生徒自身の名前が貼られたカゴを、生徒各々の机に配り、その中に、ものさし（40cmのもの）やワークシート（収穫日記）、文章を書くための手順書もしくは、見本の文章例等、学習に必要なものをあらかじめ、入れておいたことである。

b 生徒への配慮

- ・黒板に、はかっただいこんの長さ、重さを記入する手段として、紙にラミネートを施したマグネット付きのものをそれぞれ用意したことで、生徒各々が自分の机でそれぞれのペースで書いてから黒板に掲示しにできるようにしたことである。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

- ・自分の収穫しただいこんを学習に用いたことで、だいこん1本の長さ、重さの計測、計量に対して、興味・関心をもって取り組むことができた。
- ・1学期同様に、1時間目：野菜収穫、2時間目：収穫日記というように授業の流れをパターン化することで、見通しをもって学習に取り組むことができた。
- ・文章書く際、語彙数を増やすことを課題にしている生徒の中には、収穫日記を書くための見本の例文を参考にした上で、クラスメイトの収穫しただいこんの長さ、重さを比較する文章を書いたり、販売時のだいこん1本に対しての希望する値段を書いたりすることができた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

今後、今回の授業で行った学習手順を毎回継続していくことで、生徒各々が学習ルールとして覚え、定着していくことが大切であると感じている。

また、前回の公開授業での反省内容と同様に、生徒の実態の細かな変化に気付き、その上で、より実態に合った教材、教具を準備していくことが重要である。

b 対話的な学びの視点から

生徒の発表時間を多く確保したうえで、クラスメイトの発表内容や発表の様子で良かった点や気付いた点を発表し合う振り返りの時間を十分に設定していく。

c 深い学びの視点から

毎時間、学習したワークシート（観察日記、収穫日記等）を掲示板に貼る取り組みを行ってきたが、いつでも学習の経過を振り返ることができるように、時系列に沿って写真を用いた掲示を行っていく。



生徒Dがだいこんの長さを計測している様子



生徒各々が黒板の自分の名前の箇所にだいこんの長さ、重さを掲示しに行く様子

(才) 実践事例Ⅱ

令和2年度 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST3名
学部・学年・組	中学部 3年 A組	対象 児童生徒数	7人
日時	令和2年11月25日(水) 2時間目(9:55~10:40)	場所	中学部3A教室
単元名	「学年農園をつくろう」		
本時の目標	・収穫した大根の長さ、重さをはかることができる。 ・収穫日記に計測した数字を書き、内容を文章のかたちにすることができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 ・算数科 2段階 C測定 ア ■ 中学部学習指導要領 ・国語科 1段階 B書くこと ア 2段階 A聞くこと・話すこと エ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。	・正しい姿勢ができていないか確認する。	
	2 前時の振り返りと本時の流れを確認する。	・収穫してきた野菜を各生徒に確認する。	
	3 本時の目標を確認する。	・教師が読んだ後、復唱するよう声掛けする。	
	4 前時の収穫時の様子を振り返る。	・テレビを用いて、タブレットの写真を見せる。	
	5 前時に自分が収穫した大根の長さ、重さをはかる。	・ものさし、はかりを使ってはかることができるか確認する。 ・正しく数字を読み取りができていないか確認する。	
展開 35分	6 自分が収穫した大根の長さ、重さの数を黒板に記す。	・用意している記入用紙に数字を書き、黒板の自分の名前の箇所に掲示する。	
	7 ワークシートにはかった大根の長さ、重さを記入する。	・黒板に記された自分の大根の長さ、重さの数字を見て正確に書くことができるか確認する。	
	8 ワークシートに収穫した大根について文章を書く。	・文章中に自分がはかった大根の長さ、重さの数字を取り入れるよう声掛けする。 ・文章作成見本を参考にしながら、書けているか確認する。(販売学習につながる内容を盛り込む)	
	9 書いた文章を発表する。	・時間を見て、発表人数を調整する。	
まとめ 5分	10 本時の振り返りと次時の流れを説明する。		
	11 終わりの挨拶をする	・正しい姿勢ができていないか確認する	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 5、6 ものさしを使っての長さの読み取り方を理解し、正確に用紙に記入する。		大根(具体物)の長さを、ものさしを使ってはかる際、0メモリから順に指差ししながら読み取り、正しいと思う数字の箇所にシールを貼り目印をつける。それを見ながら黒板に掲示する用紙に数字を書くというルールを設ける。	主―1 ① 主―2 ② 対―1 ②
展開 8 ワークシートに収穫した大根について文章を書く。		文章を書く上で語彙数を増やすことを目標にしている生徒に対しては、 ステップ1 長さ、重さに関する内容。 ステップ2 次回の収穫時の予想を立てるというように例文を段階に分け、 ステップ1 が書けると ステップ2 というようにしていくことで文章を書く力の向上につなげる。	主―2 ②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒B	・ワークシートに収穫日記の文章を書く際、自分がはかった大根の長さ、重さをワークシートの記入箇所に正しく記入した後、見本の文章の空欄にその数字を当てはめて、見本の文章を見ながら書くことができる。	・以前は、見本の文章の空欄の部分を開けたまま、最後まで写し書きした後、教員の声掛けにより、大根の長さ、重さの数字を後から書いていたが、今回は、文章の流れの中で、数字を書くことができた。	A
生徒D	・収穫した大根の長さをはかる際、ものさしのセンチの単位を目盛りを正確に読み取り、ワークシートの記入欄に数字を正しく書くことができる。	・数学の授業での取組もあり、ものさしの目盛りを指差ししながら、1から順に数えていき、正しい長さの数字の場所にシールを貼り、ワークシートに正しい数字を書くことができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
前時で大根を収穫した様子をテレビ画面を通して見せ、学習を振り返ることで、自分が収穫した大根の長さ、重さについてより興味、関心をもつことにつながった。普段生徒個人が使用している生徒の名前付きの連絡帳提出用のかごに収穫日記の用紙や見本、専用ものさし等を入れたものを用意することで、生徒各々がスムーズに学習に取り組むことができた。 生徒の中で、大根の長さ、重さを測った後に、黒板に数字を記入したものを掲示しにくる際、掲示場所に戸惑う場面があったため、すぐ理解することができる視覚支援が必要であると感じた。 今回、学年農園で取り組んだ、収穫した大根の長さ、重さを測った数を収穫日記の中に取り入れた文章をつくることで得た学習スキルを日常で文章を書く場面で活かしていけるようにしていく。			
研究協議における意見・アドバイス			
今回の授業は、生活や社会との関わりの視点で捉えることができています。また、収穫した野菜(事象)を数量や図形及び関連性などに着目して活動し、根拠を基に筋道を立てて考え、総合的・発展的(販売学習)につなげることが出来ている。			

(3) まとめ

ア 2回の研究授業の実践(生徒の学びの姿)を通して

昨年度に引き続き、今年度も「教科学習と生活単元学習を相互に関連付けた取り組み」をテーマとして取り組んできた。国語と数学で学習している内容が生活単元学習で役立つことができるように、今回の注目してほしい生徒においては、同時期に同じ内容の学習を行うようにした。

今回の実践を通して、良かった点は、3つあると考える。1つ目は、生徒の待ち時間を少なくし、授業をスムーズに展開していくための方法がSTとの話し合いの結果分かり、授業の中で成果を上げることができたことである。具体的には、待つことが苦手な生徒に対する手立てとして、生徒各々の机で野菜の数や長さ、重さを書くことができる仕組みをつくり、書いたものを生徒がそれぞれ黒板に掲示しに来れるようにしたことで、待ち時間を大幅に減らすことができたことである。また、課題が早く終わった生徒に対して、授業内容にちなんだ学習課題を事前に用意しておくことの必要性にも気づくことができた。2つ目は、すべての生徒が、それぞれの方法で、栽培した野菜の観察日記、収穫日記を書いて、発表することができたことである。このことは、生徒に合った文章の見本や、文章を書くための手順書があれば、文章のかたちにすることができるということで、生徒の自信につながったと感じている。3つ目は、今回の生活単元学習で必要となる学習スキルを国語、数学で目的意識をもって学習に取り組んでいる生徒の姿が見られ、成果を感じることもできた。

国語、数学と今回の生活単元学習の内容に関連性をもたせることで、何を何のために学習しているのかということを理解することで、見通しをもって主体的に取り組むための意欲へとつながっていくはずである。以上のことから、今回の取組によって得られた知識やスキルがあらゆる場面で般化し、身に付いた生徒が多くいたと感じている。

イ 新学習過程分析表を使ってみて

- ・「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」について簡略化されており、とても分かりやすいという印象を受けた。また、新学習過程分析表を見ることで、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の観点を容易に確認することができ、便利であると感じた。
- ・授業後、振り返りを行う時に、指導略案の項目と分析表を照らし合わせてみて、すぐに課題点等を確認しやすいと感じた。

4 公開授業研

(1) 公開授業 1

ア 生活単元学習「お店屋さんを開こう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部1年A組は、男子4名、女子2名の計6名のクラスである。この中には、集中力が続きにくい、口頭だけの指示では伝わりにくい、初めての活動には自信がもてず消極的になる、集団の活動に苦手意識があり、流れに沿った行動をとることが難しい生徒がいる。そのために、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要である。

中学部に入学してきた当初は、どのようにコミュニケーションをとっていいのか分からず、また恥ずかしさもあり、互いに関わることが少なかったが、次第に一緒に遊んだり、コミュニケーションを取ったりするなどの様子が見られるようになってきた。しかし、関わり方は一方的で、相手の気持ちを考えず自分本位になっていることが多い。また言葉遣いにもまだ課題がある。

そこで本単元では、自分たちで製作したものを販売し、お客さんに対する態度を体験的に学ぶことで、人との適切な関わり方や言葉遣いを意識するきっかけとなるのではないかと考えて設定した。

b つけたい力

本単元では、生徒の好きな物作りを題材にした。製品作りとなると丁寧に作る必要がある。また、量も沢山作らなくてはいけないので、製品作りに長期間取り組む必要がある。そこで集中力や根気を付けていけるようにしたい。そして、お店屋さんで自分の役割を果たすことや学級以外の友達や教師と関わり、場に応じたコミュニケーションの方法を学べるようにする。

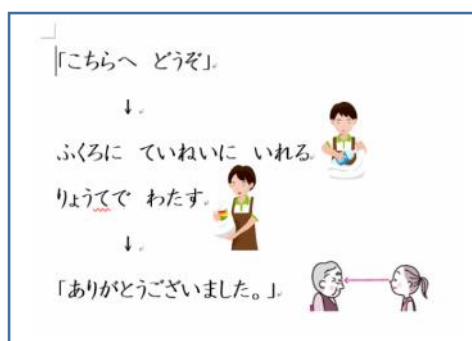
今回の単元では、以下のような内容で指導計画を立てた。製品作りに入る時には、販売する商品の見本や店の写真を見せて、これから取り組む学習のイメージがもてるようにする。また、商品を作っていることを伝え、丁寧に作ることができるようにする。店の名前や看板、店内の装飾等は生徒の意見を聞き、自分たちの店を開くという意識を作り上げていきたい。店の役割練習では、声の大きさ、丁寧な言葉遣いや態度を意識できるようにイラストや手本を見せて伝える。また、練習風景を事前に撮影した映像を見せたり、手順書を用意して練習を繰り返ししたりすることで、自分で声の大きさや丁寧な態度を意識できるようにしたい。事後学習では、開店当日の映像を見せて、自分や友達の良かったところや頑張ったところを見合い、自分たちの学習の成果を振り返るようにする。

こうした一連の学習活動の中で、お店屋さんを開くという体験を通して、店員という立場を疑似体験することで、人との適切な関わり方や丁寧な言葉遣いを意識できるようにしたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

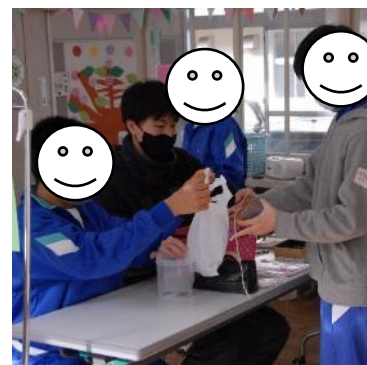
本時では、お店の係練習の中間振り返りをして、今後の練習に生かすことを目標に取り組んだ。最初に係と配置を図で示して確認した。その後、事前に撮影しておいたそれぞれの生徒の係練習の様子の映像をテレビに映して見た。その際には①相手に伝わったか（声の大きさ、身振り等）、②丁寧な言葉遣い、態度とは何かをイラストで示して確認してから見ることによって、2つのポイントに視点を絞って見るができるようにした。また、注目してほしいところは、動画を一時停止して、指し示すことで、どこを見てほしいのか具体的に伝えた。係の様子を見た後に、できていたところと課題を具体的な言葉や動きの手本を見せて伝えた。その後、係別のグループに分かれ、STと一緒に課題点を確認しながら係の練習をした。その際には係の流れやせりふ、「両手で渡す」等のポイントがすぐに確認できるよう、それぞれの係や生徒に応じた手順書を用意した。以上のように、言葉だけではなく、図、イラスト、映像、手順書といった視覚支援教材を多く用いた。



接客手順書



かご渡し係の様子



商品渡し係の様子

b 生徒への配慮

動画を見て良かった点や課題を評価する活動では、生徒は自分や友達の様子を映像を通して振り返る活動に慣れておらず、また普段の様子から考えると、生徒から活発な発言や意思表示が出ることは難しいのではないかと予想した。そのため、発問をする時には「かごは両手で渡せていますか。」「～ですという丁寧な言葉遣いで話せていますか。」「お客さんの方を見て接客ができていますか。」等、具体的な聞き方をした。それに対して生徒は「できちゅう。」「まる。」等と答え評価をすることができた。自分の意見を言葉で具体的に表現したり、画面を指さして表現したりする生徒もいた。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

開店に向けて小物作りを3か月続けて行った。これまでは長時間落ち着いて座って学習することが苦手な生徒が多かったが、一定期間根気強く小物作りをすることが少しずつできるようになってきた。また、1学期に取り組んだ単元を発展させた内容だったので、生徒は製品を作り、開店に向けて準備をしていくという流れの見通しをもって取り組めたことがよかった。また、接客を経験することで、人との適切な関わり方や言葉遣いを意識することができた。特に、生徒Fは家庭でもお店屋さんのYouTubeを見る等、興味をもって取り組み、開店後はやりきった達成感を強く感じて自信が付き、他の場面でも意見を言ったり挙手をしたりして学習に積極的に取り組むことができるようになった。本時では、自分や友達の様子を客観的に見ることで、映像に映った自分と、自分が思っていた自分との違いに気付くことができやすかった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

自分たちのお店の係練習の映像を見ることはあまり経験がなく、興味をもって視聴することができた。しかし、その後感想や評価をする場面では、生徒から積極的に意見を言うことは少なかった。普段からそのような経験を積むとともに、発表マニュアルやプラカードでの意思表示等、自ら考え、意思を示したり意見を言ったりしやすい環境や手立てがもっと必要だと感じた。

b 対話的な学びの視点から

自分や友達の良かった点や課題点を挙手やジェスチャー、言葉で表したが、評価したことが記録に残らず、後から見返すことができなかった。そこで、自己評価や他者評価をする時に、紙に丸を付けるなどの記録用紙を利用し、生徒は後からそれを見比べて良かった点や、改善点を確認することができるようにすると良いと思った。

c 深い学びの視点から

本時では友達や教師の評価やアドバイスに耳を傾け、自分のやり方を修正してより良い方法に改善するようにしたが、この授業の中だけではなく、日々の学習や生活場面でも学習したことを生かすことができるように意識付けをすることが大切だと感じた。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

授業を計画する時に、自分の中で3つの観点を整理して考えることができる指標になった。また、

分析表を参考に不十分な視点を知り、改善することもできると思った。

(力) 実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 3名
学部・学年・組	中学部 1年A組	対象生徒数	6人
日 時	令和2年12月7日(月) 5時間目(13:30~14:15)	場 所	中1A教室
単元名	お店屋さんを開こう		
本時の目標	- 自分の係の様子を見て、できているところや課題を知ることができる。 - 課題を意識して練習をすることができる。		
学習指導要領 との関連	■ 小学部学習指導要領 国語科 内容 2段階 A 聞くこと・話すこと イ ウ 3段階 A 聞くこと・話すこと イ ウ 生活科 2段階 オ 人とのかかわり (ア) 3段階 オ 人とのかかわり (ア) 2段階 カ 役割 (ア) 3段階 カ 役割 (ア) ■ 自立活動 内容 3 人間関係の形成 (1)~(4) 6 コミュニケーション (1)~(4)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 挨拶をする。	- 手はひざ、足の裏を床に付けるように伝える。 - 黒板に学習の流れを書き、流れを説明する。 - 教師が読んで内容を説明する。	
展開 35分	2 学習の流れを確認する。		
	3 本時の目標を確認する。		
	係の様子を見てふりかえり、練習しよう。 4 前時の販売の時の動画を見て振り返る。	①相手に伝わったか②丁寧な態度の2つのポイントに絞って見ていく。 - それぞれのポイントを視覚的に示したものや動きの手本を見せて伝える。 - 途中で動画を止めてポイントを確認できるようにする。 - 良かった点や改善点を具体的に伝えて意欲につなげる。 - 改善できるところをイラストや手本等を見せて具体的に伝える。	
	5 各係に分かれ販売練習をする。		

まとめ 5分	6 本時の振り返りと次時の流れを説明する。 7 挨拶をする。	・学習の頑張りや様子を褒めるような声掛け、評価をする。 ・次の時間は練習後に店を開店することを伝える。 ・手はひざ、足の裏を床に付けるように伝える。
-----------	--	--

注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
4 前時の販売の時の動画を見て振り返る。	・前時の係練習の様子を録画したものを、テレビで写して確認することで、自分や友達の様子を焦点化して客観的に見るができるようにする。 ・評価基準をイラストで分かりやすく提示する。	主－1－② 主－2－② 対－2－② 対－5－①②	
5 各係に分かれ販売練習をする。	・振り返りをしてすぐに練習することで、良いイメージを意識してできるようにする。 ・手本を見せたり、具体的に伝えたりする。	対－3－③ 対－3－④ 深－1－①	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒F	自分の係の様子を見て、できているところや課題を知ることができたか。	画面に映った自分の様子をじっと見ていた。丁寧に商品を扱うこと、両手で渡すこと、笑顔で接客することができていたと評価すると笑顔で「まる」と言い、自分ができたことが分かった様子だった。	A
生徒E	課題を意識して練習をすることができたか。	声の大きさ、客と目線を合わすことを課題として伝えた。練習場面では、目線だけでなく、顔自体を上に向けて接客するようアドバイスした。意識はできていたが自信のなさから完璧とはいかなかった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
自分や友達の様子を画面を通して客観的に見ることは、生徒の興味・関心を高めることができる。自分がどのように動いていたのかは、自分自身では把握しにくい。画面に映った様子から、良かった点と課題点を具体的に伝えることで、目的意識をもってその後の練習に取り組むことができたと考える。 改善点としては、多くの生徒が自分の言葉で具体的に表現する力がまだ足りなく、教師の問いかけに答えることがほとんどだったので、活発な意見交換が難しかった。発言のきっかけや、気持ちの表現の手段として評価をすることができるようなプレート等の物を使ったらよかった。また、長期間取り組む単位では、前に取り組んだことを忘れてしまうこともある。そのため、写真や動画等の視覚的な情報を有効的に使うことが必要である。			
研究協議における意見・アドバイス			
・録画した動画を見てふりかえりをするのは生徒にとって分かりやすかった。 ・実際に動きの手本を見せる、写真やイラストを示すことの使い分けをして、生徒に分かりやすい工夫をする必要がある。			

(1) 公開授業 2

ア 生活単元学習「フィッシングマスター～釣る名人は教える名人～」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部1年A組は、男子4名、女子2名の6名で構成されている。この中には、集中力が続きにくい、口頭だけでは伝わりにくい、こだわりが強く見通しがもてないと活動が停滞する、クラスの中に入って活動することに不安がある生徒がいる。障害の状態や特性は多様であり、理解力による差も大きいため、それぞれの実態に応じた指導や支援が必要である。入学当初は学習を進めるにあたり多くの課題があったが、授業内容を提示し、視覚教材を使用しながらゆっくりと丁寧に説明することで、座って説明を聞いたり、教師の手本を見ながらやろうとしたり、少しずつ活動に参加できるようになってきた。友達に声を掛けることができ始めた生徒もあり、学級内での生徒同士の関わりは増えつつある。しかし、初めての活動になると不安からか自分のことに精一杯になってしまうため、友達と関わるのが難しい面もある。そこで、友達や教師と関わりをもちながら、楽しく活動することができるように支援したいと考えた。

b つけたい力

この単元では、まずは自分たちで魚釣りゲームを作り、実際に自分たちでゲームを楽しむ。次に学級以外の教師を招待し、ゲームを楽しんでもらい、感謝される喜びを知る。友達のやっていることに関心をもって活動し、友達との関わりを楽しむ。また、ゲームのルールを守ることで、楽しく遊べることを知る。そして、おもてなしをする際に自分の役割を果たすことや学級以外の教師と関わるができることを考え、この単元を設定した。

単元を通して、国語では適切な声の大きさ、聞き取りやすい話し方、丁寧な言葉遣いや態度、伝えたい出来事や思いを書くことなど、数学では、個数の数え方や大きさや形、色など、美術では色や形などに気付き、用具を使って、切る・ぬる・はるなど、各教科の基礎的な学習に取り組み、その力を日常生活で般化できることをねらいとする。

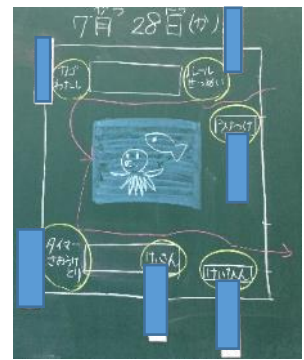
(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

「フィッシングマスター～釣る名人は教える名人～」をテーマに、オリジナルのゲームを自分たちで制作するだけでなく、楽しく遊ぶ。また、協力しながらおもてなしをすることで、仲間づくりの輪を広げたいと考えた。

1年生はほとんどの活動が初めてのことで、説明を聞く機会が多くなりがちで、口頭説明だけでは、長時間集中することは難しい。そのため、絵カードや具体物を使用し、分かりやすく説明し、理解を促す。ゲームに必要な道具や、看板や景品を制作する活動では、簡潔に説明したり、手順書を用意したりすることで、生徒が主体的に活動できるようにできるだけ一人で活動できる場面を多く設定した。ルールを守ってゲームを楽しむ活動では事前にルールを説明し、練習時間を設けることでスムーズにゲームに参加できるようにした。授業の終わりには頑張ったところなど感想を言えるよう活動の中で教師が称賛する場面を多くもった。発表の場面では、iPadやホワイトボードなどを使用し、生徒に応じた方法で発表ができるよう工夫した。

また、普段関わるのが少ない学級以外の教師との関わりをもつことができるようお客さん役の教師の設定をした。お店の店員側として、おもてなしをする際に自分の役割を果たし、友達と協力して何かをやり遂げる達成感、お客さんに喜んでもらえる満足感などを味わうことができるよう工夫した。



b 生徒への配慮

各係のマニュアルを用意し、マニュアルに沿って活動できるようにした。練習の際には、教師がお客さん役になり、ロールプレイを行い、係の仕事内容や流れを繰り返し確認し、活動が定着するようにした。景品渡し係には、魚の数が書かれたカードを見て、数字をマッチングして、かごから景品を選ぶことができるようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

この単元では各教科と合わせた指導を行ってきた。国語では適切な声の大きさ、聞き取りやすい話し方、丁寧な言葉遣いや態度、伝えたい出来事や思いを書くことなどを学習した。また、数学では、数を数えたり、比較するプリント学習を繰り返し行った。時間毎にスモールステップを踏むことで、少しずつ自信をもつことができ、声の大きさを意識し、丁寧な話し方ができるようになった。黒板に視覚的に分かりやすく釣った魚を掲示したことで、2つのものや3つのものを比較することができるようになった。それにより、生徒Fは釣れた魚の数によって景品を選んで、お客さんに渡すことができた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

時間毎の流れだけではなく、単元スケジュールを作って掲示しておく、もっと見通しをもって活動することができるのではないかと考える。また、よい手本を画像や動画で見せ、どこをどう改善すれば良いかを生徒自身が考えて判断できるようにする。

b 対話的な学びの視点から

生徒同士でお客さんと店員の役を練習する。互いを評価し合うことで、自分の振り返りにもつながると考える。また、やりとりの場面を動画で撮影し、振り返りの場面で自分の様子や友達の様子について意見を出し合い、互いに良かったところを認め合い、改善につなげる。

c 深い学びの視点から

係の仕事を生徒に投げかけてみる。やりたい係を選ぶことも大事だが、クラスの中で自分や友達の得意なことや苦手なことを知ったうえで、誰がどの係が適しているのかを考える機会をもつ。その後、出てきた意見を教師と話し合い、最終決定する。

(才) 新学習過程分析表を使ってみて

それぞれの活動が主体的な学び、対話的な学び、深い学びのどの要素に関連しているのかを把握することができた。また、参観者にとっても分かりやすかったのではないかと。昨年度の学習過程分析表よりは、簡潔で見やすくなったと感じる。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST3名
学部・学年・組	中学部1年	対象 生徒数	6人
日 時	令和2年7月28日(火) 2時間目(9:55~10:40)	場 所	中学部1年A教室
単元名	「フィッシングマスター〜釣り名人は教える名人〜」		
本時の目標	・自分の役割を果たすことができる。 ・発音や声の大きさや速さなどに気を付けて、丁寧な言葉遣いで話したり、説明したりすることができる。		
学習指導要領との関連	■中学部学習指導要領 ・国語科 1段階 A聞くこと・話すこと イ ウ ■小学部学習指導要領 ・国語科 2段階 A聞くこと・話すこと イ ウ 3段階 A聞くこと・話すこと イ ウ ・算数科 2段階 数と計算 イ・エ・オ ・生活科 2段階 オ 人とかかわり (ア)(イ) ■自立活動 3 人間関係の形成(1)～(4) 6 コミュニケーション(1)～(5)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 挨拶をする。	・正しい姿勢ができているか声掛けする。 ・前時の活動中の写真を見せながら、振り返りをする。 ・黒板に学習の流れを書き、説明する。 ・教師が読んだ後、一緒に声を合わせて読むようにする。 ・役割の確認をし、励ましの声掛けをする。 ・質問はないか問い掛ける。 ・生徒に応じた支援ツール(iPadや説明マニュアルなど)を使用し、声の大きさや速さなどに気を付けて、話したり、説明したりすることができるようにする。 ・それぞれの役割でできているところは褒め、意欲を高める。	
展開 30分	2 前時の振り返りと、本時の流れを確認する。		
	3 本時の目標を確認する。		
	4 ゲーム屋さんを開く。 それぞれの役割の位置に付く。		
	① 受付 ② ルール説明 ③ バケツ渡し ④ 竿受け取り ⑤ 魚の数を数える ⑥ 景品渡し		
	5 本時の振り返りをする。		
まとめ 10分	6 挨拶をする。	・授業の感想を発表するよう伝える。生徒に応じた発表の方法(iPadやホワイトボードなど)ができるようにする。 ・頑張ったところや様子を褒め、評価する。 ・正しい姿勢ができているか声掛けする。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 「4 ゲーム屋さんを開く」		・生徒それぞれの支援ツール（iPad や説明マニュアルなど）を使用しながら、発音や声の大きさや速さなどに気を付けて、丁寧な言葉遣いで話したり、説明したりすることができるようにする。	主－2 主－3
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒E	丁寧な言葉で、適切な大きさの声で、相手に伝わるようにゲームのルールを説明することができたか。	適度な声の大きさと相手の目を見ながら、丁寧に伝えることができた。生徒Dに習い、用紙を見ずに、伝えようとしていた。お客さんの質問にも自分の口で答えることができていた。	A
生徒F	カードに書かれている数字を見て、マッチングをして正確にお客さんに景品を渡すことができたか。	時間はかかったが、マッチングすることはできた。目の前のお客さんだけでなく、次のお客さんが視界に入ったからか、集中力が切れ、時間がかかった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
・生徒Aは、立場を置きかえて、自分たちが店員ということがあまり理解できていなかった。空想と現実の世界が曖昧で、常にルフィーの話をしているが、本時はまたいつも以上だった。 ・生徒Bは、教師と一緒に活動であった。あと何回で活動が終わるか見通しがもてず、いらつきが見られた。お客さんが何人来るのかを磁石などで提示し、見通しをもって活動できるような支援が必要であった。 ・生徒Cは、初対面の教師もあり、いつもの雰囲気と違ったため、大勢の中に入ることができなかったが、授業の終わり頃に戻ってきて廊下で、教師と一緒に「いらっしゃいませ」の呼び込みができた。 ・生徒D・生徒Eは、練習時間が十分でなかったため、不安もあったが、相手に話す、伝えることが期待以上にできていた。 ・生徒Fは、視界に入るものが気になり、集中力が途切れることが多かった。今後は視界に入らないような机の配置にするなど、支援が必要である。 ・生徒がお客さんを迎えるということをどのくらい理解できていたか、今後の授業に生かすためにも理解度を把握しておく必要がある。			
研究協議における意見・アドバイス			
・教室の入り口は開けておいた方がよかった。 ・「バケツ渡し」や「景品渡し」などの案内表示に青い画用紙を使用したため、文字が見にくかったので、使用する色を見やすい色にした方が良い。 ・お客さんに最初に景品があることをアナウンスしておけば、もっとお客さんの意欲につながったのではないかと？（〇個～〇個：景品A 〇個～〇個：景品B など） ・今回の活動をどのように将来の職業や日常生活に般化させていくのかを考えることも大切である。また、生徒に本物を見せ、体験させることも重要である。			

(1) 公開授業 3

ア 保健体育科 保健「手洗い・うがいしよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部1年A組は、男子4名、女子2名の計6名のクラスで構成されている。生徒の実態は、自閉症や自閉傾向の強い生徒、ダウン症、多動行動のある生徒等、その障害や特性は多様である。日常生活では身辺自立においても幅広い差が見られるが、衛生面については実態の程度に関わらず、どの生徒においても課題が見られるのが特徴である。特に、手洗い・うがいなどが定着しておらず、年度当初は、声掛けをしないと実行に移せない生徒がほとんどであり、時間をかけて隅々まで手洗いができていないことも衛生面の課題である。

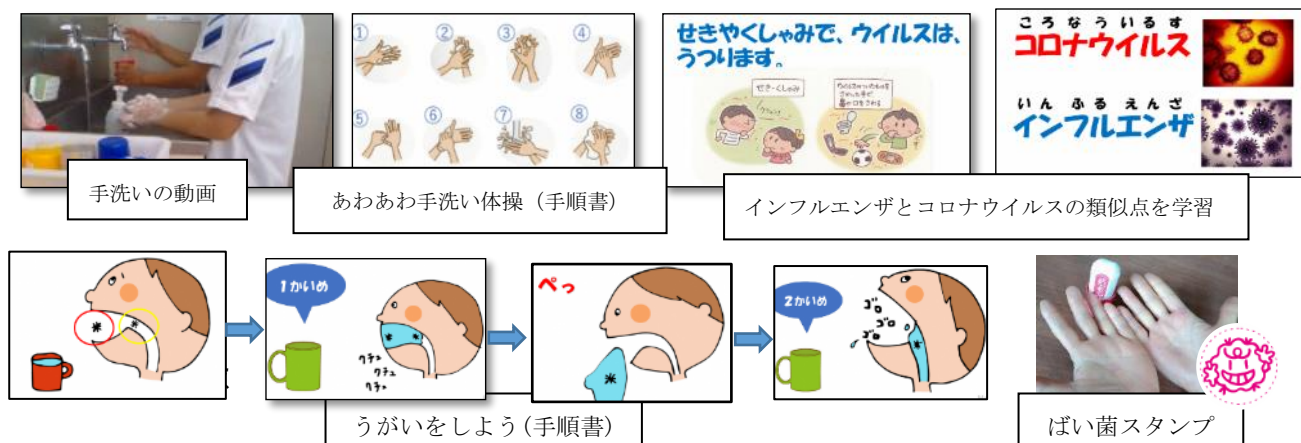
b つけたい力

昨年度から新型コロナウイルスが蔓延し、人との接触や飛沫の影響による感染リスクが高まる中、改めて、手洗い・うがい・マスク着用の重要性が言われるようになった。日常生活の中で手洗い・うがいを定着していくためには、「なぜ、手洗い、うがいが必要であるか」を知らせること、正しい手洗いやうがいの仕方について学習することを年間通して定期的に繰り返し学習することが大切である。中には、指と指の間に触れられることが非常に苦手であったり、うがいの際に、水を口に溜めることや吐き出すことができなかつたりする生徒もおり、技術的な習得を目指すためには段階を追った学習と代替となる方法も必要である。日常生活のどの場面においても手洗い・うがいが習慣化することを目指したい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

1学期から新型コロナウイルスとはどのような病気なのかその脅威を知らせるため、生徒たちがテレビ画面で毎日のように目にしているコロナウイルスの画像を見せることで、より現実的に捉えられるような工夫をした。前時では、手洗いの大切さを理解させるため、好きなアニメキャラクターの「手洗いをしよう」のYouTube動画を見せたり、生徒がよく知っている「あわあわ手洗い体操」を取り入れたりして、興味・関心を引き出すように工夫した。うがいには、「ぶくぶくうがい」と「がらがらうがい」があり、口腔内のウイルスを除去するためには、両方とも大切であることをイラストで示した。また、本時では、冬場に向けて流行の恐れがあるインフルエンザの症状との類似点等を分かりやすく伝えるようにした。昼休みに外から教室に戻ってきた時の手洗いやうがいの様子を事前に動画に撮っておき、日頃から丁寧な手洗いやうがいできているかを客観的に振り返れるようにした。また、「ばい菌スタンプ」を押して、すみずみまで洗うことや手と手を何度もこすり合わせて汚れを取ることができるようにした。



b 生徒への配慮

手洗い時間は 30 秒間を推奨しているが、子どもたちにとっては長すぎる時間設定であり、現実的に難しいと考え、20 秒間設定で、できるだけ手をこまめに動かして洗うことを目標にした。

うがいの練習では、上を向いて口を開け「あ〜」と発声する練習を行った。うがいができている生徒でも勢いよく水を吐き出してしまい周囲に水が飛び散ることがよくある。しっかりとうつむいてゆっくり吐き出す練習をするために、牛乳パック（ガーグルベースの代わり）に水を出す練習を行った。

洗面台の蛇口が 2 つしかないため、2 人ずつ手洗いの練習をした。その際、モニターでその様子を映し、手洗いをしていない他の生徒にはモニターを注目するように S T が声掛けを行った。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

本単元を通して、生徒たちは、新型コロナウイルス感染の恐ろしさとともに、インフルエンザとの症状が類似していることなどを大まかに知ることができた。毎朝、家庭や寄宿舎で検温していることの意味や、マスクの着用についても改めて理解できた生徒もいる。手洗い・うがいの定着も徐々に見られるようになり、声掛けがなくても自主的にできるようになってきている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

本時では、日常の手洗い動画を生徒に見せて、手洗い・うがいが丁寧にできているかを気付かせる場面を設定したが、時間が足りずに、生徒の自発的な言葉や気付きを引き出すことが十分にできなかった。時間配分への工夫が必要であった。日頃の自分の様子を客観的に見ることは「できている」「できていない」ことが明確になり、意識は高まりやすい。しかしその一方で、できないことに直視させられ嫌な気持ちになる生徒もいるので配慮も必要である。良かったところを褒め、課題をしっかりと伝えられるような M T の言葉掛けが大切である。

b 対話的な学びの視点から

手洗いの練習の様子をモニターで映し、生徒同士が上手に洗えているかを評価し合えるように工夫はしたが、主指導者が一方的に評価をして進めてしまったので、生徒同士が評価し合える時間設定をすることが課題である。また、友達のことを指摘するのではなく、良いところを認め合えるような他者評価になるような事前の声掛けが必要である。

c 深い学びの視点から

手洗い・うがいの習慣化を促すために、本単元は、定期的に繰り返しの学習を行い、定着を図ることが大切である。それと同時に、実生活の場面での定着を目指すためには家庭との連携が必要である。学校生活でできるようになったことを動画等で保護者に伝えるなどして、家庭や学校以外の場面でも習慣化していくことが今後の課題である。

うがいのできない生徒 F の場合、口の中に水を溜めておくことが難しいことが分かった。冷たい水の刺激も苦手である。まずは、ぶくぶくうがいができるようにするために、お茶やぬるま湯で口の中に水分を溜めることができるような練習をしていきたい。また、シャボン玉や笛等を使って、息を吐き出す練習にも取り組んでいきたい。月に 2 回程度、医療機関（S T）のリハビリを受けているので、保護者を介して関係機関とも連携し、情報共有していくことも大切である。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

学習指導略案の作成の際に、学習活動の中で特にねらいたいポイントや手立てを考える上でこの新学習過程分析表は一つの指標となったと思われる。旧学習過程分析表と比較すると、要点が分かりやすくポイントを絞ることができたと感じた。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	中学部1年A組	対象 児童生徒数	6人
日 時	令和2年10月19日(月) 1時間目(9:05～9:45)	場 所	中1教室
単元名	手洗い、うがいをしよう		
本時の目標	・丁寧な手洗いができる。 ・がらがらうがいの練習ができる。		
学習指導要領 との関連	■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 H保健 ア ■ 小学部学習指導要領 ・生活 1段階 ア 内容 ア 基本的生活習慣 2段階 ア 内容 ア 基本的生活習慣 ■ 自立活動 ・健康の保持(1) ・身体の動き(3)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 あいさつ 2 本時の目標の確認	・全員で読み上げて、本時のめあてを意識付ける。 ・新型コロナウイルスやインフルエンザの症状をイラストで分かりやすくする。 ・手洗いとうがいの様子を事前に録画しておき、自分の日常の様子を知らせる。 ・手洗いの前に、STは、生徒の手のひらや手の甲にばい菌スタンプを押して、汚れが分かりやすくする。 ・「あわあわ手洗い体操」の歌詞とイラストを洗面台に貼っておく。 ・20秒間で洗えるように、キッチンタイマーをセットして分かりやすくする。 ・STは、手洗いをしていない生徒がモニターに注目するように声掛けをする。 ・口を開けて上を向き、発声の練習をさせる。 ・水の入ったコップ、水を吐き出すカップを配る。 ・見本を見せ、分かりやすくする。 ・うがいの水を吐き出す際に、周囲に飛び散らないように気を付けるように声掛けをする。	
展開 30分	3 新型コロナウイルスやインフルエンザについて知る。 4 自分たちの手洗いやうがいの様子を動画で見る。 5 手洗いの練習をする。 ・ばい菌スタンプを押す。 ・洗面所で二人ずつ手洗いの練習をする。 ・20秒間、手洗いをする。 ・友達の手洗いの様子をモニターで見る。 6 がらがらうがいの練習をする。		
まとめ 3分	7 本時の振り返り		

	8 あいさつ	・新型コロナウイルスやインフルエンザに感染しないために、気を付けることを質問形式で確認する。
--	--------	--

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 5 手洗いの練習をする。		1 学期より取り組んできた「あわあわ手洗い体操」を覚えていて、一部分ではなく、手の甲や指の間、手首などが洗うことができているかを確認する。ばい菌スタンプを数か所押し、何度も手をこすり合わせるようにする。	主－2 対－1 ① 対－3 ①②
展開 6 がらがらうがいの練習をする。		まだうがいができない生徒もいるので、上を向いて「あー」と発声することで、のどの動かし方を練習したり、口に含んだ水をカップに吐き出せるようにしたりする。	主－1 ① 2 ② 対－1 ① 対－3 ①② 深－1 ②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 E	・インフルエンザに感染しないようにするために、気を付けることが理解できたか。	新型コロナウイルス感染症についてニュース等を通して大まか知っており、本時ではイラストや写真を用いることで、インフルエンザとの類似点を理解し、手洗い・うがい、マスクの着用の大切さをほぼ理解することができた。	A
生徒 F	・手洗いでは、手指の間が少しでも洗うことができたか。 ・うがいの水を少しでも吐き出すことができたか。	過敏により手指の間に触れることが非常に苦手であるため、ばい菌スタンプ等を利用して見たが、広げて洗うことは難しかった。また、うがいの水を口に含み留めておくことがまだできていなかった。	D
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者反省)			
手洗いの練習では、ばい菌スタンプを使ったことで、石けんで汚れを取ることの意識は高まったが、20 秒設定が短すぎたことが反省点である。生徒 F の実態把握が不十分であった。うがいの練習では、ガーグルベースの代わりに牛乳パックに水を吐き出すようにしたが、日常と違う行動に戸惑う生徒もいた。うがいが難しい生徒へのアプローチとして、口腔内を動かす体操や発声練習等にもっと時間を取れば良かったと感じた。月曜日の 1 校時に保健学習を行うことは、1 週間のスタートに意識付けを図るためには良い時間設定ではあるが、正味 35 分間の授業となり、時間が足りずに走り回りになってしまった。内容の絞り込み等、時間設定が反省点である。			
研究協議における意見・アドバイス			
・手洗いの練習は、なぜ、20 秒設定にしたのか、時間が短すぎたことのご指摘があった。 ・ばい菌スタンプは分かりやすく良かった。 ・日常の手洗い・うがいの様子を事前に動画に撮り、子どもたちに見せたことは、意識が高まり良かった。 ・うがいの際に、机に水をこぼした生徒もいたので、洗面器等を用意しておけばよかったのではないかな。			

(1) 公開授業 4

ア 性に関する教育「男の子と女の子」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部1年A組は、男子4名、女子2名の計6名のクラスである。生徒の実態としては、集中できる時間が短い、初めてのことに對して不安感がある、口頭だけの説明では理解することが難しい、発語がないといった様子が見られる。また、性の部分に関しての知識が幼く、クラスの大半が異性や同性の体に触れる、会話する時の距離が近いといった状況である。将来、高等部に進学したときに性について今のままの意識では不安な部分が多いため、男女の違いや接し方について学習していく必要がある。

b つけたい力

今回単元の目標として「男女の違いを知る」「友達との距離を考える」の二つを設定し取り組んだ。男子と女子の違いを人だけでなく虫や動物でも学習したり、生徒の学校生活の様子をビデオで撮って振り返りとして活用したりすることで、生徒の性教育への興味・関心を促した。その中で、異性の更衣室やトイレには行かない、異性はもとより同性とも適切な距離を保つといったことを考えることができる力を身に付けてもらいたい。

また、高等部へ進学したときに性に関するトラブルを起こさない、トラブルに巻き込まれないための知識を身に付けたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

授業の導入部分で「勉強する時のルール」を提示し、決まりを意識して授業に参加できるように工夫した(スライドA)。決まりとして①たくさん発表する、②座って聞く、③聞く時は静かにする、の3つをイラストで提示し、見通しをもたせた。

見通しをもって活動ができるようにパワーポイントを活用し、イラストや動画を使って授業の内容を視覚的に示した。難しい用語もイラストがあることによって理解を図ることができると考えた(スライドB)。また、展開の最初の場面で人間だけでなく、虫や動物の雄と雌の違いを取り入れ、生徒の性への興味・関心を促す工夫を行った(スライドC)。

また、意見を言いやすくするために写真や動画は生徒たちの生活場面の中で記録したものや身近にいる人の物を使い意見がたくさん出るように工夫を行った(スライドD)(スライドE)。

振り返りは、実態に合わせた問題を出題し一人ずつ答えてもらうクイズ形式で行った。○×問題や選択式の問題にして全員が振り返りに参加できるようにした。



スライドA



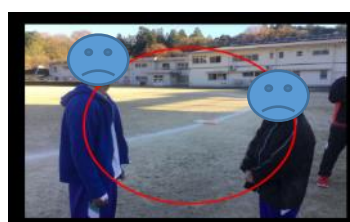
スライドB



スライドC



スライドD



スライドE

b 生徒への配慮

生徒が授業への見通しをもてるようにパワーポイントを活用し、こまめに授業の展開を提示するようにした。また、難しい単語や文章にはイラストや写真、動画を使いより分かりやすく提示した。

発表への意欲をもたせるために、発表者には好きな物カードを渡した。好きな物カードへ注目がいかないように、直接渡すのではなく生徒の見えない位置にかごを準備し、その中へ入れていくようにした。また、発語のない生徒には2つのイラストからSTと一緒に選んでもらうようにして、授業へ参加できるようにした。

生徒の性への興味関心を促すために、生徒の興味関心が強い虫や動物の雄雌についても授業の展開の中に取り入れ、人間の男女の違いにつなげやすくするための工夫を行った。

振り返りは、実態に合わせた問題を出題し一人ずつ答えてもらうクイズ形式で行った。発語がない生徒には2つのイラストから選んでもらうようにすることで活動に参加できるように工夫した。発表できる生徒には「わかりません」「知りません」といった回答が出ないように、イラストでヒントを示したり、マウスのクリックで1文字ずつ答えが出てきたりするといった工夫を行った。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

生徒たちに少しずつではあるが、異性や同性に近づきすぎないといった性に対する意識ができるようになってきた。また、生徒同士で「〇〇君近いと思う」といった声掛けや、「〇〇君と〇〇君がくっついてた」といった教師への報告ができ始めた。

発表に自信がなかった生徒が、好きな物カードがなくとも積極的に自分から手を挙げて発言することが増えてきた。発表を何度か繰り返していくことで、発表に対して自信がついてきたものだと思う。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

授業を展開していく中で、前時の授業の内容を忘れていることがあるので、導入で前時の振り返りにもう少し時間をかける必要があると考える。

学校だけでなく、寄宿舎や家庭とも連携して取り組んでいく必要があると考える。

b 対話的な学びの視点から

教師と生徒の一方的な授業となってしまうことが多かったので、グループに分けて生徒同士で意見の交換をする時間を設定したらよいと考える。また、自分の意見を考えて発表するだけでなく、紙に書いてまとめるといった活動にも取り組んでいく。

c 深い学びの視点から

性に関する教育に対する意識をより意識して学校生活できるように、性に関する具体的な部分(プライベートゾーンなど)について男子と女子で別々に授業を行い、より詳しく学習に取り組み、学校や家庭での生活に反映させていく。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点から今の活動内容がどの部分に当てはまるのかということが、すぐ確認することができるので使ってみてとてもよかった。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健体育（保健）	授業者	MT ST 3名
学部・学年・組	中学部1年A組	対象 児童生徒数	6人
日時	令和2年12月23日（水） 5時間目（13：30～14：15）	場所	中1A教室
単元名	性教育「男の子と女の子」		
本時の目標	・男の子と女の子の違いを知ることができる。 ・男女や友達との距離感を考えることができる。		
学習指導要領との関連	○小学部学習指導要領 ・体育科 G保健 3段階（ア） ○中学部学習指導要領 ・保健体育科 H保健 1段階（ア）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 挨拶をする。 2 本時の学習内容、目標の確認をする。 3 授業の中でのルールを確認をする。	・日直が号令をかける。 ・パワーポイント、ホワイトボードを活用する。 ・イラストを使って確認する。	
展開 35分	4 男の子と女の子の違いはなんだろう？ ・人、虫、動物は男（オス）と女（メス）に分かれている。 ・男の子と女の子で違うところを探してみよう。 ・プライベートゾーンってなんだろう。 5 友達との距離は大丈夫？ ・自分たちの様子をビデオを見て、意見を言い合おう。 6 チャレンジクイズ ・こんなお兄さんはどうだろう？	・興味関心を促すため、人だけでなく虫や動物のイラストを使う。 ・違うところを探すときは時間設定をし、間延びしないようにする。 ・普段の様子のビデオを見せることで、意見を言いやすくする。 ・身近にいる高校生の写真を活用することでクイズへの興味・関心につなげ、発言を促す。	
まとめ 5分	7 振り返り ・振り返りクイズ 8 終わりの挨拶をする。	・発表者が固定されないように発表者は教師が指定する。 ・日直が号令をかける。	

注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
展開 (4) 男の子と女の子の違いは何だろう？	・興味・関心を促すために人間のことだけでなく、虫や動物のことについてもふれるようにした。 ・発表者には回数ごとに好きな物カードを渡し、発表への意欲を向上するように図った。	主－1 ② 対－1 ① 3 ②	
展開 (5) 友達との距離は大丈夫？	・普段の様子をビデオを見て振り返ることで、できているのかを身近に感じることができるようにした。 ・対話的な学習ができるように友達の様子について意見を言う時間を設定した。	主－1 ② 2 ① 対－3 ③ 5 ①	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	教師の発問に対して自分の意見を発表することができる。	補助者と一緒に考え、意見を発表することができた。ただし、質問に対して関係のない答えを言ってしまう場面もあったので、考えて答えるように声掛けが必要であった。	B
生徒C	補助者と一緒に授業やクイズに参加することができる。	教師の質問に対して補助者と一緒に答えたり、2択の質問に対しては正しい答えを自分で選んで選択したりすることができた。	A
【評価基準】A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
今回「男の子と女の子」をテーマとし、男子と女子の違いやプライベートゾーンのことについて授業を展開できたことは良い経験となった。今年度の中学部1年生は性の部分に関して非常に幼く、学校生活の中で性別問わず相手に触る、抱き着くといった行動が見られていた。そういった様子がある中で今回実際に普段の様子を、ビデオを見て振り返り、友達との距離感について全員で考えることができたことは良かったと思う。ただし、伝えたいことを授業の中に盛り込みすぎたことで教師主体の授業となってしまう、生徒が考える時間が少なかったことが反省点だったと思う。今後は生徒が考える時間を設定していきたいと思う。			
研究協議における意見・アドバイス			
・パワーポイントで使用した画像が著作権に引っかかる可能性があるため注意が必要である。 ・発表回数を数えるイラストカードを生徒が見えるところに掲示してはどうか。 ・男女の導入場面で人だけでなく、虫や動物の事例から入ったのはよかった。 ・友達との接し方についての場面でウイルスについてもふれたのはよかった。			

(1) 公開授業 5

ア 保健体育：「体づくり運動」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象となる生徒は中学部の1～3年生の27名（男子15名、女子12名）である。主な障害種は知的障害であるが、自閉症やADHDの他、肢体不自由を併せ有する生徒も含まれている。また、いずれの生徒も口頭指示だけでは活動内容の詳細を理解することは難しく、学習内容を説明する際は絵カード等での支援や、手本となる動きを見せることなどが必須となっている。

運動の視点で見ると、多くの生徒が大まかに手本の動きを捉え、音楽に合わせて体を動かすことはできているものの、考えながら体を動かすことや求められている動作を正しく表現することに課題を抱えていると感じる場面が多い。また、運動の基礎となるウォーキングやランニング等の基本動作が正しく身に付いていない生徒が大半で、日常生活においてかかとを擦りながら歩く生徒が多いのも本校中学部の特徴であると言える。このほか、学習への取り組み姿勢は前向きな生徒が多い反面、気をつけの姿勢や話を聞く際の態度などの学習規律を定着させるための継続的な取組が必要となっている。

b つけたい力

本時はラジオ体操を中心に取り組むこととし、年度当初から取り組んできたこの体操を通して、体の動かし方のこつや意識すべきポイントについて学習を重ねながら、動作のイメージを実際の動きで表現できるようにしていきたいと考えた。また、準備運動の必要性にも触れながら、効率よく体をほぐしたり、メインの運動に必要な体の動きを引き出したりできるようにしていきたいと考えた。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

学習内容をボードに掲示し簡潔に説明を行うことにより、見通しをもって学習に参加できるようにした。ラジオ体操の練習では一部の種目を取り出して、一つの動作を細分化して練習するとともに、生徒が自分でカウントを取りながら行うことでリズムと動作を関連付けて覚えられるようにした。また、腕を振り上げる高さや軌道についても細かく意識できるような配慮を心掛けて取り組んだ。

b 生徒への配慮

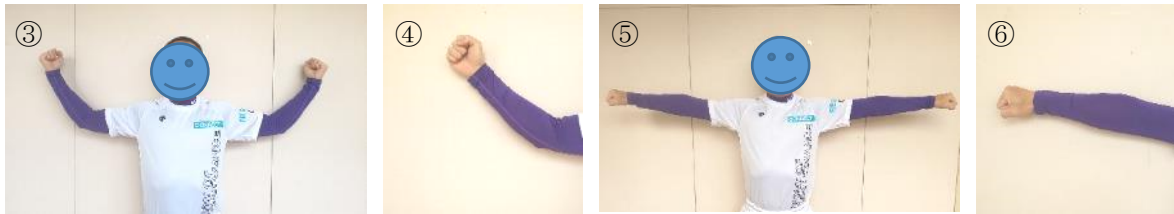
ステージ上で動きを見せるようにしながら、カウントと動作の関連付け（写真①及び②）を意識できるようにした。また、肘を伸ばししやすい手首の角度（写真③～⑥参照）や軌道について説明を行ったりした。



左の写真はそれぞれ、①がカウント1及び5、②がカウント2及び6における正しい腕の位置である。年度当初からカウントに合わせた動きを意識するように指導してきたが、本授業実施時においてもカウント1で腕が写真②の位置まで上がっていたり、カウント2の時点で腕が体の横まできたりしている生徒が多く見られていた。

「のびの運動」におけるカウントと動作

指導する際は、背筋を伸ばして体を伸ばすことや、引き上げた手を横方向に広げ下げていきながら音を立てずに体側に沿わせることを意識できるようにするために、必要に応じて体を横に向け、動作の始点と終点における腕のポジション及びそこに至る軌道について、模範となる動作を見せたり、音を立てた場合とそうでない場合について、ややオーバーな動作と音を用いて説明を行ったりした。また、体育館の両サイドに位置し正面から教師を見ることができない生徒からも見やすくするために、「斜め」の角度を意識的に取り入れるようにして説明を行った。



「腕を振ってあしをまげのばす運動」における誤った動作（③、④）と正しい動作（⑤、⑥）

写真③のように、手のひらが正面を向いた状態で腕を振り上げると、肘が曲がりやすくなってしまふ。一方、右の写真では、手首をねじって手のひらを下に向けることで、肘を曲げようとするとき窮屈になり、自然に肘が曲がりにくい状況を作り出すことができる。

生徒によっては手の平の向きを意識的に変えることが難しかったため、S Tが補助に入ったり近くで手首をねじる動作を見せたりしながら動きのサポートを行った。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

ラジオ体操における自分自身の動きを気にすることがなかった生徒が、自発的に横を向いて上げた腕の高さを確認したり、肘の角度を気にしたりする様子が見られ始めた。また、手本の動きに注目できる生徒が増え、膝の屈伸や体を倒す方向など、指示をしていない部分の動きにも変化が見られるようになった。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

この一年間を振り返り、生徒が興味・関心のある内容を授業に反映することがあまりできていなかったと感じている。原因としては、教師側の投げかけや誘導が十分でなかったことに加え、運動経験の不足により生徒の興味・関心の幅が狭く、意見が出にくい背景があったのではないかと考えている。一方で、当然ながら体育の授業において身に付けてもらいたい内容があり、生徒の関心の高い内容ばかりを取り入れることは難しく、どのようにしてその二点をマッチングさせるのかといった課題が残ったが、今まで経験したことのない内容を計画的に取り入れることによって、生徒に新たな発見や関心の広がり生まれるのではないかというヒントを得ることができた。

身に付けてもらいたい内容は、運動会期間などの一定期間に集中した取組ではなく、授業のたびに短時間で設定した方が見通しをもって取り組むことができるようになり、より身に付きやすくなるのではないかと考えた。また、教師側の説明に用いる文言や指導のこつなどについて体育教師同士の意見交換を活発に行っていく必要性も感じた。

b 対話的な学びの視点から

一方的にラジオ体操を練習させる取組みとなっていたため、クラスや学年ごとに披露し、お互いに評価し合うような学習を取り入れる。また、動画を撮影し確認させることで、客観的に自分の動きに気付いて改善することにつながり、定期的に撮影することによって各々の変化が分かりやすくなると考えた。

c 深い学びの視点から

体操に限らず、上手にできている生徒をピックアップしリーダー的な役割を与えて、気を付けるポイントを友達に対してアドバイスする場面や、自分が意識していることなどを発表する場を設定することにより、その生徒がより深く体の動かし方を理解したり自身の動きを高めようとするのではないかと考えた。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

授業実践の前は、分析表の文面をそのまま読み取って授業案に反映する方法を取っていたが、この集録作成を含む授業後の振り返りを行う中で、どのように解釈すれば良いのかを考えるようになり今後の授業改善の参考にすることができた。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科 学習指導略案

教科・領域名	保健体育 体づくり運動	授業者	MT ST 12名
学部・学年・組	中学部1～3年	対象 生徒数	27人
日時	令和2年10月13日(火) 3校時(10:50～:11:20)	場所	体育館
単元名	運動会練習(オリエンテーション・ラジオ体操)		
本時の目標	・運動会の内容についておおまかに理解する。 ・各動作の正しい動きを意識して取り組む。		
学習指導要領との関連	中学部 学習指導要領 ・保健体育科 1段階 A 体づくり運動 ア 小学部 学習指導要領 ・体育 1段階 A 体づくり運動遊び ア ・体育 2段階 A 体づくり運動 ア ・体育 3段階 A 体づくり運動 ア		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 3分	1 整列、挨拶。 2 本時の学習内容、学習の流れを確認する	・開閉会式の隊形で整列。 ・ホワイトボードに学習内容・目標・流れを示し、簡潔に説明をする。	
展開 25分	3 運動会についての説明を聞く。 ・日時、競技内容、係、練習計画等 4 ラジオ体操の動作の確認、練習をする。 ①伸びの運動 & ③深呼吸 ②腕を振って足を曲げ伸ばす運動 ③腕をまわす運動 ④胸をそらす運動 ⑤体を横に曲げる運動 ⑥体を前後に曲げる運動	・パワーポイントによる説明5分程度。 ・前半の体操を中心に7種目を取り出して実施する。 ・腕が頭上にくるカウント ・手の握り方と振り上げる高さ ・腕が頭上を通過する際の動作 ・上半身の動かし方 ・上半身の倒し方 ・4及び8カウントでの姿勢、及び腰への手の添え方	
まとめ 2分	5 ラジオ体操(通し) ※音源あり ・体操係の2名はステージへ 6 振り返り、挨拶。	・ST(○T)は体育係の対面で体操を行う。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4 動作の確認、練習		カウントに合わせた動作を意識できるようにするため、音源に頼ることなく各自がカウントを取りながら一つ一つの動作を行う。	主－１－② 対－３－①、②、④
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒N	声に出してカウントを取り、それに合わせた動きができたか。	自発的に発声をしながら動作を行うことは難しく、発声を促されると動作がおろそかになった。	D
生徒S	各動作の合間に必要な「きをつけ」の姿勢に戻ることができたか。 肘関節の角度を意識して動作を変容させることができたか。	各動作の開始と終了時に「きをつけ」の姿勢を取ることができていたが、動作の合間にその姿勢に戻ることが難しく、カウントと動作の関連付けができていないようであった。 肘の角度については大きな変容は見られなかったが、意識的に腕を上げる高さをコントロールしている様子が見られた。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・日ごろから「考えながら体を動かす」ことができていないため、自分の体がどのように動いているのか理解できていないと感じた。⇒ 動かし方のこつをレクチャーする。 ・体操の様子をビデオ撮りして見せるなど、客観的に自分の動きを知ることができるようにすることが必要であった。 ・コロナ渦において、各自の発声によってカウントを取らせることは不適切であったかもしれない。			
研究協議における意見・アドバイス			
・教師が前で動作を見せることも大切であるが、映像を用いることでより注目できる生徒もいる。また、<u>対面よりも生徒と同じ方向を向いて教師が動く</u>ことで、模倣しやすく感じる生徒もいるのではないかと。どの方法を用いるかについてよく検討すること。 ・リズムに合わせて正しい動きをすることや、仲間と動きをそろえることも体育の授業において身に付けてもらいたい力の一つである。動きをそろえるために意識すべきポイントについて、もっと分かりやすい説明の仕方がないか考えていく必要がある。 ・授業の始まりと終わりの挨拶など、授業規律の更なる定着に向けて継続して取り組んでもらいたい。 ・掲示物をのけながら説明をする場面が気になった。説明をする場合は生徒に向かって行うことを意識するとより理解が深まるのではないかと。 ・<u>準備運動の必要性</u>について生徒が理解できているか。種目に応じた準備運動が、けがの防止につながることを理解できるように指導・支援をしていく必要がある。 ・STが正しい動きで行えるように、教師に対して事前レクチャーが必要なのではないか。まずは体育教師を校内で集めて動きを確認するなどの取組を行ってほしい。			

(1) 公開授業 6

ア 国語科：「おとうとねずみチロ」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部2年は、3学級14名（男子7名、女子7名）の生徒で構成されている。教科体制は、3グループに分かれている。

本単元は2グループの生徒6名（男子3名、女子3名）を対象とする。6名はクラスが違うが、昨年度と同じメンバーである。そのため、学習の雰囲気がとても良く、教え合いや助け合いができている。学習の流れも分かっており見通しをもって学習ができている。教師の問い掛けに独り言のように意見を言う生徒や、発言したいがなかなか声に出すことができない生徒、発表時に声が小さかったり、大きすぎたり、言葉をはっきりと言えないなど、声に出して話をするのが苦手な生徒もいる。

音読は、小学1年生程度の漢字交じりや平仮名のみの物語が音読できるが、文字を目で追うことが苦手である。

b つけたい力

本単元は、6名の発達段階に合った内容の物語である。文字を指と目で追うことができ、声に出して音読ができ、物語にどんなことが書いてあるか考えることができる。また、友達の意見に対して自分の意見を伝えることができるようになってほしいと考えて設定した。

音読では、書いてある内容がイメージしやすい物語に取り組み、文章を読むことに抵抗をなくし自然に声を出しながら、文字を指や目で追い、すらすらと読めるようになる力を付ける。

文章読解では、同じ段落を個人＋全員で7回読むことで、どんなことが書いてあるのか考え、その場面をイメージできるようになることや、分からない時に再度文章を読み返すことができるようになってほしい。

この学習を通して、授業以外でも聞こえる声で話をすることや物事を考えることができる力を付けたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

音読に意欲的に取り組むために、順番を自分たちで決めることができるように毎回名前カードを掲示した。立って音読をしたり、前に出て発表したりする動きのある学習内容にした。音読時に指で文字を追うことができるように手本を示した。また、ゆっくり・はっきりと読む手本も行った。

友達の発表を静かに待つことや、教師の問い掛けに挙手して意見を述べるができるように声掛けを行った。

b 生徒への配慮

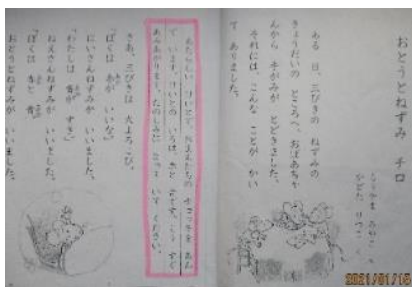
学習の見通しがもてるように、内容と目標を黒板に掲示したり板書しながら説明をした。また、文字の大きさやチョークの色も工夫した。

タイムタイマーを活用して、頑張る時間を提示した。

机の向きを少し半円向きにして、6名が前に注目できるようにした（廊下や外の人や物の動きが気になることを少しでも軽減するため）。

個々に合った声掛けや支援をした。答えが分かっているが声に出せない時は、指さしの声掛けや、プリントでは、□の枠の数を変えた（写真①）。また、注目すべき箇所にはマーカーで印を付けた（写真②③）。

意見を発表する時の待つ時間を考えた。待ち過ぎると発言しにくくなったり、他の生徒が時間を持て余して集中力が途切れてしまったりするため判断を早くした。



写真① 本時の内容



写真② 問題用紙①



写真③ 問題用紙②

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

音読することが苦手な生徒ばかりであったが、音読学習を繰り返し取り組むことで、拾い読みではなく、すらすらと、音読ができるようになった。声の大きさや音読の速さも意識して取組めるようになった。特に全員での音読では、友達の声聞きながら、自分の声の大きさを調整したり、読む速さを合わそうとしたりすることができた。

文章読解では、段落ごとの問題に対しては、自分の意見を自信をもって発表することができるようになった。友達の意見と違っている時は、もう一度考えてみようとする様子が見られだした。また、意見を述べる時のルール（挙手をして、指名されてから）を守ることもできた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

授業の流れを板書や掲示して、見通しをもって学習に参加するために、学習の主となる目標の項目には、注目できるように印を付けたり、文字を大きく書いたりする。

座ってだけの学習ではなく、前に出て発表したり黒板に回答を書いたり、カードを貼ったり、動く活動を取り入れていく。

b 対話的な学びの視点から

友達の意見に対して、「そうです。」「違います。」とはっきり自分の意見を伝えることができるようにしていく場面を設定する。

意見が出にくい生徒は、個別に二者択一方式（声に出して答えるか指さしで答える）で選ぶようにする。

c 深い学びの視点から

文章読解では、設問に対して分からない時は、文章を繰り返し読んで「自分で考えてみる」時間を設定する。

また、音読で付いた力（声の大きさ、言葉をはっきりとゆっくり）を、日常生活の中で生かしていけるようにする。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

「主体的な学び」の学習活動への環境や場面設定（机の向きや絵・文字カード）、見通しがもてる支援（学習の流れの板書やカードの掲示）、「深い学び」の学んだこと（授業中の約束事や書く・聞く・話すこと）を日々の学習活動に関連づけることを考える手立てとなった。

(カ) 実践例

令和2年度 国語科学習指導略案

教科・領域名	国語	授業者	MT
学部・学年・組	中学部 2年 2グループ	対象児童生徒数	6人
日 時	令和2年11月24日(火) 2時間目(9:55~10:35)	場 所	中学部 2B教室
単元名	おとうとねずみチロ		
本時の目標	・周囲の人に聞こえる声で音読することができる。 ・どんなことが書いてあるか考えることができる。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・国語科 1段階 A聞くこと・話すこと ア、イ C読むこと ア、イ、エ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 3分	1 始めの挨拶をする。	・全員が姿勢を整えるように声掛けをする。 ・授業の流れを黒板に板書・掲示する。 ・授業の流れと共に確認する。 ・一番目に言う生徒を指名する。二番以降は「〇〇さんの次は誰ですか」と問い掛ける。返事だけではなく、自分の名前で教師に知らせるように伝える。(名前をはっきりと伝えられた生徒から名札を掲示していく。 ・教師は順番の名札を生徒の早口言葉の速さに合わせて指していく。 ・全員が目標達成をしたことを◎を黒板に付けて知らせる。 ・教科書を、名前を呼びながら配る。返事が聞こえない時は、配らずに最後に再度呼ぶ。 ・一番に音読する生徒を指名する。二番以降は「〇〇さんの次読みたい人」と聞き、自分の名前をはっきりと伝えられた生徒から名札を掲示していく。 ・読む・聞く姿勢(立てり教科書をしっかりと持って読む。文字を指と目で追う。)ができていない生徒には、お手本を示す。 ・全員での音読は、声の大きさや速さに気を付けるように声掛けをする。 ・教師がみんなで音読した内容を絵カードや文字を活用して、内容を掲示する。 ・問題の答えが分かったら、静かに挙手し合図をするように声掛けをする。(挙手できないいない生徒のそばに行き、一緒に考える。) ・物語の内容が分かったか確認する。 ・全員が姿勢を整えるように声掛けをする。	
展開 30分	2 本時の学習内容と目標知る。 「おとうとねずみチロ」		
	3 口の体操「早口言葉：生麦・生米・生卵」 ・順番を決める ・順番の確認をする。 ・掲示された順番で、3回早口言葉を言う。		
まとめ 2分	4 音読をする。 ・順番を決める。 ・順番の確認をする。 ・掲示された順番で、音読をする。 (音読が終了した後、全員で声をそろえて音読をする。)		
	5 物語の内容を読み取る。 ・物語の内容を思い出す。 ・問題を考える。(3問)		
	6 本時の時の振り返り 7 終わりの挨拶をする。		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4 音読をする。		・文字を目で追いながら、ゆっくり、はっきりと周囲の人の聞こえる声で読む。 ・聞く時も文字を指と目で追いながら聞く。	主－1 ③ 主－3 対－3 ①②
展開 5 文章の内容を読み取る。		・質問に対して、すぐに答えを言う生徒がいるため、答えが分かったら静かに挙手をして合図するようにしている。 ・友達の答えに対して、「そうです。」「違います。」と言う意見が言えるようにしている。	対－2 ② 深－2 ①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 A	・言葉をはっきりと周囲の人に聞こえる声で音読ができる。	言葉をゆっくり、はっきりと音読することができた。読む速さも良く、周囲の人に聞こえる声で音読することができた。	A
生徒 B	・質問の答えが分かると挙手をして合図をすることができる。	(欠席)	－
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・三連休明けであり、生徒の状態を把握できない状況での授業であったが、1 学期からの学習に対する積み重ねができていたため、いつもと変わらない状態で授業を進めることができた。 ・周囲に気を取られずに授業に集中できるようにするために、声に強弱をつけたり、リズム感を取り入れた口の体操や順番決めをしたりして、楽しく学ぶことができた。 ・立って音読したり、前に出てきて発表したりする動きのある学習内容を取り入れることで、順番を意識したり返事をしたりすることができた。 ・生徒が独り言のように意見を言った時の対応に困ることがあった。これに対しては、授業が脱線しないように上手に取り入れながらでき良かったと思う。 ・「見る・聞く・話す」を意識させる授業ができ始めている。			
研究協議における意見・アドバイス			
・生徒たちが、学習に対して意欲的に楽しく取り組めていて良い。 ・展開 5 での内容を思い出す学習をせず、そのまま問題にするとよい。(答えが出ない時にヒントを出す。) ・問題用紙の工夫では、答えと類似した言葉から正しいものを選択できるようにする。(しっかりと読み取れているか確認ができる。) また、記入文字を□の数で漢字か平仮名か分かる。 ・文字のカードと同時に絵カードを掲示すると生徒たちにより答えが分かりやすいと思う。 ・板書の時、わざと文字を間違えてみる。(板書している文字をしっかりと見ているか分かる。) ・音読では、文字を指と目で追うことは、読み飛ばしがなくなるのでとても良い。文章の途中で交代することもやってみるとよい。(楽しく読みながらゲーム的な要素を取り入れる。いつ順番がくるか分からないので、集中力が付く。) 全員での音読は、友達の声を聞きながら自分の声の大きさや速さを調整する力が付くので良い。(声の大きさを伝える方法として、「ボリュームをもう少し上げて」と動作を交えて伝える。) ・授業を通して、仲間を意識した関りができ、思いやる心を育てることができる。			

(1) 公開授業 7

ア 美術「にじいろの海のいきもの～②切って貼って魚をつくろう～」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部2年生は、男子7名、女子7名の計14名である。導入である程度内容を理解し活動を進めていける生徒、個別の指示があることで見通しをもち活動できる生徒など、実態や支援の内容に幅がある。そのため、導入で動画や実演を見せたり、イラストや写真が中心の板書を提示したりしながら、制作工程を視覚的に伝えることが重要である。

お手本と同じ作品を作ることは積極的に活動を進めていくことができるが、発想したことを具体的な形として表現したり、工夫したりすることに抵抗を感じる生徒が多い。自分のイメージや発想したことを表現したり、自分や友達の作品から感じ取ったよさや美しさ、面白さを言葉にできたりすることが課題である。

b つけたい力

本題材では、イメージを表現しやすいよう生徒が親しみをもちやすい「海のいきもの」がテーマの共同作品を制作する。昨年度は二作品の共同制作をしているため、同じ流れで行うことで見通しをもち活動ができると考えられる。個々が様々な色や模様を施した和紙と、二学期に制作した回転版画を材料として海のいきものを制作する。回転版画は、事前に教師が作品を撮影し、様々な大きさの楕円型に加工印刷したものを使用する。いきものの本体（ひれ以外）として楕円型に沿ってはさみで切った回転版画に、三角形などに切った和紙をひれに見立ててのり付けする。ひれと本体を並べたり組み合わせたりして、形や色を考えたり工夫したりして制作することを目標とする。1匹完成するごとに、黒板に設置した海の中を描いた大きな和紙に貼っていくことで、いきものがどんどん増えていく過程をみんなで楽しみ、創造活動の喜びを味わえるようにしていく。鑑賞では、形や色彩に着目し共感的なコミュニケーションを通して、よさや美しさを感じる心を育み、生活の中で形や色彩などと豊かに関わられることを目指していく。

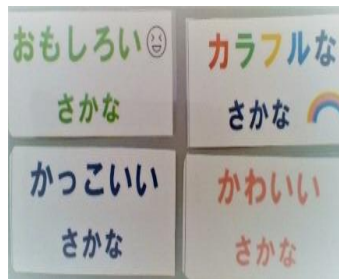
(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

導入で海の中の映像や実演を提示することで、見通しをもって活動できるようにする。また、様々な海の生物の画像を提示することで、制作のヒントにできるようにする。導入で、ひれの形が三角形や四角形であることに着目させ、抵抗なく取り組めるようにする。ひれの色や模様、貼る位置によって一つ一つ違った印象のいきものができることに、比較し気付くことができるような声掛けを行っていくことで、自分の表現が「できた」という達成感を感じる場面を設定していく。鑑賞では、良さや面白さなどに気付くよう促していく。また、MTが講評するだけでなく、STにも良かった点などを発表してもらうことで、MTが気付かなかった生徒の頑張りを称賛できるようにし、達成感や自信につなげていけるようにする。



① 制作の様子



② 心情の言葉カード



③ 制作の様子

b 生徒への配慮

曲線を切ることが難しい生徒には、多角形の回転版画を用意し、直線切りの制作をする。工夫を凝らすことが期待できる生徒に対しては、ひれの切れ込みなどにも意識してはさみを入れると良いことに気付くようにはたらきかけるなど、自分なりの表現を発揮できるようにした。また、表現の工夫を促すため、心情の言葉(かっこいい魚、不思議な魚など)カードを ST に活用してもらった(前ページ画像②)。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

繰り返し何匹も制作する過程で見通しをもつことができ、一人で活動を進めることができたり、少ない支援で制作したりする姿が多く見られた。好きな素材を選び、ひれの形や配置を考えながら制作していた。大判和紙に貼る場面では、大きい魚と小さい魚を親子で泳いでいるように貼るなどの工夫が見られた。近くの友達や教師と作品を見ながら会話したりして楽しそうであった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

支援度が高い生徒(3名)にとっては、本体とひれを切り、貼り合わせる工程が難しかった。あらかじめいろいろな形の本体とひれを準備しておき、貼り合わせて完成させることができるようにする。ST と連携し個別の支援を充実させていくことで、全員が主体的に活動していくことができる。

b 対話的な学びの視点から

制作の途中で、面白い表現をしている生徒の作品を紹介することで、友達の作品を参考にできる場面設定をする。鑑賞の時間を十分に確保し、班で一人一人が感想を述べたり質問し合ったりするなど、思考する場面を作る。鑑賞活動を毎週行うことで、自信をもって発言できるようにしていく。生徒が発した言葉に対して、教師は肯定的な言葉で次の発言を促していく。発言できたら称賛し、鑑賞を楽しむことに重きを置いて取り組んでいく。

c 深い学びの視点から

本題材は工程や材料が多く、今まで取り組んできた中でも難しい題材であった。一匹目の制作は支援を必要としたが、何匹も制作していく中でほとんどの生徒が見通しをもち一人で制作を進めたり、ひれの形を工夫したり、ひれを並べたり組み合わせたりして創意工夫していた。視覚支援などの様々な支援を増やし過ぎるのは、生徒が思考する場面を奪ってしまうことにもなり兼ねないので、支援具などの取捨選択をしっかりと吟味していく。芸術は感性を豊かに育てる情操教育である。個人目標を評価するだけでなく、感性に関する評価も行っていきたい。ただ、感性に関しては一回の授業だけで見取れるものではない。よって、2学期は題材ごとに ST にエピソード記録(※)を書いてもらった。生徒の内面の成長や変化を少しでも知ることができたのはよかった。エピソード記録を書くことは ST にとって負担であるため、今後は回数を減らすなどの工夫が必要である。

※子どもの成長を「できる、できない」といった目に見える事実で捉えるのではなく、教師の主観的眼差しを通して、教師自身が感じ取ったこと(感動した、試行錯誤していた、退屈していた、楽しんでいた、など)を書く。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

新学習過程分析表を用いることで、本題材を通して何をどのように学ばせたいのか、整理することができた。

(力) 実践例

令和2年度 美術科学習指導略案

教科・領域名	美術	授業者	MT ST 5名
学部・学年・組	中学部2年	対象 児童生徒数	14人
日時	令和2年11月13日(金) 3, 4時間目(10:50~12:15)	場所	美術室
単元名	にじいろの海のいきもの ～②切って貼って魚をつくろう～		
本時の目標	・パーツを選び、形に沿ってなぞったり、切ったり、自分で考えて貼ったりすることができる。 ・海のいきものの写真を見たり、切ったパーツを並べたり組み合わせたりしながら、いろいろな形のいきものを制作することができる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・図画工作科 3段階 A表現 B鑑賞 ■中学部学習指導要領 ・美術科 1段階 A表現 B鑑賞		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 10分	日直が挨拶を行う。 1 題材の説明を聞く。 2 本時の制作内容の動画を見る。 3 本時の目標を確認する。 ・せかいに1つのさかなをつくろう！	・魚によっていろいろなひれの形があり、大体が三角形であることに気付くような問いかけをする。	
展開 60分	4 制作 ① 自分のテーブルに置いてある回転版画(印刷物)の中から好きなものを選び、形に沿って切る。(本体作り) ② 自分のテーブルにあるひれ用和紙と三角形の型を選ぶ。 ③ 和紙に鉛筆で型取りし、その線に沿って切る。(ひれ作り) ④ 本体とパーツを自分のイメージする魚の形になるように貼り合わせる。 ⑤ 貼り合わせたものを黒板の大きな海の和紙に貼りに行く。 ⑥ ①～⑤を繰り返し、海のいきものを時間一杯作る。	・教室後方にいろいろな魚の写真を吊るしておき、必要な生徒は自由にとって参考にするよう伝える。 ・かごにいろいろな大きさや色合いの回転版画印刷物を用意する。	
まとめ 15分	5 片付け・掃除(班で分担して行う) ・材料・用具を返却する。・切りくずを捨てる。 ・ほうきで床をはく。・テーブルを拭く。 6 鑑賞 ・作品を見ながら振り返る。 ・次回の内容を聞く。 終わりの挨拶を行う。	・前テーブルでのり付けするよう伝える。 ・途中で、全体に対して参考にしてほしい友達の作品を紹介する場面を作る。 ・STは生徒が困っているようであれば、班で分担して行えるよう促す。 ・班ごとのMVPをSTに発表してもらう。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開「4 制作 ④本体とパーツを自分のイメージする魚の形になるように貼り合わせる。」		海のいきものの写真を見たり、切ったパーツを並べたり組み合わせたりしながら、自分が表したいことを見つけ、いろいろな形のいきものを制作することができるか。	主－1－②、3、4 対－3－①③
まとめ「6 鑑賞・作品を見ながら振り返る」		・工夫されている作品等をピックアップし、作者に問いかけを行ったりしながら感想を引き出す。 ・各テーブルの ST にも講評を行ってもらう。	対－5－①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 D	・選んだパーツを形に沿ってなぞり、切り、自分で決めた位置に貼ることができたか。 ・写真を参考にしたり自分で考えたりしながらパーツを配置することができたか。	掲示してある様々な種類の魚の写真から好きなものを選び、写真を参考にしながらひれの形を描いて切ることができた。胴体に貼る場面では、尾びれや背びれ、腹びれをどこに貼ったらいいかいろいろな場所に配置し、自分で決めた位置に丁寧に貼ることができた。	A
生徒 L	・選んだパーツを、線の辺りを直線で切り、ひれを好きな場所に貼ることができたか。	ひれのパーツを自分で選び、教師が描いた下書きの線をなぞり、その線の辺りを切ることができた。ひれを貼る場所はなかなか自分で決めることができず、ある程度教師の誘導が必要であった。教師が指差した場所に貼ることができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
生徒がイメージしやすい「魚」を題材にしたため、全体的に楽しく積極的に活動していた。これまでと比べて、工程や思考の場面が多い題材であった。導入での動画提示だけでは手順を理解し一人で制作を進めることが難しかったが、何匹も作るうちにほとんどの生徒が見通しをもち意欲的に活動していた。いろいろなアレンジを加える生徒もいた。大判和紙に魚が増える様子を楽しみながら制作できていた。材料が多い題材の時は、個に応じて分かりやすい提示をしないといけないと感じた。			
研究協議における意見・アドバイス			
楽しく制作していた。工程の実演をテレビを通して視覚的に伝えることで、幅広い実態の生徒の理解につながっていると思う。みんなの回転版画を自由に選んで魚を作っていたが、自分の回転版画で制作すると、作品の変化をもっと感じたり楽しめたりできたのではないだろうか。 共同制作にしたことで、作品を通して友達との関わりを増やせたと思う。これからも、個人制作だけでなく共同制作にも取り組んでいってもらいたい。			

(1) 公開授業 8

ア 数学科「金銭とお買い物」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

数学科では、4つのグループに分かれており、当グループは、男子2名、女子2名で構成されている。日常的なことをいろいろと話せる生徒がいる一方、発語の少ない生徒もあり、コミュニケーションや認知等の発達の状況は多様である。

生徒は、これまでの学習の中で、自動販売機でジュースを買ったり、保護者と一緒に好きなお菓子を買ったりする経験をしてきた。買い物をする活動には大変意欲的に取り組むことができ、お金を大切に扱う態度が身に付いてきている。買い物については、レジに並んで店員とやりとりしながら支払い、お釣りを受け取りことができる生徒がいる一方、レジに並ぶことや支払いをすることに支援が必要な生徒もいるため、生徒がお店での買い物に自信をもって取り組めるように、経験を積み重ねることが必要である。

b つけたい力

生徒がお店でいろいろな値段の買い物ができるようになるために、値段表を見て、決められた金額以内で品物を購入し、品物の値段に合う金額を見積もることができる、見積もった金額で支払ったときのお釣りを計算し、複数の硬貨を用いて支払うことができるようにしたい。

レジ役の生徒は、PCを活用して購入される品物を分類整理して簡単に個数と合計金額を求めることができるようになりたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

指導に当たって、生徒全員が見通しをもちながら活動に参加することができるように、教師が見本となる行動を実際にやってみせた。言葉による説明だけでなく写真や動画などを使って説明するなど、視覚的支援の工夫を行った。実生活の買い物に近づけた場の設定で、実物のお金、実物のお菓子、レジ、買い物かごを用意した。振り返りでは、それぞれの頑張ったところを称賛し、上手にできている生徒を評価するようにした。他の生徒が見本にしたり、お互いが意欲的に活動できる場面を設定した。

b 生徒への配慮

生徒が学習への見通しをもちやすくするために、黒板に授業の流れを記載した。実物のお金、お菓子を使用することで、生徒の興味・関心、集中力を高めるようにした。

購入する品物の金額を見積もることが難しい生徒がいることを考慮して、事前に数回練習を行ない、学習の経験を積み重ねることで、イメージをもって、不安にならないようにした。また、学習したことを最終日に実際に校外に買い物に行くことを伝え、生徒の学習意欲の向上を引き出すようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

決められた金額以内(千円)でクラスの数人分のお菓子を買うことができた。教師の手添えや声掛けが無くても一人でお菓子を選び、金額を見積もることができた。見積もった金額で支払ったときのお釣りを計算し、複数の硬貨を用いて支払うことができた。お釣りを受け取る、袋にお菓子を入れることができるようになる生徒が多くなった。声掛けが必要な生徒も繰り返し行うことで、声掛けの回数が減り一人でできることが増えた。

レジ役の生徒は、前の授業で流れをつかんでいたもので、手順表を見ながら商品の個数をパソコンに打ち込み総数と合計金額を提示して、商品代金を受け取り、お釣りがある場合は、トレイを複数使い接触しないようにお釣りを渡すことができた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒自身が必要性を感じて「考えたい」「解決したい」という学ぶ意欲を引き出すために、「何のためにその問題を解決するのか」という目的意識をもたせることが大切であり、生徒の日常生活で起こりうる場面と関連させて、生徒自身の問題と捉え、最後まで頑張ってみようと思い、やる気につながるように工夫していく必要があると思う。

b 対話的な学びの視点から

役割(お客さん役、レジ役)の中で活動することで、どの生徒も自らの役割を果たすことができ、力一杯取り組むことができていた。レジの場面でも店員から提示された金額をスムーズに支払うことができていた。また、レジ役の生徒も商品の数をパソコンに打ち込み、『〇点で合計〇〇〇円になります。』と、相手を見ながら伝えることができていた。お釣りが発生した場合もスムーズに渡すことができていた。

言葉によるコミュニケーションがとれる生徒にとっては、自分の考えや気持ちを伝えることができたので良かったと思われるが、言葉を使ったコミュニケーションが十分にとれない生徒にとっては、厳しかったと思われる。今後は、友達ともコミュニケーションという観点での配慮を考えると、タブレット等の支援グッズを準備する必要があると思う。

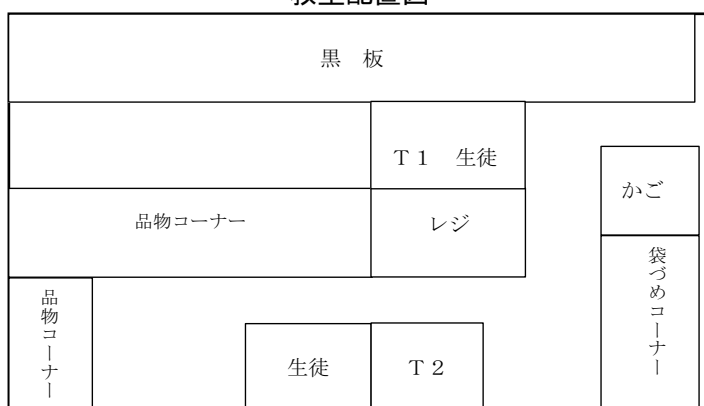
c 深い学びの視点から

本時の始めに「めあて」の確認を行い、その時間の終わりには、一人一人の目標の振り返りを行った。自己評価として生徒からの発表を今後も毎時取り入れるようにしていきたい。今後は、自らの姿を客観的に振り返ることができるように数学科だけでなくいろいろな学習活動の場面で関連付けていくことができるようにしたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

実際に新学習過程分析表を活用し、振り返ってみると三つの観点が学習活動の中に含まれているかチェックすることができた。本授業の目標の一つである対話的な学習活動は、4名の生徒共におおむね達成できていたが、深い学びについて課題が残った。今後は各項目の内容について、共通理解を深めるとともに授業改善に向けたツールとして活用していく必要がある。

教室配置図



レジ役の流れ

レジ袋は必要ですか？
商品が〇点で〇〇〇円になります。
〇〇〇円お預かりします。
お金を受け取る
お釣りがある場合のみ
お釣りは、〇〇〇円になります。

(カ) 実践例

令和2年度 数学学習指導略案

教科・領域名	数学	授業者	MT ST 1名
学部・学年・組	中学部 2年 4グループ	対象 児童生徒数	4人
日 時	令和2年12月1日（火） 1時間目（9：00～9：45）	場 所	小中学習室
単元名	1000円以内でお菓子をクラスの数分お菓子を購入する。 複数の硬貨を用いて品物の代金を支払う		
本時の目標	・クラスの数分(先生も含む)の品物を選んで買うことができる。 ・レジの場面で店員やお客さんとやりとりをすることができる。		
学習指導要領 との関連	■ 中学部学習指導要領 ・数学科 1段階 A数と計算 ア イ ・数学科 2段階 Dデータの活用 ア イ ウ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 8分	1 あいさつ 2 本時の学習内容について説明を聞く。 3 お金が入っているケースを受け取る。 4 ケースに入っているお金を財布に移す。 財布にお金を(500円玉1枚、100玉5枚)入れる。	・生徒からの発言に丁寧に対応しながら進行する。(T1) ・お菓子を買って食べたいという意欲がもてるようにたくさんのお菓子を用意する。 ・お金を財布に入れる様子を見守り必要に応じて一緒に行く。(T2) ・手順を説明しながら実演する。	
展開 27分	5 買い物の手順を確認する。 T2が買い物をしている様子を見る。 〈買い物の手順〉 (1) かごを持つ。 (2) 品物コーナーで品物を選んでかごに入れる。 (3) レジで店員とやりとりをする。 ① かごをレジに置く。 ② 店員が言った金額を聞く。 ③ 店員にお金を渡す。 ④ 店員からお釣りを受け取り、財布に入れる。 ⑤ 店員から品物を受け取る。 (4) 袋詰めコーナーで袋に品物を入れる。 (5) かごを特定の場所に片付ける。		
まとめ 10分	6 お買い物をする。レジ役をする。 7 本時の振り返り 8 次時の学習内容について聞く。 9 片付け 10 あいさつ		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 6 お買い物をする。 レジ役をする。		・本単元では、金銭を扱うこと、品物を選んで購入すること、お店の人とのやりとりなどの学習を行う場面を設定し、自分の力で買い物ができることを目指す。またかごやお金を置く場所を線で囲み生徒が戸惑わずにできるようにする。 ・お客さん(生徒)が持ってきた品物を個別に数えて PC(表計算ソフト)に入力することができる。合計金額を提示し、お金を受け取り、品物を渡すことができる。	主－1 ②③ 主－4 ① 対－1 ① 対－4 ①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 J	・千円以内で品物を選んで一人で支払い、お釣りを受け取ることができたか。	千円以内で人数分のお菓子を買うことができおり、品物の代金を支払い、お釣りを受け取ることができた。また、予算を目一杯使ってお買い物をすることができた。	A
生徒 T	・品物の数をパソコンに入力して合計金額を提示することができたか。 ・品物やお金を受け渡す際、相手に視線を向けながら行うことができたか。	お客さんが持ってきた品物の数を正確に入力することや合計金額をお客さんにしっかりと伝えることができた。 お客さんから受け取った代金を確認し、お釣りがある場合は、トレイを使い接触にせずにお釣りを渡すことができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
実物の紙幣を使ってお買い物に行くなど、実生活に近い学習であり、いろいろな種類のお菓子を準備していたので自分の好きなお菓子やクラスメイト分も考えてお買い物をする 것이できていた。半面 1000 円以内で買う意識が少し弱かった生徒もいたので、めあての意識付けをしっかりとすべきだった。商品の下限が十の位までだったのでおおよその金額を見積もりやすかったが実生活につなげていくなれば 112 円など一の位のも使ってより実践に近づけた方が今後の生活につながった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・数学科というよりは、生活単元学習の内容だったのではないか。 ・数学科と生活単元学習のさび分けをしたらよかった。 ・環境活動(エコロジー)の観点からビニール袋を使い、使用後にそのまま捨てるのは不適切だったのではエコバックを使ってみてはどうか。 ・パソコンに計算式を入れて商品の個数を入れるだけで、自動的に合計金額とお釣りの計算ができるので生徒が戸惑わずに意欲的にできていた。 ・パソコンの計算式に個数も分かればよいのではないか。 ・空箱ではなく中身が入っているお菓子を使ったので生徒の意欲につながった。			

(1) 公開授業 9

ア 国語「マッピングボードを使って正しくマッピングしよう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

本生徒は、発語はないが発声があり、教師の身振りや表情を見て理解し行動することができる。また、「トイレカード」や「手伝ってくださいカード」などの視覚支援ツールを使って意思表示をしたり、表情や声のトーン、身振りで自分の要求を伝えることができる。

机上学習では、新しい取組や見通しがもてない活動になると集中が途切れてしまい、離席をしたり身体で嫌だと表現する場面も見られる。これまでの学習の積み重ねにより見通しをもって個別学習に取り組むことができるようになってきた。

国語に関しては、平仮名の認識が不十分であり、文字としての理解や名称と具体物の一致が難しく、日常生活に活用していくことが課題となる。なぞりがきでは、筆圧が弱い「はみ出さないで、濃く書く」ことが不十分な点である。

b つけたい力

今回の単元では、これまでの学習と同様にセルフワーク課題に取り組み、手指の巧緻性を高め、今後様々な場面で自ら活動できる力を身に付けていく。また、授業開始時に、本時で取り組む課題内容が分かるようにホワイトボードにスケジュールを提示し、教師と一緒に確認を行い、一つの課題が終わるとフィニッシュボックスに入れていくよう促すことで、学習に見通しをもって主体的に課題に取り組めるようにしていきたい。

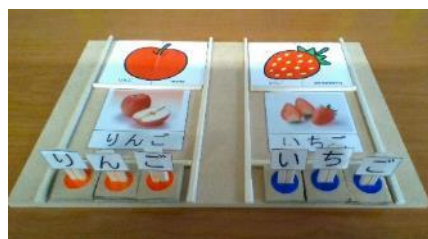
セルフワーク課題が終わると、「できましたカード」をコミュニケーションツールとして活用し教師に意志表示できる力をさらに伸ばしていきたい。名称と具体物のマッピング学習を取り入れ、生徒の日常生活に具体物をより近づけ、活用できる力を身に付けたい。補助用具を使って、平仮名のなぞり書きを行い、繰り返し練習を通し、今後なぞり線がなくても自分の名前を書くことができるようにつなげていきたい。

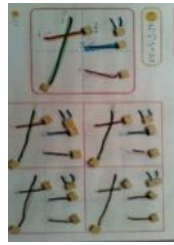
(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

学習活動全体に見通しがもてるように、口頭説明だけでなく写真やイラストを用いたホワイトボードを提示し、内容を理解し、取り組む課題の意欲付けができると考えた。なぞり書きの学習では、平仮名の始点に印を付け、終点はペンが止まるように段差を付けて「始まり、終わり」を理解して意識付けできるように考えた。また、鉛筆でなぞり書きをすると筆圧が弱くなってしまうため、本生徒の持ちやすいサイズのホワイトボードペンを選択することで、弱い筆圧でもなぞりがきができると考えた。

名前のなぞりがきでは、一文字一文字の発音と文字が自分の名前だと認識できるように、教師が一文字ずつ声に出すように支援を行った。名称と具体物のマッピングでは、絵合わせカードを使って興味を引き出し、合わせたカードをマッピングボードに並べ、イラストに合わせてことばカードのマッピングができるように教材の工夫を行った。また、以前はことばの文字チップにマグネットをつけて使用していたが、挿し込むという作業が伴うことで、楽しんで取り組めるように工夫を行った。それぞれ、置き場所が分かるように手順書を置き、確認できるように提示した。まとめでは、本時の目標が達成できたかホワイトボードを使い、本生徒の顔写真にはなまるシールを貼り視覚化することで達成感を感じることができるようにした。





b 生徒への配慮

本生徒が学習活動への見通しをもちやすくするために、スケジュールの提示や手順書といった視覚支援教材を多く用いた。

自発的に学習に取り組めるように、教材の配置や机の配置にも配慮をした。

学習に取り組む中で、本生徒のこだわりがある場面や次の課題へ移る際に行動が止まってしまうことがあるが、教師から誘導したり多くの声掛けをしたりせず、本生徒の自発的な行動が出るまで待ち、気持ちの切り替えができる支援を心掛けるようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

視覚支援教材を使うことで、学習全体に見通しをもって意欲的に学習に取り組むことができた。課題に取り組む中で、助けてほしいことがあると、カードを提示し自分の気持ちを伝えようと意思表示し教師とコミュニケーションをとる場面が多く見られた。

なぞりがきでは、始点終点に目印をつけて練習を行い「止める」を意識付けすると、ペンを止めることができ、なぞり線からはみ出ないようにしようとする意欲が少しずつ見られてきた。

名前のなぞり書きを繰り返し取り組むことで、国語の授業だけではなく他の学習場面でも成果が表れてきたと思われる

名前のマッピングでは、一文字ずつ繰り返し書く練習を行うことで、自分の写真を見て文字と名前の認識ができるようになってきた。

くだものの名称では、イラストカードに文字を記載しておくことで、間違えることなく写真と文字のマッピングを行うことができた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

イラストカードや写真カードだけでなく、ICT 機器を使って画像や映像を提示することで、生徒の興味関心を高め、名称と具体物の結びつきについて理解を深めていく。

繰り返し学習に取り組む中で、少しずつスキルアップできる教材用具の工夫や活動設定をしていく必要がある。

b 対話的な学びの視点から

本生徒は視覚からの情報の収集が得意であるが、今後は音声言語による聴覚支援によっても名称と具体物が一致できるようにしていく必要がある。

活動の振り返りを行い、ICT 機器を使って意思表示をして自己評価につなげていけるように支援していく必要がある。

c 深い学びの視点から

作業所などで取り組まれているセルフワークに取り組み、卒業後を見据えて、手指巧緻性を更に高めて学習活動に生かすことができる活動設定をする。

自分の名前の認識のみならず、家族や担任、友達などの名前も認識できるように写真カード等、視覚支援教材を使って学習していく必要がある。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

注目してほしい学習ポイントを絞ることで、授業のねらいが明確になったので良かった。

3つの観点から各項目で整理されているため、学びに向かう姿の明確化し、授業の振り返りを重視して指導と評価の一体化ができ次の授業に生かすことができると感じた。

(カ) 実践例

令和2年度 国語科 学習指導略案

教科・領域名	国語	授業者	MT
学部・学年・組	中学部2年	対象 児童生徒数	1人
日 時	令和2年12月10日(木) 5時間目(13:30~14:15)	場 所	中2A教室
単元名	マッチングボードを使って正しくマッチングしよう！		
本時の目標	・簡易なワークシステムを活用したセルフワークが遂行できる。 ・なぞり線に合わせて平仮名文字を書き、正しい順に文字を並べることができる。 ・イラストと実物写真、平仮名文字のマッチングが正しくできる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・国語科 1段階【知・技】ア 【思・判・表】A 聞くこと ウ B 書くこと イ C 読むこと ウ ■自立活動 4 環境の把握 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 初めの挨拶をする。	・号令を聞いて、挨拶ができるように声掛けをする。 ・スケジュール表を提示する。 ・一つの学習が終わると、ホワイトボードの項目を外して見通しがもてるようにする。 ・ホワイトボードに目標を提示する。 ・課題は一つずつケースに入れ、生徒の左側に置き、課題が終わったら右側にあるフィニッシュボックスに入れる。	
展開 35分	2 本時の学習内容を確認する。 ① セルフワーク課題 ② なぞりがき(名前マッチング) ③ くだものマッチング		
	3 本時の目標を確認する。		
	4 セルフワーク課題 ① ひもとおし ② ストロウのプットイン ③ 洗濯ばさみ(色マッチング) ④ 乗り物パズル ⑤ ピッキング(色マッチング) 課題が終わったら、「できましたカード」を教師の所まで持ってくる。		
	5 教師との対面課題 ① なぞりがき ・いろいろな線 ・名前のなぞり書き ・なぞった文字(名前)をマッチングする。		
	② くだものイラスト、文字のマッチング	・線の始点は、●の印をつけて書き始めを意識できるようにする。終点は、はみ出ないように段差をつけて終わりを意識できるようにする。 ・名前なぞり書きでは、一つ一つ教師が声に出し発音を聞いて、自分の名前と認識できるようにする。 ・マッチングで分からないときは、指差しをして再度	

まとめ 5分	4 振り返りをする。 ・はなまるシールを貼る。 5 終わりの挨拶をする。	イラストを見て確認するよう促す。 ・本時の目標が達成できたか確認する。 ・号令を聞いて、挨拶ができるように声掛けをする。
-----------	--	--

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
4 セルフワーク課題	・本生徒の興味のあるものを活用し、独力で遂行できる題材を設定する。	主4 対1—① 対2—②
5 教師との対面課題	・なぞり書きでは、始点に印を付け、終点は段差を付けて「始まり終わり」が分かるようにしている。 ・鉛筆でなぞり書きをすると、筆圧が弱くなってしまうため、本生徒の持ちやすいサイズのホワイトボードペンを使うようにしている。 ・イラストと実物写真のマッチングができるように題材を設定する。 ・イラスト、実物写真の置き場所が分かるように見本を置き、確認できるようにしている。	主1—①② 主4 対1—① 対5—② 深2—①

注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	・セルフワーク課題を一人で遂行し、終わったら「できましたカード」を教師の所まで持ってくるができる。 ・なぞり書きでは、始点と終点を意識してなぞることができる。 ・見本を見ながら、正しい名前順に並べることができる。 ・イラスト、実物写真、平仮名文字のマッチングが正しくできる。	・事前に視覚支援ツールを使って課題内容を伝えておくと、見通しをもって落ち着いて課題に取り組むことができていた。難しい課題があると、教師に支援カードを使って、「手伝ってください」と意思表示することもできた ・補助用具を使って、文字の始まりと終わりが分かるように支援すると、意識してなぞり線からはみ出ないように平仮名をなぞることができた。 ・自分の顔写真を見て、正しい名前順に並べることができた。自分の名前の平仮名を一文字ずつ理解ができていた。 ・イラストのみを見て名称をマッチングすることは難しいが、イラスト+名称を見て、平仮名文字のマッチングをすることができた。	・A ・B ・B ・B

【評価基準】A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない D：達成できていない。

授業の振り返り(授業者の反省)
繰り返し同じ学習に取り組んでいたため、ある程度見通しをもって学習に取り組むことができていた。次のステップアップとして、ひもとおしの場合は、色のマッチングができるため色+形を見てひもとおしをするなど教材用具の工夫が必要と感じた。 生徒のこだわりが強くあり、授業開始に間に合うことができず遅れての授業スタートになってしまったため、更に興味・関心をもちやすい授業設定が必要だと感じた。 カードではなく、教師の言葉掛けを聞いて、ICT機器を使って返答ができるように今後スキルアップを図っていきたいと思う。
研究協議における意見・アドバイス
日頃、同じ課題ではなく、ステップアップとして支援教材に変化を付けたらよいのではないかと。 視覚からの情報に慣れてきているため、今後は聴覚からの情報をもとに考えられる力を身に付けていける題材を行ってみてはどうかとアドバイスをいただいた。

(1) 公開授業 10

ア 数学「お金の計算をしよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

中学部2年に在籍する14名は、学習の習熟度により4つのグループに分かれており、本グループは生徒4名（男子3名、女子1名）となっている。本グループの生徒は、知的障害のみの生徒1名や自閉症を併せ有する生徒3名である。言語による指示で理解できる生徒、視覚的支援も併せて必要とする生徒、また気分がむらがあり別のことに気を取られて授業に集中することが難しい生徒等、実態は様々である。また、数学に苦手意識をもつ生徒が多い。

今回の授業では、中学部1年生のお店で買い物をすることを目的にして、こづかいの300円で欲しい商品を複数選び暗算あるいは計算機で加法計算を行ったり、合計金額がこづかいの範囲で買えることができるかを判断したり、硬貨（100円玉2枚と10円玉10枚）で値段分のお金を支払ったりする活動に取り組む。プリント学習において硬貨の金種は理解しているが、金種の大小の理解までには至っていない生徒が3名いる。繰り上がりや2位数と3位数の加法計算に苦手意識をもつ生徒がほとんどである。昨年度は、模擬の買い物学習で50円、100円、200円のお菓子をちょうどの小銭を出して買うことはできていたが、複数のお菓子の値段を足して合計金額を出すことはまだ難しいと思われる。

b つけたい力

日常生活で買い物をしたり、公共交通機関で代金を支払ったりするために、金銭学習が必要である。今回の買い物学習では、複数の商品の合計額を計算する支払いができることを目指す。これまで金銭学習の基礎として、金種の弁別、金種の大小、商品（単品、複数）の値段のお金を用意することに取り組んできた。

欲しい物を買うにはお金が必要であること、商品分のお金を支払うことで品物が手に入ること等を理解し、買いたい商品を複数選んで暗算あるいは計算機で計算し、お金を支払ったり予算内で買い物をしたりすることを実践的な活動を通して身に付けたい。

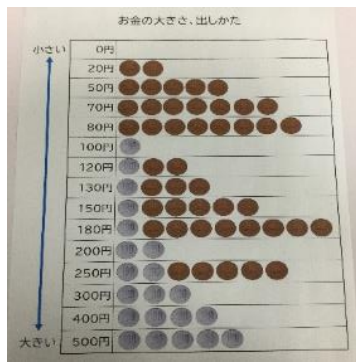
(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

今回の授業の学習の流れや目標を黒板に書くことで、授業の見通しがもてるようにした。中学部1年生のお店のちらしが事前にクラスに貼り出されてはいたが、実物の商品を提示することでどのような商品が明日販売されるのかを生徒が見たり、買いたい商品を選んだりすることができるようにした。また、買い物メモに欲しい商品と値段を書き込むことで合計金額を計算しやすいように工夫した。暗算が難しい生徒が多いので、計算機を用意して加法計算ができるようにしたり、前回の授業までに計算機の使い方を教えたりした。本物の硬貨や生徒本人の財布を準備し、実際の買い物場面を想定した。硬貨は、生徒の実態を考慮し、2種類のみ（100円玉2枚と10円玉10枚）にして選びやすいように工夫した。

b 生徒への配慮

1時間目の授業で声を出しにくい生徒もいるため、号令の後に皆で深呼吸をしたり、発声練習をしたりして授業に向かうための体の準備を行った。集中が途切れやすい生徒には、授業の学習の流れを読みあげる役割を任せて活動に沿うことができるようにした。目標を皆で読むことで、何を達成すれば良いのかを確認するようにした。欲しい商品を選ぶにあたり、本当に興味がある物でないと選ぶことが難しい生徒がいるため、おつかいという設定で買う物を教師側で指定した。お金の出し方や金額の大小が難しい生徒のために、支援プリントを準備することにより、こづかいの範囲で買えるか判断できるようにしたり、お金を支払ったりできるようにした。



支援プリント



計算をする生徒の様子

買う物	ねだん	円
アムスレット	50	円
アトラック	80	円
おかし	100	円
合計	230	円
残ったお金	70	円

買い物メモ（当日分）

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

支援プリントを見ながらではあるが、こづかいと合計金額を見比べ、合計金額の値段がこづかいよりも金額が小さいので買うことができると判断することができるようになった。また、実際の買い物の際に、選んだ商品がこづかいの範囲で買えると判断することができたり、お金の支払いができた生徒がいた。計算機を用いて合計金額を求めることができた生徒もいた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

数学に苦手意識がある生徒たちにとって、見通しがしっかりもてることで安心して授業に向かうことができる。文字だけのスケジュール提示になっているので理解が十分ではないと感じたため、絵や写真を用いた支援が必要である。

実際にお店で販売される商品の実物を見本として生徒に紹介したものの、席に座っている生徒に見せて回ることが中心になってしまった。生徒がどんな商品があるのだろうか、何を選ぼうかと興味・関心をもって活動できるように、自由に席を立てて見る時間を十分にとる必要がある。

b 対話的な学びの視点から

主に生徒と教材との対話を中心に考えたので、この授業では個々での活動が主であった。金種や買い物メモの書き方の理解が難しい生徒もいたのでペア活動を行い、お互いに質問をしたり、アドバイスをしたりする場面があれば、生徒同士の対話的な学びにつながったと思われる。

また、活動が終わっても教師に意思表示をすることが難しい生徒がいるため、「終わりました」等のカードを用いることで意思を表出できるようにしていく。

c 深い学びの視点から

100円玉を選ぼうとして1円玉を出した生徒が2名いた。もう一度考えるように伝えることで選ぶことができたが、その際に硬貨の金種名と硬貨の絵が描かれた支援プリントを準備し、見比べることができればより理解が深まったと思われる。また、100円玉と1円玉の違いを実物の硬貨で比べる活動を取り入れることで選び間違いをなくしていきたい。

また、振り返りの時間が短くなったため、生徒がこの授業で何をしたか、何を理解できたかを確認することが不十分であったので、十分な振り返りの時間をとるようにしたい。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点学習指導案に含まれているか、また観点毎にどのような項目があるのかを確認するのに役に立った。ただし、深い学びについては、単発の授業で扱える内容ではないと思うので選ぶことが難しいと感じた。

(カ) 実践例

令和2年度 数学科 学習指導略案

教科・領域名	数学	授業者	MT ST 1名
学部・学年・組	中学部2年 3グループ	対象 児童生徒数	4人
日 時	令和2年12月8日(火) 1時間目(9:00～9:45)	場 所	中学部2年C組
単元名	お金の計算をしよう		
本時の目標	・買いたい商品の合計金額を計算することができる。 ・こづかいで買える金額であるか判断することができる。 ・お金の支払いができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部 学習指導要領 算数科 3段階 A 数と計算 ア イ ■ 中学部 学習指導要領 数学科 1段階 A 数と計算 ア イ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 はじめの挨拶をする。(数学委員C) 2 本時の学習内容と目標を確認する。	・みんなの姿勢がよいか確認するように促す。 ・黒板に学習内容と目標を書く。 ・生徒Aに学習内容を音読するように促す。 ・目標は全員で読むように促し、意識するように伝える。	
展開 35分	目標 ・こづかいで買える商品をたくさん選ぶ。 ・必要なお金を支払おう。 3 中1Aのお店の商品を知る。 4 こづかいの金額を確認する。 5 買いたい商品を2つ以上選ぶ。 6 計算機を用いて合計金額を計算する。 7 必要なお金をトレーに入れる。 8 選んだ商品と出したお金をホワイトボードに書いたり貼ったりする。 9 振り返りをし、次時の内容を知る。		
まとめ 5分	・目標を達成できたか確認をする。 ・次時の説明を聞く。 10 終わりの挨拶をする。(数学委員C)	・ちらしや見本を見て商品と値段を確認する。 ・こづかいが300円であることを伝える。 ・生徒Dに300円の模擬硬貨を黒板に貼るように促す。 ・ワークシートに買いたい商品と値段を書きだすように声掛けする。生徒Aが選ばない場合は、買う物を指定する。 ・足し算、引き算のどちらを使うか質問する。 ・計算機で加法計算し、300円以内であるか確認するよう声掛けする。ヘルプを求める生徒には支援プリントを提示して問いかけをし、説明する。 ・合計金額のお金をトレーに入れるように促す。ヘルプを求める生徒には支援プリントを提示して問いかけをし、説明する。 ・展開7が終わった生徒からホワイトボードに移動し、作業するよう声掛けをする。 ・頑張りを褒める声掛けや評価をする。 ・次時は、校内の自動販売機でジュースを買うことを知らせ、学習への期待感がもてるようにする。 ・みんなの姿勢がよいか確認するように促す。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 6 合計金額を計算する。		展開 5 で選んだ商品の合計金額を計算機で計算し、こづかいの 300 円以内で買えるかを確認することがねらいである。ワークシートに書き込んで計算をすることで、合計金額を求め、予算内であるか確認できるようにする。三位数の大小が分からない生徒には、支援プリントを準備し、判断するように促す。困っていても、意思表示をしない生徒がいるため、分からない場合は、教師に質問するように声掛けし、ヘルプを求めることを意識づける。	主 2－②③ 対 1－② 対 2－②
展開 7 必要なお金をトレーに入れる。		金種は、100 円玉 2 枚と 10 円玉 10 枚を準備し、ちようどの商品代金を支払うことができるようにする。お金の出し方に慣れていない生徒がいるので、分からない場合は自分から質問するように促す。その際は、支援プリントを提示し、できるだけ一人で出せるように支援する。	主 2－②③ 主 4 対 1－② 対 2－②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 B	合計金額分のお金をトレーに入れることができたか。また、困っている場面で教師に質問することができたか。	合計金額の 280 円を出す際に 200 円を出そうとして一円玉を 2 枚出したので、もう一度金額を確認するように声掛けをした。教師と一緒に正しい金額を出すことができた。分からないことを教師に「教えてください。」と言うことができた。	C
生徒 D	買おうとする商品の合計金額がこづかいの 300 円以内であることを判断することができたか。	合計金額の 270 円を計算した際には、こづかいで買えないと認識していた。その後支援プリントでお金の大小の並びを確認すると、合計金額とプリントを見比べ、こづかいで買えると判断することができた。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
プリント学習では硬貨の弁別ができていたが、今回の授業では 100 円玉を選ぶべきところを 1 円玉を選ぶ生徒が 2 名いたため、実際のお金では理解ができていないことが明らかになった。また、買い物メモに商品の値段を書く際に位の理解ができていないことも判明した。今回の授業で、一位数や位の理解から基礎を固め、金銭学習においてもお金の弁別、お金の支払いや等価の理解などから実物を用いて繰り返し学習をしていく必要があることが分かった。発問や質問の中の「270 円は 300 円より大きいですか？」等に出てくる「大きい」の意味が理解できていないので、生徒に確認しながら概念も教えていく必要がある。			
研究協議における意見・アドバイス			
・生徒の実態に合った支援プリントがあり、そのプリントを使って自主的にお金を数えようとしていた。 ・数字だけを見ての大小は理解しつつあるが、硬貨だけを見て「お金の大小」を理解することが難しい。同じ金種の枚数が多い方が「金額が大きい」と判断した生徒がいたため、硬貨の大小が分かる取組が必要だ。 ・硬貨を並べる際に、10 円玉が 6 枚以上ある場合 5 枚をひとかたまりとして置くことができていなかったため、5 を単位としてまとめて数える練習が必要ではないだろうか。 ・課題が終わっても意思表示が難しい生徒にはカード（「終わりました」）を使用してはどうか。			

(1) 公開授業 11

ア 数学科「10 までの数をかぞえよう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

本生徒はA S Dではあるが、周囲の環境によって注意が転導することが少なく、簡易なワークシステムを活用することによって学習の維持は可能である。

数学科の学力では、「数と計算」において、規則的に一直線上に並んだ場合には 10 までの個数を正しく数えたり、ものの集まりや数詞と対応して数字が分かる一方、対象が散在した場合には正答率が下がる。また「測定」において、大小比較が難しいなど学習指導要領小学部算数 1・2 段階にある。

また、「いち」「に一」など数唱において発語はあるものの不明瞭であり、言語化できているかは不明である。

b つけたい力

高等部卒業後や発達達の臨界域（限界域）等も考慮し、本単元では 10 までの計数を確実なものとし、日常生活や作業学習等で活用できることをねらいとする。また、保護者との懇談においても、「農産物やティッシュなどを一定量袋詰めできる力をつけてほしい」という要望があった。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

学習の大きな流れ、を一人で課題を遂行する「セルフワーク課題」と教師と 1 対 1 で行う「認知課題」に分けた。「セルフワーク課題」では一つ一つの課題をそれぞれかごに入れ、本生徒の左側に積み重ねる。本生徒は最上部の課題から順に取り出し、課題終了後には右側のフィニッシュボックスに入れる。左側のかごが全てフィニッシュボックスに入れば、「セルフワーク課題」は終了となる。終了後は「できましたカード」（報告カード）を教師に持ってきて（P E C S のフェイズⅡ）、教師との「認知課題」に移行する。

「認知課題」では計数を中心としつつ、複数名詞の指示理解など短期記憶や同時処理の向上やピクトを使った言語のシンボル化も行う。



図1 セルフワーク課題（作業課題1）

* 1～10 までの数字を書いてあるカードを順に取り、クリップで留め、ジッパーファイルに入れる。



図2 セルフワーク課題（作業課題1）

* 名刺入れに、イラスト別に分類し、カードを挿入する。

b 生徒への配慮

「セルフワーク課題」では認知面と巧緻性を考慮した課題を設定した。当然、A S Dの特性への配慮として課題の開始と終了が視覚的に分かりやすいものをピックアップした。その一方で、課題へのアプローチ方法が教師の提示したものから変容しても介入はしない（例えば図1の課題では色の順は問わない。図2の課題では挿入順を問わない）また学習意欲の喚起のために、イラストに

本生徒の興味・関心がある「はにわん」「ラーメン」などを活用した。

「認知課題」では計数の確認の際に本生徒の発声の代替として数字カードを活用した。あわせて授業の「始めます」「終わります」「見ます」などは手話を使い視覚化し、正答の場合はハイタッチなどで即時評価を行うことは原則である。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

「セルフワーク課題」では落ち着いた課題の遂行と、巧緻性の向上によるスピードの向上が見られた。

また「認知課題」では計数が確かなものになり、黒板に散在しているマグネットの個数を目算することができるようになった。あわせて「〇〇を全部ください」という教師の指示に対して該当のカードを全て取ることができるようになった。

日常生活や作業学習において般化できているかについては担任から聞き取ることができていない。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

ASDの特性上、同じ課題を遂行すること自体が好子となる場合もあるが、主体的に取り組むことができるように、素材のイラストなどは興味・関心のあるものに随時更新していく。あわせてワークシステムを活用した学習形態は維持していく。

b 対話的な学びの視点から

言語指示に対しての弱さを補うために今後も、問いかけは言葉だけでなく視覚支援（数字カードと具体物のリンクなど）も併せて行う。また、色や形などの分類、大小や多少等の比較の概念形成のためにはワーキングメモリーの向上は必要であると考え。ワーキングメモリーの向上の手続きについては一定時間生徒にカードを提示し、カードを伏せた後に同じカードを選択させるもので、タブレット端末等で類似のアプリもインストール可能である。

c 深い学びの視点から

日常生活や他の学習場面の般化をねらっていくために、「セルフワーク課題」ではホッチキスの使用など幅広く日常生活品を教材として活用する。

また「認知学習」で確かになった計数の力についても、学校生活における教師の声掛けにおいて「〇〇を〇個持ってきてください。」など数量に注目し、処理する場面を意図的に設定するなどの配慮をする。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

「主体的な学び」「対話的な学び」については、分析表を活用することで本単元の注目してほしい学習活動を精選することができた。

「深い学びに」については上述したように般化の観点が必要だと考えるので、般化できているかどうかを評価するために、本生徒の担任と他の教科や日常生活における活動に関する情報を共有することが必要だと感じた。

(カ) 実践例

令和2年度 数学科学習指導略案

教科・領域名	数学	授業者	MT
学部・学年・組	中学部2年	対象 児童生徒数	1人
日 時	令和2年12月1日(火) 時間 9:00～9:45	場 所	中2A教室
単元名	「10までの数をかぞえよう！」		
本時の目標	・簡易なワークシステムを活用したセルフワークが遂行できる。 ・10までの計数ができる。		
学習指導要領との関連	■小学部学習指導要領 ・算数科 2段階 A数と計算 B図形 C測定 ■自立活動 4 環境の把握 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。		
時間	学習活動	手立て、留意点	
9:00	1 始めの挨拶をする。 2 セルフワーク課題 ① 作業課題 1 ・紙片を10ずつそろえ、袋に入れる ② 作業課題 2 ・名刺入れに台紙を入れる。 ③ 作業課題 3 ・3つのパーツの組み立て ④ 作業課題 4 ・ストローのプットイン ⑤ 構成課題 ・パズル ⑥ 構成課題 ・輪ゴムによるモデルの構成 セルフ課題終了後に、「できましたカード」を 持ってくる 3 教師との対面による認知課題 ① 大小弁別 ② ピクトを使った「同じ」の理解 ③ 複数名詞の指示理解 ④ 言葉による色・形の抽出 ⑤ 具体物(磁石)を使った計数(10まで) ※「全部でいくつ？」という問いかけをする。 4 終わりの挨拶をする。	※課題は一つずつケースに入れ、左側に置く、課題が終了するごとに、右側にあるフィニッシュボックスに入れる。 ※セルフワーク課題の作業課題については、教師との1対1の場面で確実に遂行できることを確認してから導入する。 ※カードによる課題では、間違ったカードを手にする前に、正しいカードを教師がポインティングする。 ※注意が転導する場合には、教師が耳に手を当て、「聞きます。」と声をかける。 ※数の発声の代用として数字カードを活用する。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
セルフワーク課題		・ 本生徒の興味のある画像を活用し、独力で遂行できる課題を設定する。内容は高等部卒業後の作業を見通したものとする。	主－ 4 対－ 1
教師との対面による認知課題		・ カードを使用しての認知学習を行う。発語が聞き取りにくく、言語のシンボル化が難しいのでピクトによる課題や数字カードを活用する	主－ 4 深－ 2
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	・ セルフワーク課題を独力で遂行し、報告カードを教師に持ってきたか？ ・ 10 までの計数ができたか？	・ 落ち着いて 6 つのセルフワーク課題を遂行し、教師に「できました」カードを持ってきて、認知課題に移行することができた。 ・ 2 色の磁石を本生徒に提示し、指差しをしながら「緑はいくつ？」「赤はいくつ？」「全部でいくつ？」という 3 つのパターンの問いに対して全て正答することができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・ 「セルフワーク課題」の「作業課題 1」において、前時までは色別に分類した後に 1 から順にカードを取っていたが、本時からすべてのカードをまとめて手にし、そのまま順に机の上に並べるようになった。また、「構成課題（輪ゴムによるモデルの構成）」においてモデルの色の重なりまで再現できるようになるなど「セルフワーク課題」に時間がかかり、教師との対面による「認知課題」を遂行する時間が大幅に削られてしまった。 ・ 「認知課題」では、言葉による指示に対しての①「大小弁別」や④色・形の抽出が確実になったので、今後は選択のカード数を増やしていきたい。			
研究協議における意見・アドバイス			
・ 教材に対しては「生徒の実態に適応している」という評価をいただいたが、質を高めるために課題の設定の最適化や教材・教具を他の教師と共有することの必要性についてアドバイスをいただいた。また「生徒が正しい選択をしているかどうかの確認は必要ではないか？」というアドバイスをいただいたが、誤学習を防ぐために間違ったカードを手にする前に、教師が正しいカードをポイントニングする手続きを徹底することが必要だと考える。			

(1) 公開授業 12

ア 体育 「サーキットトレーニング」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

本単元対象生徒は中学部 1 年生から 3 年生の 27 名(男子 15 名、女子 12 名)で構成されている。障害の程度は幅があり、知的障害に軽度の肢体不自由や、自閉症を併せ有する生徒などが在籍しており、障害特性や実態は様々である。生徒の中には、口頭での説明を理解することが難しいことや、見通しがもちにくい生徒も複数含まれている。そのため、手順書や絵カード、モデリングなど視覚支援を取り入れた授業づくりが重要である。

授業については、体を動かすことが好きで楽しく積極的に取り組む生徒がいる。反面、失敗することへの恐怖心や運動に対する苦手意識があり、意欲的に取り組むことが難しい生徒がいる。

2、3 年生は昨年度までに本時で行う 7 種目のうち 3 種目を経験しているが、1 年生は小学部段階では経験したことがない種目が大半である。しかし休業期間中に半数以上の生徒が自主登校をしていたことから、多くの生徒は全ての種目を経験することができている。多くの生徒はこの 7 種類のうちハードルくぐりとハードルまたぎを苦手とする傾向が見られており、身体の柔軟性やバランス感覚の獲得が課題となっている。なお、対象生徒は 4 月、5 月が臨時休業であったため体力、筋力の低下が予想される。

b つけたい力

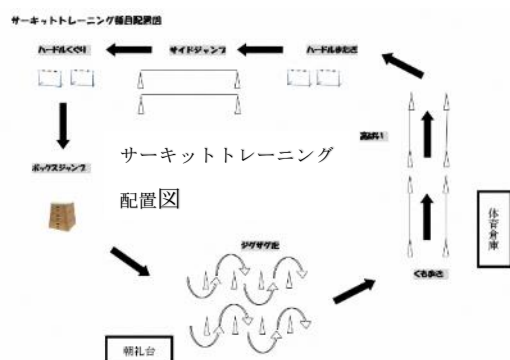
今回の単元では 4 月、5 月の臨時休業の関係で体力、筋力の低下が見られるため、少しでも元の状態に近づけるために上半身、下半身がバランスよく行えるような種目を取り入れた。また、身体の柔軟性やバランス感覚の向上もねらいとして捉え、ハードルくぐりやハードルまたぎを設定した。

また、各種目に難易度を設定し、自分のできる難易度を選ぶことで主体的に取り組める力をつけることを目的とした。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

本単元では各種目の基本的な動きが正確に行えるように、スタート前に「競争ではない」ことを明確に伝え、必要に応じて教師による声掛けや、手本を見せるなどの支援を行うようにした。また、臨時休業の関係で生徒の体力低下が予想されるため、各種目における強度は前年度の目標を参考にしてやや低く設定し、けがのリスクを抑えた状態から始め、慣れてきたら徐々に強度を増していくこととした。また、その他種目ごとに難易度に変化をつけ、自らの体力に合った強度を選択することができるように設定した。



b 生徒への配慮

ラジオ体操では主指導、体育係がステージ上で体操を行っているが、ST を生徒付近に配置した。生徒の近くに配置することによって細かい部分を口頭で伝えることができる。また、生徒が ST の動きを真似てラジオ体操ができるため設置した。

サーキットの種目強度は実態によって様々なため 1 つの種目に 1 ～ 3 のレベル別に道具を設置した。(例として跳び箱の高さを変える、ジャンプのする高さを変えるなど)こうすることによってけがのリスクを抑え、自分のレベルに合わせた強度で行えるようにし、自分で考えて取り組めるように設定した。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

今回の授業で、生徒が主体的に取り組めることができているように感じた。生徒 Q に関しては、ハードルまたぎで難易度の高い方に挑戦してハードルを倒してしまう場面があった。周回をして再度挑戦したときは難易度を下げてハードルまたぎを行っていた。これは、難易度の高い方で失敗したため、難易度を下げて行おうと自分で考えて行動したと思われる。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

難易度(3種類)を設定し、分かりやすいように赤、青、黄の3色を使ったが、難易度がよく分かっていない生徒や、できる難易度で行っていき、1段階上げて挑戦するなどの場面が見られなかった。生徒が分かりやすく覚えやすいように説明やイラストを使用して「挑戦しよう」「やってみよう」などの思いが出せるような工夫が必要である。またサーキットトレーニングでの活動中に生徒への声掛けが少なかった。もっと称賛の声掛けをしていくことで生徒のやる気や向上心を引き出していく。

b 対話的な学びの視点から

種目によっては生徒が正しい動きでできていない場面があった。教師が生徒の手を添えて同じ動きをしてモデルとなる。そうすることによって教師と同じ動き方で種目を行えるので正しい動きでこなすことができると考える。授業の終わりにある振り返りでは、時間が押してしまって振り返る時間が少なかった。振り返りの時間を十分確保できるように時間配分をしっかりと行い、生徒が感想を発表できる場面を確保したい。

c 深い学びの視点から

教師がステージ上で悪い見本、正しい見本を見せることで生徒が模倣を行っていく。悪い見本や正しい見本を見て自分でやってみることで、自分が正しい動作でできているのか考えて挑戦できるような場面を設定する。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

新学習過程分析表を使ってみて、他の教科でも十分に活用できると思いました。学習の活動内容の中に3つの観点が含まれているのか確認できることから特に不便なく使えたのではないかと思います。自分の授業の活動が3つの観点のどれが含まれているのか確認もできるのでよかったと思う。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健体育	授業者	MT ST 14名
学部・学年・組	中学部1～3年	対象 児童生徒数	27人
日時	令和2年6月5日(金) 1時間目(9:10～9:45)	場所	グラウンド
単元名	サーキットトレーニング		
本時の目標	・サーキットトレーニングメニューの基本的な動作ができる。 ・ルールを守って、自分のレベルに合った難易度を選択し、安全に取り組むことができる。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 2段階 A体づくり運動 ア ウ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 整列、挨拶 2 本時の学習内容・サーキットトレーニング目標の確認	・ホワイトボードに学習内容、目標、流れを提示し、説明する。 ・生徒全員が目標を意識できるように全員で声に出して確認する。	
展開 20分	3 準備運動(ラジオ体操、補助運動) 4 体づくり運動 ・ランニング(腕回し:前後) ・スキップ 5 サーキットトレーニング(8分間) じぐざぐ走、くも歩き、高這い、ハードルまたぎ、サイドジャンプ、ハードルくぐり、ボックスジャンプ		
まとめ 10分	6 整理運動 7 目標の振り返り 8 整列、挨拶	・ホワイトボードに各クラスのスタート地点を提示する。 ・準備ができ次第音楽をかけてスタートする。 ・使った筋肉が伸びるようにゆっくりと教師が数えるようにする。 ・今日の目標がどうであったか振り返りを行う。 ・STを指名し、各学年1名程度発表をしてもらう。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開5「サーキットトレーニングをする」		・難易度を3色(赤、青、黄)に分類し、自分のレベルに合った難易度を確認し選択することができる。難易度を分けることで、実態に合わせた種目の取組を行うことができ、けがの防止につながる。	主－1③
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒S	・サイドジャンプでは、腕の振りを使って跳ぶことができたか。 ・ボックスジャンプでは必要以上にスピードを緩めず跳ぶことができたか。	・サイドジャンプでは、腕の振りを使おうとする意識は見られたが連動して跳ぶという面ではまだまだ課題がある。	B
生徒Q	・自分のレベルに合った難易度を教師と一緒に考えて取り組むことができたか。	・自分に合った難易度を選択することができていた。自分ができる種目はレベルの高い難易度を選んでいった。 ・ハードルまたぎでは、難易度の高い方から行ったが、ハードルを倒してしまった。2週目からは難易度を下げて行っていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・体づくり運動とサーキットの間に水分補給の時間を設けたが自分がイメージしていたより時間がかかってしまい終わる時間が遅くなった。 ・サーキット中、音楽をかけていたが遠くの方は音が全く聞こえにくかった。 ・今回の反省を踏まえ、次回からは改善できるようにしていきたい。			
研究協議における意見・アドバイス			
・振り返りの評価の仕方について前は主指導者が評価を発表していたが、今回は生徒からの評価があり、発表を促すような変化があった。 ・腕回しのときになぜこの運動をする必要があるのか事前に伝えて行えばよかった。 ・振り返りでは「〇〇さん(くん)がよかった」など個人名を出して評価してあげるとよかった。次への意欲へつながっていく。 ・サーキットトレーニング中の即時評価がほしかった。励ましたり、ダメだったときでも褒めてあげるとよかった。 ・生徒たちのサーキットを8分間やり切れたのでよかったのではないかな。体力が少しずつついてきているのが感じられる。			

(1) 公開授業 13

ア 保健体育 ダンス

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は中学部 1 年生から 3 年生の 27 名（男子 15 名、女子 12 名）で構成されており、知的障害に加え自閉症・ADHDを有する生徒や、軽度の肢体不自由を有する生徒、口頭でのコミュニケーションが取りづらく見通しがもちにくい生徒等複数在籍しているため、絵カードやモデリング等の視覚支援を取り入れた授業が重要である。中学部は比較的体育の授業を積極的に取り組む生徒が多いが、声掛けがないと動けない生徒や音が鳴ることに敏感で耳をふさいでしまう生徒もいるため、音量についても注意しなければならない。

b つけたい力

音楽に合わせて踊る楽しさを知り、仲間と同じ動きで一つの作品を踊りきることができる。また、リボンの動かし方を見たり聞いたりして分かる、できないことができるようになる喜びを感じる、模範を見て踊り、自ら動きのポイントを覚えて自信をもって踊ることができる、等それぞれの段階に合わせた力を付けたいと思う。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

授業の初めに活動の見通しがもてるようにホワイトボードに活動内容を掲示したことや、達成可能な目標を設定し、それを声に出して読むことで 1 時間の取組が分かりやすくなるようにした。

リボンの動きに関しては、リボンを持ち、腕を振ることで動きが出るような振り付けにし、誰もが簡単に曲に合わせることができるものにした。そして、同じ振り付けを同じメロディーで踊るように繰り返し行う動きを多くした。また、新体操の基本の動きにもなる手首を動かすことでリボンの軌道ができる動き（蛇形と螺旋）の 2 種類を 8 カウントのみ入れ、難しい振り付けにもチャレンジしていける工夫も取り入れた。

b 生徒への配慮

授業を進めていく中で、踊り出しの曲のカウントを把握し、すぐに曲が出るように準備をしたことで生徒が待つ時間を少なくするようにした。また、音が苦手な生徒がいるため、音量に気を付けた。パソコンに接続している部分や待機時間に雑音が混じるため Bluetooth でスピーカーに音を飛ばすようにした。

動きに関しては、フレーズごとに動きのポイントを説明しながら、対称の動きで模範を示したり、聞き取りやすくなるようにゆっくり、はっきり声掛けしたりして説明をした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

これまで、ST の指示がないとすぐに行動に出せなかった生徒が、模範を見ながら真似て踊ることができるようになった。また、立ち位置についてもマーカーに一人一人の顔写真を取り付けたことが目印となり、スムーズに並ぶことができた。

パソコン接続部分からの雑音を防ぐために Bluetooth でスピーカーにつないだことで、音が鳴る前に耳をふさいでいた生徒が、耳をふさぐことなく、ダンスに取り組めるようになった。曲出しのカウントを把握しすぐに音が出るようにしたことで、待ち時間が無くなり集中して取り組めるようになった。

フレーズごとに区切り、少しずつ動きのポイント（大きな動きになるために肘を伸ばすことや体重移動をして遠くでリボンを振ること）を説明したり、踊りながらポイントを言葉で伝えたりしたことで、気を付けて欲しいことを多くの生徒が理解できるようになった。また、たくさん踊って練習したことも良かったように思う。



(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒は模範を見ながら、大きく動くためのポイントやアドバイスを聞き、曲に合わせて踊っていた。MTが前から見た感想もいろいろな場面で伝え、生徒のモチベーションが上がるようにしてきた。日常生活の中に『ダンス』という種目はあまり入ってこない。そのため、興味・関心が引き出せるような題材を選ぶことが主体的な活動へとつながってくると思う。

今回、限られた時間の中でのダンスの取組となったが、本番の発表の場がグラウンドということもあり、空間が広がり難しく感じることもある。そのため、曲を聞いたら、必ずこの振り付けだという安心して取り組むことができるよう繰り返し踊り、ダンスに慣れるようにした。

『虹』をテーマにしており、生徒たちが描くリボンの軌跡は前から見ると、七色の虹が空に架かっているように見えた。しかし、自分の踊っている姿は分からない状態であった。そこで、生徒たちの踊っている姿を撮影し、生徒たちに自分たちの踊りを客観的に見せることをすれば、生徒たちが想像する全体の印象も変わったかもしれないし、できていない所等にも気付き、さらなる意欲にもつながっていったのではないかと考える。

いつもMTが前で踊り声掛けをするだけではなく、できていない例をMTが行い、頑張っている例を数名の生徒が前で踊る等、スポットライトを浴びる場を設定するのも生徒のやる気を引き出す方法かもしれないと思った。

b 対話的な学びの視点から

練習段階ではサビの部分はリボンを持って腕を振ることで動きが出る簡単な振り付けにし、繰り返し練習することで振り付けを覚えてくる。この踊りを覚え始めた頃、学年ごとに練習した成果を発表したことがある。仲間が踊っている姿から、頑張っている所や楽しそうにしている所を見て何かを感じ、踊り終わった後には拍手をすることができていた。自分の姿は見えないが、周りの様子に変化していることには気付き、次の練習にまた力が入るのではないかと考える。今回は、見せ合う時間が少なかったのも、さらに人の前で発表をする場を増やし、感想を発表したり、ワークシートを書いたりし意見交換することも必要だと思う。

c 深い学びの視点から

初めに本時の目標を声に出し、その時間の終わりには、目標の振り返りを行った。自己評価として生徒からの発表、他者評価としてSTの発言を取り入れたが、今後も毎時取り入れるようにしていきたい。そして今後は、自分の姿を客観的に振り返ることができるように体育だけでなくいろいろな学習活動の場面で関連付けていくことができるようにしたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

実際に新学習過程分析表を活用し、振り返ってみると3つの観点が学習活動の中に含まれているかチェックすることができた。この授業の目標からは「深い学び」が足りなかった。体育では種目により担当が代わることがあるが、全体を通して取り組んでいけたらさらに良くなると思った。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健体育	授業者	MT ST 14名
学部・学年・組	中学部 1年～3年	対象 生徒数	27人
日 時	令和2年10月13日(火) 4時間目(11:30～12:15)	場 所	体育館
単元名	ダンス		
本時の目標	・リボンの振り付けを思い出し、リボンを動かすことができる。 ・体を大きく使って踊ることができる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 ・体育 1段階 F表現遊び アイウ 2段階 F表現遊び アイウ 3段階 F表現遊び アイウ ■ 中学部学習指導要領 ・保健体育 1段階 Gダンス アウ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 整列(学年別) ○横並びに3年、2年C組、A組、B組、1年の順で、マーカー(顔写真付き)の所に並ぶ	・マーカーを置いて人との距離を保つようにする。 ・並ぶ順番を視覚支援する。(顔写真を取り付ける)	
展開 35分	2 挨拶 3 本時の目標の確認 ○声を出して一緒に目標を読んで確認をする 4 振り付けの確認(復習) ○リボンの持ち方について ○フレーズごとに動かし方の確認をする ・横振り ・縦振り ・蛇形 ・らせん ・回し ・サイドステップ等 5 曲に合わせて踊る ○動きのポイントの説明をする ・動きを大きく見せるには・・・ (体重移動、肘を伸ばす等)	・ホワイトボードに本時の流れを示す。 ・はっきりゆっくりと説明していく。 ・MTは模範を示しながら、楽しい雰囲気を作る。 ・MTは生徒からの発言やジェスチャーを逃さないようにする。 ・できているところを褒める。 ・リボンを持ったSTは、生徒の見本となるようにポイントに気を付けて踊る。 ・リボンを持たないSTは、生徒の腕に手を添えて動きのサポートをする。	
まとめ 5分	6 整理運動 ○筋肉を使った箇所を聞き、自分でほぐす 7 本時の振り返り ○自己評価と他者評価 生徒・・・本時の目標を再度確認(振り付けを思い出し動けたか)、振り返りをして発言する 教員・・・生徒が本時の目標(体を大きく使えていたか)発言する 8 挨拶	・STは各部位が伸ばせているか確認をして声掛けをする。できていなければ補助をする。 ・STは生徒が振り返ることができるように側で声掛けをする。また、できていたところは褒める。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4 振り付けの確認		・リボンを回しやすくなるように持ち方の例を見せながら説明する。 ・フレーズごとに動きのポイントとなる所を説明しながら模範を示し、楽しい雰囲気を作る。	主― 4 対― 3 ―①②③④ 対― 4 ―①
展開 5 曲に合わせて踊る		・踊り出しの曲を踊る前に準備する。 ・音が苦手な生徒がいるため、音量に気を付けて調節する。 ・動きが大きく見えるように動きのポイントを詳しく説明する。	主― 2 ―③ 対― 3 ―①②③④
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	模範を見て一人で踊ることができたか。	自分の立ち位置は友達をサポートを受けながら、移動することができた。顔写真の付いたマーカーを置いたことで目印になったと思う。振り付けの確認の時には、模範を見てリボンを動かし、STの補助なしで踊ることができた。MTが前で振り付けの声掛けをしたことや対称に動いたことがよかったと思う。	A
生徒E	動きのポイントを覚えて踊ることができたか。	動きを大きく見せるために体重移動をするよう大きな声ではっきりと声掛けをしたり、繰り返し踊ったりしたことや、前で分かりやすく大きく動いたことで、手を腰に当て、肘を伸ばそうとする姿は見えた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
音出しのために生徒が長い時間待つことがないように、事前に踊りたい箇所のタイムを確認しておいたことで、スムーズに音出しができたと思う。音に敏感な生徒のために、ワイヤレススピーカーを準備したが、最大音量にしても広い場所では限界があった。持ち運びしやすいスピーカーだったので、スピーカーの置く位置を生徒の列の間に置く等、もう少し工夫ができたのではないかと思った。 リボンを持っていない空き手を腰に当てるようにしたことや肘を伸ばしてリボンを動かすこと、また体重移動することを確認し、声掛けしながら踊ったことで動きが大きくすっきりと見えるようにした。			
研究協議における意見・アドバイス			
生徒は、前での動きをよく見ていたと思う。それは、分かりやすい指示だったし、聞き取りやすい声の大きさだったように思う。最初、曲の音が小さいかと思ったが、説明をしながらだったので生徒が分かったように思う。 たくさん褒めていて生徒のやる気も出て、楽しそうに踊っていたが、上手くできている生徒を例に前に出させる等、さらにやる気をもたせることもできるのではないかと思った。生徒は自分の姿を見ることができないので、前からどのように見えているか動画を撮り、見せる授業を取り入れてみるのも効果的だと思う。 個々が上手に動けるためにS Tを上手く使っていくとよい。 Bluetoothでのスピーカーは、移動ができるので生徒に近い場所で音出しをするのも良かったのかもしれない。			

(1) 公開授業 14

ア 体育科「玉入れ」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は中学部1年生から3年生の27名(男子15名、女子12名)で構成されている。障害の程度には幅があり、口頭説明では理解することが難しく見通しがもちにくい生徒、軽度の肢体不自由を有する生徒など複数在籍している。そのため、手順書や絵カード、モデリングなどの視覚支援を取り入れた授業作りが重要である。中学部には、比較的体育の授業に積極的に取り組む生徒が多いが、失敗することへの恐怖心や運動に対する苦手意識をもち、意欲的に取り組むことが難しい生徒もいる。日頃から体育やクラブ活動以外でボールに触れながら遊ぶ生徒は限られ、昼休みには、鬼ごっこや教室でゆっくりと過ごすことを選ぶ傾向が強くなり、必然的にボールに触れる機会が減少するとともに、ボールに関する興味・関心も薄らいでいると思われる。

b つけたい力

前述のように運動の得意な生徒から苦手な生徒まで、幅広い実態の生徒全員に、玉入れの楽しさを味わってもらいたい。かごにボールが入る、入らないというよりその方向をねらってボールが投げられるようになってほしい。そのため、少しでも遠くへボールを投げることができるよう、投げ方も体得してほしいと思う。また、この競技では、円のラインの外から投げるというルールを守ることができるようになってほしい。運動能力の高い生徒には、やみくもにドンドン投げるのではなく、速さと共により正確にかごを狙ってボールを投げ、続けて入れることができる巧緻性を高めながら自信を深め、体育全般に対して前向きに臨む態度や気持ちを学校生活全てにつなげていってほしい。また、運動の苦手な生徒も少しでもボールに触れていく気持ちを培ってほしい。

また、投げ続けて1個もかごに入らないとしても、すぐにあきらめたり、面白くないといった態度を表面に出さず、最後まで頑張り続ける根気強さを身に付けていってほしい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

- ・最初に運動会での競技で「玉入れ」という話を聞いた時、真っ先に浮かんだのは通常の高いところのかごに玉を入れる方法を考えた。しかし、よくよく生徒の実態を考えると、それは実際無理ではないかと考え、まず事前に自分のクラス(中3)の生徒7名に教室にて、1名ずつ挑戦してもらい高さや距離、時間等の参考とした。
- ・生徒の実態を考慮し、高い位置と低い位置の2か所にかごを設置し、そのままでは競技すると必然的に運動能力の高い生徒も全員低い方のかごをねらって投げるのは当然と考えた。そこで、能力の高い生徒には、高い方のかごをねらってほしいので、意欲をもたせるために高い方は1個3点、低い方は1個1点とし、得点に差をつけた。採点方法は合計得点とした。
- ・2つの円を設定することとした。円の外から投げられることをルールとして初めに大きな円(5m)から投げ、次に小さな円(3m)から投げるようにし、かごに入れようとする意欲が高まるようにした。
- ・最初は玉入れの定番であるおじゃみを使用してはどうかと考えた。しかし、おじゃみは少し重く投げるのには安定感があるが、転がったボールを拾う時に上位方から落ちてくるおじゃみが頭や体に当たると、そのことに抵抗がある生徒もいると考え最も抵抗の少ないカラーボールを使用することとした。

b 生徒への配慮

- ・得点を競う競技なので、とにかく1個でもボールを多く投げ、得点できるチャンスを作ることができるように、その都度手で1個1個ボールを拾っていたのでは時間がかかるため、小さな手持ちのかごを準備し、それにボールを入れてから投げるようにした。
- ・運動が苦手でもどうしても短い距離しかボールが投げられない生徒には、特別ゾーンを設定し教師がマンツーマンで声掛けや身振り等の支援を受けながら投げられるようにした。

- ・特別ゾーンから試みても何をするのかまだ理解が難しい生徒については、かごのすぐ近くまで行き、まず教師がボールをかごに投げ入れる動作を見せてから、生徒に促すように配慮した。
- ・紅白1組ずつで一斉に競技すると密になりすぎることと、隣との距離が狭くなると競技しづらくなるのではと考え、それぞれの組を2組に分けて競技するようにした。また、競技を少しでも盛り上げられる、競技をしない組は後方で椅子に座って応援するようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

- ・多くの生徒が繰り返しの練習や声掛けにより、円の外から投げるということを意識してくれるようになった。
- ・運動能力の高い生徒は、かごにボールを入れる正確さがどんどん増し、意欲も高まった。また、自分のことだけでなく、運動が苦手なボールを拾うのが遅い生徒に対し、素早くボールを拾って手持ちのカゴに入れてあげるといった思いやりのある行動が見られる生徒もいた。
- ・苦手な生徒も特別ゾーンの設置により、少しずつかごが視界に入るようになり、すぐには上手くいかないものの、練習や競技を繰り返していく内次第に目的のカゴに向かってボールを投げることができるようになった。
- ・普段は仲良しの二人が、運動になると一方の能力が高いため、もう一方の生徒は〇〇君には勝てないと何をやってもすぐにあきらめてしまっていたが、遠い円から何個か入れることができ、それが自信につながった様子で、他の体育の学習内容について目に見えて積極性が見られるようになった。また、とても良い笑顔が多く見られるようになり、更に昨年と比較し走るのが本当に速くなったことに驚かされている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

- ・特別ゾーンを使う生徒は、時間をかけて少しずつ距離を伸ばしていき、最終的にはみんなと同じラインから投げることができるようにする。
- ・能力の高い生徒は練習時において、円から少しずつ後ろに下がりどれくらいの力で投げたらよいかを感覚で覚えながら、遠い距離からでもボールをかごに入れる技術を高めていく。
- ・生徒の興味・関心を更に深めることができるようにするため、安全性に更に配慮しながら前述した玉入れの定番であるおじやみを使って競技することができるようにする。

b 対話的な学びの視点から

- ・指導者側の一方的な競技内容や方法の提示だけではなく、生徒にアンケートも取り、「もっとああしたい、こうしたい」という意見を出してもらい、更に楽しい玉入れにしていく。
- ・運動の得意な生徒のグループ同士、苦手な生徒のグループ同士の対戦も行い、それぞれに応援しながら競技を盛り上げていく。
- ・教師の指導ばかりではなく、グループのリーダーを決め、そのリーダーを中心に練習方法や作戦等を考えさながらチームワークにつげていく。

c 深い学びの視点から

- ・競技の時間もさることながら、練習時間も多し、得意な生徒には更にその力を伸ばしていくことができるようにする。あわせて、苦手な生徒に対し、教師の支援ばかりではなく得意な生徒が苦手な生徒の手助けをすることで、相手を思いやる心を育てながら仲間意識を高め、心身の調和的発達につなげていきたい。
- ・運動能力の高い生徒は、ボールをかごに向かって投げる速さや落ちたボールを拾う速さも素早いものがあるが、中間層の生徒たちにはできる限り速く動くことでボールを拾うことができれば、その分カゴに向かって投げる回数も増すため、必然的に全的にボールがゴに入る確率も高くなるということ理解し、実践につげていってほしい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

- ・主体的な学び、対話的な学び、深い学びそれぞれについて簡潔に分析された上で一覧表にされているので、大変参考になった。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健体育	授業者	MT ST (13名)
学部・学年・組	中学部1～3年生	対象 児童生徒数	27人
日時	令和2年10月20日(火) 3時間目(10:50～11:35)	場所	グラウンド (雨天・体育館)
単元名	運動会の練習「玉入れ」		
本時の目標	・目的のかごをねらって、ボールを投げる。 ・円の外から投げるというルールを守る。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 E球技 ア ウ ・保健体育科 2段階 E球技 ウ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 整列、挨拶をする。 2 本時の学習内容、目標の確認をする。 3 準備運動をする。(ラジオ体操)	・体育委員が号令をかける。 ・ホワイトボードを使用する。 ・主指導者が手本を見せる。	
展開 35分	4 ・紅白(班分け)をする。 ・ルール、採点について説明する。 5 玉入れの練習をする。 (各班・・・1分30秒) 6 (1) 玉入れの競技をする。(競技のない班は応援) (1分30秒) (2) 採点する。	・ホワイトボードを使用する。 ・大きな声ではっきりと伝える。 ・応援をしっかりするように声掛けする。 ・ルールを守るように声掛けする。 ・生徒に計算するように促す。	
まとめ 5分	7 整理運動をする。 8 目標の振り返りをする。 9 終わりの挨拶をする。	・主指導者が簡単な見本を見せる。 ・生徒に発表を促す。 ・体育委員が号令をかける。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 6 （１） 玉入れの競技をする		・運動の得意な生徒、苦手な生徒共、自分の能力に応じた高さのかごを設置。高い方（難しい）のかごは、生徒の意欲を高めるため１個３点とした。また、沢山入れたという達成感を味合わせるため、手持ちのかごを準備し、それにボールを入れてから数多く投げるようにした。また、円の大きさも大・小２段階にして、意欲を高めることができるように配慮した。	主－１ ①② 対－２ ① ３ ②
展開 6 （２） 採点する		・玉入れの競技での採点では、１個ずつかごから出しながら皆で数えるのが通常であるが、時間の短縮を図ることと、２種類の点数を用いるためその場での採点が難しいこと等から、点数を計算することとした。	主－１ ②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒A	目的のかごに向かって、ボールを投げることができる。	５mと３mの円で実施したが、５mでは教師が側で声掛けしながら投げるように促しても、目的物が少し遠くてかごの方に集中できなかった。３mでは、目的のかごがグッと近くなったので、その方向に投げようとしていたが、入らなかった。	C
生徒B	積極的に手を上げて採点の計算をすることができる。	日頃から何事においても手を上げて発表することが好きであり今回も迷わずに手を挙げたが、掛け算と足し算が合わさっていたので少し戸惑ってしまい、後輩に助けてもらった。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
中学部の運動会（体育発表会）の種目に「玉入れ」が選考され、担当者から玉入れの担当の要請があった時、真っ先に思い立ったのは通常の競技方法だった。しかし、生徒全体の実態を考慮した時、全生徒が上方に向けて玉を投げるのは難しいと考え、上下２か所にかごを設置することとした。両方のかごも同じ点数（１個＝１点）であれば、当然全員が低い方のかごを狙うのは当然であろうと考え、能力の高い生徒に狙ってほしくて、高い方のかごは（１個＝３点）とした。また、最初大きな円から次に小さな円へと、かごに１個でも多く入れようという生徒たちの意欲を高めさるよう配慮した。実際生徒たちは頑張ってボールを投げるができたと思うが、やはり心配した点は、採点方法だった。点数の計算という採点では盛り上がりには欠け、再考する必要がある結果となった。			
研究協議における意見・アドバイス			
２班に分けての取り組みでは、見ている組の生徒が少し間延びするのではないかと。１組で一斉に競技し、マスクを着用するようにとの指摘をいただいた。			

(1) 公開授業 15

ア 音楽「仲間と動きを合わせてみよう！」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は中学部2年14名おり、口頭説明での理解や、見通しをもつことが難しい生徒、軽度の肢体不自由を有する生徒などが在籍している。音に対して敏感な生徒、急に大きな声を出す、教室を動き回る、外の様子が気になる、発作の可能性のある生徒など障害の程度には幅がある。

b つけたい力

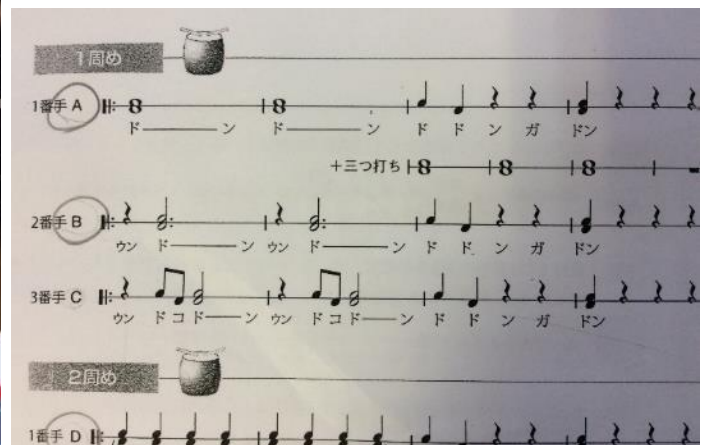
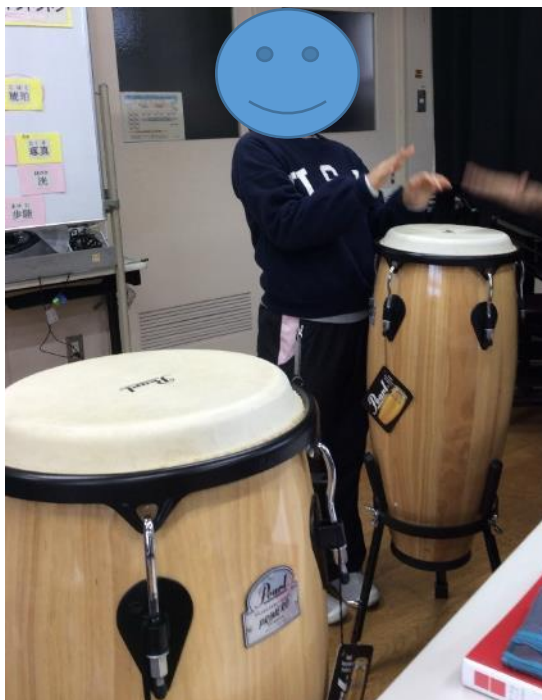
音楽の授業を通して、以下のような目標をもち、指導計画を立てた。

- ・生徒が、教師と音や音楽を通してのコミュニケーションを楽しんだり、演奏を通して得られる一体感を味わったりできる力をつける。身体表現では、示範を見て模倣したり、拍やリズムを意識したりして、手足や身体全体を自然に動かす技能を身に付けることができる。更に速さの変化に気付くことができる。文字譜や簡単な楽譜を見てリズムを意識して演奏する技能を身に付け、友達の楽器の音を聴いて、タイミングや音を合わせる力を付ける。使途が表したい思いや意図を実現させるために必要な技能を習得することへの大切さを感じるようになる。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

- ・4～5名のグループに分け、毎回リーダーを決めるようにし、みんながリーダーの経験ができるようにした。
- ・人前に立つことが苦手な生徒への工夫として、まずは席の近くに楽器を設置、授業ごと少しずつ楽器の位置を前へ動かし、自然に人前に立つようにした。
- ・タイマーを使い、時間内での練習やリーダー決め、また時間いっぱい練習することを経験できるようにした。
- ・個々の力に合わせたグループに分けにした。また、教師が関わらないグループを作り、生徒同士の会話を大切に、生徒自身が考え、声を掛け合う活動を経験できるようにした。



b 生徒への配慮

- ・手のひらを使って演奏できる楽器を選び、無理なく活動できるようにした。
- ・音、特にデジタル音や大きい音が苦手である生徒の様子をしっかりと見るようにし、無理のない内容を考えた。
- ・簡単な楽譜（図や言葉）「ドーン」「ドンドン」などを使った。（下に示している）

ドーン ドーン

ドドンガ ドン

- ・机の並べ方の工夫によって、後ろの席からも主指導と目が合うようにした。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

- ・準備運動「肩・耳・空」では、ピアノの音に合わせて、肩や耳を触ったり、空では両手を上へ高く上げる動作ができ、ピアノのリズムの変化を聴きとり、それに合わせることができるようになった。
- ・曲「龍神太鼓」を使った打楽器演奏では、リーダーの掛け声で順番にソロ演奏、続けて合奏をすることができるようになった。
- ・落ち着いて席に着き、主指導に注目するなどして活動できた。
- ・常に同じ生徒がリーダーになるのではなく、ほとんどの生徒がリーダーの経験することができた。
- ・リーダーに求める内容を説明することで、リーダーの仕事に興味をもつことや知ること、挑戦することができるようになった。また、リーダーに挑戦することができると、リーダーの資質への挑戦ができ、真剣にリーダーを選出することができた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

- ・ST との打ち合わせを大切に、支援を適宜に減らしていく。
- ・グループ分けには慎重になりつつ、固定しないようにしていく。
- ・新しく備えられたモニターを、今後活用していきたい。

b 対話的な学びの視点から

- ・45 分の授業時間の中で、音楽中心の内容時間と生徒同士の対話時間のバランスを考えていく。
- ・意思表示をしやすい質問や答え方の工夫をする。
- ・評価の仕方の工夫によって、生徒が評価しやすい環境にする。
- ・録画などを適宜に使い、友達の良さや失敗を見ることで、自分の活動を再度確認できるようにする。

c 深い学びの視点から

- ・あえて方法を伝えず、生徒が自分たちで考え、工夫できる活動内容を入れるようにする。
- ・音楽を学習するから、学校での学習を糸口に生涯学習へつなげていけるようにする。
- ・音楽の内容に合わせて、学ぶ姿勢や楽しむ姿勢、意欲的に活動することへつなげていけるようにする。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点学習活動に含まれているかの確認がしやすくなっている。教科音楽で考えたとき、音楽的な技術活動だけでなく、コミュニケーションや学習により得た知識・技能を応用する、身に付けたことを生活にもつなげていく意識がよりはっきりした。

(カ) 実践例

令和2年度 音楽 学習指導略案

教科・領域名	音楽科	授業者	MT ST 5名
学部・学年・組	中学部 2年	対象 児童生徒数	14人
日時	令和2年10月19日(月) 5時間目(13:30~14:15)	場所	音楽室
単元名	仲間と動きを合わせてみよう！		
本時の目標	・友達の楽器の音を聴いて、リズムや速度を合わせて演奏できる。 ・簡単な楽譜(図や言葉)を見たり、聞いたりして演奏できる。		
学習指導要領との関連	■中学部学習指導要領 ・音楽科 1段階 A表現 イ器楽(ア)(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦㊦ ウ音楽づくり(ア)㊦㊦(イ)㊦㊦(ウ)㊦ エ身体表現(ア)(イ)㊦(ウ)㊦㊦㊦ B鑑賞 ア(ア)(イ) 2段階 A表現 イ器楽(ア)(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦㊦ ウ音楽づくり(ア)㊦㊦(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦ エ身体表現(ア)(イ)(ウ)㊦㊦㊦ B鑑賞 ア(ア) ■小部学習指導要領 ・音楽科 1段階 A表現 ア音楽あそび(ア)(イ)(ウ)㊦㊦㊦ B鑑賞 ア音楽あそび(ア)(イ) 2段階 A表現 イ器楽(ア)(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦㊦ ウ音楽づくり(ア)㊦㊦(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦ エ身体表現(ア)(イ)㊦(ウ)㊦㊦㊦ B鑑賞 ア(ア)(イ) 3段階 A表現 イ器楽(ア)(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦㊦ ウ音楽づくり(ア)㊦㊦(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦ エ身体表現(ア)(イ)㊦㊦(ウ)㊦㊦㊦ B鑑賞 ア(ア)(イ)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始まりの号令(ピアノ)	・音楽室に入るときの挨拶を大切にしている。 ・集中するように、速度を考え、ピアノに向かって歩く。 ・掲示に注目できたか確認、タイミングを合わせやすいように促し、目標を読む。 ・生徒のみのグループ(クラスごとではない)で、自分で考え、直接友達と会話する場面を大切にする。	
展開 25分	2 本時の学習内容を知る		
	3 目標を知る		
	4 身体表現 「肩・耳・空」		
	5 器楽演奏 曲「龍神太鼓」より ア グループメンバーの発表 イ リーダー決め(グループ内) ウ 演奏順決め(グループ内) エ 発表時の目標を知る オ グループ練習		

まとめ 5分	カ グループ発表（友達の演奏を聴く） 6 振り返り 7 終わりのあいさつ	・「ドーン」「ドンドン」文字譜を使うことで、言いやすく、取り組みやすいようにした。 ・打楽器を直接手で演奏し、音を鳴らした実感や、身体に響きを感じられるようにした。 ・STは、様子を見て支援を少なくしていく。
-----------	--	--

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
9 グループ練習		・クラスの枠ではなく、生徒のみのグループでは、教員からの支援を少なくし、自分で考えること、直接友達と会話することを大切に、生徒の成長をねらう。 ・毎回リーダー決めをするようにした。 ・タイマーを使い、時間内での活動を意識するようにした。	主Ⅰ 1 ①②③ 2 ③ 3 対Ⅱ 1 ①② 4 ①②
10 グループ発表（友達の演奏を聴く）		・他のグループの評価に参加することで、より自分ができているかを意識できることをねらいとした。 ・毎回の鑑賞により、評価の答え方を知ることができるようにした。	対Ⅱ 2 ①② 3 ②③④ 4 ①② 5 ②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
H	・音楽に合わせて準備運動ができる。	「肩・耳・空」では、ピアノの音に合わせて、両手を動かす活動ができた。テンポの変化に気づき、特にゆっくりのテンポでは、自信をもって活動できている。	A
N	・生徒のみのグループでは、自分の役割を果たすことができる。	練習や発表では「次～」「全員～」と、声掛けができ、グループでの中心的存在として、集中して取り組むことができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・速さや長さなど、更にリズムを整えていきたい。 ・楽器の片付けに取り組んでいきたい。 ・簡単な楽譜（図や言葉）を今後、音符や楽譜にしていければと思う。			
研究協議における意見・アドバイス			
・クラス以外のグループ分けで、他のクラスの友達の意見を聞けるところが良い。 ・生徒だけで話し合いの、活動しているところが良い。生徒が昼休みなどで、音楽の話をしていることがある。 ・『対話的な活動』コロナ禍の中、どうすれば生徒たち同士が関わりをもち、互いの意見やアイデアを共有していけるかに取り組み、より楽しい授業を期待する。			

4 おわりに

(1) 実践を通して

本年度中学部では、「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした生活力を育てる取組」を研究テーマに、全教科を対象として代表者による2回の研究授業と主指導者全員による1回以上の公開授業を行った。中学部の教師が、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点を意識した授業実践や事後協議を通して授業改善に取り組んできたことは大きな成果であった。一方で、公開授業については通常の授業時間内で行われるため、他の教師が参観することが難しいといった状況が生じた。また、授業によっては主指導者1名の場合もあり、指導者及び補助者間での事後協議を実施することができず、その場合は参観した管理職に課題やアドバイスを聞いて、授業改善に向けてのまとめを作成する必要があった。今後、より良い授業づくり・授業改善につなげていくためには、特に同じ教科を担当する教師が参観できるようにして、事後協議を十分に行い、授業者と参観者の両者の学びにつなげる工夫が必要である。

(2) 学習過程分析表の改善に向けて

新学習過程分析表について、中学部では前年度に比べ要点がまとまっており一覧表として確認できるため使いやすいという意見が多かった。具体的には、授業を計画する段階で3つの視点を整理したり、ねらいたいポイントや手立てを考えたりする際に活用することができた等である。

課題としては、「深い学び」を学習指導略案の「注目してほしい学習活動の重視した主体的・対話的で深い学びの視点」に取り入れることが難しく、5名の学習指導略案でしか選択されていなかった点である。その理由としては、公開授業で行なった一回の授業だけでは扱ったり学習評価をしたりすることが難しいためではないかと感じる。また、新学習指導分析表の「深い学び」の内容を学習活動としてどう具現化するのかが分かりづらいのではないかと思われる。さらに、深い学びにつながっているかを評価するためには、例えば数学の授業で学んだことを他の教科や日常生活において般化されているかを確認する必要があるので、各教科の主指導者と生徒の担任が情報を共有することが必要であるとの意見も寄せられている。

この反省を元に来年度は、新学習過程分析表の深い学びの項目を授業の活動で取り入れやすい内容に見直す必要があると考える。

V 高等部の研究

高等部テーマ

「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」

1 はじめに

高等部では卒業後の自立と社会参加に向け、生徒一人一人に必要な資質・能力を育むために様々な取組を進め、「自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身に付けた生徒」の育成をめざしている。今年度は「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」（第2期）というテーマを設定した。

なお、学部テーマに沿って学年ごとに研究テーマを設定し実践に取り組んだ。学年ごとの研究テーマは以下の通りである。

高等部1年テーマ：キャリアプランニング能力を高める取組

高等部2年テーマ：卒業後の自立に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり

高等部3年テーマ：伝え合う力を高めるための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり

2 研究経過

（1）研究内容

ア 将来の自立と社会参加に必要な資質・能力の育成に向け、生徒一人一人に応じた指導や支援のあり方を検討する。

イ「主体的・対話的で深い学び」の視点について教師間の共通理解を深めるとともに、授業改善にどのように結びつけていくかを検討する。

ウ 実践から問題点や課題を明らかにする。

（2）研究方法

ア 新しい学習指導略案と新学習過程分析表を用いて、全教科を対象に年2回の研究授業及び年1回以上の公開授業を行う。

イ 各学部の代表者による研究授業（年間2回）に取り組む。「授業改善チーム」の参観を継続するとともに、授業をビデオ撮りしたものを事後協議に活用し、協議を行う。

ウ 全クラス又は全グループが学習指導略案、新学習過程分析表を使用した公開授業を実施し、事後協議までを行う。普段の授業においても定着させていく（略案で年間1回以上）。

エ 外部専門家の招へい…指導・助言、「主体的・対話的で深い学び」の検証を行う。

オ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

(3) 研修計画

ア 学部研究日を月1回設定する他、学年での研究日を随時定める。

イ 研修の日程

月日	研修内容
4/24	学部研究テーマ等協議
5/11	年間研究計画等協議
6/5	学部研テーマ、年間研究計画の確認、各学年での実践
7/22	研究授業①高等部3年生
7/31	アセスメント①「キャリア発達段階表2020改訂版」
9/8	学年研（公開授業の確認、事後協議）
10/6	学年研（公開授業の確認、事後協議）
11/13	学年研（公開授業の確認、事後協議）
12/1	実践集録についての確認
12/11	研究授業②高等部3年生
1/22	実践集録原稿作成
2/7	研究の反省
3/3	アセスメント②「キャリア発達段階表2020改訂版」

3 研究授業研

(1) はじめに

卒業を控えた高等部3年生に国語の授業を通して、「伝え合う力」を高め、日常生活で活用する能力と態度の育成を目指し、1学期には「電話を利用しよう」、「2学期には「道案内をしよう」という単元を取り上げることとした。

(2) 研究授業

ア 第1回目 国語科「電話を利用しよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は、高等部3年（国語Bグループ）に所属する男子生徒7名、女子生徒2名の合計9名である。この9名は、普段はA～C組と別々のクラスに所属しているが、国語の学習グループとしては昨年度から同じメンバー構成となっているため、仲もよくグループ活動に協力的な生徒が多いのが特徴である。高等部3年生は、今まで3度の現場実習を体験しており、事前に作成した伝達内容を書いたメモを見ながら、実習先から電話をかけた経験のある生徒がほとんどである。

コミュニケーション面では、全員に発語があり、自分の要求を言葉で伝えたり、言語指示で行動したりすることができる。ただ、中には自分の興味のあることに夢中になり、授業中、教師の指示を聞かない生徒もいる。また、普段の会話や発表するときに、声が小さかったり、非常に早口になってしまったりと聞き手に配慮した話し方が苦手な生徒もいる。

b つけたい力

これからの生活でも利用することが多くなるであろう電話利用の取組を通して、伝え合う力を養っていきたいと考え、取り組むこととした。

「知識・技能」

- ・適切な言葉で相手に伝えることができる。
- ・メモを取ることの必要性を理解し、伝えたいことや相手からの用件を正しく聞き取ることができる。

「思考力・判断力・表現力等」

- ・伝え合おうという気持ちをもつことができる。
- ・できたことや頑張ったことを発表することができる。

「学びに向かう力・人間性等」

- ・自分の役割を理解し、友達と協力して活動することができる。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

「主体的学び」

・電話をかけるときのメモづくりをするときに、実際に電話をかける場面を想定して作成した。また、なかなか自分で考えて書くことが難しい生徒には、黒板にいくつか例を提示して選択できるようにした。

- ・電話の練習には、本物の電話を使用し、興味をもって取り組めるようにした。

「対話的学び」

・電話を掛ける人、受ける人など役割にそって電話をかける練習をすることで、様々な立場から電話の利用について考える機会とした。

- ・相手にきちんと伝わる話し方を意識できるよう、「評価者」という役割を設定した。

「深い学び」

・相手に伝わる話し方や相手の話を聞き取る力を養うことで、将来電話利用の可能性が広がると考えた。

b 生徒への配慮

自分の思いを言葉で表現することができるよう、自分たちでせりふを考えられるように、黒板に例を掲示し参考にしやすくした。また、相手に伝わるように話すために必要なことを理解しやすいよう、教師が良い例、悪い例を実演し、生徒たちが聞きやすい声の大きさやスピードなどを考えやすいようにした。練習風景の動画視聴や他者からの評価をもとに自分の活動を振り返りやすくした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

「知識・技能」

- ・自分の伝えたい内容をメモに書き、電話をかけるときの原稿とすることができた。
- ・相手が聞き取りやすい声の大きさや、話すスピードを意識することができた。

「思考力・判断力・表現力」

- ・グループ活動を通して、自分の役割を担うことができた。
- ・練習風景のビデオや振り返りシートの活用で自己評価や他者評価につながった。

「主体的に取り組む態度」

- ・設定された時間の中で、課題に取り組もうとする姿勢がみられた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

今回は、「学校に欠席連絡をする」という設定で全員練習を行ったが、生徒たちの実態に合わせてもう少し自由な設定にしてもよかった。

b 対話的な学びの視点から

今回は、各グループの生徒に対する評価をしたが、自分のグループ以外の生徒に対する評価もする場面を増やしてもよかった。

c 深い学びの視点から

せっかく、活動の様子を撮影して振り返りをしていたが、時間配分が少なく十分な振り返りがで

きなかったため、1つの授業には1つの活動だけを取り入れて、振り返りを丁寧にしたほうが生徒に取ったら良かったかもしれない。



写真1
伝達事項メモの作成



写真2
電話練習（発表）



写真3
電話応対手順書
（受ける人用）

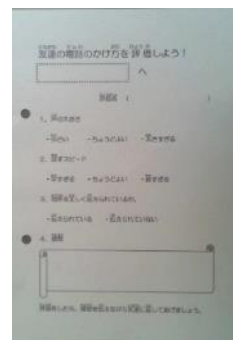


写真4
評価者用シート

(オ) 実践例

令和2年度 高等部3年（国語Bグループ）国語科学習指導略案

教科・領域名	国語	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	高等部3年Bグループ	対象児童生徒数	9名
日 時	令和2年7月22日（水） 3時間目（10：50～11：35）	場 所	高等部学習室
単元名	「電話を利用しよう」		
本時の目標	・相手に伝えたいことをメモに整理することができる。 ・相手にきちんと伝わる話し方ができる。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・国語 1段階 A聞くこと・話すこと イ、エ 2段階 A聞くこと・話すこと イ、エ ■ 高等部学習指導要領 ・国語 1段階 A聞くこと・話すこと ウ、エ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 「電話を利用しよう」スケジュールを確認する。 3 本時の目標を知る。 『相手に伝えたいことをメモに整理する』 『相手にきちんと伝わる話し方ができる』	・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・授業スケジュールを黒板に提示し、流れを伝える。 ・黒板に目標を掲示し、確認する。	
展開 30分	4 伝達事項メモのポイントを振り返る。 5 伝達事項メモを作成する。 学校に欠席する想定で、伝達事項メモを作成する。 6 作成した伝達事項メモをもとに、電話をかける練習をする。 ・3グループに分かれて行う。 Aグループ（生徒B、生徒E、生徒H） Bグループ（生徒D、生徒G、生徒I） Cグループ（生徒A、生徒C、生徒F） 7 各グループが順番に全体場で発表する。 Aグループ → Bグループ → Cグループ （時間がなければ、Aグループのみ）	・それぞれのポイントを提示することで視覚支援を行う。 ・各自プリントに記入できているかSTとともに机間巡視し、確認する。 ・終わりの時間を伝え、タイマー（3分間）で示す。 ・できるだけ自分たちで練習できるよう見守り、必要な場面だけ声掛け等の支援を行う。 ・各グループ①かける人②受ける人③評価者と役割分担し、順番に練習する。（2分×3回）（ビデオ撮影） ・実施する順番を伝え、前に出るよう声掛けをする。 ・発表グループに注目するよう声掛けをする。（ビデオ撮影）	
まとめ 10分	8 振り返りをする。 ・振り返りシートを記入する。 ・目標が達成できたかビデオを振り返りながら確認する。 ・感想を発表する。 9 終わりの挨拶をする。	・本時の目標が達成できたかを確認する。 ・頑張ったところを発表するよう声掛けをする。 ・次回は受けた電話の要件を正しく聞き取る練習をすることを確認し、次回の学習へつなげる。	

注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
展開5 伝達メモを作成する	・電話の流れやせりふを視覚的に示した手順書を示し、伝達メモを作成するために必要な情報を自分たちで取捨選択できるよう見守る。	主 1-②、③ 2-② 対 1-①、②	
展開6 作成した伝達事項メモをもとに、電話をかける練習をする。	・せりふを書いたプリントがなくても伝達メモを見ながら電話がかけられるように役割を決めて練習できるよう支援する。評価者という立場で客観的にみること、電話のかけ方を深く学べるようにする。	主 4 対 1-② 対 4-①、②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒B	・早口になりすぎることなく、相手にきちんと伝わる話し方ができているか。	・やわらかい言い方をする練習もしたらよい。 ・授業に集中できていないので、集中しやすい環境を整備したほうが良い。	B、C
生徒E	・相手に伝えたいことをメモに整理することができているか。	・ビデオでは、メモを書く様子が分からなかったもので、評価ができない。	—
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・今回は、「学校に欠席連絡をする」という設定で全員練習を行ったが、生徒たちの実態に合わせてもう少し自由な設定にしてもよかった。 ・振り返りの時間が十分に取れなかったので、時間配分を工夫する必要がある。			
研究協議における意見・アドバイス			
・最初にロールプレイなどで、良い例、悪い例を示してあげるとよかった。 ・日頃から、ゆっくり話す活動を取り入れるようにすればよい。 ・せりふのシートがあることで、電話対応のせりふが分かりやすかった。 ・メモを作る練習を何度かしてから実施してもよかった。 ・実物の電話を使用することで、電話学習をする雰囲気が出てよかった。 ・タイマーを利用することで、見通しをもって活動することができていた。			

イ 第2回目 国語科「道案内をしよう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年生は、日々の学校生活や現場実習などを通して、伝えたいことを相手に正確に伝えることの大切さや、人の話をしっかり聞くことの大切さを学んできている。第1回目で実施した「電話を利用しよう」の取組の後、現場実習先への事前挨拶の電話をする際、先方から事前に用意されたせりふにない内容で話しかけられても、しっかり相手の話を聞きながら丁寧に対応している様子が見え始めるようになってきた。

b つけたい力

今回は道案内の取組を通して、伝え合う力を養っていきたいと考え取組んだ。

「知識及び技能」

- ・相手の反応を確かめながら、丁寧に話すことができる。
- ・発表者の説明を正しく聞き取り、地図上の情報を読み取りながら目的地までたどり着くことができる。

「思考力・判断力・表現力等」

- ・伝え合おうという気持ちをもつことができる。
- ・友達の良いところを発表することができる。

「学びに向かう力・人間性等」

- ・分からなくなったときにすぐに質問することができる。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

「主体的な学び」

- ・道案内メモを作成するときには、人形やミニカーなどを使い、実際に地図上の道を通って目的地まで進めながら文章を作成するようにした。
- ・黒板に道案内をするときに使うと便利な言葉を掲示し、確認しやすいようにした。

「対話的学び」

- ・道案内する際、一方的に説明するのではなく、相手が理解できたか確認しながら話すことに重点を置いた。
- ・道案内を受ける側の生徒は、分からなくなったらすぐに質問するよう促した。

「深い学び」

- ・相手に伝わる話し方を心掛けたり、相手の話を聞き取ろうとする姿勢を大切にすることにより、伝え合う力が育つのではないかと考えた。

b 生徒への配慮

全員が授業の目標を達成できるように、以下のように細かく目標を設定しながら授業を進めていった。

① 教師の道案内を聞きながら、地図上で目的地までたどり着く練習をする。

始めのうちは地図上の左右が理解できない生徒が多かったが、必ず進行方向が上になるように地図を動かすことを意識付けたり、地図上を指や鉛筆の線で進むのではなく、前後左右が分かるように人形やミニカーを動かして進む練習を重ねることにより、友達の道案内を聞いて目的地までたどることができるようになった生徒が多くなった。

② 道案内の例文を参考に道案内の原稿を作成する。

難易度の異なるゴール地点を多数設定し、生徒自身が自分で案内可能なゴール地点を選択し、例文を参考にしながら全員が道案内の原稿を作成することができた。完成した案内文は、教師と一緒に地図を進みながら確認し、分かりにくい部分を修正することができた。

③ 自分の作成した道案内の原稿をもとに友達に伝わるか小グループで検証する。
小グループで道案内の練習をし、自分の説明の足りない部分に気付いたり、友達の表現の良い部分を自分の道案内原稿に取り入れることができた。

④ 作成した道案内の原稿をもとに全体場で発表する。
一人ずつ全体場で発表し、その都度発表の良かった点や改善点を友達や教師から聞くことで友達の発表方法の良いところをまねしたり、2回目以降は気を付けて発表ができるようになった生徒が増えた。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

「知識・技能」

- ・自分の伝えたい内容をメモに書き、道案内をするときの原稿とすることができた。
- ・一方的に説明するのではなく、相手が理解できたか途中で確認しながら話すことができた。

「思考・判断・表現」

- ・友達を目的地まで誘導することができたか確認することで、自分の説明の仕方を振り返ることができた。

「主体的に学習に取り組む態度」

- ・友達の説明を聞きながら、目的地までの道をたどろうとする姿勢が見られた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒の実態に合った視覚支援を行うこと。今回は、単元を進める中で授業で使用する地図を2回作り直したり、進行方向を理解しやすいように人形やミニカーを利用することを途中から取り入れたが、始めから配慮できるようになるといいと感じた。

b 対話的な学びの視点から

今回の取組の中で、発表者の良いところを述べ合う取組を行い、「友達の良いところをまねして自分の道案内の文章をさらに分かりやすく直してみよう。」という投げかけをしてみたが、授業時間が足りず、十分に対応ができなかった。一人一人の文章を全員で添削してみるなどの取組にしても良かったかもしれない。

c 深い学びの視点から

今回の取組では、地図を使って道案内をしたが、地図で説明した後に、実際に今いる部屋から別の部屋まで友達を案内することができるのか挑戦してみたり、ICT機器を活用し、地図アプリを使って実際の道路を画面上で進む活動を取り入れてみるなど、今回の道案内の学習を実生活に応用できるか、授業内容を般化できるような場面を設け、生徒の日常生活に生かしやすくする取組を入れることで深い学びにつながるのではないかと感じた。



写真5 道案内の発表



写真6 地図（完成形）



写真7 人形&ミニカー



(オ) 実践例

令和2年度 高等部3年（国語Bグループ）国語科学習指導略案

教科・領域名	国語	授業者	MT ST2名
学部・学年・組	高等部3年Bグループ	対象児童生徒数	9名
日 時	令和2年12月11日（金） 3時間目（10：50～11：35）	場 所	高等部学習室
単元名	「道案内をしよう」		
本時の目標	・相手にきちんと伝わる話し方ができる。 ・友達の説明を正しく聞き取り、目的地までの道順をたどることができる。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・国語 1段階 A聞くこと・話すこと イ、エ 2段階 A聞くこと・話すこと イ、エ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 「道案内をしよう」スケジュールを確認する。 3 本時の目標を知る。 『相手にきちんと伝わる話し方をする』 『友達の説明を正しく聞き取り、目的地までの道順をたどることができる』	・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・授業スケジュールを黒板に提示し、流れを伝える。 ・黒板に目標を掲示し、確認する。 ・前時に作成した道案内メモを準備するよう声掛けをする。	
展開 30分	4 道案内で大切なことを確認する。 5 「わたしの家はどこでしょう？」クイズをする。 ・一人ずつ前に出てきて、前時に作成した道案内のメモを、発表する。 ・発表者以外は案内通りに地図をたどり、正しい目的地につけるか練習をする。 ・発表者の案内が終わったら、自分たちのたどり着いた家を発表する。	・道案内で大切なことを黒板に掲示し、確認する。 ・案内の時に使うと分かりやすい言葉を覚えているか確認し、黒板に示す。 ・よい道案内の例をいつでも振り返ることができるように板書しておく。 ・相手の反応を確かめながら、丁寧に話すことができているか確認する。 ・手持ちの地図を進行方向にあわせて向きを変えるよう拡大地図を貼った大型ボードで示しながら伝える。 ・分からなくなったときはすぐに質問をするよう声掛けをする。	
まとめ 10分	6 振り返りをする。 ・どういう説明が分かりやすかったか発表し合い、道案内で大切なことに気付く。 ・目標が達成できたか確認する。 7 終わりの挨拶をする。	・生徒に意見を聞き、道案内で大切なことをもう一度確認する。 ・本時の目標が達成できたかを確認する。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 5 「わたしの家はどこでしょう？」クイズをする。		発表者が、事前に作成した道案内メモを見ながら相手が行動する順序に沿って正確で分かりやすく、相手に応じた話し方ができているかを確認する。道案内は一方的に説明するのではなく、相手が理解できたか確認しながら話すことが大切だと気付けるよう声掛けをしていく。発表者以外は発表者の説明を正しく聞き取り、目的地までたどり着くことができるよう進行方向に合わせて地図を動かしたり、ミニカーや人形を自分と見立てて地図上を動かしていくことで考えやすくする。	主 1－② 主 2－② 対 1－② 対 2－② 対 4－①、②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 C	・相手にきちんと伝える話し方ができているか。	・道案内の原稿を発表するときに、友達の反応を確かめながら説明することができていた。 ・ゆっくり大きな声で説明ができていたため、友達からも「聞きやすかった。」という意見が聞かれた。	B
生徒 G	・友達の説明を正しく聞き取り、目的地までの道順をたどることができる。	・友達の説明を聞きながら、分からないときは手を挙げて質問する場面が見られた。 ・友達の説明する左右方向と自分の進行方向での左右方向が分からなくなり、目的地までの道順をたどることができないことがあった。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・今回は、単元を進める中で授業で使用する地図を2回作り直したり、進行方向を理解しやすいように人形やミニカーを利用することを途中から取り入れたが、始めから配慮できるようになるといいと感じた。 ・今回の道案内の学習を実生活に応用できるか、授業内容を般化できるような場面を設け、生徒の日常生活に生かしやすくする取り組みを入れたらよかった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・「わたしの家はどこでしょう？」クイズの時に、事前に「必ず、配布の地図の進行方向を上に向けて、友達の話聞いていくこともポイントです。」と言っていたにも関わらず一人一人の確認指導が不十分だったため、STの教員とともに地図を見ながら確認していく作業をしていくことが、生徒の理解を助け、授業への参加意欲向上につながるのではないか。 ・生徒に配布された地図がではA4では、小さかったのでもう少し大きくしてあげると分かりやすかった ・今回の授業内容を生単など他教科とつなげることでより実践的な内容になるのではないだろうか。			

(3) まとめ

ア 2回の研究授業の実践(児童(生徒)の学びの姿)を通して

今回の研究の中で、「伝え合う力」の育成を目指し、1学期には「電話を利用しよう」2学期には「道案内をしよう」と2つのテーマで取り組んだ。

「電話を利用しよう」では、自分の伝えたいことを確実に伝えるためには、事前にメモを作ることの重要性を伝え、声の大きさや速さを意識しながら確実に伝えることを意識して取り組んだ。また、聞き取る力をつけるために伝言ゲームをしながら聞き取った内容をメモする取組につなげた。前述したように、学習後の電話練習では、相手の話をよく聞き、自分本位にならないように会話ができるようになった生徒が多く見られた。

「道案内をしよう」では、自分の伝えたいことが相手にきちんと伝わっているか確認をしながら話したり、相手から質問されたときに分かりやすく言い換えて説明をする経験をした。また、説明を聞く方も分からなくなった時にそのままにせず、すぐに質問する練習を重ねた。説明をする側、聞く側の両方を体験する中で、相手に伝わりやすい話し方について考えたり、分からなくなった時にすぐに質問することで解決することがあるということを理解できたのではないだろうか。

卒業後の生活に今回の取組が少しでも生かされ、自信をもって社会生活を歩むきっかけになればと感じた。

イ 新学習過程分析表を使ってみて

- ・注目してほしい学習活動にポイントを絞って活用することで、結び付けやすくなった。
- ・教科「国語」を指導する際にも、新学習過程分析表の中身は主体的・対話的で深い学びの観点を確認するのに役立った。

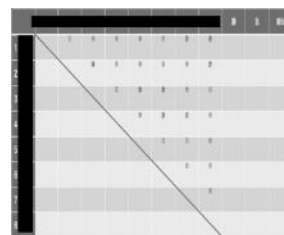
ア 保健体育「バドミントン 日高カップを開催しよう！」

a 生徒の実態

普段から明るく活発に過ごしており、体を動かすことが好きで水泳記録会では自分自身の記録の向上や、友達との勝ち負けを楽しみに授業へ参加することができており体育への期待感が高い。バドミントンはほとんどの生徒が部活動として球技の経験があり、休み時間等ではバドミントンをして遊んでいる姿がよく見られる。生徒にとって馴染みのあるバドミントンを通して、プレイすることの他に友達と協力して試合運営をすることで責任をもって自分の役割をやり通すヒントになるのではないかと考えて単元を設定した。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

審判時の仕事内容が分かるように手順書を使用した。

[illegible]

グ表と役割分担表

b 生徒への配慮

女子生徒が男子生徒と試合を行う際に、ハンデとして一部分教師が参加できるルールを設定した。

気持ち乗りにくい生徒の近くにサブの教師を配置して、いつでもフォローを行えるようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

継続して行った1分間のラリーゲームではランキング平均が約22回から約66回へと全体的に向上した。試合中にはどこを狙えば点が取れるのか、また、狙った場所に打つためにはどのようにすればいいのかを意識しながらプレイしている様子から、知識習得や技術向上が見られた。

主審、線審、点付けなどの係を全て生徒の役割としたことで、毎試合表から自分の係が何なのか確認し合い、自分の係に責任をもつことができた。

審判の係の場合はルールに則った判断をし、全員に伝わるようにコールしなければならない。ジャッジに自信がなくコールする声が小さくなってしまいう生徒もいたが、手順書や学習したプリントを見返し確認することで少しずつルールを覚え、大きな声でジャッジすることができた。できなかったことができるようになることで自信がつき、それによって責任をもって自分の役割を全うすることにつながった。友達へのアドバイスや、ミスに対する優しい声掛けが多くなった。自分の役割が無い時でも、友達の補助をするなど自然と協力している場面が多くなった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

各試合の役割とは別に毎時間の進行係を設置することで教師の働きかけを少なくでき、主体性を高められたのではないかな。

視覚支援としてパワーポイントだけでは生徒自ら確認できないため、ホワイトボードへも掲示を行うとより主体性を引き出したのではないかな。

b 対話的な学びの視点から

ラリーゲームを行う際に、ペアで目標確認する時間をもっと長くし、毎回記録表に記入するよう設定できればよかった。

c 深い学びの視点から

完成させたプリントを活用する機会がもっと多くあっても良かった。

ICT機器を活用して、試合や練習の様子を動画で撮影し、全員でポイントを話し合う振り返り場面を設定できればよかった。

リーグ戦表の説明時に、ペアまたはグループでの活動の方が理解を深められた。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

分析表からどこに該当するのか確認することで、各項目を意識して指導できることができた。

(か) 実践例

令和2年度 学習指導略案

教科・領域名	保健体育科	授業者	MT ST 1名
学部・学年・組	高等部 1 年 A グループ	対象 児童生徒数	7 人
日 時	令和 2 年 10 月 12 日 (月) 3、4 時間目 (10:50～12:30)	場 所	体育館
単元名	日高カップ (バドミントン) を開催しよう。		
本時の目標	・ルールを守りながらプレイすることができる。 ・ルールを理解して適正にジャッジすることができる。 ・友達と協力して試合運営をすることができる。		
学習指導要領 との関連	■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1 段階 E 球技 ア ウ 2 段階 E 球技 ア ウ ■ 自立活動 ・3 人間関係の形成 (1) (2) (3) (4) ・6 コミュニケーション (1) (2) (3) (4) (5)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 20 分	1 挨拶 (体育委員) 2 ラジオ体操 グループ別に分かれる。 3 本時の流れを確認する。 「日高カップ」という大会をすることを確認する。 4 活動 1 ・ネット準備 ・ミニラリーゲーム	・各種目のポイントをその場で声掛けする。 - モニターへ注目するよう声掛けをする。 ・意欲的に取り組めるよう前回までのランキング結果を発表し、掲示する。ペアが固定されないようにローテーションを行う。 ・理解度を知るため、挙手や教師の指名で 1 人ずつ回答できるよう設定する。 ・自分たちで動けるよう、試合毎の役割を掲示する。 ・自信をもって各役割を務められるよう、それぞれの手順書を用意する。	
展開 60 分	最高記録を参考に目標回数を考える。 ・審判方法の確認 プリントを頼りにスライドの問題に答える。 ・リーグ戦の確認		
まとめ 10 分	5 活動 2 (日高カップ開催) 主審・線審・点付けなどすべての役割を全員で行い、協力して試合を運営する。 6 結果発表。 試合結果をリーグ表に記入し勝敗数から順位を割り出す。 7 整理運動・挨拶		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
活動1 ・ミニラリーゲーム		・狙った場所に打ち返せるよう、向かってくるシャトルを見極め、適正なストローク方法で打つことができているか評価する。 ・意欲的に取り組めるよう前回までのランキング結果を掲示しておく。	主－3 主－4 対－3－③、④
活動2 ・日高カップの開催		・プレイヤー又は、審判として試合を進めることで、これまで学習してきたルールや決まりの理解を深める。 ・掲示物や役割別の手順書を用意することで、自分たちで試合運営が行えるよう設定する。	主－1－② 対－1－①、② 対－3－①、②、④ 対－4－①、② 深－1－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	・シャトルをよく見て適正なストローク方法で打とうとすることができたか。 ・自分の役割を理解して積極的に活動することができたか。	・ラリー時はシャトルの高さを意識してストローク方法を変えながらシャトルを打つことができた。	B
生徒D	・流れや役割を理解して積極的に動くことができたか。 ・友達と協力して試合運営ができたか。	・役割表を見て自分の役割を確認して積極的に動くことができた。また、友達に役割を教えるなど、リーダーシップを発揮することができた。 ・準備や片付け、リーグ表の記入など協力して行うことができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・リーグ戦表の理解が短時間では少し難しかった。生徒同士の教え合いが見られたのでよかった。 ・難しくても知ってほしい専門用語と説明時の難しい言葉の違いを意識して、簡単な言葉での説明を心掛ける。			
研究協議における意見・アドバイス			
・パワーポイントを使用することで見通しをもって活動できていた。パワーポイント+ホワイトボードへの掲示を行うことで、生徒の主体性をもっと引き出すことができたのではないかな？ ・この授業の一番の山はどこなのかを意識して授業を組み立てるとよい。 ・サーブ位置の間違いがあった際に主審がしっかりと把握して指摘することができていた。 ・もう少し噛み砕いて説明してもよかった。			

ア 数学「2の段でお楽しみ会をしよう！」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

本校の高等部1学年は、男子11名、女子5名の計16名の2クラスで構成されている。国語と数学については、学習習熟度からグループ分けを行い、集団及び個別で学習を行っている。本学習グループは、男子3名、女子2名で構成されており、10までの数唱は、確実にできるが、書字が難しい生徒や九九の暗唱はできるが、文章題から一人で立式することが難しい生徒など実態は様々である。これまでの足し算や引き算のプリント学習では、式から答えを導きだそうとする意欲が高く、○を書くことで視覚的に捉えて正答することができるようになった。また、机上での学習では、一定の理解を示し成果を出せるが、その内容を生活の中で自発的に活用しようとする姿は見られず、般化させるためには手立てが必要であると考えられる。こうした実態を踏まえ、実生活と分かりやすく関連させた学習計画を行うことで、教科学習で身に付けたことを生活に結び付けられるように取組を行うこととした。

b つけたい力

教科学習で学んだ掛け算を実生活で生かすためには、生活の中で掛け算がどのように活用できるかを実践的に学ぶ必要があると考えた。同じ数ずつ配分する場面は、生活単元学習でも多く見られることから、これらの経験を通して、掛け算の概念を身に付けたいと考えた。また、商品のパッケージに提示されている掛け算を探すことで、身近に活用されていることに気付かせたい。覚えることが苦手な生徒もいるが、九九表を見ることがや電卓を使うことで日常生活での定着を図りたい。こうした学習経験から、生徒のキャリアプランニング能力を高めることとした。

（イ）授業で大切にした点は何か

a 授業の工夫

小学部学習指導要領の算数科3段階 A数と計算 ア ㉗ 「数える対象を2ずつや5ずつのまとまりで数えること。」という点から、2の段から取り組むこととした。

九九の暗唱は、歌を耳から覚えることが得意な生徒が多いことから、リズムよく、聞き取りやすいテンポの曲と視覚的に概念を学ぶための動画を提示することとした。また、興味・関心から意欲と主体性を促したいと考え、ICT機器を活用することとした。更に九九を逆から言う場面を設定することで定着を図った。掛け算の概念の理解を促すために、カップやお菓子の模型を準備して、具体物を操作しながら、数の認知ができるようにした。生活単元学習の販売学習と関連付け、「おかしBOX」の生産を通して、1つのボックスに入れるお菓子の数とボックスの数から用意するお菓子の数を考える経験を積み、般化を目指した。

b 生徒への配慮

生徒がスモールステップで学習に取り組めるように、10までの数を理解している生徒には、式の答えが10位内となるようにする等、各実態に応じた問題を用意した。また、失敗経験から数学に抵抗感がある生徒が苦手意識をもたずに学べる手立てとして以下の点に工夫を行った。

○主体的に学ぶために

- ・イラストを添付して文章理解の手立てとする。
- ・長机にカップと模型を置き生徒が一人で用意できるようにしておく。
- ・プリントと同じ問題を黒板に掲示して丁寧に説明を行う。
- ・プリントに式を書き、個々に考えられるようにする。

○対話的に学ぶために

- ・お菓子の袋（12個入・8個入・16個入り）を黒板に提示して、答えの枠に自分の名札を貼るようにすることで、生徒が互いの考えを見比べられるようにする。
- ・具体物を提示して理解を促し、生徒が自信をもって発言できる場面を作る。

2の だ ん	に	いち	が	に
	2	×	1	= 2
	に	に	が	
	2	×	2	= 4
	に	さん	が	
	2	×	3	= 6
	に	し	が	
	2	×	4	= 8
	に	ご	が	
	2	×	5	= 10
	に	ろく	が	
	2	×	6	= 12
	に	しち	が	
	2	×	7	= 14
	に	はち	が	
	2	×	8	= 16
	に	く	が	
	2	×	9	= 18

掛け算表

名前 ()

① $2 \times 2 =$ ② $2 \times 5 =$

③ $2 \times 7 =$ ④ $2 \times 3 =$

⑤ カップに おかし●が2こずつのっています。カップ■は3こあります。ぜんぶでなんこですか。
 $\times$ = こたえ

⑥ カップに おかし●が2こずつのっています。カップ■は5こあります。ぜんぶでなんこですか。
 $\times$ = こたえ

プリント①

名前 ()

☆クリスマスパーティーをします。おかし●は、ひとり2こずつです。8にんだと、おかしは、なんこですか。



$\times$ = こたえ

プリント②



カップと模型

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

実際に具体物を操作することで、「同じ数ずつ配分する」という九九の概念を理解することができた。また、これまでは、お楽しみ会を準備する際に「好きなお菓子を選ぶ」という点から買い物を行っていたが、この学習を通して、参加人数からお菓子の数を考えるという点から数学的な価値観をもって、計画的に買う物を決めることができた。お菓子の袋に明記された数に気付き、生活の中の数字に興味・関心をもつことで、生徒個々のキャリアプランニングを高めることができたと考えられる。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

数学に苦手意識をもっている生徒に対しては、確実に数えることができる数から取り組み、正答することで自信を付け、学ぶことの楽しさを実感できるようにする。掛け算を概念として身に付け、般化できるように経験を積むことで、更に主体性を促したい。

b 対話的な学びの視点から

答え合わせをする際には、「なぜそう思ったのか。」を伝え合う場面を設定することで、更に対話的になれる。国語科で、自分の言葉で発表する活動に取り組み、友達に自分の考えを伝えることや友達の考えを聞く経験を積み重ねることで、対話的な態度を育てたい。

c 深い学びの視点から

買い物の際、購入する物の数をペアで考え、相談しながら買い物を行うことで、深い学びへとつながるのではないかと考えられる。また、今後は、お金の計算にも般化させていく。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

児童生徒の特性や発達段階は、多種多様で、個々の実態に応じた単元目標や本時の目標の設定、関連性が重要であると考えられる。また、生徒の発達段階に応じた授業構成を考える必要がある。新学習過程分析表は、指導計画や単元目標が省かれているため、児童生徒の学習経過が見えづらい部分があった。また、授業目標に対する評価の際には、生徒の発達段階や授業に関連する実態表記があると良いと考えた。

(カ) 実践例

令和2年度 数学科学習指導略案

教科・領域名		数学	授業者	MT・ST 1 名
学部・学年・組		高等部 1 年 B グループ	対象 児童生徒数	5 人
日 時		令和 2 年 11 月 11 日（水） 2 時間目（9：55～10：40）	場 所	高等部 1 年 B 組教室
単元名		2 の段で「お楽しみ会」をしよう！		
本時の目標		・乗法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができる。 ・具体物を分配したり等分したりすることができる。		
学習指導要領との関連		■小学部学習指導要領 ・算数科 3 段階 A 数と計算 イ ウ P124 ・算数科 3 段階 A 数と計算 ア ㊦ ㊧P126 ■中学部学習指導要領 ・数学科 1 段階 A 数と計算 ウ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ P311		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 10 分	1 あいさつをする。 2 本時の目標の確認をする。 3 九九を覚える。(2 の段) ・動画を見る。 ・九九表を見ながら、九九を唱える。		・本時の目標「2 の段を使って計算する」を掲示して、全員で読み上げる。 ・リズムよく、聞き取りやすいテンポの動画を提示することで意欲と主体性を促す。	
展開 30 分	4 プリント①をする。 ①かけ算の練習問題をする。 ②文章題を考える。 ・プリントに書かれた文章を読み上げる。 ・計算に必要なカップと具体物を用意する。 5 答え合わせをする。 6 応用問題（プリント②）を考える。		・生徒の実態に応じた問題を用意する。 ・文章を読み上げることが難しい生徒のプリントには、イラストを添付して文章理解の手立てとする。 ・長机にカップと模型を置き生徒が一人で用意できるようにしておく。 ・教員が赤で丸を付ける。	
まとめ 5 分	7 買うお菓子の枠に自分の名札を貼る。 8 答え合わせをする。 9 日常生活の中の掛け算を探す。		・プリント②と同じ問題を黒板に掲示して説明を行う。 ・プリントに式を書き、個々に考えられるようにする。 ・お菓子の袋（12 個入・8 個入・16 個入り）を黒板に提示して、答えだと思うお菓子の枠に自分の名札を貼るように伝える。 ・黒板に具体物を貼ることで理解を促す。 ・具体物を提示して生徒の発言を促す。	
	10 目標の確認をする。		・本時の目標が達成できたことを称賛する。	
	11 あいさつをする。			
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的

		深い学びの視点	
展開「5 掛け算の問題を考える。」		コップに具体的を 2 個ずつのせる活動をするこ とで、掛け算とは、同じ数ずつ配分する時に全部の 数を求める計算であるという乗法のきまりに気付く ことをねらいとした。目で見、手を動かして操作 することで、コップの数やコップに入っている物 の数に着目して立式できるようにした。	主－1－② 対－1－②
展開「8 問題を考える」		「お楽しみ会」を想定した問題に取り組むことで、 応用する力を養いたい。さらに、身の回りで使われ ている掛け算を探し、掛け算が生活の中で活用さ れていることに気付かせたい。	主－1－③ 主－3 対－1－② 深－1－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 A	文章問題 (プリント①) を見て、指定されたカ ップの数に 2 個ずつ具 体物を載せることがで きたか。	プリント①の数式を見て、指定されたカップを用意して、 2 個ずつ具体物を載せることができた。また、掛け算の表 を見ずに「に、しち、じゅうし」と言うことができた。し かし、「じゅうし」と言いながら書いた文字は「41」であ った。	A
生徒 D	応用問題 (プリント②) から立式して、16 個入 りお菓子を選ぶことが できたか。	文字や文章を読むことは苦手だが、プリント②の問題を 視覚的に捉え、「 $2 \times 8 = 16$ 」と立式することができた。ま た、提示されたお菓子の袋に書かれている数字をよく見 て、16 個入りのお菓子の袋を選ぶことが出来た。しかし、 答えの欄には、「16」と書かれており、「16 こ」ではなか った。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り (授業者の反省)			
九九の 2 の段の暗唱は、何度も繰り返し練習を行うことで定着を促すことができた。しかし、10 以上の 数唱と 2 桁の書字の定着については、まだ学習が不十分であったため、2 の段の暗唱ができてプリント には答えを書くことができなかった。基礎的な学習の定着を十分に行いながら、並行しては応用する力を 養う必要がある。また、言葉から立式を行い、答えを導き出す数学を学習するうえで、国語や生活単元学 習と結び付けながら系統的な学習計画が必要であると改めて気付くことができた。1 桁の足し算や引き算 が難しい実態であっても、計算機を使うことや具体物を使う経験を積むことで、高校卒業後の生活を豊か にしてほしい。			
研究協議における意見・アドバイス			
2 の段を使って、お菓子の個数を考えるという活動は、生徒にとって興味・関心をもてる教材であつ た。今後、より生活に活用していくためには、物の数え方についての学習を行うことが必要である。高校 卒業後の職業生活の会話の中で、「いくつ必要ですか。」と問われた際には、「16」ではなく「16 個で す。」といった正しい答え方が必要となってくる。国語と関連させ「〇本」「〇冊」「〇人」と言えるよう に取り組んでいく。			
生徒の障害特性上、短期記憶が苦手であることから、繰り返し学習を行い、定着を促すことが必要であ る。継続した学習を行うことや「なぜ、そう思ったのか。」を友達同士で話し合うことで深い学びにつな げていく必要がある。			

（1）公開授業3

ア 国語科「昔ばなしを読もう～おひさまときたかぜ①～」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

本校の高等部1年生は、各8名ずつの2クラス、計16名で構成されている。発達段階や特性など生徒の実態は様々で、学習習熟度にも差が見られることから、国語と数学においては生徒の実態を考慮し、A・B・Cの3グループに分かれて学習をしている。

本学習グループ（Bグループ5名）は、落ち着いて学習に取り組むことができ、会話のやりとりができる。一方で、平仮名・片仮名の読み書きが十分に定着していない生徒や、読みは習得しているが書くことや話すことが苦手な生徒、読み書きはできるが話すことや聞き取りが苦手な生徒などがあるグループである。また、説明を聞いて内容を理解することに課題があり、イラストや具体物など視覚的な支援を必要とする。

昔ばなしはその多くが絵本や紙芝居の形で広く浸透しており、絵本は読み上げと絵を同時に提示する優れた教材である。多くの絵本に触れることで昔話の世界を想像し、物語を理解する力を養うことにつながると考えて、この単元を設定した。

b つけたい力

本学習グループの生徒は、本校中学部からの進学生で構成されており、中学部での学習活動として絵本を教材として、内容を読み取る学習に取り組んでいた。生徒に対して、中学部での学習内容について質問をすると、教材となった絵本のキーワード等を思い出すことができおり、物語を楽しみながら学習に取り組むことができた と推測される。

一方で、読書活動の幅が狭く、図書室では読んだことがある本や親しみのある本等、気に入った本だけを繰り返し見るといった傾向があり、新しい本を見ようとする意欲に乏しい面が見られるため、新しい絵本や物語に出会う機会を設け、読書意欲や読書を楽しむ気持ちを育みたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

物語の読み聞かせでは、情景をイメージすることが難しい生徒たちであるため、視覚情報と聴覚情報が入った紙芝居を教材として、使用することとした。絵を見ることで物語の大枠を把握することができ、内容を理解しながら紙芝居を楽しむことができる。学習活動においては「登場人物は誰か」「(登場人物は)何をしているのか」「決着の方法は」「結果はどうなったか」について質問することで、学習に取り組むようにして、物語の基本情報を把握できているかを確認した。

また、紙芝居を楽しむために必要な要素として、言葉の繰り返しや強弱、音韻など、聞いた際に記憶や印象に残りやすいと思われる言葉を含むものを教材として選び、読み聞かせを行った。

b 生徒への配慮

生徒が自分の課題に集中して取り組むことができるように、原則として、生徒一人に対する発問を一つに限定し、ある生徒が発表するたびに、他の生徒に「いいですか」と問いかける形式にすることで、対話的な学習活動となるようにした。また、生徒が学習活動に取り組みやすくなるように、以下の工夫を行った。

- ・写真やイラスト等の視覚支援を行い、理解を促す。
- ・答えに詰まる生徒には、答えを含む場面を、答えの部分を強調しつつ繰り返し読み上げて、気付きを促す。
- ・板書の掲示内容と、イラストや解答欄の位置を一致させた振り返りワークシートを作成し、生徒が振り返り内容を確認しやすくする。



(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

紙芝居の文章に出てくる言葉と、絵で示される登場人物のマッチングができるようになったと考

えられる。また、ある生徒は、「太陽」と「おひさま」など、ある物事を別の名前と呼ぶことがある、ということを知ることができたと考える。また、本時に加え、これまでの絵本や紙芝居の読み聞かせによる学習を通じて、学校図書館において積極的に読書活動に取り組む姿勢を育むことができつつあると考える。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

「おひさま」と「太陽」が同じものを指すことを理解していない生徒がいたため、カーテンを開けて太陽を示し、「おひさま＝太陽」など日常の具体的な物事に結び付けることで気づきを促し、知ること・学ぶことの楽しさを感じられるようにする。

今後は、授業で学ぶことを日常生活に直結させ、生徒自身が日常的に主体的に学ぶことができるように具体性や日常性、実用性を伴う教材や発問の設定に取り組む。

b 対話的な学びの視点から

「旅人は何のために旅をしているのか考えてみよう」など、自由な想像に基づく発表の機会を設定することで、対話的な学びにつなげることができたのではないかと考える。また、あらかじめ質問する内容をワークシート等で知らせ、生徒が答えを考える時間を確保してから、発問を行うようにする。そのほか、生徒が発問や言葉の意味等を理解しているかに注目し、生徒が発問や言葉の意味を正しく理解して学習活動に取り組んでいるかを確認しながら指導を行う。

c 深い学びの視点から

マントを着ていることから「旅人」を「王様」と誤答した生徒がいた。「旅人」という言葉の概念を確かなものにするために、四国特有の「お遍路さん」や、昨今の「Go to キャンペーン」などを挙げて具体化することで、「旅人」の概念を日常生活の中に定着させ、深い学びにつなげることができるのではないかと考える。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

主体的な学び、対話的な学び、深い学びの各視点が、具体的な文言で記述されていることで、

「この学習活動はどの視点に関わっているか」、または「この視点に基づく学習活動は、どのように設定すればいいか」ということを考えることができた。

（カ）実践例添付

令和2年度 国語科学習指導略案

教科・領域名	国語科	授業者	MT ST 1 名
学部・学年・組	高等部 1 年 B グループ	対象児童 生徒数	5 人
日 時	令和2年12月2日(水) 1 時間目 (9:00～9:45)	場 所	高等部1 B 教室
単元名	「昔ばなしを読もう～おひさまときたかぜ①～」		
本時の目標	・ 紙芝居を見て、物語の内容を知ることができる。		
学習指導要領 との関連	■ 小学部学習指導要領 国語科 P.93 3 段階「C 読むこと」のア、イ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 10 分	1 始めの挨拶をする。 2 出席確認をする。 3 本時に使用する紙芝居について確認する。 『おひさまときたかぜ』 4 本時の学習の流れを確認する。 ① 聞く。 ② 考える。 5 本時の目標を確認する。	4 学習の流れをホワイトボードに掲示する。漢字には振り仮名を振って読めるようにする。	
展開 30 分	目標 「物語の内容を理解しよう」 6 本時の目標を全員で、大きな声で読む。 7 読み聞かせの準備をする。 8 紙芝居を見る。 9 元の座席に移動する。 10 本時の目標を再度確認する。 11 登場人物を確認する。	6 目標に注視させて意識できるようにする。教師が直前に数回音読し、文字の読みを苦手とする生徒が聞き覚えて読むことができるようにする。 8 きたかぜとおひさまが何をしようとしているのかを考えながら見るように、あらかじめ伝える。 11 答えが挙がるたびにイラストを掲示して、視覚的に確認できるようにする。答えに詰まる場合は、イラストを先に掲示して回答につなげられるようにする。	
まとめ 5 分	12 おひさまときたかぜが何をしているかを確認する。 13 おひさまときたかぜが、どのようにして決着をつけようとしたかを確認する。 14 勝ったのはどちらかを確認する。 15 黒板の記述をワークシートに記入する。 16 本時の目標が達成できたか確認する。 17 次時の予告をする。 18 終わりの挨拶をする。	12 場面イラストを掲示して、両者の表情から答えを導き出せるようにする。 13 紙芝居中のマントの部分拡大印刷して示して目的などを説明し、生徒が具体的なイメージをもてるようにする。 14 答えを二択にすることで、答えやすくする。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 12 「おひさまときたかぜが何をしているかを確認する。」		取っ組み合いなどの具体的な描写がない「ちからじまん」という行動を思い出すことができるかという点を狙いとした。「ちからじまん」という文言に捉われず、「どちらが上か喧嘩」など、優劣を競う回答があれば正答とする。	主－２－② 対－１－①
展開 13 「おひさまときたかぜが、どのようにして決着をつけようとしたかを確認する。」		おひさまときたかぜが決着方法とした取り決め内容を、理解できているかどうかを確認することを狙いとした。工夫として、旅人への働きかけをしている場面を掲示することで、場面のつながりを考え、結論を導き出せるようにする。	深－１－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒E	おひさまときたかぜが何をしているかを把握することができたか。	単に「ちからじまん」と答えるだけでなく、決着方法にも先回りして言及した。	A
生徒C	おひさまときたかぜが、どのようにして決着をつけようとしたか答えることができたか。	上記の生徒Eが、決着方法について先回りして回答したため、答えが出ってしまったと判断して、生徒Cには発問を行わなかった。	－
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
紙芝居の読み聞かせの間は、生徒は興味・関心を示していたが、学習活動に移ると、設定した学習活動の時間が短く、内容も生徒の興味・関心をかき立てるものではなかったためか、全体的に低調になった。また、教師の説明時間が多く、生徒の集中が途切れて、学習意欲を失いやすい状況にもなっていた。 振り返りに使用したワークシートは、写真・解答欄の順序や位置を板書と一致させることで、生徒が自分で照らし合わせやすくなる事ができた。			
研究協議における意見・アドバイス			
・ 本時の目標について、日常生活につながる内容・目標の設定をするとよい。 ・ 「おひさま」と「きたかぜ」について、「何のことか知っているか」と問いかけて、実生活と合致させると良い。また、カーテンを開けて太陽を示し、「おひさま」とは太陽のことだと伝えて、実生活に結び付いた学習活動につなげると良い。 ・ 紙芝居の中に出てくる「ちからじまん」など、なじみのない言葉の意味を、生徒がきちんと理解していたか。必要に応じて、言い換えると良い。 ・ 「注目してほしい児童生徒の評価」について、それぞれの評価規準とする学習活動が近すぎた。また、生徒Eの回答が、質問の意味を理解した上でのものだったかどうか疑わしい。 ・ 生徒Cへの質問の答えが、先に生徒Eから出ってしまったと考えたのは授業者だけ。生徒Cには予定通り質問すれば良かった。また、先にワークシートに取り組みせ、答える内容を先に整理させた方が良かった。生徒の評価が上がる手立てを考える必要がある。			

(1) 公開授業 4

ア 音楽「ボディパーカッションで、リズムアンサンブルを楽しもう」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部1年生は、知的障害と自閉症やダウン症、不安障害等を併せ有する生徒を含む男子11名、女子5名の学年集団である。実態としては、身辺自立が確立し自分で活動ができる生徒と、声掛けや視覚支援を活用して活動できる生徒がいる。

音楽の授業は、幅広い実態の集団であるため、学年全体で取り組む内容と、グループ化して取り組む内容を組み合わせながら行っている。

年齢的に、人前で表現することをやや恥ずかしいと思い始める時期であり、表現活動には消極的になりやすい。声を出して歌うことや、身体表現をすることなど苦手意識をもつ生徒も多い。また今年は新型コロナウイルスの影響で、学年全体で発表活動をする機会が例年より少ない現状がある。そんな中、1学期に取り組んだボディパーカッションでは、リズム模倣を中心に全員が同じリズムを表現する方法で取り組んだが、理解も早く、抵抗感も少なくできていた。そこで基礎ができたボディパーカッションの取組を使って、少し難易度を上げながら、全員で一つのものを作る過程で、友達と一緒に音楽活動を楽しみ、自信をもって表現する中で、主体的に取り組む力を伸ばしていきたい。

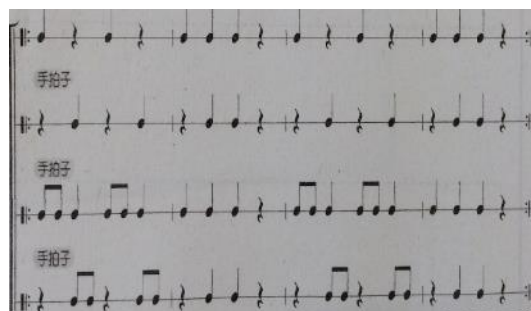
b つけたい力

リズムの要素と身体表現の要素を取り入れたボディパーカッションを使って、友達と一緒に表現する楽しさや面白さを感じ取り、苦手意識を少しでも減らし、伸び伸びと表現することを経験してほしいと考えた。

リズムは楽器演奏の基礎であるため、4分音符や8分音符のリズムの取り方、また4分休符についてもそのリズムを捉えてほしいと考えている。そのため、本単元では、4つのリズムパターンの習得を目指す。

また基礎的なリズムパターンが身に付いた後は、自分の担当するリズムパターンを選択し、BGMに合わせて、規則的に各リズムパターンを一つずつ重ねたり、減らしたりする流れを理解し、その中で担当のリズムパターンが表現できるようにしたい。音の重なりを感じながら表現してほしい。

また、経験が少なく苦手意識が強いであろう創作活動にも取り組み、考え表現する力を伸ばすきっかけにしたい。



4つのリズムパターン

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

・ボディパーカッションは1学期にも取り組んでいる。繰り返すたびに少しずつ難易度を上げることで、前回得た知識や技能を生かすことができると考えた。

・リズムパターンと各パートの重ね方や減らし方は、視覚支援（シンボルカラーも取り入れ）で表示するようにした。ユニゾンリズム（全員同じリズム・動作）を入れることで、緩和の部分进行、構成を分かりやすくした。

・自分で担当するリズムパターンを選択し、選択後は変更しないようにし、リズムリーダーを決め、リーダーの指示のもと基礎練習に取り組むようにした。

・創作部分は、前奏の4拍分のみとした。考える内容を限定するため、「手の動きと目線」という条件を付けて考えるようにした。

b 生徒への配慮

- ・創作部分（活動7）では、アドバイスができるようにS Tを配置した。
- ・新しいリズムパターンに入る際には、指導者はできるだけ大きい動作で担当するグループに向けて模範を示すようにした。また例え、生徒の表現したリズムが違っていても、間違いとして指摘せずに、どこかのリズムパターンに入っていることを評価するようにした。
- ・同じリズムを担当するメンバーが分かりやすいよう座席を固定した。

（ウ）取り組みを通して何ができるようになったか

4つのリズムパターンについては、休符の取り方にミスがある生徒もいるが、大半の生徒は正確に表現ができるようになった。リズムが身に付くことによって、別単元で取り組んだ楽器練習でも、4分音符や8分音符のリズムの取り方が上達してきた。合わせて授業中だけでなく休み時間も鍵盤楽器を演奏する姿が見られ、生活の中で音楽を楽しむという広がりを感じられた。

またBGMを使ったリズムアンサンブルでは、BGMを感じ取りながら、自分のパートのリズムを他グループのリズムに重ねたり、減らしたりする流れを理解し表現できた。

創作活動については、やや教師の支援が必要なグループもあったが、自主的に考え、別グループと動きを連動させるなどのユニークな表現もできた。単純に拍数だけから考えるのではなく、歌詞から表現を考えることもできた。このことにより、音楽の授業での表現活動に取り組みやすくなり、体育館を使って、身体表現活動にも取り組めるようになってきている。部分を限定して創作するなどの工夫をしながら取り組んではいるが、積極性を感じるようになりつつある。

（エ）さらに良い授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

「こんなBGMを使ってやってみたい」などの生徒の意見を取り入れるようにする。今回BGMに使用した楽曲は、事前に曲の構成を入念に調べて取り組んでいる。そのため、どの曲でも即座にできるわけではないが、余裕ある計画の下で、生徒と一緒に構成も含め考える時間設定をするようにしたい。

b 対話的な学びの視点から

リズムリーダーのような役割の生徒を中心にしながら、学習する場面を設定し、その経験を増やしていく。また、お互いのグループの表現をじっくり見て、意見を出し合う場面を取り入れるようにする。

c 深い学びの視点から

今回の実践は、器楽演奏や身体表現の領域には必ず役立ってくると考えている。リズムパターンの習得は、今後の器楽演奏の単元へつなげて、創作の部分は身体表現へとつなげていくことで深い学びにつながると考える。何よりも生徒自身がそのことに気付けるような意識付けが必要だと感じた。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点学習活動に含まれているかをチェックするために役立っていると思う。

「深い学び」については、活動として設定しにくい。学んだことを、他の場面へ（授業や生活）つなぐ基礎やきっかけを作っていると考えerほうが自然な感じがする。

（カ）実践例

令和2年度 音楽科学習指導略案

教科・ 領域名	音楽科	授業 者	MT ST 3名
------------	-----	---------	-------------

学部・学年・組	高等部 1 年	対象生徒数	15 人
日時	令和 2 年 9 月 17 日 (木) 4 時間目 (11:45~12:30)	場所	音楽室
単元名	ボディパーカッションで、リズムアンサンブルを楽しもう。		
本時の目標	・自分のパートのリズムや動きを理解して、ボディパーカッションをすることができる。(知識及び技能) ・曲の流れを意識し、音楽表現を考えて表したい思いや意図をもったり、創意工夫をしたりすることができる。(思考力・判断力・表現力等) ・ボディパーカッションによるリズムアンサンブルを通して、友達と一緒に音楽活動を楽しみ、自信をもって表現することができる。(学びに向かう力、人間性)		
学習指導要領との関連	■高等部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 イ器楽 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊧ ウ創作 (ア) エ身体表現 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊧㊨ ■中学部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 イ器楽 (ア) (イ) ㊦㊧ (ウ) ㊦㊨ ウ音楽づくり (ア) ㊦㊧ (イ) ㊦㊩ エ身体表現 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊧㊨ B鑑賞 ア (ア) (イ) 2 段階 A 表現 イ器楽 (ア) (イ) ㊦㊧ (ウ) ㊦ ㊧ ウ音楽づくり (ア) ㊦㊧ (イ) ㊦㊩ エ身体表現 (ア) (イ) (ウ) ㊦㊧㊨ ■小学部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 ア音楽あそび (ア) (イ) (ウ) ㊦㊧ B鑑賞 ア音楽あそび (ア) (イ) 2 段階 A 表現 イ器楽 (イ) ㊦ (ウ) ㊦ ㊧ ウ音楽づくり (ア) ㊦㊧ (イ) ㊦㊩ エ身体表現 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊧㊨ B鑑賞 ア (ア) (イ) 3 段階 A 表現 イ器楽 (イ) ㊦ (ウ) ㊦ ㊧ ウ音楽づくり (ア) ㊦㊧ (イ) ㊦㊩ エ身体表現 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊧㊨ B鑑賞 ア (ア) (イ)		
時間	学習活動		手立て、留意点
導入 10 分	1 挨拶をする。 2 本時の学習内容を確認する。		リズムパートごとに着席する。 ボディパーカッション ① BGMなしバージョン ② BGMありバージョン
展開 20 分	※BGMなしバージョン 3 リズムリーダーを中心にして、自分のパートとユニゾンリズムの練習を行う。 4 ボディパーカッションでリズムアンサンブルを行う。 ※ここからBGMありバージョン 5 BGMとして使用する「紅蓮華」を聴きながら、途中で練習し、流れを理解する。 6 ユニゾンリズムの回数を曲に合わせて変化させることを確認し、試し練習をする。 7 前奏部分の動き (各パート 4 拍分) を、パートごとに創作する。 タイムリミット 3 分間 ※創作するのは、「手の動きと顔の向き (目線)」 8 各パートのリズムリーダーが前に出て発表し、全員で動きの確認をする。 9 全員で、創作部分の流れを練習する。 10 本番トライ 1 流れを理解して、表現する。 11 本番トライ 2 ボディパーカッションによるリズムアンサンブルを楽しみながら表現する。		リズム譜面は提示しておく。 (・ビデオ撮影: 本時以降の授業での活用のため) ユニゾンリズムの回数は、黒板に提示する。 リズムリーダーを中心に、意見を出し合いまとめるように促す。 STは生徒の意見を尊重し、称賛することを心掛ける。 リズムリーダーは、黒板の方を向いて動きを発表する。(左右逆転による混乱を防ぐため) 自信をもって大きい動きができるように、称賛しながら意識付ける。 (・ビデオ撮影: 本時以降の授業での活用のため) 間違っても大丈夫なことを伝え、自信をもって楽しんで表現するように声掛けする。 片付けは、給食当番以外の者が協力して行う。
まとめ 5 分	12 感想を述べる 13 次回の学習について聞く 14 終わりの挨拶		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 7 前奏部分の動き（4 拍分 手の動きと顔の向き（目線）を各パートごとに創作する。		・BGMは、生徒の好きなアニメから選曲することで、意欲を高めることができる。 ・創作活動の初歩として、短い拍数（4 拍分）で部位を限定（手の動きと顔の向き（目線））することで、意見を出しやすくなる。	主－ 3 対－ 1－① 対－ 2－② 対－ 3－①④ 対－ 4－①
展開 11 本番トライ 2 ボディパーカッションによるリズムアンサンブルを楽しみながら表現する。		・練習を重ねることで、流れを理解し、かつBGMに合わせながら、表現活動することで、楽しみながら、自信をもって表現することができる。	主－ 2－②③ 主－ 3 対－ 3－①② 対－ 4－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	・リズムの大体を捉え、ボディパーカッションをすることができたか。 ・友達や教師と一緒に創作部分の動きについて思いを出すことができたか。 ・教師の指示を聴き取り、自ら取り組もうとすることができたか。	・担当するリズムの大体を捉え、ボディパーカッションができた。 ・STからの声掛けを受けて動作を考えることができた。 ・教師の指示を聞いて、積極的に取り組むことができた。	A
生徒E	・流れを理解しリズムを正確に捉えて、ボディパーカッションをすることができたか。 ・リズムリーダーとして自分のパートチームの意見をまとめ、創作することができたか。 ・友達と協働的に取り組み、積極的に学習に取り組むことができたか。	・リズムは正確に捉えて、ボディパーカッションをすることができていた。 ・リーダーとしてまとめるというよりは、同グループの友達が積極的に意見を出し、それに追随する形にはなったが、考えようとする雰囲気は十分出せていた。 ・意欲的に且つ協働的に取り組むことができていた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
4 拍分であっても動作を考える活動はまだまだ経験が少なく、ST からのアドバイスが必要なグループがあった。グループの構成の仕方が、生徒の選択によるものだったためやや偏りがあるグループになったこともあって、思いや考えをやりとりしにくいグループもあった。 リズムパターンについては、自分の担当するリズムを大体覚え、例え途中でミスしたとしても、周りを見て修正することができていた生徒もいた。 生徒たちが好きなアニメの曲をBGMに使ったことは意欲を高めるには効果的であった。			
研究協議における意見・アドバイス			
音だけでなく、歌詞から動作を考えることができていたグループがあり、指導者の意図よりも上をいつているグループもあった。 最初は、自分のパートのリズムで表現できていたが、他のグループのリズムが入ってくるとつられてしまっていたので、本人の目の前で模範を示すようにしたら、リズムに気付いて正確にできた。			

（１）公開授業 5

ア（保健体育・保健）

（イ）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は高等部 1 年生 16 名のうちの、知的障害と自閉症やダウン症、不安障害等を併せ有する生徒を含む、男子 10 名・女子 4 名（内部生 7 名・外部生 7 名）である。

生徒の実態としては、身辺自立が確立されており、自分で活動ができる生徒と、声掛けや視覚支援を用いた支援等で活動できる生徒が含まれる。全体的には行動や発言も活発で授業への期待感も高く、普段から明るく過ごすことができている生徒たちである。

事前アンケートでは、心肺蘇生法の講習を受講したことがある生徒が 10 名、心肺蘇生法とは何か理解している生徒は 11 名と心肺蘇生についてある程度知っている生徒が大半である。また、1 学期には応急手当の授業で止血法や捻挫や骨折の対処法、熱中症の予防法などにも触れ、応急手当について学ぶ意欲が高まっていると感じられた。

b つけたい力

中堅教諭等資質向上研修では、「生」と「性」を感じながら生活をしよう ～自分と他者を大切に～という研究テーマで取り組んだ。

他者と関わりを上手くもつことができない、また自己肯定感が低い生徒たちが「生」と「性」について考えながら生活できるようにしたり、PP やワークシートを活用したりしながら、分かりやすい授業や身近で日常に即した内容に取り組んでいくようにした。

「心肺蘇生法」では「あっぱくんライト」と呼ばれる簡易式の心肺蘇生法の道具を活用し、「救急アニメ救え！ボジョレー」の動画で視覚支援をしながら、分かりやすく心肺蘇生法を学びたいと考えた。個人での胸骨圧迫では主体的な活動を、ペア学習では対話的な活動を、そして今後こういう場面ではどう行動するかを考えるまとめでは深い学びができるように目指した。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

対象の生徒は視覚優位が大半であり、口頭説明だけでは理解に時間がかかるため、パワーポイントを使って最初に流れを説明し、同時にアニメーション動画を活用し、生徒が興味関心をもったところで、実技に取り組むようにする。本単元では、7 月に「応急手当の意義とその基本」で命の大切さや応急手当の必要性をパワーポイントやアニメーション動画で学んだあと、ペア学習をしながら捻挫や骨折の応急手当の簡単な方法を雑誌や布切れ、三角巾を実際に使って実技を実施した。2 時間目には 7 月という時期に応じた熱中症の予防方法などをパワーポイントやアニメーション動画を見たあと、実際に 1 人ずつ塩と水で作る経口補水液を作り、体育の授業後に試飲した。どちらも生徒のワークシートの感想からある程度の理解が見られ、また興味・関心をもったことが感じられた。本時である「心肺蘇生法」では「あっぱくんライト」と呼ばれる簡易式の心肺蘇生法の道具を活用し、「救急アニメ救え！ボジョレー」の動画で視覚支援をしながら、分かりやすく心肺蘇生法を学びたいと考えている。個人での胸骨圧迫では主体的な活動を、ペア学習では対話的な活動を、そして今後こういう場面ではどう行動するかを考えるまとめでは深い学びができるように目指したい。

b 生徒への配慮

小学部 1 ～高等部 2 段階までの生徒対象に実施したため、本時の目標を生徒の段階別に設定し、それに合わせてワークシートを作成した。目標に合わせたワークシートにしたため、記入がしやすかったのではないかと考える。

「あっぱくんライト」と呼ばれる簡易式の心肺蘇生法の道具を活用した。本時は多目的室で実施したが、本来は机一つ分のスペースがあればできるため、教室でも実施できる教材である。また、♡の教材は正しく押せないと言が鳴らない仕組みになっているため、音になるまで頑張ろうという気持ちに生徒もなる。この教材とセットで「救急アニメ救え！ボジョレー」という動画も YouTube で配信されているため、視覚支援と教材でわかりやすい授業を意識した。



(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

本時の授業だけではなく、「応急手当」の単元を通して見ると、指を怪我して出血している生徒に「タオルで押えないかん」と伝える生徒や、しんどそうにしている生徒に「大丈夫？」と優しく声掛けができる生徒、家で経口補水液を作って家族で試飲した生徒などがいた。学んだことが実生活で生かすきっかけになっている場面を見ることができた。また、日高消防署の方に来ていただき、心肺蘇生法を実施した際に、授業で学んだことをしっかり覚えて活動できていた生徒もいた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒が正しいリズムで胸骨圧迫をできる工夫が必要だった。(例えば、1 分間に 100 回のリズムがわかる音を提示しながら胸骨圧迫を行うなど。)

b 対話的な学びの視点から

ワークシートへの記入の仕方・評価方法について、もう少し説明を詳しくするべきだった。記入方法や評価の伝え方が分からず、こちらが意図していた活動になるまで時間がかかった。また、ペアの実態が合っていないところが 1 組あり、お互いの評価を伝えあう場面の成立が難しかったため、ペアについても学年団に相談するなどして検討すべきだった。

c 深い学びの視点から

単元の内容を「応急手当」という大きな枠組みではなく、「熱中症」や「胸骨圧迫」などの細かい単元など、もう少し生徒の実態に応じた単元内容にすべきだった。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

主体的・対話的・深い学びをみとめるための具体的な参考になった。ただ、分析が合っているかどうか分からないまま記入している面もあった。

(カ) 実践例(指導略案)添付

令和 2 年度 保健体育科 学習指導略案

教科・領域名	保健体育 I 保健	授業者	MT ST
学部・学年・組	高等学部 1 年	対象	14 人

		児童生徒数	
日 時	令和2年9月10日(木) 5・6時間目(13:30~15:00)	場 所	多目的室
単元名	I 保健 「応急手当、心肺蘇生法を学ぼう」		
本時の目標	・心肺蘇生法の手順の中の胸骨圧迫の方法を知る。(知識及び技能) ・心肺蘇生法の手順や方法の中で、次はどうしたらいいのか、自分で考え、行動することができる。(思考力・判断力・表現力) ・日常の中で心肺蘇生を行う場面を想定し、行動することができる。(学びに向かう力、人間性)		
学習指導要領との関連	■ 高等部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 I 保健 ア ・保健体育科 2段階 I 保健 ア ■ 中学部 学習指導要領 ・保健体育科 1段階 H 保健 ア ・保健体育科 2段階 H 保健 ア ■ 小学部学習指導要領 ・体育 1段階 G 保健 ア ・生活科 1段階 イ 安全(イ)		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 10分	1 はじめの挨拶 2 前時の振り返り 3 本時の確認 ・あっぱくんライトを見せて、心肺蘇生法の中の胸骨圧迫の練習をすることを伝える。	・1学期にどんな保健学習をしたか問いかける。(全体) ・前に注目するよう声掛けをする。道具の確認をする。(全体) ・注目するのが難しい生徒には声掛けをする。(個別)	
展開 40分	4 目標の確認 ・胸骨圧迫の技能を身に付けよう。 5 心肺蘇生法の流れを知る。 ・救急アニメ 「救え ボジョレー」1話を流す。 6 心肺蘇生法の流れの復習をする。 7 胸骨圧迫について学習する。 ・あっぱくんライトを一人1つ配付し、準備する。 ・続きのアニメを見る。 8 1分間で100回胸骨圧迫をする。	・スクリーンに注目するよう、声掛けする。心臓突然死について勉強する。 ・PPで振り返りをする。(全体) ・一人で準備が難しい生徒は教師と一緒にやる。(個別) ・みんなで動画に合わせて、実際に胸骨圧迫をする。(全体) ・動画のタイミングが難しい生徒は教師がリズムを声掛けする。(個別) ・前に大きくタイマーで時間を示す。(全体) ・リズムに合わない生徒は教師が近くで声掛けをする。(個別)	
まとめ 15分	9 ペアになり、交代で胸骨圧迫をする。 ・ワークシートを配布する。 ・一人ずつ胸骨圧迫を行い、ワークシートに記入する。 ・二人が終わったら、ワークシートを交換し、よかったところや改善点を伝える。 10 あっぱくんライトを片付ける 11 全体の前で実演する。 12 振り返りをする。 13 次時の説明をする。	・ペアを伝え、ペアの友達について、チェックする項目を確認する。特に姿勢について見本を見せて確認する。(全体) ・字が読めなかったり項目の内容の理解に難しかったりする生徒は教師と一緒に確認する。(個別) ・最初に入っていたように丁寧に片付けることを伝える。(全体) ・一人で片付けが難しい生徒は教師と一緒に片付ける。(個別) ・前で見本を見せてくれるペアを指名する。(二人×2組) ・ワークシートで振り返りをする。(全体) ・一人でワークシートを記入するのが難しい生徒は教師と一緒に記入する。(個別)	

	14 終わりの挨拶	・次時は振り返りを行い、10月に地元の消防隊員に来てもらい、心肺蘇生法の学習をすることを伝える。(全体)	
注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
展開7 胸骨圧迫について学習する。	動画に合わせて、音が出るあっぱくんライトをしっかり押せているかどうかで、正しいリズム、また音が鳴っているかで5cm沈むまで胸骨圧迫できているか確認できる。	主-2-①、②、③ 主-4 対-1-①	
展開9 ペアになり、交代で胸骨圧迫をする。 ・一人ずつ胸骨圧迫を行い、ワークシートに記入。二人が終わったら、ワークシートを交換し、よかったところや改善点を伝える。	ペアの友達に確認してもらうことで、自分自身の動きの確認ができる。また、友達の動きを確認し、ワークシートを見せることで、自分の考えを相手に伝えることができる。ワークシートを元に意見交換ができる場面も増え、さらに手元に残ることで、次時の救急法の際にもこのワークシートを活用することができる。	主-1-①、② 対-1-② 対-2-① 対-4-① 対-5-①、②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	・心肺蘇生法の手順通りに行えたか。 ・友達にアドバイスをしたり、よかったところを伝えたりすることができたか。	手順書を見なくても思い出しながらできていた。友達へのアドバイスもワークシートを見せながら伝えることができた。	A
生徒M	・胸骨圧迫が1分間連続してできたか。 ・正しい姿勢を意識してできたか。	胸骨圧迫する動作に必死になり、時間を気にする余裕はなかったが、100回を目途にそばで教師がカウントすることで1分間連続してできた。イラストを見て、前のめりに腰を浮かすことや腕を伸ばすことができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・年次研修と合わせて実施したこともあり、単元内容が生徒の実態より難しい内容になってしまった。次年度以降は細かい単元計画をたてていきたい。 ・生徒全員、胸骨圧迫のリズムが全体的に速かった。動画から流れるリズムを聞かずに押している様子があった。1分間に100回というリズムをわかりやすく提示することが必要だった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・「あっぱくんライト」という教材が知的の生徒の実態にあったものだった。 ・ペアの実態が合っていないところがあり、ワークシートを活用してのアドバイスが難しいペアがあった。 ・ワークシートや「あっぱくんライト」を出すタイミングに工夫が必要。特にワークシートに関しては、記入の仕方やアドバイスの方法にもう少し時間をかけて丁寧に説明すべきだった。 ・最後の活動で、立候補ではなく指名にした理由を生徒に伝えてあげれば良かった。			

(1) 公開授業6

ア (各教科等名：総合的な探求の時間 進路学習)

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部1年Aグループは、男子6名、女子2名の計8名の学習グループである。このグループは、高等部1年生の中でも軽度知的障害のある学習グループである。8名の生徒の学習到達度は「読む・聞く・書く・話す」「数量・図形」などの国語や数学（算数）の学習到達度では、小学校3年生～中学校1年生程度と幅が広い実態である。また、ADHDやASDの生徒も含まれるため学習の環境調整や5つの構造化（場所、時間、活動、流れ、課題）などの学習支援の柱とした。

8名の生徒とは6月から進路学習を毎月1回計画的に実施してきた。生徒は、「働くために自分には何が必要か」ということは十分に理解できていないことが多い。そして、ワークスキル（ハードスキル）といわれる仕事そのものの能力（職業能力）はそれぞれが一定の能力をもっているが、ライフスキル（ソフトスキル）といわれる身だしなみやコミュニケーション、余暇活動などの仕事以外の能力に大きな課題があることは明らかであった。このことからまずはこの1年間の進路学習では「自分を知る」「働くこと」「働くために」という3つのキーワードを中心に指導や支援をすることとした。

b つけたい力

この進路学習が卒業時に目指すものは、自分が希望、選択した進路目標の実現である。そのために生徒には、進路実現に向けてライフスキル（ソフトスキル）の獲得を中心に指導・支援を行う。具体的には、身だしなみ、遅刻しないで出勤すること、同僚や上司へのあいさつ、適切なコミュニケーション、休憩時間を適切に過ごす（余暇活動）など、仕事とともに大切なスキルをつけたい力とする。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

この進路学習では生徒が見通しをもって授業に臨めるように授業の導入で、1年間の進路学習のスケジュール（これまで学習してきたことを含む）を提示して確認する。また、本時の授業でも1単時間（45分間）に行う活動内容や時間配分、量、手順そして本時の目標（ゴール）を生徒へ提示することを欠かさず行った。授業では、パワーポイント（以下「PP」と略す）で全ての活動を提示した。例えば、自分でPPを見て設問に対して「選ぶ」「書く」「グループで話し合う」「発表する」などの活動を多く取り入れた。このことで生徒たちが自分の言葉や態度、行動でやってみたい仕事のことや発表の準備を生徒主体で活動することができた。授業では、8名の生徒が意見発表ができよう付箋を使って1人1つは書いて貼ることをルールとしたことで、活発な生徒同士の協議ができる環境ができてきた。また、授業前日には指導略案や教材を実際に使ってSTと準備、打ち合わせを行った。STには、生徒の主体性を見守ることや生徒の言葉を否定しないことなどを確認した。

b 生徒への配慮

授業では、個別、ペア、グループ（4人）の3つの学習形態で展開した。この学習形態にした理由としては、個別活動を中心にするると特定の生徒のみが意見発表してしまう恐れがあった。そこで生徒の特性を把握した上でペアやグループでのワークを多く設けた。意見発表が苦手な生徒への支援として付箋に書いて貼る活動を設けた。言葉にして発表する機会と並行して文字にして発表できる機会も設けたことで8人の意見が確実に他の生徒や教師に伝わる回数が増えた。グループワークの進行でも司会進行役を指名して協議の手順表を渡し、活動を視覚化することで誰でもわかる、できる活動を展開することができた。教室の環境調整では、大きな机などをグループに1つずつ準備して生徒同士の顔が見えるように工夫した。これにより黒板や教師に向かうことよりも生徒同士が活動しやすいような学習環境を調整した（3密や飛沫対策をした上での活動）。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

「間違いはないよ」「いい意見だね」「うん、うん」「いいよ」など教師が生徒たちに活動の中で共感や感嘆する言葉がけを多くすることで、安心感や信頼感を相互にもてるようになった。また、「でききたね」「すごくいい発表だったよ」という言葉がけのタイミングを逃さないことで生徒の成

功体験を積み重ね生徒の主体性がより多く引き出した。授業では、生徒たちが提示された課題やキーワードを見て自然に意見を発表、交換し、意見を積極的に出さない生徒に「どう思う?」「この付箋に書いたの〇〇さん?」などの会話が生まれ教師が多く言葉がけしなくても進行や協議が少しずつできるようになってきた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

さらにより授業にするには、授業をつくる教師力にかかっているが、まずは新学習指導要領の示す、育成を目指す資質・能力3つの柱である「知識・技能（何ができるのか）」「思考・判断力・表現力（知っていることをどう使うのか）」「学びに向かい合う力（どのように社会と関わるのか）」を強く意識し理解した授業づくりが必要ではないかと考える。このことを踏まえて、今年度の進路学習では、受動的な授業スタイルから能動的な授業スタイルへのシフトチェンジした。生徒へは、「6つの業種」というキーワードで示し、自分が興味関心のある業種を選ぶ（自己選択）こと。他者はどんな業種を選んでいるのか（他者理解）を授業の中心にして、生徒が主体的に考える時間を多く設けた。

b 対話的な学びの視点から

授業では生徒同士で「〇〇さんがまだ発表してないよ」「〇〇さん、サービス業の中にある清掃が合ってるんじゃない」などの言葉が多く交わされるようになった。授業を進める中で、どうしても選ぶことができなくて「この2つで悩んでいる」「どっちがいいかわからない、迷う」など考える過程やその行動力を「この2つを選んだんだ。よく自分で選んだね」などの肯定的な評価をすることで、生徒の対話的な学びや活動意欲を引き出すことにつながった。

c 深い学びの視点から

進路学習では、特別支援学校を卒業した生徒がどのような業種で会社でどんな活躍をしているかを映像で多く視聴した。その映像を視聴することで教師から聞いた内容ではイメージがつきづらい部分を細くできることがある。特に ADHD や ASD の生徒への支援としては理解が深まり「日本理化学工業のチョーク製造の動画」では「その日の目標が目の前に貼ってあった」「手元に集中して作業をするって書いてあった。私と同じ目標やった」など映像を見た感想や意見が多く出てきたので有効的であったと考える。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点により具体性をもたせて教師自身が毎回、チェックでき PCDA を行う際にもとても活用しやすいツールであった。授業後の改善点を見出す際には、生徒の行動や言動を動画などを使って確認したが、このツールの観点を意識して振り返るとより発展的、建設的な教師同士の協議ができることもわかった。また、より多くの生徒が安心して学べる環境設定のポイントをチェックする機能としても利用したことで生徒との関係性（会話や言葉遣いなど）、態度、雰囲気といった人的環境も良い方向へ変化をもたらしたツールでもあったので今後も活用する。

（カ）実践例（指導略案）添付

令和2年度 高等部1年 総合的な探求の時間学習指導略案

教科・領域名	総合的な探求の時間	授業者	MT ST: 1名
学部・学年・組	高等部1年（Aグループ）	対象 生徒数	8名

日 時	令和 2 年 10 月 22 日 (木) 1 時間目 (9:00～9:45)	場 所	高等部 1 年 カームダウンルーム
単元名	進路学習「働くこと①」(単元計画全 3 時間中の 1 時間目)		
本時の目標	①どんな仕事があるかを自ら調べて知り自分に合った職業(業種)を選ぶことができる。 ②卒業後の進路を考え、他者と将来(進路)について意見を発表しあうことができる。		
学習指導要領との関連	■特別支援学校高等部学習指導要領「職業」 第 1 段階 A 職業生活 ア 勤労の意義 (ア) イ 職業 (ア) ⑦ C 産業現場等における実習ア		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 3 分	1 前回の復習 (1) 進路学習の年間予定を P P で見て予定を確認する。 (2) 前回のプリントを見て、各自で確認する。 (3) 「進路学習を始める前に」を MT が読む。	パワーポイント資料(以下「P P」と略す) 前回の P P、プリントをみて本時につなげる MT が読んでいる時に S T は机間を巡回して確認する。	
展開 42 分	2 「働くこと」 (1) 本時のテーマを P P で発表する。 「働くこと」というキーワードを P P で提示する (2) 「働くことってどういうこと？」を生徒が読む。 質問 1 赤字になっていた漢字 2 つ答えよう。 (3) 「いろいろな仕事」を考える。 ワーク ① 日本にはどんな仕事があるでしょう？ (4) グループ構成の発表を行う。 グループワーク ① プリントに書いた仕事を青色付せんに書いて用紙に貼り(まとめ)、全体で発表する。 (5) 「先輩たちの仕事」を知る(6 業種とは何か) (6) 日本理化学工業の会社紹介の映像を見る。 質問 2 社員の方働いている姿勢や態度について感想を聞く。 (7) 「業種を知る(6 業種それぞれの違い)」 グループワーク ② 青い付せんに書いた職業を 6 つの業種に分けて発表する。 ★自分に合っていると思う業種を 1 つ選ぶ ★印は、この時間の最終目標 発表が途中であってもチャイムで休み時間にします	プリントの「働く」「仕事」というキーワードにアンダーラインを引いて確認する。 黙読 1 回、生徒代表の音読 1 回 MT が指名 プリントで仕事を記入して自ら考える時間を確保する。 筆記用具、ファイルのみを持って移動する。 MT、 <u>S T</u> は担当のグループの机に着く。 <u>グループワークの手順(流れ)</u> を提示する。 6 つの業種を簡単に P P で説明して、映像につなげる。 質問 2 の感想は指名して 1～2 名にあてる。 6 つの業種を生徒主体で分ける。 1 つ選ぶことが難しい生徒に <u>S T</u> は 2 つ選んで良い等の助言をする	

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
「日本にはどんな仕事があるのか？」という質問に自ら考えて付せんに記入する。	日本理化学工業の社員の方々の映像を見て、日本にある仕事を知ることができるように P P 資料も多く取り	主 1－②③ 対 2－①

	入れる。		
グループで 6 つの業種を分けて発表する。	業種を P P で 1 つ 1 つ説明を行い、グループ協議につなげる。	主 1－③ 対 2－② 4－① 深 1－①	
注目してほしい児童生徒の評価			
生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 A (角田)	仕事（進路）に興味関心をもって考え、自分に合った職種を選ぶことができる。	卒業後の進路に関しては、まだ憧れが多くあり現実的なことを少しずつ理解していく必要がある。活動では、「飲食厨房」を選び「カフェ店員になりたい」という発表をすることができた。	B
生徒 B (中岡)	・新しい情報を知って自分の進路選択につなげることができる。 ・自分に合った業種を 1 つ選ぶことができる。	「パン屋に就職したい」という希望を授業前から表明しており授業でも発表することができた。そのためには自分には何が必要であるかという自分を知る（自己分析）が課題としてある。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
指導案を作る際に 8 名の生徒の個別目標を考える前にそれぞれの実態把握をしようとしたが、どうしても生徒の良い部分を見つけ出すことが難しかった。そのため授業でも生徒 B は、文章を考えることは苦手であることは把握していたが、映像を見た直感的な意見発表ができることに気づくことができず、その能力を授業で引き出すことができなかった。別の生徒の指導や支援では、人前で話すスキルや自分の意見をまとめて発表することにつまづきがある生徒に対して、間違っても否定されない「安心感」（「ダメ」「違う」「そうじゃない」は指導ではないという教師間の確認）を与えること、活動に応じて「スピード」を落とす（「はやく」は指導ではない）など生徒への指導、支援上の配慮は ST との事前確認から連携がとれていたと自分でも評価できると思う。また、障害特性に応じた支援では、「視覚支援」イラスト・写真・手順表・動画視聴など ICT 機器の活用も含めてきたと評価できる。			
研究協議における意見・アドバイス			
授業後に授業参観して頂いた先生方から意見やアドバイスを受けた。進路学習という将来を知って考えるという学習で具体性のある内容が要所要所で出てきて生徒は活動がしやすく学びやすかったのではないかという意見があった。6 つの業種を 8 名の生徒が調べて発表する活動では、生徒の活動（言葉や行動、協議の方法など）を尊重し教師がそばで見守る様子は新学習指導要領が目指す 3 つの柱にもつながる活動ではないかという評価もあった。課題として、この学習にどうしても参加できない（活動に参加しない）生徒への対応を想定し、事前に個別課題や教師との活動などより細かな支援方法を ST と準備しておくべきではなかったかという課題も受けた。これらのことを受けて今後も生徒の実態把握を客観性をもっと多く取り入れ目標設定、指導の効果的な手立て、評価につなげていく必要があると改めて感じた。			

(1) 公開授業 7

ア 美術「発泡スチロールでスタンプ!～年賀状づくり～」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部1年生16名(男子11名、女子5名)の集団である。この中には、簡単な声掛けや指示で理解し自分で考え活動ができる生徒、活動内容を理解していても自信がなく行動に移せないときがあるが教師と確認しながらであればできる生徒、手順書等を見ながらであれば落ち着いて活動できる生徒、意欲はあるが周囲が気になり活動に対して気持ちが散漫になる生徒、言葉はなく気持ちが不安定であるが見通しをもつことができれば視覚支援や声掛けで活動ができる生徒など、実態や支援の内容は様々である。1学期のうちわ作りの折り染めでは、1回目の授業ではうまく染めることができなかった生徒が多かったが、計画を見直し染めに時間を掛けるようにして、もう一度2回目の授業をしたことで豊かな模様を作り出せる生徒が増えた。1つの題材に対して見通しをもち、どのようなところを工夫すればよいか気を付けながら実践の中で繰り返すことでよい結果が得られた。また、野菜版画制作では、茄子のスタンプを押したのから「何に見えるのか」考えることで、手順が決められた中でも個人の発想からユーモアのある表現ができた。幅広い実態の生徒がいる中でも制作するだけでなく見る楽しみも皆で共有することができた。できた野菜版画を暑中見舞いとして両親等に送った経験から、年賀状のイラストも制作することで季節を感じつつ誰かに向けて想いを込めて表現することへもつなげるため単元を設定した。

b つけたい力

本単元では発泡スチロールスタンプで年賀状の「丑」のイラスト部分を制作する。イラストはパソコンを活用しインターネットで検索することで、主体的に興味をもって調べ、図案を考えることができるようにする。下書きの段階では「自分で考えて描く」「イラストを参考にして描く」「イラストをなぞって描く」から制作方法を選ぶようにする。そうすることで、家などで制作物を作る際、必要な情報を調べて参考にしながら自分の作りたいものを自分のできる方法で表現する方法を考える力を身に付けてほしいと考えた。

スタンプ作りでは、発泡スチロールに油性ペンで絵を描くと溶剤の働きで溶けて少しへこむ効果を利用して原版を作る。どのようにすればきれいに発泡スチロールをへこますことができるか、どのようにスタンプに色を付けて押すとイラストがくっきりと浮き出るようにすることができるか、道具を使用する際の力加減や注意点に気を付ける力を身に付けることを目指す。

完成した作品は、モニターに大きく映し全員で鑑賞する。もらったとき、どのような気持ちになるか問い掛けながら作品に対しての感想を引き出し、形や色の違いだけでなく、心で感じることも言語化していくことでより美術を楽しむ感性を伸ばしたい。作った発泡スチロールスタンプは冬休み前に持って帰り自宅でも使用できるようにしたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

年賀状用紙にスタンプする前に練習刷りの時間をしっかりと確保し、どうすればよりよくなるか、改善点に自分で気付くように3回練習することを設定した。1回目は黒板の手順をもとに教師が制作している様子を見ながら説明をする。2度目から各自のスピードで行うようにした。

練習の成果が出せるよう意識付けるため、練習がしっかりとできたと思った生徒から年賀状を取りに来るようにする。手渡しする際には、スタンプ練習したのを見てどのようなところに気を付けたか質問をし、いい年賀状ができるよう声を掛ける(希望がある場合は練習回数を5回程度まで増やす)。制作中は必要最低限の声掛けにし、できるだけ見守るようにした。



b 生徒への配慮

きれいにできたかどうかの判断が難しい生徒がいることを考慮して、練習回数3回とした。他の生徒が気になる生徒がいるため、班机でなく全員が前向きにすることで各々の制作に集中しやすい座席にした。

制作状況が遅い生徒にも、困っている点について出来上がりのイメージをもてるように丁寧に指導することで不安にならないようにした。

一人では落ち着かず不安になりやすい生徒には、すぐ質問したり話しかけたりすることができる位置にサブティーチャーを配置し、安心して取り組めるようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

技術や感性はもっているが、指示を待って制作を進めることが多かった生徒が、イラストをインターネットから調べたことで制作に対して意欲的になり、時間が掛かっても手順書を見ながらこだわりをもって一人で仕上げることができた。

スタンプ練習の際に、線が出にくい箇所を自分からマジックでなぞってへこましてから、もう一度スタンプする生徒がいた。また、色が薄かったため、絵の具を前回より多く付けるようにするなど、調整しながら制作する様子が多く見られた。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か**a 主体的な学びの視点から**

スタンプ練習してから本番は色を変えたくなり、もう一度同じ手順に戻ってしまう生徒もいた。手順をもっと整理し、本番のための練習であることを意識付けるか、また実態によっては本番と同じ色で練習すると決めておく方が良かった。

b 対話的な学びの視点から

授業中席から近い友達の作品を見て参考にすることができるが、遠い席の友達の作品や練習の様子は見るのが難しいため、上手にできている生徒を前で紹介する等して、自分の制作に生かす機会があっても良かった。

c 深い学びの視点から

練習チェックをサブティーチャーにも分担してもらい、生徒一人一人に対して“どうしてきれいに紙にスタンプできないのか”“どうしてうまくできたのか”問いかけることで、生徒自身が考えてやり方を修正していくことができれば良かった。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

年間計画で予定している活動内容だったが、学習過程分析表からどの学びに該当するのかを確認することで、より意識して指導できることに気付けた。

(カ) 実践例

令和2年度 美術科学習指導略案

教科・領域名	美術	授業者	MT、ST4名
学部・学年・組	高等部1年A・B組	対象 児童生徒数	16名（内1名個別対応）
日 時	令和2年12月11日（金） 1時間目（9：00～9：45）	場 所	美術室
単元名	発泡スチロールでスタンプ！～年賀状づくり～		
本時の目標	- イラストのイメージに合わせて色を選び、表現できる。 - 絵の具の量や押す力を工夫してスタンプできる。		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 - 図工 1段階 A表現（イ）、B鑑賞（ア）、〔共通事項〕（ア）（イ） - 図工 2段階 A表現（イ）、B鑑賞（ア）、〔共通事項〕（ア）（イ） - 図工 3段階 A表現（イ）、B鑑賞（ア）、〔共通事項〕（ア）（イ） ■ 中学部学習指導要領 - 美術 1段階 A表現（ア）（イ）、B鑑賞（ア）、〔共通事項〕（ア）（イ） - 美術 2段階 A表現（ア）（イ）、B鑑賞（ア）、〔共通事項〕（ア）（イ） ■ 高等部学習指導要領 - 美術 1段階 A表現（ア）（イ）、B鑑賞（イ）、〔共通事項〕（ア）（イ）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 始めの挨拶をする。	全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。	
展開 45分	2 本時の学習内容を知る。 ・制作の内容について知る。	- スケジュールのボードを提示し、流れを伝える。 - ホワイトボードに目標を掲示する。 - 制作の手順を黒板に示す。	
	3 本時の目標を知る。 『イメージに合わせて色を選ぼう』 『絵の具の付け方、押す力に気を付けよう』	- 終わりの時間を伝え、タイマーで示す。 - スポンジで絵の具を付ける量や紙にスタンプする時の押す力が十分か、各自行った後確認し、練習する中で改善する必要があるれば声を掛けるようにする。	
	4 制作する。 ①スタンプ練習（3回） ②年賀状にスタンプ ・片付け	- 練習が終わった人は年賀状を取りに来るようにする。 - 年賀状の上下を間違えないよう声を掛ける。 - 早く終わった生徒は、予備の紙に好きな色でスタンプするようにしたり、友達へアドバイスしたりする等を促す。 - タイマーで終わりを知らせる。	
	5 次の授業について（2時間目：鑑賞）		
	6 終わりの挨拶をする。		

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開4 制作する。 ①スタンプ練習 (3回)		・他の生徒が気になる生徒がいるため、班机でなく全員が前向きにすることで各々の制作に集中しやすい座席にしている。 ・どうすればよりよくなるか、改善点に自分で気付くように3回練習することを設定した。1回目は手順書をもとに教師が制作している様子を見ながら説明をする。2度目から各自のスピードで行うようにする。	主 1－①② 2－①②③ 対 3－①②③ 5－①
展開4 制作する。 ②年賀状にスタンプする		・練習の成果が出せるよう意識付けるため、練習がしつかりできたと思った生徒から年賀状を取りに来るようにする。手渡しする際には、スタンプ練習したのを見てどのようなところに気を付けたか質問をし、いい年賀状ができるよう声を掛ける。(希望がある場合は練習回数を5回程度まで増やす。)制作中は必要最低限の声掛けにし、できるだけ見守る。	主 1－① 2－② 対 3－①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	・手順（黒板）や友達の様子をもとに、自分で年賀状にスタンプし表現できたか。	・手順を確認してから、手元をよく見て押すことができていた。教師の声掛けが、まだ時々必要な時があった。	B
児童B	・表現したい内容に合わせて色や配置、力加減を工夫してスタンプすることができたか。	・こだわりと制作スピードにより次の授業まで時間が掛かったが、年賀状にスタンプする工程は、どのような色にするか、色の濃さ・付け具合、力加減を一人で考えて仕上げることができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り（授業者の反省）			
・スタンプ練習チェックで何名もの生徒に呼ばれたため、こうすれば良いとすぐアドバイスしてしまった。生徒一人一人に対して“どうしてきれいに紙にスタンプできないのか”問いかけながら生徒自身が考えてから答えを引き出すようにできればもっと良かったと感じた。 ・スタンプ練習してから本番は色を変えたくなり、もう一度同じ手順に戻ってしまう生徒もいた。本番のための練習であることを意識付け、本番と同じ色で練習すると決めておく方が良かった。			
研究協議における意見・アドバイスを			
・板書に手順が常時出ていて分かりやすい。また、モニターで手元を撮影し制作方法を説明するなど視覚的な情報が重視されていて見通しがもちやすくなっていた。 ・作品を楽しく作ったが、手が汚れて嫌な気分になる生徒がいた。ビニール手袋やエプロンを準備しておき、任意に使用しても良いなどの配慮があるとなお良いと思う。 ・練習回数3回と示すのは、自閉症スペクトラム傾向のある生徒にとっては分かりやすい。 ・楽しい雰囲気の中にも規律のある授業になっていた。主指導が16名全員のスタンプ練習のチェックをするのは難しいので、サブティーチャーと打ち合わせし分担してもよい。			

(1) 公開授業 8

ア 国語 ミッション「クイズに答えて漢字カードをゲットせよ！」第3弾

(ウ) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

対象生徒は高等部1年生16名のうちの、知的障害と不安障害等を併せ有する生徒を含む、男子6名・女子2名(内部生1名・外部生7名)のグループである。学年内ではAグループに所属する集団である。

Aグループの生徒の実態としては、基本的には自分から活動ができる生徒や、声掛け等で活動できる生徒がほとんどである。全体的には行動や発言も活発で授業に臨む姿勢も大変良く、個人活動だけではなく班活動を授業に取り入れることで良好な集団意識が形成されてきている。

生徒の中には家庭の事情により2か月間登校できなかった生徒も含まれており、登校再開後に学級や所属する学習グループと円滑に馴染めるかどうか心配されたが、自分の思いを出せる環境であることを実感し始めることで自我を開放し始め、現在は問題もなく順調に登校し参加できている。

b つけたい力

学習室で一斉指導に取り組んでいるが、今回は学校の敷地内に設置されたクイズを探して答えるフィールドワークに取り組んだ。このグループの実態の最大の特徴としては、どんな活動も活発に協力して取り組めることである。日頃からクラス対抗でクイズ形式の問題を出題し活動に取り組む様子を見てみると、フィールドワークを取り入れることでも、さらに共同的な学習につながると考えた。

学校にあるクイズ(7か所)を探す過程では、8名でまとまって相談し合う活動が想定されるので、仲間意識が高められることを期待した。クイズに回答する際は、全員で協力して答えを出し合う活動が設定される。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

- ・今回で3回目ということである程度活動に見通しをもてているが、学習全体像が分かるようにパワーポイント資料で流れを確認した。

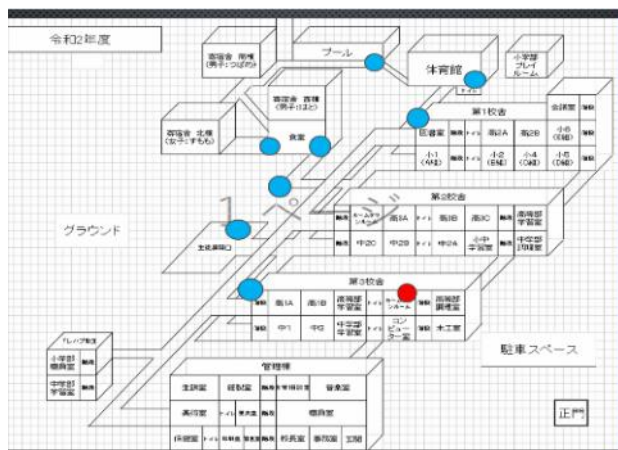
- ・授業への期待感を高めるために活動の説明場面では「ミッションインポッシブル」のテーマ曲を流した。

- ・活動前に、「ルールを守りながら行動できる」、「自分が考えた答えを伝えることができる」、「獲得した漢字カードを用いて、協力して並べることができる」3つルールを確認する時間を設けた。

- ・クイズを探す時間に制限を設けることで、時間を意識した活動を設定した(タイマーをスライドで表示)。

- ・獲得した漢字カードを教室へ持ち帰り、正しく並べることで五文字熟語になるようにした。

- ・学校の校舎内が分かるように生徒Dと生徒Fに見取り図(クイズの場所を大まかに示している)を配布した。(右図参照)



b 生徒への配慮

- ・同じ学習グループではあるが習熟度には少なからず差異があるため、クイズの難易度は8名全員が正

答できるように、これまでの国語で学習してきた復習問題や一般常識を中心に出题した（下図参照）。

- ・支援が必要な生徒にはS Tを配置し、クイズを回答する際に助言役に回ってもらった。



クイズ例①

クイズ例②

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

どの授業内容を展開しても、ほとんどの生徒が前向きに学習に取り組んでいる。漢字の学習が多く設定されているが、解答が困難な際にはS Tに声を掛け、助言を受け問題解決に努めている様子が見ええる。また、困っている仲間に声を掛け、教え合う姿も増え始めている。

グループ活動では、答えをホワイトボードに書く生徒、グループをまとめる生徒、意見を積極的に発言する生徒など役割が明確化されつつあるが、全員が参加できるよう生徒同士で声掛けができるようになってきている。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

・今回で3回目の実施で、全員がまとまって活動できた。授業のアウトラインを説明する際には、パワーポイント資料を活用していくことは効果的である。次回はクラス対抗に分かれ、あるいは自分たちでグループを形成し取り組む内容にしても良いと考えている。

b 対話的な学びの視点から

・今後も学習活動の中にグループワークやフィールドワークを取り入れていくことは効果的だと考えている。国語という教科の枠組みに捉われず一斉授業だけではなく、生徒同士で思考し表現していく過程を積み重ねていきたい。

c 深い学びの視点から

・例えばクイズの内容をグループ単位で考える活動を設定すれば、より深い学びにつながってくると考えられる。授業を受ける側から、自分たちで授業を能動的に作り、また、生徒の「やってみたいこと」を可能な範囲で今後取り入れていきたい。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

主体的・対話的・深い学びをチェックするための基本的な指標が設定されており、参考になった。

（カ）実践例

令和2年度（国語科）学習指導略案

教科・領域名		国語	授業者	MT ST 1名
学部・学年・組		高等部1年 Aグループ	対象 児童生徒数	8人
日 時		令和2年9月23日(水) 1時間目(9:00～9:45)	場 所	高等部カームダウン ンルーム及び校内
単元名		ミッション「クイズに答えて漢字カードをゲットせよ!」第3弾		
本時の目標		・ ルールを守りながら行動できる。 ・ 自分が考えた答えを伝えることができる。 ・ 獲得した漢字カードを用いて、協力して並べることができる。		
学習指導要領 との関連		■ 中学部学習指導要領 ・ 国語科 2段階 A聞くこと・話すこと イ ウ エ ・ 生活科 3段階 カ 役割(ア)(イ) ■ 自立活動 ・ 3 人間関係の形成(1)～(4) ・ 6 コミュニケーション(1)～(5)		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 10分	1 挨拶(A組の日直) 2 本時の目標の確認 3 本時の流れを確認 ・ ミッション「漢字カードをゲットせよ!」の流れを2名(生徒D・生徒F)が他の生徒に伝える。 ・ 説明を聞く。 ・ 活動のルールを一緒に読む。		・ パワーポイント資料に注目するよう声掛けする。 ・ これまで実施した2回のミッションを振り返る場面を作る。 ・ BGM「ミッションインポッシブル」をかけて期待感を高めていく。 ・ クイズがある場所を掲載した地図を渡す。	
展開 30分	4 活動(1)【フィールドワーク】 ・ 校内にあるクイズを協力して探す。 ・ 封筒に入ったクイズを見つけたら、問題文を読んでから答える。 ・ 漢字カードを全部もらったら教室へ戻る。 5 活動(2)【カードを並べよう】 ・ 黒板に漢字カードを貼る。 ・ 正しい五字熟語「日・高・村・役・場」になるよう組み合わせを考える。		・ できるだけ全員が発言する場面を作るため声掛けをする。 ・ 答えが出にくい場合はヒントを出し、正答に導く。	
まとめ 5分	6 本時の振り返り ・ ミッションをクリアできた感想を述べる。 7 挨拶(A組の日直)		・ チームで協力して取り組めたことを称賛する。	
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話 的で深い学びの視点

展開「4活動(1)校内にあるクイズを協力して探す」		・地図には校内の見取り図が掲載されており、クイズがある大まかに場所がマークされている。チームで話し合いをもち、地図とマークを頼りにどこから行けばよいか、時間内に全ての場所に行けるかを評価していく。	主－1－② 対－4－①
展開「5活動(2)：正しい五字熟語「日・高・村・役・場」になるよう組み合わせを考える。」		・黒板に貼られたカードには不要なカードが2枚含まれており、どれを除外するかを話し合う機会が設定される。いろいろな漢字の組み合わせを試行錯誤することで、正しい答えに徐々にたどり着く過程で、適切な熟語のまとまりが分かる。	主－1－② 対－2－② 対－4－①、②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	地図を使って、効率よく時間内に回れるかを相談できたか。	・地図を効果的に活用できた。 ・地図の全体像を把握してから、早く回れる方法を考えることができた。 ・メンバーに声掛けをし、チームをまとめることができた。	A
生徒F	単独行動ではなく、チームでまとまってクイズ探しが協力してできたか。	・過去2回は単独で先走ることがあったが、「一緒に行くよ」という声掛けが度々あり、集まって活動することが意識できていた。終始、事前に確認したルールに沿って取り組むことができた。	A
【評価基準】A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業全体の総括			
・一斉指導というスタイルではなく、3回にわたりフィールドワークを実施してきた。普段とは異なる活動形式ではあるが、協力して課題解決（ミッションクリア）する共通の目的を共有することで、生徒たちもより意欲的に活動できた。 ・「ミッション」、「クイズ」など興味が沸きそうなキーワードを用いること、またBGMを流すことは授業への期待感が高まるので効果的であった。 ・授業を進行する際に留意している点は、授業者自身が「楽しむ」ことである。クイズ番組の司会をイメージし、声のトーン、間の取り方などに配慮している。			
本授業後に改善・実施した内容又は今後の方針			
・黒板に漢字カードを貼る活動時、ラミネートされた枠組みの中にカードを貼れば、よりカードが際立ち、クイズ番組のような雰囲気を取り組み、さらに楽しめることができたと思う。 ・生徒がクイズを回答する際、発言にやや消極的な生徒も一部おり、発言の機会を平等に設定する配慮をすればよかった。			

（１）公開授業 9

ア 作業学習「セメント加工」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童（生徒）の実態

高等部の作業学習のセメント加工で現在学習している生徒は、男子6名女子2名の計8名のメンバーで構成されている。知的障害に加え学習障害やADHD、情緒面で不安定な生徒が在籍し、障害の程度や支援の仕方も異なる。

また、生徒の中には、新しいことや初めてのことへの不安から、声が小さく、聞き取りづらい生徒等、それぞれの実態が異なり、適切な支援の仕方も様々である。全体的に、視覚的な情報を提示することや口頭であっても事前にスケジュールを示せば、学習に対する見通しが立ちやすい集団である。また後期の作業開始当初（9月）、言葉遣いや集団での規律に対しては、敬語が使えず、休み時間とのめりはりのない集団であったが、少しずつ規律を守り、緊張感を持ちながら作業に取り組むことができるようになってきている。

b つけたい力

この単元を通して、協働して1つのものを生産する喜びやセメントからブロックが出来上がる過程を通して、勤労意欲や計画性をもって主体的に取り組む力を身に付けるようにしていく。また、ブロック棟での作業ということもあり、特別な場所、雰囲気を感じ取って、現場実習のような緊張感をもちつつ、安全に配慮しながら、規律ある作業を目指して取り組んでいった。

特に反省会の中では、作業ノートをもとに作業時の振り返りを行いながら、大きな声で挨拶、敬語を使う、作業工程を覚える、安全に配慮する、協力する、報告する等項目に分けて振り返り、次回の作業時には少しでも改善できるように話し合いや教師からのコメントを参考にしながら、積極的に討論する場面を設定している。その中で、集団として将来必要とされる勤労意欲や態度面が養われると考える。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

ブロック棟に入ると、まず工場長が、日付、生産数などをホワイトボードに記入し、他の生徒は作業内容、作業グループを確認していく。作業グループは固定している。欠席者や必要な人数が確定したうえで、必要な道具、材料、装備、作業場所の安全確認などをしていく。また、日頃から作業動線を整理して、他の生徒と混雑しないように声掛けしたり、道具の整理・整頓、敬語、報告、協力行動等を徹底することで、将来の進路に必要な力が身につくと考えます。そうすることで、生徒の積極性や主体性を大切にしつつ、仲間の助けや教師に支援や依頼を引き出す行動に結びつけたい。作業中、このような行動が見られた場合は称賛し、反省会などで再び称賛し、強化していくようにも心掛けたい。



b 児童（生徒）への配慮

ブロック加工の作業を進めるにあたり、グループごとに担当教師を決め、指示や報告が一本化し、スムーズな作業ができるようにしている。また、生徒が道具の準備や片付けが容易にできるように、以前は

乱雑に置いていた道具についても整理・整頓や道具のメンテナンスを生徒が中心になって片付けをしている。初めは乱雑に片付けしていた生徒もきれいに整頓された置き場を維持することで、整理・整頓を意識して置くような行動が見られてきた。時には、仲間同士で声を掛け合いながら整理・整頓しようとする姿も見られた。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

反省会の中で自分自身の課題を積極的に発言したり、考えてノートに記入するなどの、流れができるようになってきた。以前は注意を受けたことに対して、素直に受け入れたり、振り返りができず発表さえできなかった生徒が、ノートやホワイトボードに積極的に記入する姿が見られた。他の生徒の不適切な行動や作業での効率性を考えて改善したい内容についても指摘したり、活発な討論をしようとする姿も見られた。また、報告や相談、質問など、適切な言葉で行うことができる生徒が多くなってきた。ブロック作業を希望している生徒ではなかったが、ブロック作業のメンバーとして作業を経験することで、弱音を吐かず頑張れるようになった生徒もいる。ブロックや重い物を運び体力が付き、いろいろな機械や今まで使ったことのない道具に触れることで意欲になり、自信につながっているという報告も受けている。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒たちにとっては、ブロック棟という場所は、現場実習や卒業後の進路を意識して作業できる大切な場所である。安全面に配慮し、生徒が自分自身で活動を進めていき責任をもたせながら、最後まで任せる形で取り組んでいき、教師からの声掛けは必要最低限にして、生徒が考える場面を設定していくことで、自主的に促すことを意識していく。

b 対話的な学びの視点から

反省会の場面では、各グループごとに良かった点や注意を受けた点を出し合いながら、各グループの代表が全体に向けて発表する。情報を共有しながら、作業の振り返りをして、教師からの意見をもらったり、生徒同士で意見を出し合う場面を設定して行く。良かった点については全体で共有、称賛をしながら自信につなげる。注意を受けた内容については全体で共有し、集団としてのまとまりや士気を高めていくことを大切にしていこうようにしたい。

c 深い学びの視点から

ブロック生産の回数に取り組める回数は限られているが、緊張感をもちながら、作業に取り組み、今後の現場実習や強化実習につなげ、将来の働く生活の基礎につながることを伝えていく。仕事をする場面での適切な言葉遣いや敬語といったコミュニケーションの仕方等、実際の作業を通して身に付け、日常生活でも意識して使えるようにしていく。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

主体的・対話的・深い学びを考える上で大変参考になった。使い慣れていない点もあり、今後も活用しながら、授業の組み立てをする参考として活用していきたい。

教科・領域名	作業学習	授業者	MT ST:3名
学部・学年・組	高等部1年～3年	対象 児童生徒数	8人
日 時	令和2年12月18日(金) 時間 9:00～12:30	場 所	ブロック棟
単元名	セメント加工		
本時の目標	・大きな声で挨拶、連絡、報告をする。 ・分からない時は、質問して解決する。		
学習指導要領との関連	■高等部学習指導要領 ・職業 1段階 イ (ア) 職業に関わる知識や技能について ⑤使用する道具や機械等の特性や扱い方の理解を深め、作業課題に応じて効果的に扱うこと。 ■中学部学習指導要領 ・職業 2段階 イ (ア) 職業に関わる知識や技能について ⑤作業課題が分かり、使用する道具や機械等の扱い方を理解すること。 ■自立活動 3 人間関係の形成 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること (4) 集団への参加の基礎に関すること 4 環境の把握 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること 6 コミュニケーション (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること		
時間	学習活動	手立て、留意点	
開始前	・集合前に工場長はホワイトボードに日付とメンバーを貼る ・ホワイトボードに掲示された作業の中から希望の作業を選び、自分の名前カードを貼る。	・ホワイトボードに作業での内容を提示する。	
導入 5分	1 工場長の声かけにより始めの挨拶をする。 2 出席確認をする。 3 準備体操をする。 4 セメント加工で守ることを全員で復唱する。 5 作業での注意事項を確認する。	・大きな声で挨拶するように促す。 ・作業の担当教師を確認し、報告や相談、質問は担当教師に行うように伝える。 ・装備では、正しい装着や丁寧な扱えることができるように促す。	
展開 3時間 55分	6 個々の担当の作業の準備に取り掛かる。 7 作業を始める。 ① 室内 ② 搬出 ③ 骨材 ・生産準備ができたなら、担当教師に報告に行き、確認を求める。 ・ミキサーの質問等はできるだけ担当教師のところまで行き、大きな声で、質問をする。 ・工場長の声掛けにより休憩時間を適宜とる。(休憩は 10:30～10:50)	・丁寧な言葉遣いで、報告や相談ができたときには称賛し、強化する。 ・報告時、丁寧な作業の様子が確認された時には、称賛し、強化する。 ・休憩時間をタイマーにより提示する。 ・掃除の場面で、戸惑う生徒がいれば掃除の方法などについて指示する。	

まとめ 10分	5 片付け・掃除を行う。 ・工場長の声掛けに従い、作業で使ったものをそれぞれ洗う。 ・協力して掃除を行う。 6 終わりの挨拶をする。	・周囲の状況から自ら判断し掃除を行っている生徒を称賛する。	
注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
導入 「作業での注意事項を確認」	・作業での注意事項を確認する。安全な機械、道具の扱いについては細心の注意を払うように徹底できているか。	主－1 ②③ 対－3 ④	
展開 「各作業」	・作業手順を理解し、丁寧に正確に行えているか。報告の言語表現は適切か。	主－2 ②③ 対－2 ②	
まとめ 「片付け・掃除」	・自ら活動を見つけ、意欲的に活動できているか。 ・他者を意識し、協力し合って片付け・掃除ができているか。	主－1 ② 対－4 ①②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 S	・安全な作業を心掛けることができたか。 ・大きな声で連絡、報告することができたか。	目標を意識して、安全に作業に取り組むことができた。大きな声で報告できた。	B
生徒 O	・安全な作業を心掛けることができたか。 ・適切な言葉遣いであったか。	適切な言葉遣いをしようと努力し、しようとしていた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・いつも以上に緊張感をもちながら作業に取り組むことができた。機械の不具合でセメントを直接バケツリレーして機械に投入する場面もあったが、生徒同士で協力しながら作業を進めることができた。 ・生徒主体で生産する上で、必要最低限の声掛けや支援で生産することができた。			
研究協議における意見・アドバイス			
・工場長からの指示を受けて、骨材班が、砂、ビリを流すタイミングを図っていたが、互いに声を掛けて、作業確認ができていた。 ・ブロックが積まれたラックから、一つ一つ下に降ろす際、ブロックを持つ手がしっかりしておらず、高い位置にあるブロック降ろしは要注意。 ・4人の教師が互いに役割分担及び、連携が取れており、特に生徒の安全面に気を付けながら、作業ができている。 ・教師のきびきびとした指示、工場長の声掛けも良い。 ・朝1校時目から寒い中でのスタートであるので、準備体操、さらに、全員で「セメント加工で守ること」(目標)の復唱(読み上げ)も、互いに声を掛け合うことは体をほぐし、仕事に向かう気運を高めていくうえでも大事な学習と考える。			

(1) 公開授業 10

ア 生活単元学習「社会参加のために今から準備すること」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部2年B組は、男子7名、女子1名の計8名のクラスである。大部分の生徒が、集中力が続きにくい、口頭だけの説明では学習内容が伝わりにくく活動にも見通しがもてないなどといった特性をもっている。また、中学校での不登校や問題行動の影響から自己肯定感が低く自分の行動に自信が持てない面や授業中の離席、机にうつ伏せた状態で授業に参加する行為など学習活動に向かう姿勢の消極性といった面も、改善されつつあるが、まだ見られる生徒もいる。社会参加に向かう面では、日常の言葉遣いや時間厳守の意識、意見表明に対する消極的な態度などが挙げられよう。そういった困難さを軽減解消するために、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要となる。

b つけたい力

本年度、生徒たちは現場実習や強化実習に取り組み、個別懇談や関係機関とのサービス担当者会・進路懇談会などの参加を通して、就労に向けた具体的なイメージの形成を図ろうとしている。一人一人が自分のセールスポイントや強み、課題を知り、意識を高めて学習体験を積むことで、生き方理解を深めていこうとしている。卒業後のなりたい自分について考える機会を持ち、社会参加を肯定的にとらえて、自己実現に向けた具体的な行動について自己と他者を比較して考える力を育てていくために、この単元を設定した。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

本時の導入で、意見の短冊（図1）をもとに、前時の司会者が意見集約をして振り返る場面を設定し、本時の活動1の動画やスライドの理解の深長、活動2の話し合い活動参加へのイメージの伸長をねらった。また、短冊を掲示することでマグネット系の活動を想起する生徒もいると仮定し他者理解の伸長を図った。活動1では、生徒たちが将来に展望を持ち、社会参加に向けて今から準備することを前向きに考えていくために、動画視聴の後で内容補充を行った。活動2の話し合い活動で、「未来の社会」に向けて自立した自分を育てていくためには、どのようながんばりや支援が必要であるか、自分のセールスポイントやより良くしたいことの視点から自己を見つめた意見が出せるように、STと連携して話し合い活動を支援していくこととした。

本時で活用した動画「政府広報オンライン Society 5.0」は、生徒たちの興味・関心や生活年齢などを考慮して、話し合い活動に向けての意見形成のツールとして取り入れた。これは、本年度の高知県高等学校教育課程研究協議会で紹介された教材の一つで、対象生徒たちの大部分が関心のあるAIやドローンといった、ICTやIoTなどのデジタル革新やイノベーションによって社会のありようを変え社会が抱える様々な課題を解決しようとする観点を扱った高校生を対象にした動画である。

動画の内容理解を図るために、写真や絵、シンボルマークを大部分のスライドに活用し、難解な語句はアニメーションで簡単な語彙に変換して復唱させ、インフォメーションギャップを埋める活動を丁寧に行った。しかし、あくまで意見形成のツールの位置づけであるために、細かな内容理解はねらわなかった。

b 児童生徒への配慮

話し合い活動では、生徒の実態や課題に応じて司会役や書記などの役割分担を行った。絵や丸印などの記号で表記された意味に応じて行動していくことが得意な生徒にはマグネット係を、漢字の形や平仮名とのバランスに気を付けて書くことを目標としている生徒には書記係を、人間関係の形成に課題のある生徒には書記の補助を申し出てくれるよう発問で促した。



10



図1「わかったこと かんがえたこと」

図2「今からすること」

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

生徒主体の話し合い活動を重ねていく中で、調理実習や校外学習などの役割分担やクラスでの取り決めなどは生徒同士が意見を出し合って決めていく流れが定着してきた。発表に消極的な生徒の多くが、適切な言葉遣いで自信をもって意見を発表する場面も増えつつある。また、朝の会や終わりの会での学習姿勢も向上し、活動に気持ちを向けて期待感をもった表情で日直に注目して、一日の学習の始まりや締めくくりを行う雰囲気がクラス全体に広がっている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

話し合い活動において生徒たちが成功体験を積む工夫として、生徒の実態に応じたシンプルで細やかな段階を設定した思考ツールや進行表、活動中の丁寧な形成的評価が大事となってくる。本時で使用したツールでは生徒が受け身になってしまい、教師の声掛けが多くなりがちになり生徒の自発的な動きを引き出せない場面が多かった。そのため、今後の課題として、生徒の思考を促す発問や考え方のモデリングの提示の仕方についてSTと検討し、一貫性のある支援の共有を具体的にしていきたい。

b 対話的な学びの視点から

話し合い活動では、適切なヒントや助言を与えながら対話を進めて行けるように、担当生徒の近くにSTを配置した。一人一人の意見の短冊を黒板に提示し(図2)司会者が読み上げ全体で意見の共有し、自分の意見を改めて確認し他者の意見について深く知ることができるように配慮した。自分や友達の意見を短冊で可視化することで、活動の全体像が見通せ、様々な意見を知ることによって自分の意見との比較や自己の意見形成の助けとなり対話的な学びへとつなげていけるよう、自己評価と他者評価の場面を設定した。

c 深い学びの視点から

活動2のまとめとして、「一人一人が未来の創り手」であり、①どのように社会や人生をより良いものにしていけるか自分で考え出すことができることや②じっくりと考えて自分の考えをまとめること、③相手にふさわしい表現を工夫すること、④いろいろな人と一緒に行動して課題を解決することの4点を復唱して確認した。また、本時のまとめとして補助発問で「この時間に勉強したこと」を問い、学習内容の理解と適切な言葉でまとめて話す表現の伸長を図った。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

領域や併せた指導では分類上は活用しやすいと感じた。下位の内容をそれぞれの発達段階や障害特性に応じた具体的な学習活動に照合したものにすると、児童生徒の実態や各学部に応じた授業展開などに対応でき初回から活用しやすくなりうるのではないかと、今後具体的に考えていきたい。

令和2年度 高等部2年B組 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2名
学部・学年・組	高等部2年B組	対象児童生徒数	8名
日 時	令和2年12月11日(金) 第2校時(9:55~10:40)	場 所	高等部2B教室

単元名		2学期のまとめ3 「社会に出るために今からすること」
本時の目標		「社会に出るために今から準備することについて考える」 ・自分のよりよい行動について考え、意見が言える。 ・役割を分担し、話し合い活動をすすめる。
学習指導要領との関連		■小学部学習指導要領 ・生活 1段階 カ 役割（イ） ・国語 1段階 （3）読むこと C ウ ■中学部学習指導要領 ・国語 1段階 思考力・判断力・表現力等（1）聞くこと・話すこと Aオ ・国語 2段階 知識及び技能（3）書写 ウ（ウ）④ ・社会 2段階 ア 社会参加ときまり 社会参加（ア）⑦ ■高等部学習指導要領 ・社会 2段階 エ 産業と生活 我が国の産業と情報との関わり（イ） ■自立活動 ・人間関係の形成（1）～（4） ・コミュニケーション（1）～（5）
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 8分	1. 始めの挨拶 2. 前時の学習活動の振り返り 3. 学習目標の提示・学習内容の確認	・前時の活動内容について発問する。 ・目標を提示し、授業の流れを板書する。
展開 30分	4 「大人になって生きていく社会とは」 ・動画を視聴する。 ・スライドを見て、動画の内容をより詳しく知る。 ・前時の短冊から自分や友達の感想や意見を振り返り、話し合い活動の参考にする。 5 話し合い活動 「自分らしく生きていくために今から準備すること」 主発問:「社会に出て自分らしく生きるために、今から準備していくことは何ですか。」 ・司会や書記、マグネット係など役割を分担して話し合い活動を行う。 ・意見の短冊を作成し、黒板に掲示して注目する。 ・活動のまとめを行う。	・モニター画面に注目して、シンキングツール1（「政府広報オンライン Society 5.0」）を視聴する。 ・シンキングツール2：ppt.「社会に出るために今からすること」を活用して補足説明を行う。 ・就労して生活していく将来を、各自が肯定的にとらえることができたか。 ・主発問を復唱させ、理解の深化を図る。 ・MTは、技能統合が円滑に図れるよう司会や書記の生徒を適宜支援する。 ・MTとSTは、友達の意見への共感や意見の違いを認め合う活動の雰囲気づくりを支援する。 ・印を理解してマグネットが貼れたか。 ・将来への肯定感や期待感をもつことの大切さをスライドで再度確認する。
まとめ 7分	6 本時の学習の振り返り 補助発問:「この時間に学んだことをひとつ答えましょう。」 7 次時の活動について ・次時の単元について知る。 8 終わりの挨拶	・分かったことや勉強したことを振り返ることで各自の自己評価につなげる。 ・次の単元への期待感がもてたか。やるべきことがイメージできたか。

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開4 「大人になって	・将来、生活していく社会に期待感や肯定感をもつこと	主 2－③

生きていく社会とは」	ができるように、動画に気持ちを集中し、場合によっては2回視聴する。 ・主体的な社会参加するイメージが描けるように、教材への注視が図られているか、行動観察を丁寧に行う。	4 対 3－① ④ 深 1－①
展開5 話し合い活動 「自分らしく生きていくために今から準備すること」	・任された役割を果たそうとする態度や姿勢を伸ばすために、友達同士の働きかけの場面を設定し教師の支援が適宜行えるようにする。 ・適切な行動を模索し改善できるように、経験から推測して答えることができる発問を行う。 ・友達の意見を聞き短冊を作ることで、自分の考えを広げたり深めたりして自分の意見が言えたらなお良い。	主 1－② ③ 対 2－② 4－① ② 深 1－①

注目してほしい児童生徒の評価

生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒B	・進行表（シンキングツール3）を活用して、声の大きさに気を付けて司会進行ができる。	先週末よりの風邪で病欠だったため金曜日の本時が最初の活動となってしまったが、普段より任されている学級会の進行役の経験をいかして、進行表を読みながら友達に意見を聞くことができた。前もって進行表を音読して確認することや前時の様子を友達に聞くなど自分の役割に責任をもつ態度が見られた。	B
生徒E	・出された意見を漢字や平仮名の配列に注意して短冊に正しく書くことができる。	1回目の活動での課題とされた、書くスピードと字の大きさのばらつきに改善が見られた。前時の活動で、友達が書記の協力を申し出てくれたことも積極性や責任感の伸長となったようだ。また、字のバランスや配列に加え紙面の配置にも気付け、読み手への配慮がうかがえた点も大変良い。	A

【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。

授業の振り返り(授業者の反省)

- ・それぞれの活動場面において、生徒の実態に応じて「授業の内容や自分の気持ちについて、「スライドに書かれていることを正しく復唱できる」「友達の意見を覚えて正しく書ける」などといった形成的評価を評価規準と照らし合わせて設定したが、評価規準が、病欠による学習空白に対応しきれていないものがあった。
- ・政府広報オンライン動画を思考ツールと位置付けたことは、思考ツールの機能から無理があった。動画の内容のフロー図や写真を入れたシンプルな紙ツールも用いて活動2の意見や生徒同士のやり取りを促すべきであった。

研究協議における意見・アドバイス

- ・学習内容が知的障害の生徒の実態に合わず、障害理解がきびしい。特に動画は、理解度に合っていないものを利用して意見を求めるのでは活動自体が成立しないし、話し合い活動も成立していない。全体的に残念な授業だった。
- ・生徒の実態を踏まえると、授業参加の様子や態度に落ち着きが見られていたように思う。各々の生徒が、場所と場面、全体の雰囲気を感じて「聞く態度・聞く姿勢」ができていた。
- ・本時の内容は、卒業後を考えるために重要なことだと思う。ただ、この教材や題材については、難しい生徒もいた。授業者の思いと目標にした生徒の動きが一致しなかったところを考えていったほうが良い。
- ・短冊を使うことで前回の振り返りや今回の活動のまとめを容易に行うことができていた。
- ・段階に応じた内容である必要はあるが、生徒たちが注目するような動画資料を今後の実践に取り入れてみたい。

(1) 公開授業 11

ア 国語科「みんなで話そう～現場実習クラス報告会」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

国語科の本学習グループは、高等部2年A組生徒7名中の5名（男子3名女子2名）で構成されている。

国語科に関しての実態は、支援があれば、経験したことを短い文章に書くことができる。また、教師の補足説明があれば大まかに短文の内容を理解することができる。発表や話し合いは、友達の発表に興味をもって聞くことができるが、自発的に感想を言うことは、恥ずかしさや自信のなさから消極的

であったり、言葉が思いつかなかったりする様子が見られる。

このような実態から、共通の体験で、緊張や不安、達成した喜びも大きい「現場実習」をテーマに、それぞれの体験を聞き合う「現場実習クラス報告会」（以下、「報告会」）を開くことを考えた。それぞれ、悩んだことや努力したことを短い文章にまとめて発表し、感想を話し合うことを通して、友達と自分との共通点や、友達の新たな一面を見つけ、友達や自分の良さに気付いて欲しいと考えこの単元を設定した。

b つけたい力

今回の単元では、まず、「報告会」を開くこと、「報告会」の目標、流れ、役割分担をパワーポイントで学習し、現場実習で「困ったこと悩んだこと」「頑張って乗り越えたこと」を中心に文章を書く。内容を深めたり整理したりするよう、教師は生徒と対話しながら個別に支援を行う。また、読み手に分かるよう、内容や文字の表記は適切であるか、教師と一緒に確認をする。役割の言葉の練習も行う。

「報告会」の前時には、友達への感想の伝え方を学習する。聞き上手になること、共感的なメッセージを友達に伝えることの大切さを確認する。

「報告会」（本時は1回目）当日は、それぞれ役割を果たしながら、発表とグループでの感想の話し合いを行う。友達の発表に興味をもって聞き、手元に配られた発表者の文章を読むことで、発表の要旨を理解したい。グループでの話し合いでは、感想を述べ合う。感想の言葉の選択肢を設けるようにし、語彙の少なさや表現が苦手な生徒も、積極的に話し合いに参加し満足感を味わえるようにしたい。

2回目の「報告会」では、役割を交替して行い、話し合いの記録の一部を生徒に担当させるなど、1回目の報告会より教師の支援を少なくして行いたい。

これらの発表や感想の話し合いを通じて、発表者は、自分の発表内容が、友達から「(気持ちが)分かる」等の肯定的な感想を得ることで自信をもつことができる。発表する内容が成功体験でない場合は、発表することも勇気が必要になるが、悩みとして友達に共感をもって聞いてもらえる経験を得ることで、仲間意識が生まれ、困難なときには一人で考え込まず、言葉にすることで安心できる関係に発展することを期待したい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

感想の話し合いでは、全員が参加し発言できるよう、1グループの人数を2～3名に設定した。聞き上手になるポイントとして、共感的な感想「そうだったのか」「うん、分かる」「いいな、すごいな」「(その他)」の選択肢があること、選んだ理由を発表することを伝えておいた。

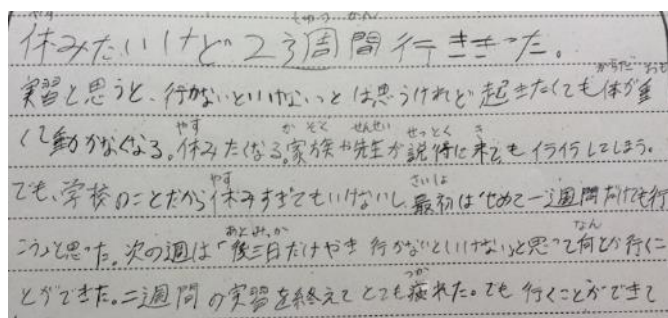


写真1 生徒Cの発表文の一部

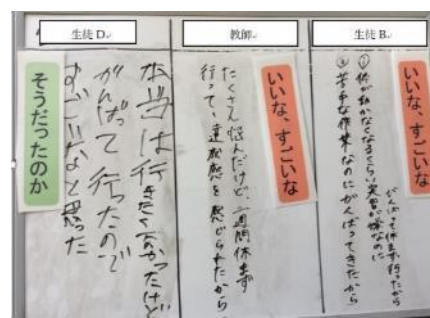


写真2 生徒D、Bの感想ボード

b 生徒への配慮

それぞれが実習先で覚えた食品の加工方法や軽作業等の仕事を再現し、ビデオに撮影して発表内容の一

部にした。撮影、視聴共に興味を高めることができると考えた。

役割分担は、発表者（2名）や司会（1名）、グループでの進行（2名）に分担し、原稿や手順表を読む等の準備を行うことで、授業への見通しや、任せられたことへの意欲を促した。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

生徒Cについては、1回目の報告会では、気恥ずかしさやプライドから教師や友達からの促しを受けながら参加していたが、2回目の「報告会」では、話し合いの記録係になり、友達の話す感想を丁寧に聞き取って書こうとする等、主体的な姿が見られた。生徒Dについては、2回目の「報告会」で、引き続き進行係を行い、教師の声掛けを減らすことができた。また、1回目の時よりも、どうしてそう思ったのか、口に出すことに少し慣れた様子が見られた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

感想の話し合いの活動で、生徒Dは選択した感想の理由を、すぐにまとめて言葉にすることが難しかった。手元にある発表文を自分から見て読むことはできたので、日頃から、印象に残ったところは印をつける、線を引く等の活動を取り入れ、言葉にする力につなげていくと良いと考えた。

b 対話的な学びの視点から

この単元では、話し合いをより効果的に成立させるために、言葉の選択肢のカードを使用した。話し合いの内容によっては、共感だけではなく、反対意見を述べる必要もある。同じパターンで繰り返すのではなく、テーマを変えて話し合う学習を今後も設けたい。

c 深い学びの視点から

生徒Cの発表については、STの教師との信頼関係があることで、成功体験ばかりではない内容を、気持ちを絡めて書くことができた。友達も、生徒Cに対して、自分と同じように悩み、上手くできないことがあり、進路に不安や悩みをもつ仲間のような気持ちをもったのではないかと感じた。

本単元のみ成果とは言えないが、生徒Cは、よく友達に当番活動を促す言葉掛けをしてくれるが、「～しようか」「～忘れてるよ」など、より相手の気持ちを配慮した言葉が増えてきた。また、生徒Dは、掃除の分担で話し合いをもった時に、今までよりも自分の希望の掃除区域をはっきりと伝え、「でも〇〇さんが、一人で（苦手な場所を掃除）できないなら、私がやってもよい」という発言をする等、行動の変容が見られだした。

（オ）新学習過程分析表を使って

各学習活動を、特にどのようなねらいで行いたいのか、ポイントを絞ることができた。また、支援の方法をどのようにすればより効果的になるか、考えを整理することに役立った。

（カ）実践例(指導略案)添付

令和2年度 国語科学習指導略案

教科・領域名	国語科	授業者	MT ST1名
学部・学年・組	高等部2年A組 国語科Aグループ	対象 児童生徒数	5名
日時	令和2年12月10(木) 5時間目(13:30～14:15)	場所	(高)学習室
単元名	みんなで話そう～現場実習クラス報告会		

本時の目標	・現場実習で体験したことを発表することができる。 ・友達の発表に興味をもち、聞くことができる。 ・友達の発表への感想を伝えることができる。	
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・国語科 1 段階 A ア エ オ ・国語科 2 段階 A ア エ オ ■ 高等部学習指導要領 ・国語科 1 段階 A ア エ オ	
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 10 分	1 挨拶（生徒 A が司会を兼ねて行う） 2 本時の学習内容、目標を確認する ・友達の現場実習の体験を聞こう ・感想を発表しよう	・司会役の生徒 A が現場実習クラス報告会の開始を伝える ・スライドに注目させる ・発表や聞き上手になるポイントを確認する
展開 30 分	3 「みんなで話そう～現場実習クラス報告会」を行う （1）生徒 A は司会をする （2）生徒 B は発表をする （3）発表者以外の生徒 ACDE は発表を聞く （4）生徒 ACDE は質問があればする （5）2 グループに分かれて、感想を話し合う 一人ずつ、感想のキーワードを選択肢 【①そうだったのか②わかる③いいね④その他】 から選び、どうしてそう思ったのか話す （6）グループごとに感想を発表する （7）生徒 B がまとめの感想を言う （8）生徒 C が発表者となり、生徒 B と同様の流れで発表やグループでの感想を行う	・司会は、大きな流れを進行できるよう手順表を利用できるようにする ・発表者（生徒 2 名）は、事前にまとめた発表文やビデオ等を使い発表する ・グループ活動では、友達の感想発表を参考にし、自分の感想を選択したり理由を考えたりできるよう、手順書の利用や声掛け等の支援を行う ・ST は感想の話し合いのグループに入り、生徒と一緒に感想を話す等の支援を行う
まとめ 5 分	5 本時の振り返り 6 挨拶（生徒 A）	・本時の目標を振り返り、良かったところ等を称賛する
注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開「3 活動(2)」	・現場実習中に悩んだことや頑張ったことを発表文にまとめるよう助言を行った。また、生徒が興味をもてるよう、一部、ビデオや写真を用いて紹介するようにした。	主－3 対－2－②
展開「3 活動(5)」	・聞き上手のポイントを事前に確認し、共感的な言葉の選択肢を利用できるようにする。自分で考えられる生徒は、自分の言葉で表現できるようにする。	対－2－② 対－3－②

		・グループでの話し合いに見通しがもてるよう、手順書を使用できるようにする。	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 C	文や写真等で自分なりに発表することができたか。グループの話し合いに参加しようとしたか。	教師に促され、実習中の悩みを書いた原稿を読んで発表することができた。話し合いでは、顔を伏せた姿勢も見られたが、生徒 B に、自分と共通した悩みを見つけ、「朝（起きることが）つらかったのが共感できた。」と感想を言うことができた。	B
生徒 D	グループの話し合いで、手順書を使い進行することができたか。感想を選択肢から選び、発表することができたか。	教師の声掛けを多く要したが、手順書の言葉を読み進めることができた。配られた発表資料を自分から見て、話を聞くことができた。感想を、教師の声掛けで選択肢から選ぶことができた。理由をまとめて話すことは難しさもあった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業全体の総括			
友達の発表内容を理解しようと、発表者の言葉を聞き、表情を見ること、実習中の仕事内容を再現したビデオを見ること、手元に配られた発表文を読むことの主に 3 つの活動を通して、友達の心情を考えたり、共感したりすることができたことは良かった。 感想のキーワードを選択肢にしたことについては、全員が話し合いに参加することができた点で良かった。 感想の理由を言うことについては、生徒 B、D のグループでは、どうしてそう思ったのか、すぐに頭の中で整理して言葉にすることに難しさもあった。			
本授業後に改善・実施した内容又は今後の方針			
生徒 D のように、手元にある発表文を見て読む力がある生徒については、日頃から、印象に残ったところは印をつける、線を引く等の活動を取り入れていくことで、感想の理由を述べたり、大切なところを自分で見つけたりする力につながるのではないかと考え、今後、学習に取り入れていきたい。			

（１）公開授業 12

ア 生活単元学習「手作り豆腐に挑戦しよう」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部 2 年 B 組の生徒は、男子 7 名女子 1 名の合計 8 名のクラスである。知的障害に加え学習障害や ADHD、自閉症を併せ有する生徒たちと 1 名の重度の生徒がおり、障害の程度や支援の方法も異なる。また、2 年生に進級する際、学級編成を見直して新たな学級となったため、友達関係や役割分担について一から集団を作り直す必要があった。生徒の中には不登校気味の生徒もおり、学校生活や家庭生活のリズムが崩れることにより、臨時休業明けには登校できるのか心配したが、大きな問題もなく順調に出席できている。

このような状況の中で、少しずつ集団としてのまとまりができるようになり、友達関係も比較的

良好で、役割分担や団体行動に関しても、相手のことを思いやる場面も増えてきつつある。また、調理実習に対して興味・関心が高く、手先が器用で安全に調理器具や道具を使用することができる生徒も多い。しかし、学習内容や教材によっては、すぐに生徒たちのモチベーションが上下したり、マニュアルどおりに調理することが苦手な生徒もいる。また各教科、領域の学習において、具体的に分かりやすいだけでなく、ある一定の難易度のある授業内容が求められる。

b つけたい力

コロナ感染予防の観点から、できるだけ三密を避け、なおかつ生徒たちの実態に即した授業内容を模索していた折、ある動画配信サイトで「手作り豆腐」の動画を目にした。

大豆の準備から手作り豆腐が完成するまで、約 10 分程度の動画であった。調理学習ではあるが、食材に直接手を触れることが少なく、衛生的に豆腐を作り上げることができる。作業工程に関しても、簡単な工程から難しい工程まで、難易度に幅があり、レシピ作りや道具作りを含めて、数量や等分、重さの学習にも適した単元である。

豆腐という日常よく食べる食材を、自分たちの手で作り上げることができる驚きと、必要な道具の製作から豆腐の完成までの全工程を自分たちで行い、達成感や満足感を味わうことができる単元である。また、残ったおからは、クッキーやケーキ、ハンバーグなどの材料としても利用することができる。食材を余すことなく使い、いろいろな調理を行うことができるのもこの単元の特徴である。

豆腐作りに必要な木杵やこし布作りを通して、生徒たちが主体的に授業に取り組み、マニュアルを見ながら安全で正しく調理できる力を身に付けたいと考えこの単元を設定した。

この単元を通して、協力し合って一つのものを仕上げる喜びや、原料から製品が出来上がる過程を通して、自分たちの食生活に関する基本的な知識を身に付けるようにしていく。

また、卒業後の就労に向けて、様々な経験を積み重ねることによって、働くことの喜びや大切さに気付くきっかけとなる学習にしていきたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

主体的に取り組むことができるように、単元導入の段階で動画を見せ、おからを使った調理の時間を先に設定して、生徒たちのモチベーションを上げてから授業に取り組むこととした。

また、手順書どおりに作ることは大切なことであるが、微妙な水やにがりの量の調整、豆乳を固める際の型枠の重りの微調整など、友達と相談して取り組んでいけるように工夫した。

b 生徒への配慮

文字を読むことが苦手な生徒がいるため、手順書に画像を多く用い、授業内容を視覚的に理解できるように配慮した。また、エプロンや三角巾を身に付けることが苦手な生徒がいるため、声掛け等で必要以上に無理強いせずに、準備物を黒板に書き生徒の自発的な行動を待つよう配慮した。生徒たちの作業能力が大きく異なるため、作業内容の幅を大きく取り、個々の実態に合わせて作業ができるように配慮した。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

集中して授業に取り組む、友達と協力して一つのものを作り上げることができるようになった。文字や文章に対して苦手意識が強く、最初は消極的になる場面もあったが、3回の豆腐作りを通して自信が付き、自分たちから工夫点や改良点を発表することができるようになった。



自作型枠



濾し布製作



手順書製作



手作り豆腐

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

おからを使った調理では、生徒たちの中から「～～～を作りたい」などの意見が出てきているので、インターネットや調理本を見て調べ、自分で手順書を作る機会を設定していきたい。また、より生徒の活動が主体的になるように、前時の失敗や成功体験を意見交換する場を多く設定していきたい。

b 対話的な学びの視点から

今回の手作り豆腐の3回の取組は、リーダーを固定していたので、授業の内容によってはリーダーを変更しながら取り組んでいきたい。また、調理活動を動画で撮影し、自分のグループの調理活動をじっくり見ながら、マニュアルとの相違点や次回への工夫点の意見を引き出すことができるよう学習活動を設定していく。

c 深い学びの視点から

第1次指導計画、第2次指導計画を併せて37時間の単元を設定した。今後ともこの単元に取り組み、事前学習と事後学習に十分時間をかけ、生徒たちのモチベーションを維持しつつ、どうすればよりおいしい豆腐をつくることができるのか、その方法や手順について自分で「考え気づく場面」を設定していきたい。今後の具体的な取組としては、校内販売の回数を増やし、アンケート表を作成し、購入してくれた方からの意見や評価を集約して、さらに商品価値を高めていきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使って

指導略案には記載していないが、自分たち以外の人に手作り豆腐の試食をしてもらい、感想や評価をいただくことを急ぎ取り入れてみた。対話的な学びの「5 活動の評価する。」の中の「②他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。」という項目は、生徒達の主体性を育むうえでとても大切な項目である。他者からの評価を受けることができ良かったと思う。

(カ) 実践例

令和2年度 高等部2年B組 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST2 名
学部・学年・組	高等部2年B組	対象児童生徒数	8 名
日 時	令和2年10月1日(木)	場 所	高等部調理室

		1 時間目（9：00～9：45）		
単元名		「手作り豆腐に挑戦しよう」		
本時の目標		・ 手順書を見ながら、できるだけ自分たちで作る。 ・ 役割を分担し、みんなで協力して作る。		
学習指導要領との関連		■ 高等部学習指導要領 ・ 国語 2段階 A 聞くこと・話すこと エ、オ ・ 数学 1段階 A 数と計算 エ ・ 家庭 1段階 B 衣食住の生活 イ（ア）（イ）		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 5 分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 手順書を見ながら前回の学習を振り返り返る。 3 本時の目標を知る。 『手順書を見ながら、できるだけ自分達で作る』 『役割を分担し、リーダーの指示に従って協力して作る』		・ 全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・ 授業スケジュールを掲示し、流れを伝える。 ・ 黒板に目標を掲示し、読みながら確認する。 ・ 本時のリーダーと、3 グループの調理台を確認する。	
展開 35 分	4 大豆を3回に分け、ミキサーにかける。 5 鍋に入れて、沸騰するまで煮る。 ※空いている人は片付けをする。 6 弱火にしてさらに 10 分間煮つめる。 ※空いている人は片付けをする。 7 こし布に入れ、豆乳を搾る。		・ できるだけ自分たちで活動できるよう見守り、必要な場面だけ声掛け等の支援を行う。 ・ 生徒 T に関しては、ST2 と共に、食器出しや後片付け等できることを行うよう支援する。 ・ カップの水量を確認する。 ・ 焦げ付かないように、混ぜることができているか確認する。 ・ 片付け等、リーダーが指示を出すことができているか確認する。 ・ 火傷しないように留意できているか確認する。	
まとめ 5 分	8 搾りきれたことを確認し豆乳の味見をする。 9 次時の活動を発表する。 10 終わりの挨拶をする。		・ 衛生面に留意できているか確認し、味見の感想を発表するよう声掛けする。 ・ 手順書を見ながら発表するよう促す。 ・ 火元、鍋等の安全を確認し、休憩後引き続き調理することを伝える。	
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 5 鍋に入れて、沸騰するまで煮る。		・ 手順書や友達のアドバイスを参考にして、火力の調整や適切な混ぜ方を工夫してもらいたいの で、できるだけ最小限の声掛け支援をする。 ・ 片付け等協力して作業ができているか、確認し		主 1－③ 2－③ 対 3－①、②、④

	ながら声掛け支援をする。		
展開 7 濾し布に入れ、豆乳を搾る。	・搾り方について、どうすればより効果的に搾ることができるのか、自分達で工夫ながら活動してもらいたい。 ・ボールを押さえる等、役割分担ができるよう声掛け支援をする。	主 1－②、③ 対 3－①、②、④ 対 4－①、②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 B	・自ら考え、手順書等を参考にしながら、友達と協力して作業ができているか。	・2回の豆腐作りの授業で、手順のほとんどを記憶しており、数回の質問だけで作ることができていた。 ・にがりの準備では、友達の作り方をよく見て、適切なアドバイスをすることができていた。	A
生徒 E	・自ら考え、手順書等を参考にしながら、役割を分担して作業ができているか。	・少し乱暴な言葉遣いはあったものの、自分だけで作るのではなく、役割を分担して作業をしようとしていた。 ・にがりの成分が異なり、十分に固まらなかったが、途中で諦めず、にがりを追加するなど、自ら考えて作業ができていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・生徒Bに関しては、エプロンや三角巾を身に付けることを嫌がり、普段は身に付けることができないが、今回の授業では参観者もあったためか、身に付けることができて良かったと思う。 ・各グループとも、友達と協力し合いながら、役割を分担して作業ができていた。 ・3限目に試食をしてもらい、自分たちの作った豆腐に対して評価をもらえたことは、生徒たちのモチベーションが上がり、今後の授業に生かせると思う。			
研究協議における意見・アドバイス			
・生徒全員が活動できていて良い授業であった。 ・生徒一人一人の特性に合った題材であった。生徒達が主体的に活動できていた。 ・ミキサーにかける時の水の量がグループによって異なっていたため、細かな指導が必要。 ・こし布に大豆を入れる時、火傷等の安全確認が不十分だった。 ・水を出しっぱなしにする生徒がいたので、止めるよう促す支援をした方が良かった。			

(1) 公開授業 13

ア 体育「ティーボール」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 児童(生徒)の実態

本学年は、男子生徒12名、女子生徒3名の計15名である。生徒の実態は、教師の説明を聞き理解し行動することができる生徒、声掛けや視覚支援を用いた支援等で活動できる生徒、支援者の介助が常時必要な生徒と様々である。また、中学校まで不登校気味だった生徒が数名おり、集団参加が難しか

ったり、苦手意識や不安感をもったりする生徒もいる。一方、授業中の記録測定や勝負事にはとても積極的で、主体的に授業に参加することができる生徒もいる。

これまでの授業では、交歓会でのフットベースボールや、授業や部活動でのソフトボールの経験はあるが、団体種目の経験は少なく、他者とのコミュニケーションに課題の多い生徒たちである。ティーボールについても取り組んだ経験はなく、ボールを投げたり捕ったりした経験が少ない。野球に興味のある生徒もおり、ボールを投げること、捕球すること、バットを振ることに関心はもっている生徒たちである。

b つけたい力

ティーボールの特性を生かし、苦手意識のある生徒たちにも、ティースタンド上に置いた静止したボールを打つため、空振りすることが少なく、バットをボールに当てやすくすることができる。さらに、繰り返しバッティング練習に取り組むことにより、ボールに当てられるようになり、思い切り打つ爽快感を味わえたり、「打てた」という達成感を感じたりすることができる。また、打球は野手の方向へ飛ぶ機会が増えるため、「捕れた」という達成感も同時に味わうことができ、より短時間で全員がティーボールに必要な基本的な動作である、「打つ、捕る」を学習することができるのではないかと考えた。また、毎時間のウォーミングアップの中にベースランニングやキャッチボールを取り入れることで、「投げる、走る」を身に付けていくこともできると考え、この単元を設定した。ボールを使った団体競技では、友達と作戦を立て、協力して取り組むことにより、面白さや楽しさを味わうことや、他者とのコミュニケーションを図ることにもつなげていきたい。また、ゲームをする際には、ルールを工夫することで実態に応じた技能を身に付けたり、達成感を味わうことで球技が楽しいものであるという感覚をもたせたりし、意欲的に取り組めるようにしていきたい。

(イ) 授業で大切にした点は何か

a 授業の工夫

実態に幅があるので、生徒自身が扱いやすい用具を選択できるようにした。生徒が球技の楽しさや喜びに触れ、基本的な技能を身に付け、簡易化されたゲームをすることができるよう、用具やルールを工夫する。また、理解しやすいゲーム内容や、危険な状況をなくし安心して活動していけるように、残塁制にはせずベース得点制にする。そして、競い合っていけるようなルールを工夫することで、守備の面でも「飛んできたボールを上手く捕球したい」、「味方に正確に投げたい」という気持ちにつなげ、「打つ」「捕る」「投げる」「走る」など運動の楽しさ等に触れ、基本的な技能を身に付けられるようにする。



写真1 バットの種類



写真2 ボールの種類



写真3 ポイントの視覚支援

b 児童(生徒)への配慮

授業の工夫にでたように、バットの種類を金属バットやゴムバット、プラスチックバット等複数の種類を用意し、個々の実態に応じて生徒自身が用具を自由に選択できるようにした。そうすることで、打つことに興味をもち、「もっと遠くへ飛ばしたい」という意欲につなげていくようにした。また、使用するボールも生徒によって見えやすいボール、扱いやすいボールなどがあるので、色違いやサイズ違い、感触ボール(いぼ付き)などを用意し、個々にあったものを自分で選べるようにした。また、授業内容を単発的に進めていくのではなく、繰り返し同じ活動に取り組むことで見通しがもて、自信をもって取り

組めるようにし、達成感や成功体験を積んでいけるよう展開していく。打撃面の手立てとして、バットのどの部分にボールを当てて打つか分かりやすくするためテープを巻き視覚的に示す。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

本時の授業だけでなく「ティーボール」の単元を通して見ると、繰り返し同じ活動に取り組むことで見通しがもて、少しずつ技能も習得していき、自信をもって取り組む姿が見られた。取り組みの中では、ティースタンド上に置いてあるボールを打つことでボールを捉えやすく、打つ爽快感を味わえる。また、捕りやすいボールに変え、捕球しやすいようにすることで、捕ることの成功体験を積むことができ、授業に生徒自身が生き生きと主体的に取り組めるようになった。生徒の実態に合わせたルールを設定しゲームを行い、各チームで守備位置や打順、作戦を考えることで他者とのコミュニケーションを図ることができた。試合の中でも、友達と声を掛け合ったり、リーダーとなる人が指示を出して協力し動く姿も見られた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒が見通しをもって活動できるように、本時の活動の流れをはじめに提示し、全体で確認をする。ホワイトボード等に提示するものは、字体や色、大きさを工夫し、生徒が注目できるようにする。その際には、イラストや写真を使い、生徒がイメージしやすいようにしていく。各活動の前には、教師が全体の前で見本を見せたり、ポイント等イラストを使いながら示したりする。

生徒が自信をもって授業に参加できるよう、ウォーミングアップや前半の活動に大きく変化をつけず、繰り返し同じ活動に取り組むことで見通しをもち、同時に基本的な技能も身に付けていけるようにする。

b 対話的な学びの視点から

各グループに分かれ、お互いのプレーを見合いながら取り組むことができるようにした。上手に捕れたり、投げたり、打ったりできている人を見本にしながら取り組めるようにする。活動の中で上手にできている生徒に注目する場面を設け、良い点はどこであったかなどを発問しながら全体で考え、発言するようにする。また、見本を見せた生徒の自信にもつながる。試合をする際には、各チームの生徒同士で守備位置や打順、作戦を考えるようにし、他者の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりするようにして、コミュニケーションを図れるようにする。

c 深い学びの視点から

それぞれの活動の中で、良い点やポイントなどを友達や教師から、見たり教えてもらったりし、技能を身に付け表現していく。また、iPadなどで動画を撮影し自分自身を客観的に振り返ることができたり、他者との違いを見つけたりしながら技能向上に結び付けていく。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

主体的・対話的で深い学びについて項目ごとに細分化されており、どこの項目をどのように身に付けさせていけるかを考えやすい。

（カ）実践例

令和2年度 保健体育科 学習指導略案

教科・領域名	保健体育	授業者	MT ST 3名
学部・学年・組	高等部2年	対象 児童生徒数	15人
日 時	令和2年12月9日（水） 9：00 ～ 9：45	場 所	グラウンド

単元名	ティーボール （本時 15/20）	
本時の目標	・打球方向に移動し、ボールを捕球する。 ・きまりを守り、友達と協力して運動する。	
学習指導要領との関連	小学部学習指導要領 ・体育科 1段階 E ボール遊び ア ウ 2段階 E ボールを使った運動やゲーム ア イ ウ 3段階 E ボールを使った運動やゲーム ア イ ウ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 E 球技 ア ウ 2段階 E 球技 ウ 高等学学習指導要領 ・保健体育科 1段階 E 球技 ア	
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 15分	1 整列、挨拶、体調確認 2 本時の学習内容及び目標を確認 3 準備運動 （体操、ベースランニング）	・整列場所が分かるようにコーンを置く。 ・本時の流れ及び本時の目標をホワイトボードに視覚的に掲示する。 ・体操では、一人一人が声を掛け合いながら行えるよう、その都度声掛けを行う。
展開 前半 30分	4 キャッチボール 5 ゴロ捕球 ・2チームに分かれる （※ <u>ここまでを公開授業とする</u> ）	・相手が捕りやすい場所はどこかを考えながら投げられるよう声掛けをし、意識を高める。 ・MTがポイントを説明しながら、手本を見せてから行う。（展開4、5） ・よい捕り方で捕球できている生徒を指名し全体で見て、動きのイメージができるようにする。
展開 後半 35分	休憩（10分） 6 点取りゲーム（ベース得点制） ・2チームに分かれる 7 整理運動 8 体調確認	・チームが分かるよう、ホワイトボードに視覚的に掲示する。 ・各チームに教員が1人ずつ入り、作戦や動きなどの声掛けを行う。
まとめ 10分	9 振り返り ・数人が活動の感想を発表する。 10 挨拶	・目標の達成に関して的をしぼり、感想や反省、良かった点などを聞き評価する。

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点

展開 5	ゴロ捕球	ゴロ捕球では、ボールの正面で捕球できるよう、活動の前に捕る位置や姿勢の手本を見せたり、イラストを提示したりする。また、2 チームに分かれ、縦 1 列で一人ずつ行うため、同じチームの友達にアドバイスをしたり、よい捕り方で捕球できている生徒を指名し、他の友達に見てもらい、動きをイメージできるようにしたりし、まねをしたりできるような環境を作り、必要に応じて声掛けをしていく。転がすボールも徐々に左右に振ることで、少しずつ動きながら、捕球することにつながる。	対 - 3 ①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
B 金枝	ボールを見て捕球することができるか。	本児が見えやすいボールを選択し、活動に取り組むことで、ボールを目で捕えやすくてきたが、捕球時まで手元を見続けることが完全ではなくボディーイメージをつかみきれていない。	C
J 矢野	打球方向に移動し、ボールを捕ることができる。	飛んできたボールの打球方向に移動することはでき、おおむね捕球することはできていたが、ボールの正面に入りきれず上手く捕球することができていない時もあった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・ 生徒同士で良いところを評価し、まねをし合うのは難易度が高かった。 ⇒各活動でのポイントや良い動きを示し、全体の前で見本を見せる。 上手にできている人をみんなの前で称賛することでその生徒が自信をもてたり、周りの生徒も意識しながら取り組めるようになる。 ・ 日によって授業に参加できる生徒に変化がある中での対応。 ⇒相性や段階レベルによってのペア、チーム分け。			
研究協議における意見・アドバイス			
・ 環境の整備やその時々に応じた対応。 ⇒太陽の方向によってまぶしくないように活動の向きを変える。 気温によってランニングの周数を変える。固定する必要なし。 ・ 規律面。やるときはやる。指導するときはする。伝え続けることが大切。 ・ 一人一人が意欲的に取り組めており、全体の雰囲気も良い。 ・ 喋るときのメリハリ。声が流れてしまわないように、しっかり前を向いて話すことが大切。 ・ 注目してほしい生徒に対する目標のレベル設定。			

(1) 公開授業 14

ア 生活単元学習 「災害に備えよう～防災グッズを作ってみよう～」

(ア) この授業でどんな力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部2年は男子12名、女子3名の合計15名の学年である。生徒達の多くは日頃から災害に対する認識をもっており、中でも地震は怖いもの、地震が来たら逃げなければいけないことを知っている。しかし、状況判断や口頭での指示をすぐに理解することが苦手で状況の変化への適応に時間がかかる。また、自分の置かれている状況を説明することも苦手である。そのため、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要である。

防災学習では、全校で行う避難訓練に加えて、学期に1回2年全体で特設時間を設定し、地震などの自然災害に備えて何ができるか、どのような準備をしたらよいかについて学ぶ時間を設定してきた。未経験のことを想像して理解をするのは難しいが、繰り返し話を聞き、防災対策について考え、災害時の自分の生活についてイメージをもつことができれば突然の災害にも冷静沈着、迅速な行動に移すことができると考える。

b つけたい力

今回は特に地震の危険性について考え、身の守り方について再度確認し、災害に備えて身近なものでできる防災グッズを作り、防災に対する意識を高めることを目標に本単元を設定した。生徒自身は大きい地震をまだ経験したことがなく、地震や津波の具体的なイメージがもちにくい。しかし、災害の危険性の大きい地域から通学している生徒もいる。そこで、阪神淡路大震災や東日本大震災等過去の地震について学び、揺れの大きさや屋内外の被害の様子等を学び、避難や対策を考えるための基本的な知識を学んでいく。そして将来起こりうる南海トラフ地震についての知識を身に付け、学んだ備えの中で家庭や避難所でできることがないか考え、行動できる力をつけていく。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

学習活動に見通しがもてるように学習内容をスライドで提示し、分かりやすく伝えるようにした。導入段階で昨年度の活動について画像等を用いて簡単な振り返りをし、今までに学んできた地震や津波の恐ろしさや被害を過去の大震災の画像を見て基礎的な知識を得ることができるよう配慮した。

災害グッズについては新聞紙スリッパを作ったが、動画でイメージを示し、教員の実演、手順書を手掛かりに単独で取り組めることを目指した。また、作り方がより分かりやすくなるように新聞紙に印をつけたりするなど視覚的な支援も行うようにした。単独で制作することが難しい生徒についてはSTと一緒に取り組めるよう配慮した。教科との関連については数学の時間に定規を使って長さを図ったり、計量をする際に分数を意識できるようにした。



図1 スライド

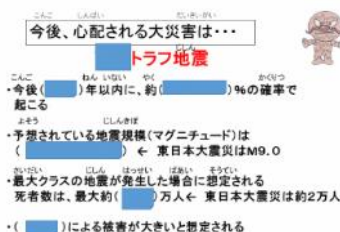


図2 スライド



図3 新聞紙スリッパ

b 生徒への配慮

生徒が学習への見通しをもちやすくするために、学習の流れをスライドで示したり、活動内容を都度確認をした。スライドの中では過去の地震の被害状況を知らせるために図2のように付箋を活用し、被害者数等の数値を予想し、被害の大きさを知ることができるようにした。また、理解を促すために画像や動画などの視覚支援教材を多く用いた。座席については音声に対して過敏な生徒や生徒同士の人間関係等に配慮して配置した。学習を進めていくうえで個別の対応が必要な生徒についてはSTを配置し、STは課題のある生徒を中心に支援しながら周囲の生徒たちにも声掛け等行ってもらったようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

過去の地震災害の被害状況を知ること地震が来たら、まず頭を守ることなど揺れに対する構

えや避難時に自分の身体や命を守ることへの具体的な行動を思い出すことができた。また、校外学習で避難タワーに上ったことを思い出し、「避難タワーがあればそこへ行ったらよい」等自分の経験と学習を結びつけて考えることができた。

防災グッズの制作では一緒に学習する機会が少ない友達と協力して作ったことで友達の作る様子を見たり、やり方がわからなくなっている友達を見つけて声掛けをしたりするなど、他者を意識し、配慮しながら学習活動に取り組めた。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒達にとってわかる実感がもてるようになることが学習意欲につながる。そのために分かりやすい実物を提示したり、画像等を積極的に活用したりして、実際の場面を想定して行動に移していけるようにする。また、興味・関心の持てることや意欲的に活動できることを取り入れたり、やりたいことを選択したりできるような活動も取り入れていく。

b 対話的な学びの視点から

振り返りの際は目標に沿ってどのような防災意識が育ったのか確認し、友達の発表に意見を出し合う活動を十分に設定する。そのために、防災に対するや資料を充実させ、意見交換をする中で本人の気づきを促していく。意見を述べるのが難しい生徒に対してはいくつか想定される考えを準備しておき、生徒が選択できるなどの活動を設定していく。制作活動については友達が活動している様子を見たり、模倣したりする中で自分がやるべきことに気付いたり、理解できるような配慮をする。

c 深い学びの視点から

友達から多くの意見を聞くことで自分の考えを比較・検討していくといった考える場面を設定していき、学習したことが他の学習や実生活で活用できるような声掛け、取組を継続していく。そして授業を通して学習したことが後で役に立ちそうだという期待感、余韻を感じられるような指導計画の工夫と改善を図っていく。また、日常生活で使える簡単な均等割を数学、発表の仕方や言葉遣いを国語といった教科の中で合わせて学んでいくことで日常生活への般化を意識し、使える知識・技能へとつなげていく。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

学習課題を遂行するにあたって一つ一つの項目が分かりやすく細やかに書かれており、使いやすかった。ただ、生徒の実態によっては他者を意識して活動することがまだ難しく、教師との関わりが中心になってくる生徒についてどのように記載すればよいのか戸惑うことがあった。

（カ）実践例

令和2年度 高等部2年 生活単元学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST：6名
学部・学年・組	高等部2年	対象児童生徒数	15名
日時	令和2年11月11日（水） 3時間目（10：50～11：35）	場所	会議室
単元名	「災害に備えよう ～防災グッズを作ってみよう～」		
本時の目標	・地震の危険性について考え、身の守り方を再確認する。 ・災害に備えた防災グッズの作り方を知り、防災に対する意識を高めることができる。		

学習指導要領との関連		■ 中学部学習指導要領 ・国語 1段階 A 聞くこと・話すこと ア、オ ・社会 2段階 ウ地域の安全 (ア) イ ・数学 2段階 A 数と計算 カ B 図形 ア ・理科 2段階 B 地球・自然 イ (イ) ・美術 1段階 A 表現 ア
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 5分	1 始めの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 ・自然災害について知り、自分の身を守ろう ・災害に備えて防災グッズを作ろう	・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 ・学習の流れを PP で提示し、伝える。
展開 35分	3 自然災害について知る。 4 地震が起きた時にどのような行動をとったらよいか考える。 5 自然災害に備えて、足を守る新聞紙スリッパを作る。 ・作り方を知る。 ・作ったスリッパをより丈夫にする方法を考える。 ・早くできた生徒はイラストなどを貼ったり、絵や名前をかいたりする。 ・実際に新聞紙スリッパを履いて歩いてみる。	・画像等で災害直後の生活をイメージできるようにする。 ・地震が起きた後、どんなことが起こり、行動をとったらよいか考え、発表しあう。 ・新聞紙スリッパが役立つ場面について画像等を見せて気付くようにする。 ・作り方の順番がわかるように画像、動画等を見せてイメージできるようにする。 ・新聞紙に描かれた線を手掛かりにして折るようにするなど分かりやすく説明する。 ・1足目は MT と一緒に作り、2足目は画像等を手掛かりにして単独で作れるよう声掛けする。 ・ST が適宜入ってサポートする。 ・はさみ等使う時の留意点を事前に話し、作成時には適宜使い方等の声掛けを行う。
まとめ 5分	6 本時の振り返りをする。 ・感想等発表する 7 終わりの挨拶をする。	・防災グッズの大切さを知り、身近にあるもので作れるものもあることを再確認し、防災に対する意識を高めるよう声掛けをする。 ・相手に聞こえる声で挨拶ができるよう姿勢や声の大きさを確認する。
注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 3、4 自然災害について知り、特に地震の際、どのような行動をとったらよいか分かる。	・画像や過去の防災学習等を手掛かりにして自然災害について知る。 ・地震が起こった時にどのような行動をとったらよいか考えることができる。	主 1－② 2－② 対 2－② ②、
展開 5 自然災害に備えて、足を守る新聞紙スリッ	・身近にあるもので自分を守ることができることがわかる。 ・手順書や動画、教師の話を聞くことで作り方が	主 1－② 2－② ③

パの作り方を作ってみる。	わかる。 ・折線を引くなどして視覚的に作り方がわかるようにする。	対 3－① ②、 深 1－②	
注目してほしい児童生徒の評価			
生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 A	・地震の危険性について画像を手掛かりに考えることができる。 ・防災グッズに関心をもって作ることができる。	・地震の画像を見ることで危険性について考えることができていた。 ・防災グッズについては示範を見ながら少しの支援で仕上げることもできた。	B
生徒 B	・地震が起きた時の行動の仕方がわかる。 ・手順書や動画を手掛かりにして新聞紙スリッパを作ることができる。	・地震が起きた時の行動については過去の避難訓練等を思い出しながらイメージすることができていた。 ・防災スリッパづくりでは動画や示範を見て理解することがまだ難しかったようで支援が必要であった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・前半の自然災害についての学習に時間がかかってしまい、防災グッズづくりに十分な時間がとれなかった。 ・防災グッズ作成の際はできるだけ指示を出さずに作っていく中での気づきを大切にしていこうと重きをおくとよかった。 ・新聞紙スリッパの端を三角に折り込むことが難しい生徒が多かったのでその行程は省略し、シンプルでわかりやすい折り方を提示すればよかった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・振り返りの時間を大切に、目標に沿った意見交換があればよかった。友達の発表を聞き、自分の知識や経験と相互に関連付けてより深く理解し、自分の考えを形成できるようにつなげていくことが肝要である。 ・新聞紙に折線をつけていたが不必要と思われる線もあった。 ・スリッパにイラストを貼ることに気持ちが移ってしまう生徒もいたので、この活動は授業外で行う方がよかった。 ・南海トラフ地震の想定被害者数が変わってきているので、できるだけ最新の数値を提示するようにしたい。			

(1) 公開授業 15

ア 美術科「草木染めで、世界で一枚だけのハンカチを作ろう」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部2年生は、男子12名、女子3名の計15名の学年である。この中には、美術の活動を好む生徒もいるが、関心のもてない活動や初めての活動に対しては意欲が低い生徒や、集中力が続きにくい生徒がいる。そのために、それぞれの障害特性に応じた指導・支援と、題材に興味をもてる工夫が必要となっている。

また、生徒の中には、自分の意思を表現することや、細かな作業に苦手意識をもつ生徒も見られる。本学年の美術では、毛糸を使ったコットンボールや粘土でカードスタンドなど、身近な材料を用いて

題材とし、美術に苦手意識のある生徒も今までの経験があることで、それぞれが興味をもって制作に取り組むことができているが、自分でデザインや材料を考えたり、材料を準備して制作物を完成させたりすることは、まだ経験が少ない。

b つけたい力

今回、身近にある木の葉や花、野菜を利用した草木染めで、絞り方や材料を工夫してハンカチを制作することを目標に、本単元を設定した。

この単元では、事前に制作手順を知り、草木の採取、染液と媒染液作り、染色計画、話し合い活動に取り組む。その中で、自分の意見を述べたり、他者の意見を聞いたりしながら、全体で意見をまとめ、採取する草木の組み合わせや、手作りする染液の名前を決めて、計画を作り上げていく。また、制作手順や、草木染めの作品例などについては、事前に制作した見本やインターネットの動画を見たり、練習したりすることで、想像力を高め、計画・実行する力を身に付けていく。

染色活動当日は、事前に確認した手順と計画に沿って制作をする。材料や絞り方を自分で選択して、意思決定ができる力を身に付けていく。

一連の学習活動の中で色や模様を表し、材料や用具の使い方などを通して自分の心情や考え方を表現することを目指したい。また、自らの思いや意図を他者と共有する気持ちを育てたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

学習活動に見通しとイメージがもてるように、前回までの活動の様子をまとめたスライドを見て振り返りをするようにした。黒板には、本時の作業手順と写真画像を掲示し、生徒が困ったときに、自分で手順を確認することができるようにした。このような視覚情報を使用することによって、口頭だけでは伝わりにくい内容も理解することができると思った。生徒の実態に応じた、絞り方の「手順書」を作成し、生徒に配布した。

また、制作に苦手意識をもつ生徒も取り組みやすいように、偶然にできた模様や色合いを楽しむことのできる草木染めを題材にし、様々な種類の材料や道具を準備しておき、選択できる環境を整えた。

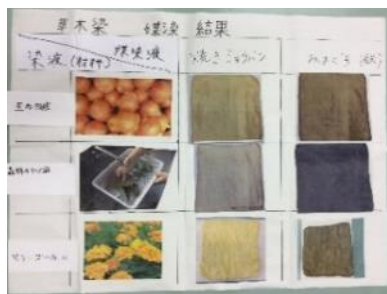


写真1 染色媒染結果表



写真2 手順書 A4



写真3 生徒作品

b 生徒への配慮

生徒が学習へ見通しをもちやすくするために、事前に作成した染色・媒染結果表（模造紙）や画像（スライドや写真）などの視覚支援教材を多く用いた。

グループ学習を進めるにあたっては、各グループに ST を配置し、ST は課題のある生徒を中心に 支援をしながら、グループ活動が活発にできるように声掛け等を行ってもらったこととした。

また、個別の支援としては、光の刺激に過敏な生徒もいるため、スライドを見る時の照明はつけたままの状態にした。スライドは、室内が明るくても見やすい背景色と文字色の組み合わせや、文字の太さになるようにした。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

絞りの中に入れる材料を選ぶだけでなく、入れる個数を変えてみるなど、染色活動を通して、表したい模様や色合いに合わせて材料や用具を使い、表し方を工夫することができるようになってきている。また、染め上がった制作物を周りの友達同士で見せ合う姿が多く見られた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

導入では、見本として草木染めをしたハンカチの提示や、染色工程の動画や写真を使ってモデリングで示したりし、指示は理解できていることに対しては出さず、開始の指示のみで活動ができるようにしていく。

b 対話的な学びの視点から

時間の掛かる染色中に、制作過程を鑑賞し合うことで、自分の制作活動に生かすことができるようにしていく。

c 深い学びの視点から

前時までに染色液と媒染液の組み合わせを実験し、染め上がった布でどのような色になるのかをまとめた表を作っていた。それを見て本時に、媒染液を混ぜたらどうなるのだろうかと考えた生徒がいた。これからも、情報を整理、活用する機会を設定していく。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

授業計画だけでなく、授業後の振り返りにも新学習過程分析表を利用して、本時の目標をより明確に設定していきたいと思った。

（カ）実践例

令和2年度 美術科学習指導略案

教科・領域名	美術科	授業者	MT ST3名
学部・学年・組	高等部 2年	対象 児童生徒数	15人
日時	令和2年11月11日（水） 5時間目（13:30～14:15）	場所	美術室
単元名	草木染め④『草木染めで、世界で一枚だけのハンカチを作ろう』		
本時の目標	・材料や道具の特徴を生かして工夫して制作することができる。 ・友達と協力して、草木染めをすることができる。		

学習指導要領との関連		■小学部学習指導要領 ・図画工作科 3段階 サ 生命・自然(ア) ・生活科 3段階 A 表現(ア)(イ) ■中学部学習指導要領 ・美術科 1段階 A 表現(ア)(イ) 2段階 A 表現(ア)(イ) ■高等部学習指導要領 ・美術科 1段階 A 表現(イ) 2段階 A 表現(イ) ■高等学校学習指導要領 ・家庭科 (3)服飾材料としての各種手芸の技法
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 10分	1 初めの挨拶をする。 2 前回までの学習を、写真を見て振り返る。 3 学習内容を知る。 染色作業の手順を確認する。 4 本時の目標を知る。 『絞り方を工夫して、ハンカチを染めよう』 5 グループ別に分かれる。	・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。 授業全体を通して、物の扱い方や姿勢等について声掛けをする。 ・モニターに注目するよう声掛けをする。
展開 30分	6 染色作業を行う。 ①染液を温め直す。並行して、ハンカチに絞りを入れる。 ②水にハンカチを浸けて絞り、染色液で約15分煮る。 ③水洗いをして絞り、媒染液約5分つける。 ④水洗いをして絞りを外す。 ⑤iPadでハンカチの写真撮影をする。 ⑥染まったハンカチを干す。	・黒板に作業の手順を掲示する。 ・黒板に目標を掲示し、読みながら確認する。 ・希望の材料毎に班を作り、協力し合って活動できるようにする。 ・火傷など、けがをしないよう、注意をしっかりとしておく。また、班ごとにSTが付き、安全に活動できるようにする。 ・全体の進度を合わせるために、タイマーで時間をはかり伝える。 ・絞り方等の手順書を用意し、できるだけ自分たちで活動できるよう見守り、必要な場面だけ声掛けや指差しの支援を行う。 ・ビー玉やペットボトルの蓋等を選んで絞ることができるように準備しておく。輪ゴムの使用は5つまでとする。 (・iPadの撮影：シートでの振り返りに活用のため)
まとめ 5分	7 作業の進捗確認を行う。 8 次時の活動を知る。 9 終わりの挨拶をする。	・次の時間に片付けと振り返りをする ことを知らせ、見通しをもたせる。 ・全員が姿勢を整えるよう声掛けをする。

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
【展開6-①】 絞りを入れる	・絞り方の手本を示したり、ポイントを事前に確認したりする。必要に応じて絞り方等を視覚的に示した手順書を提示したり、声掛けや指差しで支援したりするが、できるだけ自分たちで作業ができるように見守る。	主 1 2 対 1-① 3-①

【展開 6－⑤】 iPad で染色した作品 の写真撮影をする		・次の時間、シートでの振り返りに活用する。作品 そのものの表現に加えて、画像で記録して客観 的に振り返ることで、より工夫して表現すること ができる。また、全体での鑑賞の活動を充実させ る。	主 2 4
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒 A	・手順書を参考にしな がら、教師と一緒に絞 り方を選ぶことができ る。	・教師が手順書の内容を説明すると、自分で手順書を見 て、材料と絞り方を選ぶことができた。	A
生徒 B	・色の変化に関心をも ち、楽しみながら作業 に取り組むことができ る。	・染色中は、鍋の様子をととても興味深く観察していた。染 め上がると、自分から周りの友達や教師に制作物を見せ てとても喜んでいる様子が見られた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
生徒からのチェックや質問が重なり、円滑に対応ができなかった。普段から先にグループ担当の MT に 声を掛けるルールを決めておくと良いと感じた。 染色中に、二人の生徒から「二種類の媒染液を混ぜてみたい」と新しい意見が出された。これは、媒染液 を選択できるように複数準備していたこと、媒染液の種類が変わると染め上がりの色が変わることを前回 までの学習で理解することができていたので、発想が広がったと考える。染色した制作物は、違った色が 所々に混じっていたり、色の濃淡があったりする素晴らしい模様染に染め上がった。 これからも、豊かな感性を養う授業づくりを行っていきたい。			
研究協議における意見・アドバイス			
対象の生徒たちは、「ものを作る」ことの成果として「もの（成果物）」ができるという活動の流れが合 う。また草木染めは、偶然生まれる模様を楽しむことができるので、発想が膨らみ、おもしろがる題材で あった。前回までに染色を経験していたので、活動に見通しが立っていた。様々な材料から自分で使いた いものを「選択する」という作業は、キャリア教育の神髄である。美術科でも、発想や構想したことを基 に、意図に応じて表現方法を工夫して表す技能を身に付けることが必要である。 目標は、具体的にすると良い。そうすることで、その目標を達成させるためにどのようにしたらよいか を生徒も教師も考えることができる。また、指示は理解できていることに対しては出さず、開始の指示の みで活動ができるように指導をしていくと良い。 さらに学びが広がるように対話の場面の設定と、時間が掛かる染色中に他の活動を設定し授業に隙間を 作らないようにすることで、さらに良い授業になると思う。			

(1) 公開授業 16

ア 保健体育科・ダンス『『ダイナミック琉球』をみんなで踊って楽しもう』

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部 3 年生は、男子 16 名、女子 6 名の計 22 名で、高等部から新たに半数の仲間が加わった学
年集団である。障害の程度は様々であり、みんなで取り組む学習活動においては、工夫や支援が必要
である。一人一人の違いやよさを認め、仲間づくりをするために、よさを生かして仲間と取り組
めるダンスの学習を継続し、成果を発表する経験を重ね、自信につなげるようにしている。

高等部3年生のダンスの学習は、2020 こうち総文特別支援学校部門ステージ発表に向けて、「和～夏の音～」をテーマに、①パーランクー、大太鼓、和太鼓の演舞による「太鼓の響き」、②歌、パラボルーンの演舞による「打上花火」、③鳴子、大太鼓、和太鼓の演舞による「鳴子のリズム」を表現した作品に1年生から継続して取り組み、ブラッシュアップを図っている。第1学年では、運動会、学習発表会、第2学年では、運動会、中国・四国地区特別支援学校知的障害教育校PTA連合会研究協議会（高知大会）アトラクション、2020 こうち総文特別支援学校部門プレ大会ステージ発表、第3学年では、2020 こうち総文WEB SOUBUN特別支援学校部門ステージ発表、校内ステージ発表、体育発表会において、学習の成果を発表している。

ダンスの学習を通して、一人一人がよさを生かして演舞し、仲間のよさを認めることや、音楽に合わせてみんなで楽しく演舞すること、発表動画を見てよりよく演舞しようとするなどができるようになってきている。観客の前で発表する実践を積み重ね、発表動画を見て振り返り、よいところを評価することで、達成感や自信を得て、挑戦する意欲につながっている。2020 こうち総文特別支援学校部門の生徒実行委員となり活動してきた生徒においては、自分たちが取り組んできたダンスを後輩にも引き継いでほしいと思うようになってきている。

b つけたい力

ダンスは、踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動である。生徒は、よりよいダンス発表を目指す中で、仲間を互いに意識して活動することができるようになってきているが、ダンスの特性を踏まえて、さらに仲間との関わり合いを大切に、仲間のよさを認めて活動することができるよう取組を継続していく。みんなで新たなダンスに挑戦し、作品を仕上げて踊ったり、後輩の前で発表したりすることを目標に取り組むことで、仲間との連帯感を高め、卒業までに仲間とのよりよい関係も深めてほしいと考える。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

新たに取り組むダンスは、2020 こうち総文WEB SOUBUN特別支援学校部門ステージ発表の作品「ダイナミック琉球」で、パーランクーと大太鼓による少し難易度の高い演舞である。ダンス部員と生徒実行委員が校内ステージ発表をし、他の生徒は発表を見て印象に残っている。音楽の授業でも「ダイナミック琉球」の歌唱に親しんでいて、ダンスをやってみようという意欲が高まっている。学習では、全員がパーランクーの演舞に取り組み、全体及びグループの活動、見せ合う発表の場面の流れを毎時間設定して、仲間と自主的に活動できるようにする。

全体の活動では、教師が歌を口ずさみながら、メロディごとの動きとリズム打ち、ポイントの手本を示し、一緒に動いて確認する。グループでの練習の進め方を具体的に提示し、次のグループ活動がスムーズに行えるようにする。

グループ活動では、大太鼓の演舞で作品の取組を経験している生徒実行委員がリーダーとなり、動きを習得できるよう仲間と教え合い練習する。仲間の動きを見て、できているところを伝えて称賛し、互いに動きを高められるようにする。動きがスムーズにできるようになってきたら、音楽に合わせて踊ってみる。活動するグループについては、リーダーが相談して仲間と教師のグループ編制を考え、意欲的に取り組めるようにする。

見せ合いでは、グループ活動の成果を仲間とともに発表する。見る人も歌を口ずさんだり、リズムをとったり、拍手をしたりして交流し合うことを意識付ける。仲間の動きをよく見て、よいところを見つけて評価できるようにする。

b 生徒への配慮

新たなダンスの取組にあたり、音楽の授業と連携を図り、「ダイナミック琉球」の多様な映像作品を見てイメージをふくらませるとともに、楽曲の歌唱に取り組み、歌詞の沖縄の言葉にも触れて、興味・関心をもてるようにしている。

学習では、グループでもメロディごとに動きの練習を進められるよう、歌詞とリズム打ちのタイミングを印して提示をする。基本の動きができるようになってから、ポイントを意識して動き、アレンジを加えるなど、段階的に習得を目指すようにする。

グループ編制では、リーダーとなる3名の各グループと別に、左利きの生徒のグループを設け、グループ内で左右同じ動きで練習に取り組めるようにする。

教師は、グループ活動において、リーダーが中心となり、声掛けや教えるなどして仲間と練習や見せ合う発表に自主的に取り組めるよう支援し、できていることを評価、称賛して生徒の自信につなげていく。動きの習得について、個別の支援が有効な生徒には場面に応じて行うようにする。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

本単元のダンスの学習を通して、リーダーは、3年生の仲間と教師のことを理解してグループ編

制を考え、グループ活動においては、仲間の活動の様子を気に掛け、声掛けや動きを示して、仲間とともに練習を進めることができた。仲間と練習や見せ合う発表に意欲的に取り組み、短期間で上達し、仲間のよいところを評価、称賛することができた。新たな作品をみんなで踊り、楽しさや達成感を味わうことができた。

ダンスや様々な学習経験を通して、仲間のよさや個性を認め、学校生活において、仲間に合わせて学習活動を行うことができている。グループでの学習活動場面では、より自分のよさを発揮することもできている。

（エ）さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

- ・一斉指導と課題に応じてグループ活動を取り入れ、有効的に学習する。
- ・仲間との交流を意識できる活動、隊形を工夫する。
- ・活動中に見て分かるよう歌詞やリズム打ちなどをプロジェクターで大きく視覚支援する。
- ・取組の成果を発表する場を設定し、目標とする。
- ・発表に向けての取組において、自分たちで並びなどを考える。

b 対話的な学びの視点から

- ・仲間と教え合い、仲間のよいところを評価し、手本にして活動する。
- ・動画で自分の動きを見て確認し、よりよく動く取組をする。

c 深い学びの視点から

- ・校内の観客の前で取組の成果を発表する。
- ・後輩にダンスを教える取組をして、一緒に踊って交流する。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

保健体育科の観点(表現)で考えていることを、新学習過程分析表の項目に照らして、主体的な学び、対話的な学び、深い学び、それぞれの視点で区別して整理し直すことが、少ししづらい点があったが、それぞれの項目について、確認することはできた。

（カ）実践例

令和2年度 保健体育科学習指導略案

教科・領域名	保健体育科・ダンス	授業者	MT ST 9名
学部・学年・組	高等部3年	対象生徒数	22人
日時	令和2年11月19日(木) 5時間目(13:30~14:15)	場所	体育館
単元名	「ダイナミック琉球」をみんなで踊って楽しもう		

本時の目標	・ポイントの動き(低く踏みしめるような足取りや腰の動き)を意識し、音楽に合わせて踊ることができる。 ・練習や見せ合う発表の際、仲間にできているところやよいところを伝えることができる。 ・仲間の動きをよく見たり、教え合ったりして練習することができる。	
学習指導要領との関連	■ 高等部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 Gダンス ア イ ウ ■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 2段階 Gダンス ア イ ウ	
時間	学習活動	手立て、留意点
導入 5分	1 パーランカーを準備して、4グループで整列 2 リーダーの号令ではじめの挨拶 3 本時の学習内容・目標の確認	・リーダーが声掛けをする。 ・学習の見通しをもち、意欲的に取り組めるようにする。
展開 35分	4 ウォーミングアップ ・リーダー3名はステージで行う。 ・音楽に合わせて前奏の動きを行う。 5 動き(A-B、C-D、E、F、ラスト)の復習 ・動き、ポイントと一緒に動いて確認する。 ・グループで教え合って復習する。 ・音楽に合わせて踊る。 6 成果を見せ合う発表 ・2グループごとに踊る。 ・見る人は歌を口ずさむ、リズムをとる、拍手をする。 ・仲間の良かったところを発表する。 ・みんなで一緒に踊る	・リーダーは手本となるよう大きく動く。 ・歌詞を提示し、歌を口ずさみ、メロディごとの動き、リズム打ち、ポイントを確認する。 ・リーダーや覚えた人が、教え合って活動できるよう支援する。 ・仲間の動きを見て、できているところを伝えるよう声掛けをする。 ・発表を見る際、リズムをとるなど一緒に交流することを伝える。 ・仲間の動きをよく見て、よいところを見付けるよう声掛けをする。 ・教師も一緒に踊り、楽しい雰囲気作りをする。
まとめ 5分	7 本時の振り返り 次時の説明を聞く 8 おわりの挨拶・後片付け	・本時の目標について評価をし、次時に意欲をもてるようにする。 ・リーダーが声掛けをする。

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点

展開 5 動きの復習 ・グループで教え合って復習する。		グループ活動の場面を設定し、リーダーを中心として仲間と教え合い、できたことを伝え、自主的に活動できるようにする。 メロディごとの動き、ポイントを教師と一緒に確認し、グループ活動がスムーズに行えるよう支援する。	主－１－② 主－２－② 対－３－④ 対－４－① 深－１－①
展開 6 成果を見せ合う発表 ・２グループごとに踊る。 ・見る人は歌を口ずさむ、リズムをとる、拍手をする。 ・仲間のよかったところを発表する。		踊る人はグループ活動の成果を仲間とともに発表する。 見る人も歌を口ずさむ、リズムをとる、拍手をするなどして交流し合うことを声掛けする。 発表を見て仲間のよいところを見付ける。	対－４－② 対－５－② 深－１－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒T	グループ活動の中心となり、仲間に声掛けをしたり、教えたりして自主的に活動することができたか。	グループの仲間に声掛けをして、自主的に整列や練習を進めることができた。前で動きを見せて、手本となり仲間と動いて練習する。一人一人の動きを見て「できている」と伝えたり、個別に動きを見せて教えたりすることができた。	A
生徒H	グループ活動の中心となり、仲間に声掛けをしたり、教えたりして自主的に活動することができたか。	グループの仲間に声掛けをして、自主的に整列や練習を進めることができた。円形になり、練習する動きを示して、仲間と動いて練習する。仲間の動きを見て「できている」と伝えたり、上手な動きを見て、本人も意識して動いたりすることができた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
今まで学習を積み重ね、本単元では、グループのリーダーを中心に仲間と教え合い練習するなど自主的に活動し、新たな作品をみんなで踊ることを目指した。 グループ活動を取り入れることで、リーダーは役割を意識し、仲間の活動の様子を気に掛け、声掛けや提示された動きを示して、仲間とともに練習を進めることができた。教師の助言や生徒に応じた支援もあり、より充実した活動が行えた。仲間とともに意欲的に取り組み、短期間で上達し、みんなで踊って楽しさや達成感を味わうことができた。指導に際しては、教え合う活動をするための具体的な提示、生徒の支援についての教師間の確認、自信につなげる評価や言葉掛けが大切である。			
研究協議における意見・アドバイス			
授業の流れはよく、ピンマイクを使用して動きながら指導し、生徒は活動がよくでき、上手に踊れていた。リーダーが教えることについては、本人の言葉を聞いて、役割を果たせたかを確認し、指導の手立てに生かす。成果の見せ合いや全員の発表では、４グループが四角形になり、仲間を互いに見て踊り、見る人もリズムをとるなどして交流する工夫がよかった。踊る人、見る人の交流の仕方や評価のポイントを事前に伝え、生徒は仲間のよいところを評価できた。目標や学習の流れ、歌詞の掲示は、プロジェクターを使用し、大きくして見て分かる視覚支援をする。振り返りでは、目標と照らして一人一人がその時間に達成できたか、生徒の言葉を引き出し評価する。目標確認の際に、振り返りで聞くことを伝えておく。目標は明示しているので、教師間で意識して指導する。			

(1) 公開授業17

ア 作業学習(農産園芸作業)「収穫野菜で漬物を作ろう。」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

作業後期の農産園芸作業班は、高等部1年生から3年生まで在籍し、男子8名、女子3名の11人である。これまでの学級農園や農産園芸作業学習において、学習の過程は様々であるが、習熟度に応じて、土づくり、種まき、収穫等を学んでいる。収穫後の販売準備や調理作業については、いずれも事前に写真説明し、モデリングをすることで、最後まで一人で取り組むことができている。計量や包丁を使った細かい作業においては、全員が丁寧にできているが、慎重に取り組むため時間がかかる生徒もいる。一方で、途中で停滞したり、後半には見本と同じように仕上がらない生徒もあり、集中力と持続力に課題が見られる。

また、作業学習では高等部1年生から3年生まで在籍する中、学習や生活の中で交流する場面が少なく、全体を通して友達同士でのやりとりは少ない。また、話し方も、乱暴であったり相手の気持ちを考えて話すことが難しかったりする場面が見られ、教師や友達との場に応じた適切なコミュニケーションをとることに課題がある。一方で、相手を思いやり優しく教えたり手助けや協力をしたりする活動ができる生徒もいるグループである。

b つけたい力

この単位では、ダイコンやブロッコリー、サニーレタス等の冬作物の栽培を通して、作物管理の作業内容の重要性を知ることができ、生長の様子に気付き、作物に応じた扱い方に気を付けて生産活動に主体的に関わる力を養うことができる。生徒の課題である自分の役割を最後まで果たす責任感や達成感、仲間との協力、適切にコミュニケーションをとることを学習でき、卒業後の就労意欲につなげることができると考え、この単位を設定した。

作業開始前に始めの会を行い、作業内容の確認や役割分担、作業道具の準備を生徒が司会進行をして、生徒一人一人が思考力・判断力を身に付けていく。生徒が自ら考え行動することができるよう時間の設定や見守りをし、その中で、困ったときに教師やまわりの友達に助けを求めるようにしたい。普段から他者とのやりとりが少ないので、困ったときに援助を求める力も身に付けたい。

こうした一連の学習活動中で、育てる喜び、食や調理への関心など、今後の社会生活に生かしてほしい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

写真や現物見本とともに簡単な言葉での説明や指示、補助具などの視覚支援、タイマーを使用し、活動に見通しをもって取り組むことができる環境を整える。はじめの会、準備から片付けまでの一連の流れを定着させ、生徒一人一人が見通しをもって主体的に取り組めるようにする。一つの作業を、数人で協力して取り組む活動や役割分担など、場に応じた活動内容を設定することで、他者と適切なコミュニケーションを取りやすい場面を大切に、生徒同士で確認したり助け合いながら互いを認め合う機会や場面を設定する。そして、人の話を聞くことや、報告・連絡・相談が身に付くよう日々、目標の確認や声掛けをしていく。さらに、振り返りでは、それぞれの頑張りを称賛したり、上手にできている生徒を評価することで他の生徒が見本にし、お互いが意欲的に活動できる場面を設定する。作業時間内に完成させ達成感を得ることができるよう、個々の生徒を把握し、生徒の実態に応じた教材を準備する。





b 児童（生徒）への配慮

生徒が学習への見通しをもちやすくするために、ホワイトボードに作業内容を記載し、いつ見ても分かるようにした。個別の対応としては、生徒一人一人の実態に応じた役割分担を指示したり、生徒同士で話し合っただけで役割分担を考えて決める時間も設定した。細かい手作業が苦手な生徒に関しては、計量スプーンで数回量るのと同時に計量器で量る方法も伝え、作業のやりやすい方を選択できるように配慮した。また、事前説明時に見通しがもてずパニックになる生徒に対しては、分かりやすい道具を事前準備したり別活動を指示し体を動かすことで、落ち着いて参加することができるようにした。

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

作業に見通しをもって取り組むことで、最後まで集中して活動を行うことができ始めた。役割分担では、友達と話し合ったり生徒同士で作業を教えたり必要なコミュニケーションをとることができ、各自の役割に責任をもって最後まで仕上げることができた。また、一度活動した内容をしっかり覚え、次回からも意識して動いたり指示やモデリング説明がなくても取り組める生徒が増えた。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生徒たちにとっては、見て分かり、見通しがしっかりもてることで、やってみようという思いが想起されたり、最後まで頑張ってみようと思い、やる気につながるものだと考える。また、教師から発信するばかりでなく、必要最小限の声掛けを意識していく。その中で、生徒が考えて行動したり作業に困ったときに周囲に質問や報告をしたり、他者とコミュニケーションをとろうと生徒自身が考える時間を教師が待つことで、主体的な学びにつながっていくと考える。

b 対話的な学びの視点から

現在取り組んでいる内容を継続して行い、限られたグループのみに実施するのではなく、農産園芸作業全員と担当教師が一丸となって取り組んでいく必要がある。相手への伝え方やコミュニケーションの取り方を作業の中で実施するのは、将来においてとても重要なことなので、生徒に適宜な必要かの説明をしながら引き続き徹底していく。また、教師が事前に伝え方を教えたり生徒が模倣できるような環境づくりをする。作業の技術面も大切だが、同時に対話面も育てていきたい。

c 深い学びの視点から

将来の職業生活につながる学習であることを伝え、生徒自身が自覚をして適切な言葉遣いや役割に責任をもつこと、仲間と協力することを心掛けることができるような学習の場としたい。生徒一人一人が作業に集中できるよう、個々の実態に応じた作業内容の提示や環境を整えることで、振り返り時には称賛や課題点などの講評をしたり次につながるように話をする。

（オ）新学習過程分析表を使って

生徒の特性や発達段階の実態に応じた活動内容で考え、主体的な学び、対話的な学び、深い学びそれぞれについて簡潔に分析されたうえで一覧表になっているので、見やすく使いやすかったと感じた。

（カ）実践例

令和2年度 作業学習指導略案

教科・領域名	作業学習（農産園芸）	授業者	MT ST 1 名
学部・学年・組	高等部 3 年グループ	対象 生徒数	5 人
日 時	令和 2 年 12 月 4 日（金） 2・3 時間目（9：55～11：35）	場 所	調理室
単元名	漬物を作ろう。		
本時の目標	・役割に責任をもって取り組む。 ・衛生面、安全面に気を付けて作業をする。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・職業・家庭科 1 段階 職業分野 ア（イ）（ウ） ・職業・家庭科 1 段階 職業分野 イ（ア）㊦㊧㊨ ■ 自立活動 3 人間関係の形成（1）（3） 6 コミュニケーション（5）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5 分	1 号令を掛ける。 2 衛生面について学習する。 3 漬物の作り方について学習する。	・ホワイトボードに流れを記載して、いつでも分かるように提示する。 ・テレビで動画や写真を見て、服装や手洗いのやり方について友達同士で確認し合う。 ・テレビで一連の流れを理解する。 ・全員が注目しているのを確認しながら進行をする。適宜、質問や個別の声掛けを行う。	
展開 80 分	4 必要な道具を準備する。 ・まな板 ・包丁 ・ピーラー ・計量スプーン、スプーン ・ボール 5 ダイコンの漬物づくり（60 分間） ①教師の手本を見せる。 ②作業内容にわかるる。 1. ダイコンの皮を剥ぐ 2. ダイコンを切る 3. 調味料を量る 4. ダイコンと調味料を合わせる ③終了確認をする。 6 片付けをする。	・写真と名前を見て、道具置き場から必要な道具を持ってくるよう時間設定をする。 ・作業時間のタイムタイマーを設定する。 ・各担当箇所の前に見本を置いて、各自で確認できるようにする。 ・適宜、生徒一人一人に褒める等の声掛けを行う。 ・生徒 C には、ST 1 が補助をする。 ・洗い場に密集しないよう各場所を指示する。	

まとめ 5分	7 本時の振り返りをする。	・全員が最終確認できるよう集合場所に配慮する。 ・各自が目標を振り返るとともに、教師から生徒の講評を行い、達成感や次回への意欲につなげる。
	8 作業休憩の号令をする。	

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的 で深い学びの視点
展開 3 漬物の作り方について		作業前にパワーポイントを使用して説明をする。テレビで確認後、各自、作業内容の視覚支援を用意し配付後、実際にモデリング説明をする。作業内容を理解したうえで、周りを見て安全面に気を付け、スムーズに取り掛かれるように声掛けをする。	主－2－2 深－2－①
展開 4・6 必要な道具を準備する 道具の片付けをする		各自必要な調理道具を、名前と写真を見て、必要個数持ってくるようにする。その際に、道具をとってきた場所を忘れないように声掛けをする。準備から片付けまで生徒一人一人が責任をもって行うことで、責任感や自信を身に付けさせたい。	対－2－② 対－4－①
注目してほしい生徒の評価			
生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒A	・役割に責任をもって最後まで集中して取り組むことができたか。 ・安全に気を付けて、決められたダイコンの本数の皮を剥ぐことができたか。	・長時間の作業になると、私語が増えたり手が止まり停滞する場面が見られる生徒だったが、今回の作業は、最後まで集中して取り組むことができた。作業前にパワーポイントで説明や視覚支援の説明書を作成し、生徒に分かりやすく約束をすることで、決められた本数のダイコンを全て剥ぎ、自ら終了報告をすることもできた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
作業内容を確認後、長時間とても集中して決められた本数や量の作業を進め仕上げることができていた。調理をして全員が集中していたこともあり、休憩時間を設定できなかったのが次回への課題で、今回生徒全員が集中して怪我なく時間いっぱい活動できたので良かったが、包丁の安全面や生徒の実態、集中力を考えて設定する必要がある。			
研究協議における意見・アドバイス			
換気を十分にすることを忘れずに実施する。MTは授業全体への指示や説明をして、個々の生徒への呼びかけや声掛けはSTが支援するよう事前に確認をする。ダイコンを切る作業では、現物見本を置いたりモデリングは良かったが、何cmといった具体的な数字を出していなかったのが、生活に般化できるようにするとより深い学びとなる。パワーポイントや事前説明、準備物に関しては、見やすく生徒一人一人に応じた視覚支援教材があったので良かった。ダイコンの量が決まっていたので、全員が見通しをもって作業に取り組んでいた。			

(1) 公開授業 18

ア 生活単元学習「ミズナの種まきをしよう。」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年A組は、計8名で構成されており、今までに作業学習などで農業を履修した者や学級園において経験した生徒が存在する。日常の簡単な声掛けで活動できる生徒、声掛けや視覚支援等を用いて活動できる生徒、教師の支援を常に必要とする生徒等、実態は様々である。

読み書きや文章の構成、簡単な計算についてはできる生徒も在籍する。コミュニケーションについては、友達や教師とのやり取りが口頭でとれ、相手の気持ちを考えて行動できる場面も見られる。中には、進路先として農業分野を目指す生徒も数名おり、将来の目標を明確にもって楽しく活動できている。

農業に関する知識や技術においては、土づくりや種まきの仕方などを事前に説明をし、モデリングを行い着手できる段階である。また、決められた種まきの数量や土の深さ、その後の水やり作業などについてはやり直しが必要な場面もあり、経験を積み重ね覚えていく必要がある。できた報告については、生徒個々に応じて手段は違うものの声掛けなどでできている。また、周囲への気配り作物に対する責任、愛情についても畝を踏んだり、マルチシートを破ったりと自分から意識を持って大切に管理しているという認識は今のところ薄い。

農業では巧緻性が求められる細かなものから体力を資本とする作業、時には一人で行う作業や仲間と協力して取り組んでいく作業と多くの項目が存在する。対象の生徒たちは経験が乏しいために、周囲を見ての判断から行動に移すことが難しい。学級園での学習では、作付けから収穫、収穫後の販売などいろいろ取り組むが、卒業間近な時期であり特に、仕事につながることに重点的に取り組んだ。

b つけたい力

今回の作業では穴あけ、種まきなどの作業を取り入れたが、いずれも正確性や丁寧な作業が求められる。種を使う作業では巧緻性が求められるので、手の機能や感覚を養いながら、集中力も身に付く。種をまいた後の管理では、天候を見ながらの水やりや追肥等、自身で考えなければならないが、このような作業では今後、伝えた内容を最後まで取り組んでいくことができたかが大きな課題である。また、周囲の状況を判断しながら機転をきかせ自分で行動できるようにしていきたい。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

事前学習において、ミズナの特徴を伝え意欲をもって作物栽培に携わろうとする意識を付けたい。また、ただ取り組むのではなく用語の意味や作業の内容を理解し視覚的に理解しやすいようにスライドで提示し、中身のある学習につなげた。

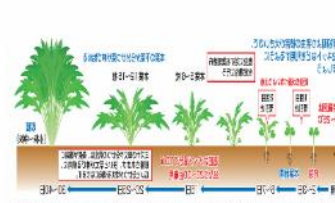
周囲を見ての判断力では、自分が今行わなければならない作業に加え、作業の流れを左右するスピードを意識させた。収穫や調整がスムーズにできれば作業全体の流れが良くなることを伝え、声掛けを行いながら取り組んだ。また、畝を踏まない作物を大切に扱うことについても声掛けを行う。

たねまきとは？
さくもつ ほたけ た せえどこ
**作物のたねを畑や田、苗床
などにまくこと。**



発芽適温
5℃～35℃と幅が広い
発芽最適温度
20℃～25℃が最適

スライド例



ヨトウムシ



b 生徒への配慮

15 cm間隔の植穴を付けていく作業では間隔が認識できるように、ロープや物差しを使用し

た。また上級編では、ヒューマンスケールについて事前に学習を行い、物差しがなくても自分の体で長さの認識力を身に付けることができるようにした。

(ウ) 取組を通じて、何ができるようになったのか

種まきの基本を通じて、作物に対する知識や技術が身に付いた。また、一生懸命に取り組む姿を称賛することで生徒の自信につながり集中して取り組んでいくことができてきた。水やりも、天候を確認しながらできるようになり最初は難しかったが、できたことで自信につながっている。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

生活単元学習の中で計画的に農作業を取り入れての一連の流れを修得できればと考える。このことで、作業の段取りが把握でき意欲的に取り組んでいけるきっかけとなる。また、教師が専門的な知識を学んだ上で授業に臨むことが大切である。授業の中身がしっかりしていれば生徒のいかなる関心や疑問にも対応でき、興味がもてる授業ができると感じる。授業の中でも展開にない害虫についてや他の作物について生徒が質問をしてくる場面があった。教師はあらゆる場面に対応できる準備が必要である。

今まで理解できていなかった知識を活用し授業に臨めば、できた喜びから意欲的な思考へとつながり、自ら進んで物事に取り組んでいけるようになる。できた時の喜びは脳内の細胞を活性化し、更なる意欲へとつながる。実際、授業を行った後の取組では前回よりも活動の幅や取組姿勢が良くなることが分かる。

b 対話的な学びの視点から

農作業では教師と生徒が共に、汗を流し協力して取り組める環境がある。このことは、言葉を発しなくてもお互いの思考が自然に理解できる。座学では感じなかったお互いの距離感や性格が理解でき人間性構築の礎となっている。また、作業を通じて教師と生徒の間で信頼関係が築け学校生活のあらゆる場面において生かされることが多いことに気付く。

c 深い学びの視点から

他の教科でも教師の意欲的な研修や修養が通常取り組まれていればいかなる場合でも対応できる。教師になった以上は生徒や保護者の期待に応えられるように、自分の教科専門性を高めることが必要である。教科の基礎を知ることによって授業に幅ができ、生徒が意欲的に興味・関心が持てる授業が計画でき、内容のある分かりやすい授業へとつながる。また、指導・支援の工夫が発見しやすく充実した授業展開につながっていく。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

とても使いやすく、授業に対する教師側の意識付けにもなるので今後も内容を精選しながら活用できたらと感じた。

(力) 実践例

令和2年度 生活単元学習学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST 2 名
学部・学年・組	高等部 3 年 A 組	対象 児童生徒数	8 人
日 時	令和 2 年 9 月 23 日 (水) 時間目 (1・2 限目)	場 所	教室・校内
単元名	ミズナの種まきをしよう。		
本時の目標	・種のまき方を理解する。 ・友達と協力して、作業することができる。 ・ミズナの種まき方法を学ぶ。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・国語科 1 段階 A 聞くこと・話すこと オ ・職業・家庭科 1 段階 職業分野 イ ■ 自立活動 3 人間関係の形成 ア・エ 6 コミュニケーション ア～オ		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5 分	1 始めの挨拶をする。(教室にて行う) 2 本時の学習を知る。 ・ミズナの種まきについて。 「種まきとは何かを理解する」 「ミズナについて知る」	・姿勢や取り掛かりへの意欲を確認しながら挨拶を行う。 ・種まきを始めるに当たり、ミズナの種類を確認し知識を深め意欲へとつなげる。	
展開 80 分	3 ミズナの種まきについて。 ・ミズナの特徴について知る。 ・ミズナの種まき方法を知る。 ・一般的な手まきについて伝える。 (点まき・すじまき) 「マルチに穴をあける→土をならす→種を置く→もみ殻を被せる」 役割分担を決める。 4 種まき後の管理について。 ・水を与える。 ・不織布で畝を覆う。 ・観察をしながら生育に合わせて管理する。 5 種まきの実践。(学級園にて行う) 「マルチに穴をあける→土をならす→種を置く→もみ殻を被せる」	・スライドでミズナの特徴を確認する。 ・作物の種類や栽培方法によって種まきが違うことを伝える。 ・今回の種まきについて方法を伝える。動画を見せる。(教師のモデリングで行う。) ・自分の役割が理解できたかを確認する。 ・作業中は手際よく行えるようにお互いのコミュニケーションを図りながら行う。 ・種をまいた後の管理が大切であることを伝える。(スライドで確認) ・再度説明後、理解できたか確認	

まとめ 5分	6 本時の振り返りをする。(教室にて行う) 講評をする。 7 終わりの挨拶をする。	し実践していく。 ・責任をもって丁寧に行えているか確認する。 ・種まきについていくつか質問し、理解できたか確認する。 ・全員が前を見て正しい姿勢で注目できているかを確認する。
-----------	---	--

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 「ミズナの種まき方法」		・一般的な種まきについて知り、他の作物にも応用できることを知る。	主－3 対－4
展開 「種まきの実践」		・段取りを理解し、丁寧に行えるかを確認する。また、協力し愛着につながる取り組み方ができているかを確認する。意欲の確認。報告の確認。	主－3 深－1
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒W	・丁寧にマルチの穴を開けられたかを確認する。	15 cm間隔を意識し、穴あけができていた。課題としては、直線に沿って丁寧に穴あけができることである。	A
生徒K	・整地を意欲的にできたかを確認する。	意欲的に取り組んでいた。課題としては丁寧な作業とスピードを上げることである。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
農作業では現場の状況や天候によって作業の段取りや内容が急に変更する場合がある。このような事態に対応できるように、事前学習において様々な作業の仕方や作物の特性などを伝えておく必要がある。見通しが立たないようであるが、回数を重ねる毎に自分から判断できるようになり本人の自信になる。また、自分から考えて取り組んでいけるように必要以上に声掛けをしないことで落ち着いて取り組んでいく姿も見られた。今回の作業では、穴の間隔を物差しや紐で確認する方法をとった。また、自分の身体の一部を物差しにし、確認する手法も取り入れたが、生徒によっては使いこなせる場面も見られ、今後の取り組みへの期待がもてた。これからは魅力ある授業につながるように、専門性を生かした中身のある活動にしていきたい。 農福連携が話題となる昨今では、農業の従事者が福祉の中で活躍している場面が多く見られる。農業を専門にしている立場上、農業に関する知識を身に付けた生徒が多く社会で活躍できるように、一般的な農業の知識についても意欲的に伝えていきたいと思う。			
研究協議における意見・アドバイス			
授業に生かせるように、普段の作物管理などを徹底して取り組んでいることが、生徒たちへの興味・関心に大きくつながっている。 農業は生きた教材を基に、知識を伝えながら生活に必要な動きや考え方を学べる授業である。			

(1) 公開授業 19

ア 体育「サッカー」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年生Aグループは知的障害と自閉症やADHD等を併せ有する男子12名、女子4名、計16名が在籍している。簡単な声掛けで主体的に活動できる生徒、具体的な声掛けや視覚教材等を用いた支援によって活動できる生徒、教師の支援を常時または適宜必要とする生徒等、実態は様々である。運動することが好きな生徒が多く、授業の中で友達と一緒に活動や競争をする楽しさを味わうことができ、協力して準備や片付けをする姿も見られる。

これまで球技ではバスケットボールやフットベースボール、キンボール等を経験してきた。昨年度、サッカーは実態に応じてルールを変更し、基礎練習や簡易化されたゲームに取り組んだ。練習を繰り返す中で、大半の生徒がボールをコントロールしながらのドリブル、インサイドキックを意識したパス、枠内を狙ったシュート等の技能面で一定の上達が見られた。しかし、全体的にボールを持たないときの動きや攻守交代の切り替えの判断に課題が残った。これはルールや戦術理解、ゴール型の球技経験の少なさ等が原因として考えられる。

b つけたい力

サッカーは、ルールや作戦を工夫し、個人及び集団の攻防によって友達と力を合わせて勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動である。ゴール型の球技の中でも攻守の切り替わりが多く、ボールに触れる時間や回数、運動量の確保もできるため、ボール操作の技術や体力を身に付けていきたい。コートサイズやゲーム人数の調整、ルールの簡易化がしやすく、練習やゲームを繰り返していくことでボールを持たないときの動きの習得やルール理解の深まりを目指したい。また、チームプレーが重要な競技であり、他者との関わりが必須となる。ゲーム開始や終了時の挨拶、パス交換での声の掛け合い、練習やゲームで出た課題を考え、他者へ伝えることでコミュニケーション力の向上、そして思考力、表現力の育成にもつなげたい。単元を通して、きまりやルールを守ることの大切さを知り、友達と助け合ったり、場や用具の安全に留意したりして自己の力を発揮して運動をすることができるようにしたい。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

初めの授業では、イメージが高まるようにサッカーの動画を提示し、単元で取り組む内容やルール、所属チームをパワーポイント教材で確認した。技能や判断力、コミュニケーション能力等を参考にそれぞれが高め合って活動することができるよう3つのチームに振り分けた。授業中はチーム毎に決められた色のビブスを着用することで友達を意識できるようにし、設定したリーダーを中心にチームで活動していくことで、主体性や協調性を高めることができると考えた。また、各チームに配置したSTには練習指導や配慮の必要な生徒への支援、声掛け等を行ってもらった。導入では、ホワイトボードに授業の流れや目標、ドリブル、パス、シュート等のサッカーの基本的な技能や名称をイラスト付きの掲示物で示して毎回確認することで、授業に見通しをもって取り組むことができるようにした（写真①）。

展開では、基本的技能の習得やルールの理解を促すために視覚教材を用いたり、教師がモデルを示したりした。ゲームは、「チーム全員がパスをしてからシュートをする」というルールを設定することで、全員がボールに関与できるようにした（写真②）。また、運動量やボールに触れる機会を増やすためゴールキーパーを無くした。代わりにゴール周辺に半円の進入禁止エリアを設け、その中にキーパーのイラストを付けた土のう袋を置くことで、容易には得点が決まらないようにした（写真③）。フェアなプレイやルールを守る大切さを伝えておき、チームで勝利するうれしさや楽しさを実感できるようにした。ゲームをしないチームは審判や得点係、観戦、応援をすることでスポーツに対して多様な関わりができるようにした。

まとめでは、全員で協力して片付けを行った後、授業内容や目標について振り返り、達成度を確

認することで次時以降の課題解決へとつなげた。



写真① 板書



写真② 掲示物 (ルール)



写真③ ゴール周辺

b 生徒への配慮

学習への見通しや理解を高めるために、視覚支援教材を多く用いた。掲示物は視認性を高めるためにゴシック体の白抜き文字を採用した。ゴールには攻守の切り替えの中でもシュートを狙う場所が分かるよう自チームと同じ色のビブスをゴールに吊り下げた。

練習やゲームでの動き方や動き出しのタイミング、ボール操作などは掲示物と手本を具体的な言葉を用いて説明した。特に支援が必要な生徒にはSTが声掛けや促しを十分に行うようにした。

また、取組を生かすことができるように練習後にゲームをする流れを単元を通して繰り返した。成長過程に合わせて練習のレベルを上げていくことで上達を図った。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

ボール操作が上達したことで運動量が上がり、よりサッカーを楽しむことができるようになった。さらに、ゲームで勝利するうれしさや楽しさを実感できるようになったことで、練習への取組も積極的になった。得点が決まった時にはチームのみんな喜び、称え合う姿が見られた。片付けはみんな協力して行い、徐々にスピードも上がっていった。一部の生徒は「手伝うことはないですか」と自発的に発言するようになった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

サッカーの動画を見たのは初めの授業だけだったが、さらに興味・関心を引き出すために、スキルの動画を視聴する場面を技能が向上しているであろう単元の中盤に設定しても良いと考える。

板書の掲示物によって、本時の学習の流れや取り組む内容に一定の見通しをもつことができていると思う。ただ、技術的な部分や試合におけるルールについてはどこまで理解して取り組んでいるか把握できていなかった。そのため振り返りの場面で、生徒に問い掛けることで理解度を確認する必要がある。

b 対話的な学びの視点から

ドリブル、パス、シュートや試合等の活動や振り返りの中で、教師が生徒に何がどうできたのか、どうできなかった(難しかった)のか、それは何故なのか問い掛けをする必要がある。自己評価、他者評価をする場面を設定することで次時へつなげていきたい。授業後は各自の運動能力や認知をSTと共有し、今後の指導に生かすことができると考える。

c 深い学びの視点から

友達のプレイに注目して意見を言うまたは友達や教師からの意見やアドバイスを聞く場面を設定することで、必要な情報を得たり、知識を学んだりし今後の学習活動に生かしていきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使って

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」のポイントを意識しながら授業計画をすることができた。授業後には意識した視点を基に振り返ることができた。

(カ) 実践例(指導略案)添付

令和2年度 体育科学習指導略案

教科・領域名	体育	授業者	MT ST 7 名
学部・学年・組	高等部 3 年 A グループ	対象生徒数	16 人
日 時	令和 2 年 12 月 3 日 (木) 5, 6 時間目 (13:30~15:10)	場 所	グラウンド
単元名	サッカー		
本時の目標	「ボールを止めよう、正確に蹴ろう」「試合をしよう」		
学習指導要領との関連	■ 小学部学習指導要領 体育科 2、3 段階 E ボールを使った運動やゲーム ■ 中学部学習指導要領 保健体育科 1、2 段階 E 球技		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5 分	マスクとビブスを着用してチーム別、番号順に整列する。 1 始まりの挨拶をする（水色リーダー）。 2 授業の流れを確認する。 3 準備体操、ストレッチをする。	○集合、整列、解散の移動を迅速に行えるようチームリーダーを中心に声掛けをすること伝える。 ○全員が正しい姿勢になっているかを確認してから号令を掛けるよう伝える。 ○見通しをもつことができるよう授業の流れや目標等をホワイトボードに板書、掲示する。	
展開 75 分 (休憩時間を除く)	4 トラックを 5 分間走る。 1 分間歩いて呼吸を整える。 5 本時の目標を確認する。 「ボールを止めよう、正確に蹴ろう」 「試合をしよう」 6 足のいろいろな部分を使いドリブルをする。 ①右足で ②左足で ③両足を使って ④ドリブルリレー 7 パスをする。 ・ボールの止め方、蹴り方の説明を聞く。 ・三角パス…パス後はボールを蹴った方向へ走って移動する。一定時間経ったらパスを反対方向にする。 8 ドリブルシュートをする。 ・センターラインからスタート。ゴール正面、右側、左側の 3 か所を順番に。 9 1 対 1 をする。 …教師がボールを転がし（バウンドでもよい）たらスタート。先にボールに触れた方が攻撃でシュートを狙う。守備側はシュートを阻む。シュートが打てなくなったら終了。 ～10 分間休憩～ 10 試合をする。 ・ルール説明を聞く。 ①シュートまでにチーム全員がボールに触れないと得点することができない。得点後はリセットされる。 ②試合開始、得点後はコート中央からのパスで始める。 ③コート外にボールが出た場合はキックで再開。その際、最初のパスカット禁止。 ④半円のキーパーエリア（土のう、斜線有）へは	○しっかりと曲げ伸ばしができるようモデリングをする。ST は不十分な生徒に支援をする。 ○自分のペースでよいが、最後まで走り続けるよう伝え、歩いている場合は声掛けをする。必要な場合は伴走をする。 ○目標に対しての理解が深まるようイラストを用いた掲示物や手本で端的に示す。 ○各練習前の説明では、イメージが高まるように成功、失敗例を交えながら手本を行う。 ○注意点として、強く蹴り出すとうまくできないことを伝える。 ○ポイントとして、トラップは足の裏や内側でボールを止めること、インサイドキックでのパスは軸足をボールの横に踏み込み足の内側で蹴ることを意識するよう伝える。 ○友達の名前や「いきます」、「パス」などの声を出すこと、手を挙げることでパスがつながりやすくなることを伝える。 ○パス後、止まったままにならないよう適宜声掛けや促しを行う。 ○ドリブルからシュートまで一連の流れになるようスタート位置にマーカーコーンを置き、地面に進行方向へ矢印を書く。 ○シュートを打った後は、自分でボールを回収することやスタート前に友達がゴール付近にいないこと、ボールが転がっていないことを確認するよう伝える。 ○生徒同士が力を発揮できるようペアの組み合わせやパスの出し方を調整する。 ○攻撃側が状況判断に困っている時にはドリブルやシュートなどができるタイミングで声掛けを行う。 ○十分に休むこと、水分補給をすることを徹底するよう伝える。 ○「チーム全員がボールに触れたらシュートを打てる」というメインのルールを意識できるよう、それ以外のルールは試合の中で適宜説明していく。	

	侵入禁止。 ・審判、得点係、観戦の仕方について知る。 ・総当たりの試合をする（全3試合）。	
まとめ 10分	11 片付けをする。 12 振り返りをする。 13 終わりの挨拶をする。	○全員で協力してできるように必ず何かをすること、 分からないことがあれば質問することを確認する。 ○活動内容や本時の目標に対して考える時間を設定 する。次時につながるよう良かった点は称賛し、課題 には改善点を伝える。 ○号令前に全員が正しい姿勢になっているかを確認 する。

注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
展開	7	パス	事前にパスとトラップのポイントを成功例と失敗例を交えながら説明することで、その後のチーム練習で各自が意識して取り組むことができるようにする。また、チーム担当 ST が個別に指導する。	主－1－①、② 3 対－3－①～④
展開	10	試合	試合に出場するだけでなく、審判や得点係、観戦の役割を設定することで多様なかわり方ができるようにする。その中でルールやマナー、他者との望ましい関わり方を伝えていく。	対－4－①② 深－1－①
注目してほしい児童生徒の評価				
生徒名		評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 J		・パスの時に、へそを相手に向けてボールを蹴ることができる。 ・場面に応じた言葉遣いをしようとしている。	・練習の中で、パスをする相手を見ながらボールを蹴ることができていた。 ・教師に対して話し言葉になっていた。促すことで言い直すことはできていた。	B
生徒 L		・向かってくるボールを足の裏や内側で止めることができていた。 ・チームリーダーとして、相手に聞こえる声や伝えるジェスチャーを出そうとしている。	・恐怖心からできていないこともあったが、概ね向かってくるボールを足の裏や内側で止めようとしてできていた。 ・リーダーとしては、教師の促しがあると手を挙げてチームのみんなに集まるよう声掛けをすることができた。しかし、聞こえるぐらいの大きな声は出ていなかった。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。				
授業の振り返り(授業者の反省)				
・授業全体としては ST との協力によりスムーズに進行できた。 ・生徒たちは内容を理解して、見通しをもって活動することができていた。 ・コートが小さく、生徒の運動量が制限されていた。 ・本時のねらいであるトラップとインサイドキックを使ったパスの練習時間が短かったため、目標達成できた生徒が少なかった。 ・実態が十分に把握できておらず、目標とその手立てが適切でなかった。				
研究協議における意見・アドバイス				
・5分間走はボール経験を増やすためにドリブルで行っていても良い。 ・目標であるボールを止める、蹴るが試合で活用できていなかった。 ・チャイムやタイマーの合図の後、生徒の行動を待たずにさらに笛や口頭で指示をしていた。 ・振り返りでは、何がどうできたのか、どうできなかった（難しかった）のか確認する必要がある。 ・試合のルールを全員は理解できていなかった。				

（１）公開授業 20

ア 音楽科「二部合唱をたのしもう！」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年生は、男子16名、女子6名の計22名の学年である。この学年は知的障害に加えて自閉的傾向や広汎性発達障害、聴覚過敏、学習障害等を併せ有する生徒も在籍しており、実態は様々である。音楽が好きな生徒が多く、合唱、合奏、鑑賞など様々な領域にわたり活動に取り組んでいるが、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要となっている。

学年全体としては、基本的に歌うことが好きな生徒が多く、活発に歌唱に取り組もうとするが、数名は表現することが苦手であったり、音程がとれないまま大きな声で歌っている生徒もいる。また、言葉が不明瞭で歌詞を見て、歌えない生徒もいる。また、聴覚過敏でイヤーマフをつけて参加する生徒もいる。

授業の状況は、集中力が続かない生徒もいるが、みんなと一緒に歌いたいという意欲は見られる。障害特性や環境により、最初から参加できない生徒や途中で退室する生徒もおり、状況を見て活動を進めていくこともある。

合唱活動では、3パートに分けて取り組み、2つのパートについては、音程がとりにくい生徒や表現することが苦手な生徒を対象として行い、主に主旋律を歌うようにした。1つのパートは、比較的音程がとれたり、表現することができる生徒を対象とし、副旋律を歌うように構成した。

b つけたい力

新型コロナウイルス感染症の関係により、歌うことへの制限があったが、生徒は歌が好きで、歌を歌いたいという気持ちを尊重し、主旋律だけではなく副旋律も取り入れ、二部合唱で歌うことを目標に設定した。

この單元では、パート練習の中で、お互いの声を聴いたり、音程やリズムに気をつけながらCDに合わせて練習したり、キーボードを使って練習に取り組む。その中で、主旋律パートはCDを聴いて旋律を聴いたり、CDに合わせて歌うように設定し、歌うことが難しくても、音楽を聴いて声に出して歌うことや友達の歌も聴きながら一緒に歌う楽しさを味わうことができるようにした。

副旋律のパートについては、MTがキーボードを弾き、見本を示しながら音を少しずつ覚えていけるように練習を行うようにする。音を覚え主旋律につられないようにし、友達の声も聴きながら同じ音で声に出して歌え、お互いにできたことに対して喜び合えることができるよう身に付けていく。

更に全体の二部合唱で主旋律につられずに歌えることができたことに対しては称賛し、生徒自身が歌うことの楽しさや自信をもって歌うことへ、つながっていけるようにしたい。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

パート練習では各パートごと毎にSTを配置し、パソコン機器を使用して練習する部分の曲を流し、主旋律が分かりやすいように歌付きを流して繰り返し練習するようにし、音程が取りにくい生徒や歌を歌うことが苦手な生徒が少しでも声に出して歌えるように配慮した。副旋律のパート練習については、教師が手本を示し、主旋律と副旋律の違いについて説明や歌唱を行い、フレーズごとに繰り返し練習していくことで身に付けていけるように工夫した。

b 生徒への配慮

学習活動に見通しが持てるように、座席表、パート編成表、授業内容のパネルをホワイトボードに示した。座席表を示した際に、教師が支援に頼らずに友達同士で声を掛け合って着席できるようにし、パート編成表については、パートリーダーを決め、移動する時や練習に向けて友達に

意欲を持たせるなどパートリーダーが中心になってできるように、友達と関わりをもって行動できるようにした。

キーボード											
A B C D				パート③							
G				E F							
H I K L				P R S T				パート①			
M				N O				U V W X			
				パート②							

座席表（生徒名）



授業の流れ

パート	リーダー	本練習者	伴奏者(副伴奏)	指揮
パート①				
パート②				
パート③				
パート④				
パート⑤				
パート⑥				
パート⑦				
パート⑧				
パート⑨				
パート⑩				
パート⑪				
パート⑫				
パート⑬				
パート⑭				
パート⑮				
パート⑯				
パート⑰				
パート⑱				
パート⑲				
パート⑳				
パート㉑				
パート㉒				
パート㉓				
パート㉔				
パート㉕				
パート㉖				
パート㉗				
パート㉘				
パート㉙				
パート㉚				
パート㉛				
パート㉜				
パート㉝				
パート㉞				
パート㉟				
パート㊱				
パート㊲				
パート㊳				
パート㊴				
パート㊵				
パート㊶				
パート㊷				
パート㊸				
パート㊹				
パート㊺				
パート㊻				
パート㊼				
パート㊽				
パート㊾				
パート㊿				

パート編成表

パート	歌詞
パート①	歌詞①
パート②	歌詞②
パート③	歌詞③
パート④	歌詞④
パート⑤	歌詞⑤
パート⑥	歌詞⑥
パート⑦	歌詞⑦
パート⑧	歌詞⑧
パート⑨	歌詞⑨
パート⑩	歌詞⑩
パート⑪	歌詞⑪
パート⑫	歌詞⑫
パート⑬	歌詞⑬
パート⑭	歌詞⑭
パート⑮	歌詞⑮
パート⑯	歌詞⑯
パート⑰	歌詞⑰
パート⑱	歌詞⑱
パート⑲	歌詞⑲
パート⑳	歌詞⑳
パート㉑	歌詞㉑
パート㉒	歌詞㉒
パート㉓	歌詞㉓
パート㉔	歌詞㉔
パート㉕	歌詞㉕
パート㉖	歌詞㉖
パート㉗	歌詞㉗
パート㉘	歌詞㉘
パート㉙	歌詞㉙
パート㉚	歌詞㉚
パート㉛	歌詞㉛
パート㉜	歌詞㉜
パート㉝	歌詞㉝
パート㉞	歌詞㉞
パート㉟	歌詞㉟
パート㊱	歌詞㊱
パート㊲	歌詞㊲
パート㊳	歌詞㊳
パート㊴	歌詞㊴
パート㊵	歌詞㊵
パート㊶	歌詞㊶
パート㊷	歌詞㊷
パート㊸	歌詞㊸
パート㊹	歌詞㊹
パート㊺	歌詞㊺
パート㊻	歌詞㊻
パート㊼	歌詞㊼
パート㊽	歌詞㊽
パート㊾	歌詞㊾
パート㊿	歌詞㊿

パート別歌詞カード

（ウ）取組を通して、何ができるようになったのか

座席表を見て、着席する時に友達が違う席に座っていたり、自分で座席表を見て判断することが難しい友達に声を掛けるなど友達同士の関りができている。教室を移動する時には、パートリーダーが中心となり、教師の声掛けがなくてもスムーズに移動できるようになった。

パート練習（副旋律）では、短い時間での練習であったが、キーボードや友達の声に音程を合わせようとする姿勢が見られ、少しずつ音を覚えていくことができた。パート練習後、各パートで発表をし、発表を聴いた生徒に感想を数名に発表してもらうように促すと、普段発表しない生徒が手を挙げて友達の良い部分について発表できる場面があった。

（エ）さらによい授業にするためには何が必要か

- a 主体的な学びの視点か
 - ・二部合唱に向けて、各パートに分かれたことにより、少人数で練習することができた。
 - ・自分のパートの音程に集中し、音程が違っていればその音を生徒自身で直そうとする意識を高めていけるようにしていく。
- b 対話的な学びの視点から
 - ・パート練習の時に教師主導の指導ではなく、友達の良さを感じながら友達と自分を比較していけるようになる。
 - ・生徒同士で声を掛け合って練習できるような取組ができるようにしていく。
 - ・パート別の発表を聴いて、友達の良かった点や授業目標に沿った感想を発言できるように配慮する。
- c 深い学びの視点から
 - ・パート毎に練習してきたことにより自分のパートの音程に気をつけながら歌うことができた。
 - ・副旋律パートは、二部合唱になるとつられてしまう生徒もいた。パート練習の練習時間を長くとりたり、生徒一人一人の声を聴くなどして取り組んでいきたい。

（オ）新学習過程分析表を使ってみて

生徒の個々の実態に応じた単元目標や本時の目標の設定をする上でとても重要であると思われる。音楽の授業構成をしていく中で、新学習過程分析にある「他者からの情報を活動につなげる」という項目は参考になり、全体を見てもとても使いやすかった。

（カ）実践例(指導略案)添付

令和2年度 音楽科 学習指導略案

教科・領域名	音楽科	授業者	MT ST 7名
--------	-----	-----	----------

学部・学年・組	高等部 3 年	対象 児童生徒数	22 人
日 時	令和 2 年 11 月 16 日 (月) 6 時間目 (14:25～15:10)	場 所	音楽室
単元名	・二部合唱を楽しもう。		
本時の目標	・自分が歌うパートを理解し、音程を気にしながら歌うことができる。 ・声に出して歌うことができる。 ・みんなと合唱する楽しさを味わう。		
学習指導要領 との関連	■高等部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 ア歌唱 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊦ ■中学部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 ア歌唱 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊦㊦ 2 段階 A 表現 ア歌唱 (ア) (イ) ㊦ (ウ) ㊦㊦㊦ ■小学部学習指導要領 ・音楽科 1 段階 A 表現 ア音楽あそび (ア) (イ) (ウ) ㊦ 2 段階 A 表現 ア歌唱 (ア) (イ) ㊦㊦ (ウ) ㊦㊦㊦		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5 分	1 始まりの号令 (ピアノ)	・パート別に着席する。 ・授業の流れを説明し、見通しをもつ。 ・本時の目標について説明をし、意欲を高める。 ・無理に声を出さないように、小さい声で軽く出すように声掛けをする。(視覚支援含む) ・声を出して伸ばす。 ・見通しをもつため、練習時間や集合時間などを伝えておく。 ・音程やリズムなど気を付けて歌う部分を確認する。 ・パート別に分かれて、お互いの声を聴く。音程やリズムなど気を付けるように S T が支援する。 ・パート別に発表し、生徒間で評価しあう。 ・練習したことに気を付けながら全員で歌う。 ・二部合唱の低音パートが、主旋律につられないようにピアノで主旋律を弾く。 ・振り返りを交えて説明し、次の学習へつなげる。	
展開 3 5 分	2 本時の学習内容を知る		
	3 目標を知る		
	4 発声練習		
	①ロングトーン (アの口)		
	②音階での発声 (アの口で)		
	5 歌唱 パートに分かれて練習。 各教室に移動 ・音楽室 ・生訓室 ・縫製室 (公開授業)		
まとめ 5 分	6 パート別に発表する。 (ピアノ伴奏に合わせて)		
	8 合唱 (C D に合わせて)		
	9 次回の学習について		
	10 終わりの号令 (ピアノ)		

注目してほしい学習活動		
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4	声の出し方に気を付けて、ピアノの音を聴いて声	主 I 1 ①②③

	出すことができる。		2②③ 3
展開 5	パートに分かれ、できるだけ生徒が中心になって練習する。生徒同士で歌うことの楽しさを味わい、練習する。 タイマーを使うことにより、時間を意識して練習できるようにする。		主Ⅰ 1①②③ 対Ⅱ 1①② 3①②③ 4①② 深Ⅲ 1①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
H	音程を意識して声を出すことができる。	パート練習で、二部合唱の副旋律を練習する。初めは主旋律の音を歌うことがあった。教師や友達の声を聴いて意識しながら声を出すことができた。全体合唱で主旋律のパートにつられてしまうことがあった。	B
Y	音程を意識し、他のパートにつられないように歌うことができる。	パート練習で、二部合唱の副旋律を練習する。最初の練習では、主旋律を歌うことがあったが、練習を重ねるごとに音程に気をつけながらできるようになった。音も覚え、全体合唱ではほぼつられずに歌うことができていた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・感染症対策として、パート練習をグループに分かれて行った。練習場所や時間設定など視覚的な支援で行ったので、スムーズに移動ができたように思う。パートリーダーが中心となって移動ができていた。 ・パート練習では、副旋律を歌う生徒を指導した。事前に生徒の実態を把握し、音程が大体とれる生徒を集めて練習に取り組んだ。主旋律の音を覚えていることもあり、初めは主旋律の音を歌ってしまいうことがあったが、練習を重ねるごとに生徒も副旋律の音程を意識しながら歌うことができてよかったと思う。 ・全体での二部合唱では、生徒Yは、音程を意識してほぼつられずに歌うことができてよかったと思う。 ・生徒自身、初めての二部合唱であったので、練習してきたことを生かして合唱することができたという達成感を得ることができたのでよかった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・時間設定について短いパート練習であったが、短時間でも生徒が集中してできていました。 ・感染症対策の中で、マスクをつけたまま声を出すような形であったが、生徒は気にせずに歌うことができていたと思われる。 ・授業内容の視覚支援としてスケジュール教材を貼っているが文字が小さい。大きくしてはどうか。 ・歌に対しての気を付ける部分など説明がはっきりしていないことがあったので、明確に分かりやすくしてはどうか。 ・本時の目標に関する生徒への投げ方ができていなかったもので、感想を述べるときに抽象的に答えてしまっていたので、目標に対しての感想が言えるように声掛けをしてはどうか。			

(1) 公開授業 21

ア 作業学習：受注サービス

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部の作業学習の受注サービス班で現在学習している生徒は、1年生の男子1名、女子1名、3年生の男子4名、女子1名の7名である。この中には、長時間の集中力が持続しづらく、丁寧な作業を続けることに課題のある生徒、周囲の状況が気になり自分の作業に集中しづらい生徒、知的障害に加えて、疾病からくる体力的、精神的な不調状態のある生徒、軽度の肢体不自由を併せ有し、手指の細かな作業が苦手な生徒、音などに過敏で、苦手な音のする環境では落ち着いて学習活動に臨むことが難しい生徒、細かな作業は比較的得意だが、やったことのない新しいことへの不安感が強い生徒、登校状況が安定せず、学習活動全般に自信がもてない生徒など、それぞれに実態が異なり、適切な支援の形は様々である。自閉的な傾向のある生徒はこのうち2名で、視覚的な情報を活用することで、学習に対する見通しが立ちやすい。

b つけたい力

作業内容の中に、端子切り、ゴム外し、仕分け、最終チェックなどがある。これらは、本校の学区内にある自動車部品製造企業の協力により、提供を受けている作業である。この作業は、学区内の福祉事業所でも取り組んでいる作業内容であり、実際に卒業後にこの福祉事業所に所属し、同じ作業内容に取り組んでいる卒業生もいる。福祉事業所と同じ作業内容を作業学習の中でも取り入れて行うことにより、作業の際の正確さ、丁寧さを心掛けることができ、またその作業内容の必要性について生徒自身が感じ取ることができる。また、端子切りやゴム外しはニッパーやペンチを取り扱うことから、安全に気を付けて道具を取り扱うなど、職業人として欠かせない注意力、集中力を養うことができると考える。

印刷は、校内のニーズを注文という形で生徒に伝え、注文に応えるという形で業務を行う。注文書を読み取り、印刷機を適切に扱い印刷し、注文通りの枚数や製本ができているかを確認し、納品する工程を校内で取り組むことができる。丁寧で正確な作業を心掛けることができる内容である。

ミシン作業では、校内の食堂で使う雑巾や布巾を縫ったり、ネームストラップやマスクケースなど校内外で販売する製品を縫ったりしている。ミシンやアイロンなどの機械の扱い方、また裁縫道具の安全な取り扱いを学び、丁寧で正確なミシン掛けなど心掛けることで、作業に対する集中力を高めることができる。と考える。

それぞれの作業での工程で、疑問に思ったことなどをすぐに解決できるように、質問したり報告したりする担当を事前に決めている。適切な言葉遣いを心掛けながら職場で報告・連絡・相談できる能力が養われると考える。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

作業の場に入ると、まずリーダーは、日付などをホワイトボードに書き込み、他の生徒は自分の名札を希望の作業種に貼る。

あらかじめ、自分の名札をホワイトボードに貼ることで、出勤状況を示すことと、希望の作業種を示すことができる。これを受けて作業の担当を生徒自身の希望を取り入れて決定することで、生徒は自分の希望を尊重された体験を通して意欲的にその後の作業に取り組むことができる。意思決定の場面を設けることで、作業に対する責任感も芽生える。希望の作業種に自分の名札を貼るときに、他の人の状況を確認し、その作業種に人が集まりすぎているかどうかを気に掛ける生徒も見られた。周囲の状況を確認して、自分の意思を決定することは、将来の職業の場でも必要になる力である。と考える。

作業動線を整理し、作業の場所が他の作業をしている生徒の動線と混雑しないように決定する。その場合、作業場所が確認できるように教室内の地図を黒板に示しておく。

作業準備の時間には、最初に全体に関わる作業準備に取り組むことができた場合は、評価する。協力し合って準備ができている場面はすぐに評価し、強化する。自分の準備が整ったことを報告できた場合も口頭で評価する。

作業中は、それぞれの作業担当者に報告に行くことを基本とし、適切な言葉遣いで報告できた場合は

称賛し、強化する。ミスが見つかったときには、その場で指摘し、直すことができたらずぐに肯定的な言葉を掛ける。作業の工程で正確さを心掛けている様子、丁寧な作業の様子が見られた場合はすぐに評価し、強化する。

b 生徒への配慮

文字では伝わりにくい生徒もいるので、作業カードはイラストや写真を用いた。

残り時間が視覚的に把握できるように、タイマーを設置し、作業時間と休憩時間に示している。

音に過敏な生徒については、担当の教師を固定化し、落ち着いて取り組める環境を作る。

不安感の強い生徒には、リーダー役を任せ、進行マニュアルを示して進行をする役を担うようにした。集団をけん引する役割を担うことで能動的に見通しをもって学習に臨めるようになった。

作業種を自分で選ぶことができることから、生徒自身の好きな、得意な作業種を選ぶことが多くなり、教師側は、それぞれの生徒の気持ちや意欲、得意分野が把握しやすくなった。コミュニケーションの苦手な生徒も、希望種に名札を貼ることで意思表示ができるため、精神的な負担が軽減できると考える。

反省会では、ワークシートを用いて自分の作業を振り返る。通常のワークシートの他にイラスト入りのものも用いている。読み書きの困難を感じている生徒にはイラスト入りのワークシートを使うようにした。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

担当を決めておくことで前もって気持ちの準備ができることから、報告や相談、質問など、適切な言葉で行うことができる生徒が増えた。

希望の作業種で作業ができることが多いことから、それぞれの生徒の作業意欲が増した。

片付けや掃除など、協力してできている場面では称賛されることが多いので、自然と生徒同士の声掛けが増え、親和的な雰囲気掃除が行えている。協力し合って掃除を行うことができるようになり、掃除にかかる時間が短縮された。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

作業中のしんどさを言語で訴えることが難しい生徒もいる。ヘルプカードなどを作り、それを提示することで休憩できるようにするなど、生徒がプレッシャーを感じすぎない学習の場としたい。

b 対話的な学びの視点から

製品の販売学習は、販売品の検品などに関わることから、自然とミシン作業担当の生徒が行うことが多くなり、他の作業を行っている生徒が販売に関わるができていない。接客の際の適切なコミュニケーションを養う機会を平等に設定するために、販売の活動を各作業種から切り離して設定し、希望を募るなどしたい。

また、自分の作ったマスクケースの使い心地など、購入者から意見や感想などを集約することにより、より良いものを作ろうとする気持ちが芽生えたと考える。購買者から感想を募るなどの機会を設け、それを生徒自身に伝え、製品の増産、また製品の改良につなげることができるような取組を考えたい。

反省会で、作業を振り返り自分の言葉で発表する場面を大切にしたい。

c 深い学びの視点から

将来の職業生活に直結する学習であることを、反省会など振り返りの場等で言及することで、生徒自身が自覚して、報告や相談等の際に適切な言葉づかいを心掛けることができるような学習の場としたい。作業中、集中して取り組むことができるようになることを成功体験として積み重ね、その態度が職業人としての基礎を築くことを常時伝えていく。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

主体的な学び、対話的な学び、深い学びそれぞれの視点から授業内容を確認することで、生徒それぞれの長所、特性を視点から分析し、適切な学習活動へつなげることができた。

(カ) 実践例

令和2年度 高等部 作業学習（受注サービス）学習指導略案

教科・領域名	作業学習	授業者	MT ST:1名
学部・学年・組	高等部1年～3年	対象生徒数	7人
日 時	令和2年11月6日（金） 時間 9:00～12:15	場 所	高学習室 （第2棟2階西）
単元名	受注サービス		
本時の目標	・分からないことは質問して解決する。 ・丁寧に正確な作業をする。		
学習指導要領との関連	■高等部学習指導要領 ・職業 1段階 イ職業に関わる知識や技能について ㊥ ■自立活動 3（3）（4） 4（5） 6（5）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
開始前	・集合前にリーダーはホワイトボードに日付とリーダー名を書き込む。 ・ホワイトボードに掲示された作業①の作業の中から希望の作業を選び、自分の名前カードを貼る。	・ホワイトボードに作業①の作業内容を提示する。	
導入 5分	1 リーダーの声かけにより始めの挨拶をする。 2 作業の分担と作業場所を確認する。	・挨拶により作業への切り替えを促す。 ・作業の担当教員を確認し、報告や相談、質問は担当教員に行うことに言及しておく。	
展開 3時間 40分	3 全体の準備をしてから、個々の担当の作業の準備に取り掛かる。 4 作業を始める。 ④ 端子切り ⑤ ゴム外し ⑥ 仕分け ⑦ ミシン作業 ⑧ 印刷 ・端子切り、ゴム外し、仕分け業務はトレイの分が終わったら、担当教員に報告に行き、確認を求める。 ・ミシン作業の質問等はできるだけ担当教員のところまで行く。ミシン操作などの質問や相談についてはミシンのある場所から担当教員に声を掛ける。完成の報告は完成品をもって担当教員まで行く。 ・リーダーの声掛けにより休憩時間をとる。（休憩は10:30～10:50） ・作業②の時間も作業①と同様に行う。	・協力して準備ができているときには称賛する。先に個々の準備に取り掛かる生徒がいたら、先に全体の準備を手伝うように促す。 ・タイマーにより作業の残り時間を提示する。 ・丁寧な言葉遣いで、報告や相談ができたときには称賛し、強化する。 ・報告時、丁寧な作業の様子が確認された時には、称賛し、強化する。 ・休憩時間をタイマーにより提示する。 ・作業①と同様の配慮をする。	
まとめ 10分	5 片付け・掃除を行う。 ・リーダーの声掛けに従い、作業で使ったものをそれぞれ片付ける。 ・協力して掃除を行う。	・掃除の場面で、戸惑う生徒がいれば掃除の方法などについて指示する。 ・周囲の状況から自ら判断し掃除を行っている生徒を称賛する。	

6 終わりの挨拶をする。			
注目してほしい学習活動			
学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点	
導入 「作業内容を決める」	・作業内容を意欲的に決める。その際、他の人の意見も参考にしながら、一つのところに集中しないようにする。	主－１②③ 対－３④	
展開 「各作業」	・作業手順を理解し、丁寧に正確に行えているか。報告や相談の言語表現は適切か。	主－２②③ 対－２②	
まとめ 「片付け・掃除」	・自ら活動を見つけ、意欲的に活動できているか。 ・他者を意識し、協力し合って片付け・掃除ができているか。	主－１② 対－４①②	
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
生徒A	・安全な作業を心掛けることができたか。 ・集中して作業に当たることができたか。	当日は欠席	
生徒B	・丁寧な作業を心掛けることができたか。 ・適切な言葉づかいであったか。	・丁寧な運針を心掛けることができ、ガイド線に沿った運針ができた。 ・報告の言葉遣いが丁寧だった。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・準備や片付けや掃除の際には、生徒同士で協力し合って行うことができていた。声を掛けたり、自然な形で手伝ったりできていた。 ・ミシン掛けの報告は縫い終わり次第報告することになっていたが、縫い終わったら自分でも見直すことができるように声掛けをしたほうがよかった。			
研究協議における意見・アドバイス			
・生徒の実態に応じて自分の力を発揮していた。普段は作業の場所で作業することが難しい生徒も今回は落ち着いて作業に取り組むことができた。 ・作業時間の開始ぎりぎりに集合する生徒がいた。時間厳守を徹底させてほしい。 ・子どもたちが淡々とやるべきことをしている印象。静かに作業に取り組むことができていた。 ・自分で製品の良しあしを判断し、自分で検品して報告できるようになってほしい。そのためには、完品を見本として置き、それと見比べてから報告するようにすれば成長するのではないかな。 ・ミシンの調子の不具合にも自分で気付けるようになってほしい。 ・一般企業などでは、仕事の担当を自分で決めることはできないので、自分で気持ちを切り替えることが難しい生徒には自分で作業を選択させることは作業学習では不向きではないかな。 ・端子の適切な長さを生徒自身で判断できるように見本などがあればよい。 ・マスクケースは、実際に保護者に使ってもらうなどしてモニタリングして、生徒自身が製品改善する意欲を育ててほしい。			

（１）公開授業 22

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

リサイクル作業の構成員は男子生徒6名、女子生徒5名であり、支援度の低い生徒から高い生徒まで発

達に幅のある生徒 11 名である。活動する時間が長くなると集中力が続かない生徒、丁寧な作業ができずスピードだけを意識する生徒、周囲の活動が気になる自閉症を併せ有する生徒や難聴を有する生徒、また、音に対して過敏になる生徒、新しいことに対して不安になる生徒、知的障害に加え障害の重複や言葉による意思疎通が未熟な生徒、危険認知の面に支援を要する生徒など、それぞれに実態が異なり、適切な支援もそれぞれである。

リサイクル作業は、作業の正確さやスピード、持続性の向上、返事、報告の習慣化を目指して、生徒個々に応じた目標設定をすることも可能である。単純な動き、確認できる作業量、見通しのもてる仕事から、どの工程でも各自が達成感を得られやすい。また、視覚支援として、工程のマニュアル化や支援ツールを整えることで、比較的支援度の高い生徒も障害の実態が多様な生徒も共に取り組める作業活動で学習に対して見通しがたちやすい。

作業経験年数でみると、2，3年生の半数以上は昨年度より引き続きリサイクル作業に所属している生徒もいるが、1年生にとっては初めての作業学習である。現時点では経験年数に関わらず、ほとんどの生徒が作業工程の流れを捉えることができている。

b つけたい力

リサイクル作業には、「缶運び」、「缶洗い」、「缶分け」、「缶潰し」の4つの作業工程があり分業で行っている。各工程は単純な作業の繰り返しで作業内容を身に付けやすく作業の理解を得やすい。どの工程でも作業が短時間で完結し結果が明確に表れ、コンテナの数や重さにより作業の到達度を確認することができるなど作業量が目に見えて分かりやすい。各作業工程の目標は以下の通りである。

○「缶運び」・・・一輪車または両手を使って安全に多量の缶を運ぶことができる。

○「缶洗い」・・・缶の内側、外側、飲み口の一連の洗いを、流れるように洗うことができる。

○「缶分け」・・・アルミとスチールの違いが分かり、分別できる。プルタブははずしやシールはがしをきちんとできる。

○「缶潰し」・・・自分のペースを保ち、持続して潰すことができる。潰す量の目標を持ち、作業に従事することができる。

このように障害の実態が多様な生徒が取り組める作業活動になっていることから、作業内容の理解と見通しをもち主体的に作業をする力や集中力、持続力（根気強さ）、責任感、協調、協力の作業態度を身につけたいと考える。

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

授業の始めに日付などをホワイトボードに書き込み、生徒は自分の名札を希望の作業種に貼るようにする。自分の名札をホワイトボードに貼ることで、希望の作業種を示すことができる。これを受けて作業の担当者が生徒自身の希望を取り入れて決定することで、意欲的に作業に取り組むことができる。希望の作業種に自分の名札を貼るときに、周囲の状況を確認して、自分の意思を決定することは、これから先、様々な場面で活かされてくるに違いないと考える。

作業全工程は同じ作業場にあることで、各工程だけでなく全体としても見通しをもちやすくなっており、リサイクル作業としての一体感を持つこともできる。また、生徒の動きやすさをねらって工程間の連携や作業の動線を考慮し、視覚的な表示や道具の配置により工程を識別し、エリアどうしの交錯をなるべく防ぐようにした。

b 生徒への配慮

支援に際しては、どの生徒にも工程の流れを分かりやすくすることが大切であり、支援度の高い生徒に合わせた教材を用意することを意識して準備や設置をした。「缶分け」の個所においてはイラストや写真カードを準備して、どのような準備をしたらよいのかを分かりやすくしている。生徒の実態に応じて周囲があまり見えないようにコンテナを積み上げるなどして作業場の構造化にも努めてきた。また、各作業場への報告の仕方などはその入り口に具体的に文言を書いたプラカードを準備した。準備段階で一

人では困難なところ以外は、できる限り自分で身支度をするように支援する。また、併せて高等部を社会生活への出口と見据える時期としてとらえ、卒業後の生活への橋渡しとして必要以上に支援をしないことにも留意したいと考える。その場で気付いたことを必要に応じて指導、声掛けはしていくが、場面により待つことも大切である場合もあり、状況によっては見守ることを重要視した。

(ウ) 取り組みを通して、何ができるようになったのか

作業活動時においては、作業場で4つの分業を行っており、工程間を行き来しながら、次の作業への報告、返事等、相手に伝わるように必要なことを伝達することができるようになってきた。社会性を育てるために必要となるコミュニケーション力を育むことにもつながってきている。片付けでは、まず自分の持ち場の片づけをしたうえで、早く終われば自分の担当場所以外を手伝ったり、協力を頼む声掛けや最後まで共同作業を行うことを通して、協力する態度や責任感が持てるようになってきた。

(エ) さらによい授業にするために何が必要か

a 主体的な学びの視点から

- ・周囲の状況を見て、自分から考えて行動できるようになる。
- ・作業前の身支度や必要な準備ができるようになる。
- ・時間を意識して行動することができるようになる。
- ・場面に応じた必要な返事、報告、質問、相談などの伝達ができるようになる。
- ・作業工程の内容理解と正確な作業をする力を付ける。

b 対話的な学びの視点から

作業時のリーダーは固定しているが、洗濯の係とかを輪番制にするなどにして準備、片付けが協力してできるための必要なコミュニケーション力を付けることに取り組んでいきたい。また、協調・協力して働く力、より良い対人関係を構築できるように共同作業としての意識を高めることができるように取り組んでいきたい。

- ・缶の回収を通して、地域との関りを深めることを継続していきたい。

c 深い学びの観点から

作業の終わりの振り返りでは、良い点を評価し改善点を伝え次回に生かすようにしたい。自己肯定感を高められるよう個々の達成感を認め、仕事への真剣さを伝えるときにも仕事をねぎらう気持ちを忘れないようにしたい。

また、資源の大切さや自分たちの作業が社会の役に立っていることも伝えていきたい。

- ・将来設計能力や情報活用能力、金銭の扱い、働く喜び、役割の理解と働くことの意義を考えることができる力を目指していきたい。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

生徒の特性や発達段階は、多種多様で個々の実態に応じた単元目標や本時の目標の設定、その関連性が重要であると考えられる。この点から、授業構成を捉えるうえで新学習過程分析表は、的を得ていて使いやすかった。

令和2年度 高等部 作業学習（リサイクル）指導略案

教科・領域名	作業学習	授業者	MT ST 4名
学部・学年・組	高等部1年～3年	対象	11人

		児童生徒数	
日 時	令和2年10月13日(火) 時間 9:00~9:45	場 所	作業場 (セメント棟南)
単元名	リサイクル作業		
本時の目標	・仲間と共に協力して取り組む。 ・報告や返事をし、分からないことは聞く。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・職業・家庭科 1段階 職業分野 ア、イ ■ 自立活動 3 人間関係の形成 ア 6 コミュニケーション ア、オ		
時間	学習活動		手立て、留意点
導入 5分	1 リーダーの声掛けにより集合し、始めの挨拶をする。 2 作業工程の分担を決める。		・速やかに集合するよう促す。 ・大きな声であいさつをして、作業への切り替えを促す。 ・自分の名前を担当する工程に貼るよう指示する。貼ることが困難な生徒には、挙手や返事で、担当を確認するようにする。
展開 35分	3 各工程に分かれ、準備をする。 4 作業工程ごとに作業を始める。 ⑨ 缶運び ⑩ 缶洗い ⑪ 缶分け ⑫ 缶つぶし ・ 工程間の報告・返事を行う。		・一人では困難なところ以外は、できる限り自分で身支度をするように支援する。 ・状況に応じて、作業中に気づいたことを伝えたり、作業を静かに見守ったりする。 ・作業全体の流れに滞りがいないか、作業全体に目を配り確認し、各工程に必要なことを各工程の責任者(教師)や場合によっては生徒に伝え、全体を調節する。 ・自主的に伝えるよう支援する。 ・丁寧な言葉づかいを促す。 ・数名の反省を聞く。 ・特に伝える必要のある意見を簡潔に述べる。
まとめ 5分	5 本時の振り返りをする。		・本時の作業内で、良い点を評価する。

	6 終わりの挨拶をする。	・大きな声であいさつをして、作業終了の切り替えを図る。
--	--------------	-----------------------------

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
導入 「作業工程を決める」		・作業内容を意欲的に決める。その際、他の人の意見も参考にしながら、一つのところに集中しないようにする。	主－3 対－4
展開 「各作業」		・段取りを理解し、丁寧に行えるかを確認する。また、意欲の確認。報告の確認。	主－3 深－1
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒 T	・友達と会話をしないで作業に集中していたか。	・作業手順も正確に覚えていて準備段階から、率先してできていた。	A
生徒 H	・大きな声で報告できたか。	・声を掛けるタイミングも、周囲の作業の状態を見て報告できていた。	B
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・作業開始時にどの作業をしたいのかを自分で選択させる取り組みは、生徒の意欲を高めるためにもよかったと思う。 ・生徒 A は参観者もあっていつもより緊張感をもって取り組めていたように思う。人から見られるということを日頃から意識して取り組むことにつながればと思う。 ・生徒 B は教室での声量よりは大きかったと思うが周囲の作業音が大きくなると聞こえにくいので、これからの取組においても恥ずかしがらずに声を出すことができるように促していきたい。			
研究協議における意見・アドバイス			
・必要最小限の声掛けで生徒が考えて動けるように。 ・称賛する声掛けを多くする。 ・目標設定をはっきりする。 ・生徒が流れや動きを理解していた。			

(1) 公開授業 23

ア 生活単元学習「新型コロナウイルス感染症の予防」

(ア) この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年C組は男子6名、女子2名の合計8名のクラスである。生徒は知的障害に加えて、自閉症、精神疾患や脳性麻痺を有するなど多様である。簡単なコミュニケーションは可能であるが、口頭での説明では内容の理解が十分でないために視覚支援が必要な生徒や、精神的に不安定な場面では教員が付き添う必要がある生徒など、個人の特性も様々であり、それぞれの障害特性に応じた指導・支援が必要となっている。

知的障害のある生徒の学習上の特徴としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことが挙げられる。今回、「新型コロナウイルス感染症の予防」を取り上げて授業を展開する際に、感染症に関する言葉や意味が難しいことが予想される。分かりやすい表現や視覚教材を活用して、一人一人が気を付けなくてはならないことを理解して、生活の場で適切な行動がとれるようにしたい。また、成功体験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことがある。学習や生活全般の課題として、「分からないことは自分から質問する。」や「大きな声ではっきり話す。」としている生徒が多く、主体的に活動することや、自分の意志や思いを表現することに支援や配慮が必要である。

b つけたい力

新型コロナウイルス感染症の感染が拡大する中で、新型コロナウイルス感染症の予防について正しく理解し、適切な行動がとれるようになることを目標とした。

1学期開始時、夏休み前に「手洗いの方法」「正しいマスクの付け方」「密閉・密集・密接の3つの密を避ける」などの感染予防対策についてパワーポイントを使って授業を行った。また、日々の生活の中で「手を洗いましょう」「他者との距離に気を付けましょう」などの声を掛ける働きかけを行った。

2学期には感染症を予防するポイントとなる「感染源の排除」「感染経路の遮断」「抵抗力を高める」ことについて科学的に理解することを目指し、感染予防の三原則と感染予防行動の関係について説明したが内容が難しくなり、日常的によく聞く手洗い、マスク着用が「感染経路の遮断」にあたることを中心に説明した。また、ウイルスに感染していても症状が出ない場合があり、その人たちが、知らないうちに感染をひろげてしまうことがある。本時では新型コロナウイルス感染症の症状を知り、健康チェックを行い、知らないうちに感染を広げることなく適切な行動ができるようになることを目指した。健康チェックを行い、感染が早期に発見できることが感染拡大につながることを理解でき、体調不良があった時には早期に報告できる力を身に付けたい。

今回の一連の学習活動は、新型コロナウイルス感染症の防止を念頭に展開した。今回の学習で身に付けた感染防止行動が、今後異なる感染症が流行した時にも適切に行動することの基礎になるように育てていきたい。

1. 健康チェックをしよう。体調について、ある場合は「○」、ない場合は「×」を記入しよう

日付		月日（曜日）	体温		
体 調	頭痛		体 調	吐き気・吐いた	
	鼻水・鼻づまり			腹痛	
	においがしない			下痢	
	あじがしない			からだがだるい・気持ちが悪い	
	せき			その他に気になること	
	のどのいたみ				

（イ）授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

パワーポイントを用い、視覚的に説明内容を伝えた。健康チェックに体調を記録する際の体調の項目は新型コロナウイルス感染症の症状を用い、今の情勢に合わせるようにした。またチェック内容の表記については頭部から順に腹部症状、そして全身症状へと展開できるよう順序を工夫した。また、実

際に頭部から順に自分自身の身体を触りながら体調チェックを行うように工夫した。

b 生徒への配慮

生徒が学習への見通しがもてるように、パワーポイントに本時の目標や内容を提示し、説明もパワーポイントに画像を用いるなど視覚教材を多く用いた。STは机間巡視を行い、集中が切れてきた生徒に声を掛け、意識を授業に向かうように支援した。健康チェック表に記入する際は、支援が必要な生徒の近くにSTを配置して、書き方や質問内容の理解を確認し、なるべく生徒からの質問を待つようにした。また、今回の体調チェックでは体温をワークシートに記入することを学習活動としたため、STに非接触型の体温計で体温を測定してもらい、体温を用紙に記入することに集中できるようにした。体温表に体温を記入する際に、「〇〇度〇分ですよ」という教師の表現では理解できない生徒に対しては、体温計の表示を見せて「〇〇てん〇」と表現して記載するように指導した。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

新型コロナウイルス感染症の症状をパワーポイントで確認して、ワークシートの健康チェックに自己の体調を「○」「×」で記入することができた。体調チェックについては、「体調」という言葉が示す内容として「頭痛」「嘔気」「からだがだるい」などの項目があることを知ることができ、自己の体調を具体的に確認することができるようになったと考える。毎日の体温測定もしっかり記録ができており、毎朝提出もできている。他者との距離についても友達同士で「近い」と声を掛け合う姿が見られるようになった。

(エ) さらによい授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

パワーポイントで扱う画像を専門的な内容と平易な表現を合わせる工夫をし、分かりやすく興味をもてるようにする。

今回は教師が作成した健康チェック表を使って健康チェックを行ったが、生徒に自ら作成したものを活用させたい。例えば公的機関からのホームページ等から新型コロナウイルス感染症の症状を検索し、それらの項目を参考にしたチェック表を作成し、それを使って健康チェックをするなど主体的に活動ができるようにする。

b 対話的な学びの視点から

教師が質問し、そして生徒が回答するという流れだけでなく、生徒同士で感染症予防の課題などについて、考える場面を設定したい。また、クイズ形式にして選択肢を用意したり、選択肢を用意したり、選択肢にない答えを自ら考え、発言を引き出すような工夫をしたい。

c 深い学びの視点から

体調管理や感染予防については、卒業後の生活でも必要となる。生徒が自ら公的機関などのホームページ等で提供する正確な情報を入手することで冷静な行動がとれるようになる。SMSで氾濫しているデマや誤った情報に惑わされないよう注意するなど、心配なことがあったら一人で抱え込まずに、周囲の人に相談することを日常から身に付ける取り組みをする。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

3つの観点で学習場のどの場面に含まれているかを確認することができた。単元全体を振り返り、3つの観点が踏まえられた学習活動が展開されているかを整理して考えることができた。

(カ) 実践例

令和2年度 生活単元学習 学習指導略案

教科・領域名	生活単元学習	授業者	MT ST：2名
学部・学年・組	高等部3年C組	対象 児童生徒数	8人

日 時	令和2年11月16日（月） 2時間目（9：55～10：40）	場 所	高等部学習室
単元名	新型コロナウイルス感染症の予防		
本時の目標	・新型コロナウイルス感染症の予防方法が分かる。 ・健康チェック表に体調を記録することができる。		
学習指導要領との関連	■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 H保健 ア ・国語 1段階 A聞くこと・話すこと ア イ ■ 高等部学習指導要領 ・保健体育科 1段階 I保健 ア ■ 自立活動 ・健康保持（1）		
時間	学習活動	手立て、留意点	
導入 5分	1 日直が始めの挨拶をする。	・日直が号令を掛けてるので、必要時に勢を整えるように声を掛ける。 ・本時の目標をパワーポイントで提示する。	
展開 27分	2 本時の目標の確認		
まとめ 10分	3 新型コロナウイルス感染症の予防方法を確認する。 ＜発問：どんな予防方法がありますか？＞ ＜予測される回答＞ 予防1：正しい手洗いの方法 予防2：咳エチケットとマスクの着用 予防3：3つの密からの回避	・ウイルスから身を守るために正しい予防方法を身に付け、毎日実践することが大切であると伝える。	
	4 新型コロナウイルスの症状について知る。 ＜発問：どんな症状があると思いますか？＞	・症状をイラストで分かりやすくする。 ・頭部から順番に症状を伝えることで、思い出すときの手掛かりになるようにする。	
	5 健康チェックをしよう ① 体温測定	・非接触型体温計を使い、T1 T2の教師が測定し、測定値を生徒がワークシートに記入する。	
	② 健康チェック表の体調について、症状がある時には「○」、ない時には「×」を記入する。	・S Tが健康チェックの進捗を確認する。 ・体調をチェックが予防対策の一つであることを伝える。	
	6 本時の振り返り ・感染症の予防方法の確認	・本時の目標が達成できたかを確認する。	

	・どうすれば新型コロナウイルス感染症を予防したり、流行を防いだりできるかについて発表する。 7 挨拶	・予防方法について分かったことを発表するように声を掛ける。
--	--	--------------------------------------

注目してほしい学習活動			
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント	重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開3　新型コロナウイルス感染症の症状を知る。		・症状はパワーポイントを使い、イラストで分かりやすく説明する。症状が分かることが感染の早期発見になり、予防につながることを伝える。	主－2 対－1 ① 対－2 ①②
展開5　健康チェックをしよう		・体調を確認する項目が、自分で体調について答えることができる。 ・健康チェックは、頭部、鼻、口喉、腹部と身体の上部から順番に行い、また自分の身体を触りながら確認することで理解を深める。	主－1 ② 対－1 ① 対－2 ①②
注目してほしい児童生徒の評価			
児童生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	体調チェック表に自ら考え、判断して記入することができる。	ワークシートの体調チェック表に体温を記入し、体調の各項目について「○」「×」を自分で考えて記入することが自分でできていた。	A
生徒H	体調チェック表に体調を記入しすることができたか。自分から確認を申し出ることができたか。	ワークシートの体調チェック表に体温を記入し、体調の各項目について「○」「×」を自分で判断して記入することができた。記入後の確認については、教師からの全体への働きかけがあった後に申し出ることができた。	A
【評価基準】 A：十分達成できた。　B：ほぼ達成できた。　C：あまり達成できていない。　D：達成できていない。			
授業全体の総括			
パワーポイントでの説明を静かに聞くことができた。前時の復習である「どんな予防方法がありますか」については「マスクをつける」「三密」などの回答があった。クラスの生徒全員が健康チェックに「○」「×」のチェックができた。チェックする際に生徒からの質問よりも、教師からの働きかけが少し早く、質問があるまでもう少し待つ時間が必要だった。			
本授業後に改善・実施した内容又は今後の方針			
新型コロナウイルス感染症は全国的に拡大傾向にあり、現在の感染対策を続ける必要がある。感染予防について分かったことや、大切だと思うことをグループで話し合っ発表するなど、主体的に活動する学習活動にする。生徒に公的機関のホームページ等を検索して、新しい情報を自分で収集できるようにする。			

（１）公開授業 24

ア 保健体育科「いろいろな動きに挑戦しよう」「頭と体のつながりを感じよう」

（ア）この授業でどのような力をつけさせたいか

a 生徒の実態

高等部3年生22名を2グループ（A，B）に分け授業を行った。3年A組は男子2名、3年B組は男子3名、女子1名、3年C組は男子2名、女子2名の計10名をBグループとし、授業を行った。今回3年C組は校外学習のため、今回の授業は3年A組と3年B組の6名で行った。

知的障害に加えて自閉症の生徒が4名在籍し、授業に参加した際には他の生徒と同じ内容での活動は難しく、その日の状態を見て個別対応が必要となる。また、音に過敏でコミュニケーションがとりづらい生徒、体のバランスが

悪く活動時に体のコントロールがうまくできない生徒、理解はしているが集中力が持続せず、注意力散漫になる生徒がいる。その他理解力があり、活動もしっかりできるが体力的な面で心配な生徒、疾病からくる不調状態のある生徒は、過度な取組になると発作を起こすこともあり声掛けや見守りが特に必要となる。言葉での説明が理解しづらい生徒には、動きの見本を見せて、手を取り一緒に活動することで徐々に動きに慣れ、活動できる。また、同じ動きを繰り返し行うことで、動きに慣れスムーズな動きへつながる生徒もいる。言葉での説明が理解できスムーズに動ける生徒には、個別に課題を与えて取り組むことができる。それぞれの生徒の特性に応じた支援・指導が必要である。繰り返し行った動きはスムーズに活動ができていますが、初めて取り組む動きにはスムーズに動けないことが多い。様々な動きを経験することで日常生活や将来の事業所等での活動にもつながる力にしたい。

b つけたい力

今回の対象学年は卒業学年である高校3年生である。高校卒業後はそれぞれの実態に応じた事業所や施設で生活を送る生徒が多数である。事業所などでは散歩や体操といった活動を取り入れているところもあるが、体育授業で取り組むような様々な活動は少ないと思われる。将来、事業所等で健康的にそして継続して働くためにも、体力向上や健康を保持増進することが大切になってくる。そこで、体育の授業を通して体を動かすことの楽しさや喜びを味わったり、決まりやルール、マナーを守る力をつけてほしい。こういった経験が卒業後にもそれぞれの場所で活躍できる力につながると思う。

体づくり運動は、全ての動きの土台になるものであり、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動きを持続する能力を高めるために大切な単元である。そこで今回は体づくり運動を設定し、目標を「いろいろな動きに挑戦しよう」「頭と体のつながりを感じよう」とした。生徒の実態は様々であり、同じようにできないことがたくさんあるが、繰り返し行うことで少しずつ動き方が分かり、スムーズな動きにつながっていくことができる。こういったことが、将来の事業所等での生活に生かされるのではないと思う。また、自分が苦手な動きを改めて確認することができ、今後の体育の授業やその他の取り組みの中で、苦手部分を高めようという気持ちをもつことにも期待している。

(イ) 授業で大切にしたい点は何か

a 授業の工夫

ホワイトボードに授業の流れを掲示し、見通しをもてるようにする。分かりやすい説明を意識し、理解できたか時折確認しながら授業を進めた。また、口頭指示では理解することが難しいため、動きの見本を示した。その中でも、体の動かし方が難しい生徒には近くで見本を示し、手を取りながら一緒に動いた。最初の活動で体力向上と体を温め次の活動に入りやすくするため5分間走を取り入れた。その際に音楽を流しながら走りやすい環境づくりをした。

S Tには、活動時の安全面への配慮、動き方がスムーズにできない生徒への個別指導や、困っている生徒への声掛け、授業後の評価をしていただいた。

b 生徒への配慮

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、生徒同士の間隔を十分に取り、整列した。体の動かし方が特に困難な生徒に対して手を取りながら一緒に動き、口頭ではなく生徒の前で見本を示し繰り返し動きを行った。また、生徒が活動する距離にも配慮した。端から端まで動くことができる生徒、距離を短くして距離の負担を少なく活動できる生徒に分けて取り組んだ。

(ウ) 取組を通して、何ができるようになったのか

初回の授業での動き方よりも、2回目は体の動かし方が分かり、動きがスムーズに行えたこと、

スキップをするときにはスキップだけではなくスキップの動きに自分で工夫した手の動きをつけて行えた生徒がいたことは、これまでに取り組んできた成果が表れたものと思われる。

(エ) さらにより授業にするためには何が必要か

a 主体的な学びの視点から

今回の授業では視覚支援が不十分であった。今後、授業で扱う種目について、具体的に見やすい文字で掲示し説明したり、動画を見せたりすることで、生徒がより理解し、積極的な取組につながっていくと思うので取り入れていきたい。準備をしっかり行い、生徒が自発的、積極的に活動できる授業にしていきたい。

また、体育が苦手な生徒に対しては、簡単な体を使った遊びや体でジャンケンゲームをしたり楽しめる活動を取り入れることで苦手意識を和らげたい。そして、生徒とコミュニケーションを図り、つまずきがどこにあるのかを確認しながら授業に取り組んでいきたい。

b 対話的な学びの視点から

今回の授業は教師と生徒の関わりはあったが、生徒同士が関わる場面を設定することができていなかった。これからの授業で生徒同士が関わる活動を取り入れていきたい。

活動中に、生徒同士がお互いの動きを見合う時間を設定することは、どこがいい部分か、自分の動きとの違いがどこにあるのかといったことを知るためにも大切である。また、自分が考えていなかったような動きを見つけることができ、次の活動に生かすことができる。生徒が自分の活動に対して評価できる場面、生徒同士が評価しあう場面、S Tが評価する場面を設定して取り組んでいきたい。

c 深い学びの視点から

今回の授業は、深い学びの分析表を用いることができなかった。深い学びへつなげるには授業回数をしっかり確保し、目標達成のために時間をかけて取り組みを行わなければならないのではないかと感じた。今回の授業では深い学びの分析表を用いることができなかったので、公開授業時だけでなく日々の授業の中で深い学びにつながる授業を意識していきたい。

また、他教員の授業を見る時間を確保しながら学びを続けていきたいと思う。

(オ) 新学習過程分析表を使ってみて

授業の中でポイントとなる観点を確認し整理することができた。また、授業後に環境設定（活動時の場所、道具の位置）や視覚支援教材での支援方法が不足していた点、活動の評価等、自分自身の不足部分を再確認することができた。そして、次の授業にはどの観点を重視していくことが必要かも確認することができた。

Ⅲ深い学びに関しては、障害特性を考えた時にレベルの高い項目が多いように感じた。「～できる」という表現のため、そのことをしっかりとクリアーしていることが必要であると思う。段階別の捉え方として、一項目でも「～しようとする姿がみられる」といったような表現を追加していただけると嬉しい。

(カ) 実践例

令和2年度 保健体育科 学習指導略案

教科・領域名	保健体育 体づくり運動	授業者	MT S T 3名
学部・学年・組	高等部 3年 Bグループ	対象 児童生徒数	6人
日 時	令和2年11月26日(木)	場 所	体育館

		5 時間目（13：30～14：15）		
単元名		体づくり運動		
本時の目標		・いろいろな動きに挑戦しよう。 ・頭と体のつながりを感じよう。		
学習指導要領との関連		■ 中学部学習指導要領 ・保健体育科 1 段階ア ウ 2 段階ア ウ		
時間	学習活動		手立て、留意点	
導入 1 5 分	1 挨拶、出席確認 2 本時の目標の確認 3 準備体操＋5 分間走		・マーカーに整列するよう促す。 ・ホワイトボードに目標を掲示する。 ・体操をしている体の部位を意識できる声掛けをする。5 分間走は自分のペースで走り続けられることを重視する。	
展開 2 5 分	体づくり運動 4 コーディネーショントレーニング ・グー・パー（手） ・足グー・パー、手をつけて足グー・パー ・手足タッチ（つま先、かかと、膝）など 5 いろいろステップ ・両足とび ・スキップ ・ギャロップ ・サイドステップ ・片足とび（ケンケンパー） ・ミニハードル など 6 ストレッチ ・柔軟体操含む		・分かりやすく丁寧な説明と手本を心掛け、動作の最初には合図を出す。 ・スムーズに動いている生徒や戸惑っている生徒を確認し声掛けをする。 ・生徒の様子を見ながら曲を使用する ・ステップに慣れてきたら、手をつけてステップを行ってみる。 ・S T に生徒のサポートをお願いする。 ・ストレッチしている体の部位を意識させる声掛けをする。 ・生徒に感想等聞き評価する。	
まとめ 5 分	7 振り返り、挨拶			
注目してほしい学習活動				
学習活動		授業者のねらい及び工夫ポイント		重視した主体的・対話的で深い学びの視点
展開 4		コーディネーショントレーニング ・いろいろな動きをすることで頭と体のつながりを意識することができる。 ・間違っても動きを行うことが大切ということや、間違いも楽しむことを伝え取り組めるようにする。		主 1－①、2－③ 対 3－①、5－①
		いろいろステップ		主 1－①、2－③

展開 5	・いろいろなステップを行うことで、体を動かすことの楽しさや心地よさを味わえるように生徒一人一人にあった声掛けを工夫する ・手本をする教師が大きく、楽しく体を動かし、手本を見せる。		対 3－①、5－①
注目してほしい児童生徒の評価			
児童 生徒名	評価規準	学習活動に関する分析	目標 達成度
E	・説明を聞き最後まで体を動かすことができているか。手足の動きがスムーズにできているか。	・理解力があり、本時の活動では、安定した動き方ができていた。手足の動かし方もスムーズで、ステップ（スキップ）では、自分で考えた手の動かし方をつけてステップ（スキップ）することができた。	A
H	・手足の動きを考えながら取り組んでいるか。間違えても最後まで動くことができているか。	・手足の動かし方に困難さがあるが、最後まであきらめず取り組む姿勢が見られた。 ・考えながら取り組んでいるかは、不十分などころがある。	C
【評価基準】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。			
授業の振り返り(授業者の反省)			
・このBグループは、生徒の実態も様々であり、同じ動き方で行う難しさがあった。同じ動き方をする時や、一人一人の実態に応じた動き方を示し、行うことも必要だった。そのためには生徒一人一人の実態をもっと確認し、見ておかななくてはならないと再認識した。生徒の段階に合った動き方を示すことで「できた」達成感や楽しさを感じる場面が増えるのではないかと感じ、次の取り組みに生かしていきたい。また、生徒の実態に応じた視覚支援を取り入れながら、分かりやすい授業に取り組まなければならない。まだまだ、特別支援学校の授業について学ばなければならないことがたくさんある。積極的に生徒とコミュニケーションをとり、実態を知りながら必要な支援や授業を行っていきたい。			
研究協議における意見・アドバイス			
・生徒が達成感を得るためには、生徒のマイナスの発言（できなかったこと）に対してプラスで終わらせる声掛け（できたこと）の工夫をすることが大切。STにも取り組みについての感想を聞く。 ・タイマーで時間を示し、見通しをもてるようにする。ステップをするときに進む方向に視覚支援があると動きやすく分かりやすい。生徒一人一人の実態に応じた活動内容にする。段階別に取り組む、動きがスムーズにできる生徒の運動量確保も必要である。また、可視化が必要な生徒には視覚教材を有効に使うこと。 ・運動量の確保はしっかりできているし、ゲーム感覚で楽しめているよさもある。体の部位をしっかりと意識して動けている。体が硬い生徒が多いので柔軟の取組はこれからも必要。			

4 おわりに

（1）実践を通して

高等部では、学部テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」に基づき各学年で実践に取り組んだ。

1年生では、「キャリアプランニング能力を高める取組」を学年テーマに、各教科学習に取り組んだ。新しく形成された集団であることから、学年全体で取り組む内容と、グループ化して取り組む内容を組み合わせることで、生徒それぞれのキャリアプランニング能力を高めることができた。

グループ活動では、全員が参加できるよう生徒同士が声を掛け合うことができるようになってきている。授業中だけでなく、休み時間も授業で学んだことを生かそうとする姿が見られ、学校生活を楽しむ様子

が見られるようになった。

2年生は、学年テーマを「卒業後の自立に向けた、主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」として組んだ。学習集団の実態を把握し、学習内容や教材を工夫することで、生徒たちの学ぶ意欲を高めるための授業づくりが行われた。また、各教科、領域の学習において、具体的で分かりやすいだけではなく、自立に向けてある一定の難易度のある授業内容が求められることから、生徒の自発的な行動を待つ等の配慮の工夫が生徒の主体性を高めることにつながった。

3年生は、学年テーマを「伝え合う力を高めるための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」として、公開授業及び2回の研究授業を実施した。進路学習や現場実習を経て、高等部卒業後の生活を豊かにするために必要な力を明確化し、より具体化した授業づくりを行うことができた。

（２）分析表改善に向けて

作成当初、生活単元学習の授業改善に向けて考案された様式であったが、昨年度より生活単元学習以外の教科でも活用されるようになった経緯がある。今年度は、全クラスまたは全グループが新学習過程分析表を使用した公開授業を実施し事後協議を行うことで、分析表改善に向けて様々な角度から検討することができた。「国語を指導する際にも、新学習過程分析表の中身は主体的・対話的で深い学びの観点を確認するのに役立った。」「保健体育科の観点(表現)で考えていることを、新学習過程分析表の項目に照らして、主体的な学び、対話的な学び、深い学び、それぞれの視点で区別して整理し直すことが、少ししづらい点があったが、それぞれの項目について、確認することはできた。」「領域や合わせた指導では分類上は活用しやすいと感じた。」との意見があった。また、「生徒の特性や発達段階は、多種多様で個々の実態に応じた単元目標や本時の目標の設定、その関連性が重要であると考えられる。この点から、授業構成を捉えるうえで新学習過程分析表は、的を得ていて使いやすかった。」との意見の一方「学習指導略案は、指導計画や単元目標が省かれているため、児童生徒の学習経過が見えづらい部分があった。」等、各教科の授業研究で活用する際には今後も工夫が必要であると考えられる。

VI 寄宿舎の研究

テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」

1 はじめに

寄宿舎では「主体的・対話的で深い学び」という視点から、昨年度までの3年間、各ホームで様々な取組を行ってきた。昨年度については、相手との適切なコミュニケーション能力を身に付けるということを中心とした取組で、「自分で伝える力や相談する力を育てる」「コミュニケーション力・金銭管理力の向上に向けて」「助け合い共に学び、お互いを大切に思う気持ちを育む」というテーマで、ホームごとに取り組み、子どもたちは楽しみながら生き生きと活動することができた。

今年度は、それを毎日の生活の中で生かせることができるように、より深めた取組ができると思われたが、新型コロナウイルス感染症の影響で制限された生活の中、いわゆる3密を避ける寄宿舎生活が始まり、これまでのような人との関わり方ができない状況になった。

そのことを踏まえて、「新しい生活様式」での寄宿舎生活の中で、上記の視点を踏まえた取組は何ができるだろうか試行錯誤を重ね、各ホームの取組が始まった。その内容の共通するキーワードとして「つながり」という言葉が見えてくる。相手と一定の距離をとりつつコミュニケーションができる、感染予防をすることで相手を思いやる、新しいコミュニケーション様式を実践するなど、直接的・間接的に相手とのつながりを意識した取組である。

今後の寄宿舎生活あるいは卒業後も、このような「新しい生活様式」の中で日常生活を送ることが考えられる。その中で生かされる取組とはどんなものがあるか、その一つの取組としてここに報告をする。

2 各ホームの取組

(1) つばめホーム(男子)の取組

ア 舎生の実態

今年度は、小学部1名、中学部3名、高等部13名、計17名の舎生が生活を共にしている。全体的に基本的な生活習慣がおおむね自立している子どもは多いものの、介助が必要な支援度の高い子どももいる。自閉症やADHDなどの特性を有する子どものほか、てんかん発作があり体調面に配慮の必要な子ども、情緒面の過敏さから突発的な行動が表れやすい子ども、中学時代に不登校傾向のあった子どもなど、一人一人の実態は様々である。

基本的には明るく素直で優しい子どもたちではあるが、甘えたい、かまってほしいという依存的な関わりが強い子どもや、他者の気持ちの理解が困難な子ども、距離感が上手く取れない子ども、感情のコントロールが苦手な子どもなどがあるため、人との関わりが上手く表現できていない場面が見られる。そのため、些細なやりとりからの行き違いやちょっとしたふざけがきっかけとなり、トラブルに発展することが多かった。その反面、ホーム会や当番活動など全体またはグループ単位の自治活動面においては、昨年度からの取組が子どもたちの中に根付いており、お互いが目的に向かい協力し合う姿が見られている。

寄宿舎生活を通じ、なかよし会役員やホーム役員などを経験した子どもたちがしっかりとリーダーシップを発揮し、思いやりのある行動がホーム集団のまとまりにつながっている。そうしたことがホーム内での活動や行事を行う際などにも生かされていると感じる。

イ 研究課題

つばめホームでは、寄宿舎がホッとできる居場所になるような雰囲気づくりをホームの年間指導計画の目標とし、気持ちや思いに寄り添えるよう、子どもたちとの“密”な関わりを大切にしてきた。余暇時間には指導員も子どもも寄り合うようにテレビを見ながら語らい、カラオケで子どものストレス発散を見守ってきた。また、バスケットボールや鬼ごっこといった一緒に体を使った遊びを通して

子どもたちからのスキンシップを受け止めながら、豊かな関わりをもって相互理解と関係性を深めてきた。そして、ホーム会などの自治活動や行事、グループ学習の場面では、テレビ室で和気あいあいと身を寄せ合い、一体感を感じながら話題を共有し共感することで、時間をかけて仲間意識や思いやりを育むための指導・支援をしてきた。ホーム集団としてのまとまりは、それらの積み重ねで培ったものだが、今年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、寄宿舎においても「新しい生活様式」への転換が求められ、戸惑いと不安の中でのスタートとなった。

これまでホームにおいて当たり前のように行ってきたことの多くは、感染症対策で回避しなければならない3密（密閉、密集、密接）の要素に当てはまってしまう。ソーシャルディスタンスについても、人と人との距離を保たなければならない生活への移行は、大切にしてきた“密”な関わりとは逆行するものとなった。そのため、これまで培ってきた関係性が希薄化し、その中での仲間づくり、集団づくりが十分にできないのではないかという不安が大きかった。そうした中、命に関わることとして感染症を理解し、「新しい生活様式」へ対応しながら、これまで大切にしてきた仲間づくり、集団づくりの要素を損なわないための工夫と実践が、ホームの中心的な課題となった。そこで表1に示したように、今年度も子どもたちの実態に応じた様々な取組の中で、課題に関連し、コロナ禍でも子どもたちの関係性や集団づくりを継続しながら、工夫して行った取組についてまとめていきたい。

表1 生と性の支援部を中心とした主な取組（網掛けが本稿の実践内容として取り扱うもの）

取組名	実施時期	実施形態	対象
感染症予防・対策に関する取組	1学期～毎週（火）	ホーム会を活用	ホーム全体
（※ソーシャルディスタンスについて 6月24日に実施）			
FMスワロー	2学期～毎週（木）	放送機器を活用	ホーム全体
パーソナルスペースについて	10月27日（火）	ホーム会を活用	ホーム全体
命の誕生（妊娠・出産）	10月8日（木）	グループ学習	高3の5名
	10月29日（木）		高1・2から6名
上手なお金の使い方	10月5日（月）	グループ学習	高1～3から6名

ウ 実践内容

（ア）感染症予防・対策に関する取組

a 取組の背景

感染症リスクの高い寄宿舎の環境においては、生活する子どもたち一人一人が予防・対策への意識をもち、新しい生活様式へ対応する必要性があった。そこで1学期は、子どもたちの話し合いの場であるホーム会で（原則毎週火曜日 15時～20分程度）集中的に全体指導を行った。

b 取組内容と子どもたちの様子

5月～6月は新型コロナウイルス感染症について、その時点で分かっている情報（新聞報道などをもとに調べた世界や日本での情勢、感染者数、症状と重篤化の危険性、クラスターが発生した事例など）を紹介し、あわせて、マスクの着用や手洗い、換気、3密の回避、ソーシャルディスタンスなどの対策が重要であることを、自分と身近な人たちの命を守るために大切なこととして、繰り返し話してきた（写真1）。また、会話や咳、くしゃみでどれだけ飛沫が飛散するかの実験や、丁寧な手洗いの手順など、視覚的に理解を深められるよう、動画やパワーポ



写真1 ホーム会での全体指導



写真2 距離の計測

イントを交えて話をした。手洗いの手順について学習して以降、指先や親指まわり、手首をしっかりと洗う子どもの姿が見られた。『お話覚えてくれてたんやね、上手に洗ってるね。』と褒めると、照れくさそうに念入りに洗うことができていた。学習の直後には、内容を意識した行動が見られたが、時間が経つと忘れて

しまうことも多く、テレビ室に複数名集まっているのに、言葉を掛けるまでマスクの着用ができていない子どももあり、日常的にその都度指導する必要性が高かった。

それでも、マスクの着用や手洗いなどは毎日の約束事として行う必要のあることだけに、繰り返し指導していくことで習慣化していくことができたが、ソーシャルディスタンスについては課題が大きかった。上述した舎生の実態にもあるように、関わり方に課題がある子どもを中心に、指導員の目がないと、テレビ室などの共有スペースで密着するほどの距離に数人集まり、そこからトラブルになることもあった。そこでソーシャルディスタンスを学習会で扱い、自分と身近な人たちの命を守るための“思いやりの距離”と表現して話をした。

一般的には1～2m離れるとよいと言われているが、実際に測ってみると1mという距離は体感的にかなり近く、1mよりは1.5m程度離れた方が望ましいという気づきがあった(写真2)。2mとれば十分に距離がとれることも具体的に確認することができた。学習会を受けて、参加した指導員も『ちょっと近すぎないかな？思いやりの距離をとろうね。』と日常的に言葉掛けをしていくことで、意識的にテレビ室での座り位置を考える子どもも見られるようになった。

7月のホーム会の中で、自治担当の指導員から『みんな良くやってると思うけど、予防のために何が大切か言えるかな？』と改めて聞いたところ、子どもたちからマスク、手洗いと口々に答えが出た。『そうだね、ほかに気を付けることはないかな？』と意見を求めると、しばらく間をあけて『あ、ソーシャルディスタンス。』と答えた子どもがいた。学習会で指導員と一緒に距離を計測した子どもからの答えだった。

c 成果と課題

学習会を通じて日常生活の中で指導員が感染症について注意するのではなく、命に関わることというメッセージ性を込めた思いを伝え続けることで、マスクの着用や手洗い、手指消毒はスムーズに習慣化していった。また、これまでテレビ室に集まり行ってきたホーム会を今年度はソーシャルディスタンスを保つために、スペースの広い多目的ホールで行うようにした。自治活動ではホーム会を原則、毎週設定したことで、感染症対策のためお互いの距離を意識した配置で座ることが意識づけられた。

また、会の中でメッセージ性を込めた思いを伝え続けたことは、他者の声にしっかりと耳を傾け聞こうとする姿勢と、全体的な場面での協調性や思いやりをもった行動につながり、集団としてのまとまりを維持するうえでも大きな意味があったと感じる。

こういった環境づくりや働きかけが、子どもたちの土台となったことで、大きな環境の変化の中でも、感染症に対する予防・対策への意識の高さを示す行動となって表れたと思われる。

生活の場面でも、食堂への移動、登校時の整列・点呼の際、一定の距離を確保して並ぶために、廊下へ目印の名前入りシールを貼る工夫を年度当初から行っている。子どもたちが視覚的に距離を意識できる環境づくりを行ったことで、点呼係の子どもの呼び掛けで並ぶ様子についても、1学期の早い段階から距離を意識したうえでのまとまりのある行動が見られていた。しかし、余暇の場面では“密”な関わりを大切にしてきた過ごし方から、一定の距離を保った過ごし方への切り替えは容易でなく、指導員も遊びや雑談の輪の中に入って夢中になり、距離をとることをついおろそかにしてしまっていた。共有スペースにも廊下同様に、距離を保つための目印のテープを貼る工夫をしていたが効果は薄く、その都度具体的に座り位置を指定する方が効果的であった。

指導員間での言葉掛けや注意喚起への共通理解が徹底できていなかったこともあり、2学期以降も継続して感染症に関する情報や日頃の様子から気を付けた方がよいこと、意識が薄れてきている

場面などを話題にして取り上げるようにしている。

(イ) 思いやりの距離

a 取組の背景

1 学期を通して、余暇時間になると遊びの中でつつい距離が近くなりすぎ、トラブルに発展する場面が多く見られた。そのため、感染症対策としてのソーシャルディスタンスとは別に、人とのより良い関わり方としての距離感について、改めて指導する必要性がでてきた。そこで、ホーム全員を対象にパーソナルスペースについての学習会を行うこととした。

b 取組内容と子どもたちの様子

導入のソーシャルディスタンスの確認では、パワーポイントを見て子どもたちもすぐに答えることができていた。これはウイルスから身を守るために大切なことであり、相手と自分の命を守るための「思いやりの距離」であることも添えて話をした。

しかし、パーソナルスペースについては知らない子どももあり、以前に学習したことのある子どもに問いかけても『分からない。』と言う答えだった。ロールプレイでは指導員が不審者役にふんしたところで子どもたちから笑いも出たが、嫌な場合にははっきりと『やめて！』と伝えること、それ以上来ないで



写真3 思いやりの距離の学習の様子

ということを視覚的に相手に伝えられるように、手で相手をさえぎるようなジェスチャーも有効であることを話す真剣に聞いていた(写真3)。指導員の方から子どもたちの方へ寄っていき、『こんな風に近寄られ過ぎたり、たたいたり蹴ったり嫌なことをされるとどう?』と、数人の子どもに問うと、『嫌です!』『やめて!』という声が聞こえてきた。相手のスペースを大切にしたい関わりをしないとどんな危険性があるのかについては、子どもたちのトラブルで実際にあったようなちょっかいや行き過ぎた言動を例に挙げ、相手が嫌だと感じたらそれはいじめであることを説明した。

まとめでは、友達や将来恋人ができたとき、また仕事仲間など、様々な人と上手に付き合っていくためには信頼関係が大切だということと、この人は私のことを大事にしてくれる、この人といるとなれば落ち着く、嫌なことをしてこないから楽しいと感じてもらえることを意識し、お互いのスペースに入ったとしても、お互いに安心できる関係がつくれるように日頃から気を付けようと話した。

c 成果と課題

この取組はソーシャルディスタンスと、パーソナルスペースのどちらも、意識して人と接することが大切だという学習と同時に、子どもたちが客観的に自分を振り返り、日頃の指導を充実させるための場にもなった。また、距離をとることだけの指導に留まらず、いつかこの脅威が終わりを迎えたときには、好きな人や大切な人の側で寄り添って過ごしてほしい、家族や友達ともスキンシップを取りながら、すてきな関わり方ができるようになってほしいという、大人たちからのメッセージを込めた取組であったことも重要な点だと感じる。

子どもたちの関係性が深まっていく中、徐々にトラブルも少なく、落ち着いた状態になっている。トラブルがあった場合には、お互いがどんな関わり方をして、どうすればトラブルなく過ごせるか、それぞれの付き合い方と距離のとり方を、丁寧に話を聞きながら一緒に考え、必ず仲直りし解決できるよう繰り返し支援してきた。

以前は会話のやり取りが上手いかず、つい手が出てしまいトラブルに発展してしまうことが多かったA(高1)とB(高2)だったが、2学期には一緒に誘い合って学習室で静かに距離をとり

ながら、ゲームを楽しめるようになってきた。また、楽しくゲームをしているかと思うと、ちょっとした行き違いや思い込みで突然パニックになることがあったC（高3）、D（中3）、E（高1）も、2学期後半からはEが、話し掛け方や言い方に気を付けて会話をするようになったことで、落ち着いて仲良く遊べるようになっていく。友達と仲良くなる中で、付き合い方と関わり方を理解し、スペースの確保とトラブルの減少につながったところはあるが、逆に仲が深まったことで、距離が近くなり過ぎる子どももでてくる。全体と個別支援を平行していくことが重要なため、ソーシャルディスタンス、パーソナルスペースともに、お互いに相手を大切に、思いやるために必要な距離として、今後も継続した支援を行ってきたい。

（ウ）FMスワローの取組（放送を使った投稿形式の交流）

a 取組の背景

つばめホームでは登校前の整列・点呼の際など、子どもたち全員が集う場面で、日頃見かけた子どもの良いところや感心した出来事の紹介を習慣的に行ってきた。積極的に子どもたちの良いところを褒め、自信につなげるねらいで取り組んできた。この取組を通じて、短時間でも日常的に全員が集う場面を大切に、そこで仲間のエピソードをホーム全体で共有することが、仲間意識や集団としてのまとまりへつながることを実感している。しかし、今年度は感染症対策のため、上記のような集いの機会や、エピソードの紹介がやや希薄になってきていることが、1学期の反省点として上がってきた。反省を基に、代替方法として放送機器を使ってラジオ風にエピソードの紹介などができないだろうかというアイディアが浮かび、2学期から取り組むことにした。

b 取組内容と子どもたちの様子

取組の名称は、ホーム名にちなんで「FMスワロー」とし、子どもたちからも、放送で取り上げてほしい話題を楽しみながら提供してもらえよう、投稿用紙と回収箱を設置した。放送は週1回、指導員が輪番制でラジオパーソナリティーとなり、舎務室からホームへ向けて、木曜日の19時20分から30分までの10分間程度行うこととした。事前にホーム会で「FMスワロー」の取組を始めることを周知すると、さっそく投稿用紙（写真4）と回収箱（写真5）の設置箇所に数名の子どもが集まり、和気あいあいとリクエストを投稿する姿が見られた。好きな音楽のリクエストにも応じることにした

ため、子どもたちからは曲名を書いた投稿が多かったが、学校で作業を頑張ったなど、自分の頑張りを書いた投稿も見られた。初めての放送が流れた時には、物珍しさで歓喜する子ども、自分のことを紹介されて照れくさそうな表情の子ども、リクエストした曲が流れて得意気な子どもなど、子どもたちの様々な反応を見ることができた。

ある時の放送では、誕生日を迎えた指導員に対して、お祝いのメッセージを書いた子どもの投稿が紹介され、翌週には、指導員から感謝の言葉が紹介された。好きな友達にまつわる投稿があった後には、そういう相談もしていいのだなと感じた子どもが、異性との付き合い方に関する相談の投稿をすることがあった。放送の直前になって、『あ、今日はFMスワローの日やね』と駆け込むように投稿する姿や、どの先生が今日のパーソナリティーだろうかという指導員の動きを目で追う様子なども見られるようになった。

また、F（高3）は自宅から2週間の現場実習となることから、『FMスワローが聞けないよ〜。』

写真4 投稿用紙



写真5 投稿回収箱

と嘆きの言葉も聞かれ、回を重ねるごとに子どもたちにとって週末の楽しみになっていることがうかがえた。2学期の終業式が木曜日だったため、『FMスワローを締めくくりの週に聞くことができない。』と嘆く声が子どもたちから上がった。そのため、2学期最後の放送を前日の水曜日に設け、クリスマスソングのスタートとともに、指導員から頑張ってくれた子どもたちへ『ありがとう』の感謝の言葉で放送が締めくくられた。

c 成果と課題

「FMスワロー」は仲間のエピソードをホーム全体で共有する場を充実させるために取り組んできた。いざ始まってみると子どもたちが楽しむだけの実践ではなく、指導員にとっても、生活での対話だけでは知ることができなかった姿や、子どもたちの内面に隠れた素直さや優しさ、頑張りや心の豊かさを知ることができる貴重な発見の場になっていた。馬が好きなFは、“馬大好き”というラジオネームで、指導員に伝わるアピールをこっそりしていた。『みんなと一緒に、お買い物をしに行きたいです。』といった投稿を受け、コロナ禍で全く舎外学習ができていなかったこともあり、密を避けた買い物学習を計画し実現させた。また“ベロ痛嫌い人”や“たたみでくつろぐ”といった独特でユニークなラジオネームは、『これはだれやろね〜?』『この字は…』と、指導員間でも子どもの話題が尽きることはなかった。G(高3)が、いつの間にか自分で投稿用紙を手に取り、G R e e e e Nの“歩み”をリクエストしていたことには、新鮮さとうれしさと意外な選曲にも驚きを感じることができた。子どもたちにとっては、投稿を通じて指導員とも一緒に交流できることが楽しみとなり、友達の投稿や指導員のコメントによるやり取りをホーム全体で共有できたことが日常生活での言動の変化となっており、仲間を認め思いやる姿にもつながったと感じる。

偏食のため食べられる物が限られているH(中3)が、大好きでたくさん食べられるカレーライスが夕食のメニューとして出された日があった。おかわりの量が少なかったため、みんなに行き渡らないことを察した高等部生を中心に、『Hくんにおかわりいれちゃりやー。』と言う声があちこちから上がった。Hは久しぶりに満足いくまで夕食を楽しむことができ、そのやり取りを見ていた指導員としても感動的な出来事だった。その週の放送では、『大好きなカレーを全部食べて、おかわりもできました。美味しかったです。ありがとう。』と、Hの気持ちを代弁する形で指導員からお礼のメッセージが紹介された。それを聞いた子どもたちはとても満足気で優しい笑顔にあふれていた。また、自分たちで洗濯をしている自立洗濯グループに関して、指導員から応援のメッセージがあった時をきっかけに、洗濯や干すタイミングを積極的にグループの仲間へ知らせるようになった子どももおり、直接話をするのとはまた違った効果があるように思えた。

指導員側は、輪番制でパーソナリティーが回ってくるため自分が務める番ともなると、楽しみでありながら、緊張とプレッシャーを感じる1週間が始まる。放送日までに集まった投稿用紙に目を通し、それに対するコメントや、10分間の放送時間をどう展開させていくか構成を練る。そして、子どもからの声にどう答えるのか、投稿内容から日頃知らなかった子どもたちの興味・関心に触れ、新たな気付きや発見をどのように表現し、ホーム全体で共有していくか、思いを巡らせながら本番に挑む。新しい形の取組として、指導員全員が継続的に直接関われる取組だったことも、子どもたちの間だけにとどまらず、指導員と子どもたちとの関係を同時に深めることにつながり、ホーム全体の一体感やまとまりとなって表れている。当初の予想よりも、遥かに大きな成果を出せた取組だったが、継続が長期化してくるにつれ、投稿する子どもがある程度限定される、内容が曲のリクエストに偏った週があるといった課題も出てきた。指導員側も後半には、子どもへの応援メッセージや褒める内容、良いこと紹介の投稿数が減ってきていたため、褒める機会の充実というねらいを考えると、一人一人が投稿にも積極的に参加する意識をもち続けなければならない。継続的な良い実践として、今後も投稿数の少ない子どもたちを巻き込みながら、ホームの子ども一人一人をどう取り上げていくか、工夫を凝らし取り組んでいく必要がある。

エ まとめ

今年度はコロナ禍での生活の変化に対応しながら、子どもたちの関係性や集団づくりを継続できるように工夫して実践してきた。感染症予防・対策に関する取組や距離感の全体指導では、できていない人だけ、トラブルになりやすい人だけというように、一人だけのこととして扱うのではなく、日常的に子どもたちの気になる様子を捉えて話題にし、ホーム全体のこととして受け止めて扱うようにしてきた。それによって、一人一人の自覚を促すことができ、個別の指導・支援と関連をもたせて、トラブルが起きても丁寧に解決することを重ねていくことで、友達同士の相互理解を深めることができた。そうした日常生活での変化やトラブルの減少と相まって、集団としてのまとまりも少しずつ育まれている。

こうした取組を通じての集団や個々の変化を振り返ると、単純な注意喚起だけではなく、例えば感染症に関しては「命に関わること」「自分や友達、家族、みんなの命を守るためにとても大切なこと」というメッセージを、距離感の指導では「いつか感染症の脅威が収まったときには、大好きな人と安心して親密な関わりができるようになってほしい」というメッセージを込めて取組を展開し、日常生活でも対話的に伝え続けてきたことが、とても重要であったと思われる。「FMスワロー」の取組も、元は指導員からの応援のメッセージを伝える機会を充実させたいという思いからスタートした。ホーム全体で一人一人の投稿＝メッセージを共有することで、これまでと違った子どもたちの新鮮な姿が見られ、新しい対話の形として定着することができた。今年度は関係性の希薄化や仲間づくり、集団づくりへの影響が懸念されたが、その分、これまで以上にメッセージ性を意識して取組を工夫し継続してきたことで、ホームが大切にしてきた“密”な関わりを、形を変えて実践することができたのではないだろうか。まだまだ終わりが見えない状況だけに、今後も取組を工夫、改善していくことで、より良い仲間づくりや集団づくりを心掛けていきたい。

(2) はとホーム（男子）の取組

ア 舎生の実態

今年度のはとホームは、小学部1年生をはじめ5名が新たに入舎し、小学部2名、中学部3名、高等部13名の計18名で生活している。舎室は1人から3人部屋で、自室以外の舎室へは出入りはしないようにして、テレビ室と学習室の2部屋を共有のスペースとして利用している。

子どもたちは、高3生のホーム役員を中心に、小学部から高等部まで学年や学部を越えて一緒に遊び、当番活動や係活動も助け合いながら過ごしている。また、落ち込んでいる子どもがいれば言葉かけ、励ましたり遊びに誘って気分転換したりと心温まる場面も見られる。

新型コロナウイルス感染症対策のため、寄宿舎という集団生活の場でも生活様式が大きく変わり、行動制限をする場面が増えてきた。体を動かすことが好きな子どもたちは、バスケットや鬼ごっこなど友達との距離が近くなる遊びはせず、代わりとしてサッカーやソフトボールをしている。また、人との関わりが苦手な子どもは、より一人で過ごす時間も増えている。そういった状況の中でも、寄宿舎生活を充実させながら社会性や思いやりを育むため、余暇時間の過ごし方についての支援を行った。

イ 研究課題

一人や静かな場所が好きな子どもにとっては、その時間が増えたことで過ごしやすくなった場面もある。しかし、卒業後は、新しい場所で今まで会ったことがない人と関わる場面や、突然のトラブルや予定変更など様々なケースが予想される。そのため、変化に対応できる力や自分の意思を他者に伝える力を身に付けることが必要であると考える。

はとホームでは、人とのコミュニケーションや急な予定の変更が苦手な、毎日同じルーティーンで過ごすことが多いAとBの2名の子どもを対象に、「余暇時間の過ごし方」をテーマに以下の4点をねらいとして取り組んでいくこととした。

- ① 余暇時間の過ごし方の選択肢が増える。
- ② 余暇時間の過ごし方を自発的に決めることができる。
- ③ 余暇時間の遊びを通して、他者と関係性が広がる。

④ 卒業後の休日や仕事の休憩時間の過ごし方の選択肢が増える。

表1 AとBの実態

A (中3)	・自閉症スペクトラム。今年度より入舎。バドミントンクラブに所属。 ・基本的生活習慣は自立している。 ・1日の生活では、スケジュール通りに進まないとな納得しないことが多い。 ・はとホームの舎生と遊んだり話したりすることはほとんどない。 ・引っ込み思案で自分から要求することが苦手。声を掛けてもらうことを待つことが多い。 ・自由時間は、指定の場所に座ってテレビを見ることがほとんどである。 ・学習時間は、自室で何もしないでベッドの上で座っていることが多い。 ・遊びに誘っても『いい!!』と強く拒絶する。 ・学校の休み時間は、主に読書をして過ごしている。 ・自宅では、ペットの猫や犬との散歩や遊び、ゲームやユーチューブを見て過ごすことが多い。 ・利用しているデイサービスでは、制作活動や課題プリントをしている。
B (高1)	・自閉症スペクトラム。中2より入舎。 ・基本的生活習慣は、ほぼ自立している。 ・こだわりが強いため、他児が読んでいる本を奪い取って本棚に片付ける、日程表や献立表を予定が終わる前から剥がそうとする。 ・自由時間は、DVD鑑賞もしくは、音楽を聴いて踊ることが多い。 ・学習時間は、時間をもて余しており、部屋から出て廊下の行き来を繰り返す。 ・学校の休み時間は、ユーチューブで映画や音楽鑑賞をしている。教員に聴きたい曲名を言いに来ることはあるが、自分から進んで友達と遊ぶことはない。 ・自宅では、ドライブ (コンビニ・マクドナルド) かスマホ・タブレットをして過ごす。

ウ 実践内容

(ア) 学習時間の取組

毎日 19:00～19:30 は、学習時間として自分の部屋で過ごす時間となっている。ゲームやテレビ、スマホなどに依存傾向がある子どもも多く、自由時間に言葉を掛けても聞こうとしないことが多い。そのため、学習時間は、ゲームやテレビ、スマホなどは休憩とし、宿題や翌日の準備、洗濯物の片付け、同室の友達や指導員と話す時間などとしている。しかし、Aは何もしないで布団の上でずっと座っており、Bは、テレビ室の本棚や洗濯機の様子が気になり、何度もテレビ室と洗濯場を行き来して、時間をもて余している様子が見られた。AとBへ『何したい?』『何する?』と聞いても『いや!』と強く拒絶してしまう。学習時間の過ごし方を充実させるために、指導員間の引継ぎで以下の支援方法を決め、統一した支援を行った。

a 遊び道具リスト

AとBの実態から、写真付きの遊び道具リスト (写真1) を作成し、約 20 種類の中から自分で選択できるように支援した。そうすることで、AとBは自分の好きなことを選んで遊ぶことができた。また、子どもの好みを指導員が把握できた。Aは、何もしたくないというだけでなく、『何をしたら良いのか分からない。』『だめと言われたらどうしよう。』という不安な気持ちもあることが分かった。

Bは、『パズルする。』と毎回パズルを選ぶ。パズルを選択肢から外して選ぶよう支援すると、塗り絵など別の物を選択するが、気持ちが落ち着かない様子が見られた。そのため、無理強いせず、まずは、洗濯や本棚の片付けを気にせずに、パズルを部屋ですてゆったり過ごすことを優先し支援

していった。



写真1 遊び道具リスト

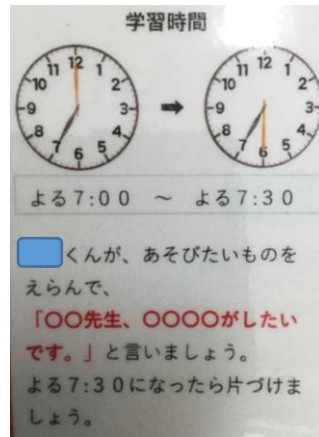


写真2 言い方カード



写真3 学習時間の様子①パズル

b 言い方カード

遊び道具リストから選んだあと、言い方カードを見て『〇〇先生、〇〇がしたいです。』と始めに相手の名前を呼ぶことを意識して言えるように支援した。また、終わりの見通しが立つように時計のイラストと文字で確認できるようにした（写真2）。そして、言い方カードを繰り返し見ることで定着するまで一緒に確認を行った。

1か月後には、Aは、19:30になると、『〇〇先生、終わりました。』と遊んでいた物を返しにくるようになった。Bは、始めは洗濯の仕上がり状況やテレビ室・学習室の散らかり状況が気になり、何度も部屋から出て落ち着かないことが多かったが、終わりの時間の見通しが立つと気持ちの切り替えができ、集中して遊ぶ姿も見られるようになった。

c 似顔絵

相手と何度も目を合わせることで、コミュニケーション能力の向上を図ること、描いた絵をみんなに見てもらい、これまで関わりのなかった子どもたちとのつながりをつくることを目的に、指導員9名の似顔絵を描いてもらった。事前に頼んでいたため、快く描いてくれた。

似顔絵を描くために指導員を何度も見ることで、視線を合わせる機会が自然に増えて話がしやすい環境ができた。その後も、しっかり目を見て話をしてくれる場面が増えた。また、『次は〇〇先生。』と次に描く指導員を自分で考えて伝えることができた。似顔絵を作成しながら話をする中で、今まで話をしたことがない友達の名前も全員知っており、周りの子どものことをよく見ていることも分かった。

描いた絵を飾って、たくさんの友達や指導員に褒めてもらうことで自信につながり、自己肯定感が生まれているのではないかなと思う。



写真4 学習時間の様子②似顔絵作成中



写真5 Aが描いた似顔絵



写真6 洗濯当番中のB

d 友達からの言葉掛け

友達から『洗濯物できたよ。』『ダンスするよ。』など言葉を掛けてもらったり、自分から話し掛ける機会をつくったりすることで、友達との関わりが広がっていきけるよう支援した。日常的に繰り返していくことで習慣となり、抵抗も和らぎ、自然に友達と対話する機会となっている。

エ 成果と課題

はとホームの年間支援目標は、「輝かせよう、大切な自分、大切な友達」～はとホームで活躍できる場面を一つつくろう～である。遊びや当番活動を通して自分のこと・相手のことを知ること。活躍できる場面を一つ設定し、周りから褒められ認められることで、寄宿舎での集団生活が充実したものになると思う。

Aは、『〇〇先生、〇〇がしたいです。』と相手の名前を意識することで、学習時間以外でも『〇〇先生、おはようございます。』『〇〇先生、掃除終わりました。』など、声を掛けてくれるのを待つのではなく、自分から言える場面が増えている。以前は自由時間に外に出るのを嫌がっていたが、今ではすすんで友達・指導員と散歩やバドミントンをするようになり、得意なけん玉で『すごい。うまい。』と褒められ喜ぶ姿も見られるようになった。また、指導員と学校ですれ違うとAの方から笑顔で手を振ってくれるようになった。

Bは、DVD鑑賞やゲームがほとんどだったが、夕方の自由時間は散歩、学習時間はパズル、夜の自由時間はDVD鑑賞かゲームのルーティーンに変わってきている。洗濯当番の日には、同じグループメンバーの洗濯をして、終わる度に『洗濯できました。』と一人一人に声を掛けるように支援を継続している。

ねらい④の「卒業後の休日や仕事の休憩時間の過ごし方の選択肢が増える。」に関しては、まだまだ長期的な支援が必要である。指導員としては、子どもの気持ちに寄り添いながら、表面的な言動のみを受け止めるのではなく、子ども一人一人の背景にあるものや内面にあるものに目を向けていきたい。

一人自分のペースで過ごす時間を大切にすることを前提に、特定の友達や指導員が関わるのではなく、他のホームの友達や指導員・学校の教員も含めて、できるだけたくさんの人と少しでも関わりをもつ機会を増やしていくこと、それが社会に出た後の日々の生活が充実し、また、急な予定の変更やトラブルへの抵抗が和らぐことへもつながっていくのではないかと考える。

今後も、寄宿舎という集団生活の場を通して、余暇時間だけでなく行事や当番活動、また日々の生活の中で人とのつながりを広げていけるように支援していきたい。



写真7 自由時間に2人で音楽鑑賞中



写真8 けん玉披露中のA



写真9 散歩中のB

(3) すももホーム（女子）の取組

ア 舎生の実態

今年度すももホームは、新入舎生1名を迎え、舎生13名（途中退舎1名を含む）、指導員8名でスタートした。

休校明けすぐの新型コロナウイルス感染症予防対策は、集団生活の寄宿舎でいかに「新しい生活様式」を取り入れていけるか試行錯誤であった。日頃、友達や指導員と楽しく会話をしたり、遊んだり

する“密”なコミュニケーションを通して成長し合っている子どもにとって、感染予防するために様々な行動を制限される生活は厳しいものとなった。

イ 研究課題

しばらく続くであろう新しい生活様式を取り入れた寄宿舎生活で、より良い仲間づくりにしていくために、自分や周りの人も感染し合わない思いやりの気持ちを育てる取組にしたいと考えた。

そこで、感染予防のために子ども自身が主体的に取り組み、毎日の習慣になるために、実態に応じた手洗い・うがい講座を行うこととした。子どもたちの手洗い・うがいが習慣化することでコロナに対する感染予防となると考えた。一人一人が予防することで、周りの人に対する思いやりにつながることを理解を深めるとともに、お互いを大切にする仲間づくりをしたいと考え、子ども同士の話し合いの場をもった。

ウ 実践事例

(ア) 手洗い・うがい講座

a 取組の内容

講座の対象は、舎生 12 名である。講座を始めるにあたって、学年や子ども同士の相性に配慮し、意見や質問が自然と出し合えるような少人数のグループに分けた。“正しい手洗い・うがい”について一緒に考えるとともに、周りに配慮することについても考えてもらった。指導員側の留意点として、一方的な働きかけではなく、対話的な学びにつながるようパワーポイントの作成や子どもたちが主体的に参加できるように○×カードの準備を行った。また、講座後は子どもたちが日々意識して取り組んで行えるように、洗面所とトイレにイラストや写真を掲示した。指導員も子どもたちの手洗いの様子や変化を記録するため、各階に「気付いたことノート」を用意し、記入するようにした。

手洗い・うがい講座の内容については以下のとおりである（表 1、2）。

表 1 手洗い講座

手洗い講座「手洗いしてる？」	
内容	子どもたちの様子
①手洗い講座を始める前に、子どもたちに約束事として、『この講座はみんなの話を聞きたいと思っています。だから自分の話ばかりではなく、友達の話も否定せず、聞いてください。』と伝えた。	・一つのグループでは発言できる子どもばかりが話してしまい、みんなの前で発言できない子どもが黙ってしまうことがあった。指導員がその子どもに意見を求めても、押し黙った状態であった。
②導入として、子どもたちに『なぜ手洗いが大切なのか。』を投げかける。 『私たちは手を使って生活することが多い。手はいろいろな場所に触れ、そこにはたくさんのウイルスたちがいて、私たちはウイルスたちを触ってしまっている。その手で目や鼻を触ったり、食事をすることで自分の体の中にウイルスが入ってきてしまう。そこで手洗いすることでコロナウイルスだけでなく、他の病気についても自分の体の中に入ってくることを防ぐことができるので、手洗いが大切である。』と話す。	・『なぜ手洗いが大切なのか…』の投げかけに、『コロナがあるき、手洗いが大事。』と答える子どもが多かった。 ・手にウイルスがついたり、口から入ってくることについては『そうながや！知らなかった！』という反応の子どもがほとんどだった。目や口からウイルスが入ってくるということについては、想像もしてなかったという感じだった。

③手洗いについてクイズを出し、○×で答えてもらう。 ④クイズの答え合わせをしながら、手洗いはなぜ大切なのかを説明する。 ⑤『どんな時に手を洗ったらいい?』という質問をし、手洗いが必要な場面を説明する。 ⑥手洗いをする時に、どのような手順でするのかを“あわあわてあらいのうた”を参考に、一緒に練習する。 ⑦洗面所へ移動し、手洗いの実践をする(図1)。 ⑧まとめとして、今回手洗い講座をしてみてどう感じたか、今まで自分の手洗いと違っていたかの振り返りを行う。	・『どんな時に手を洗ったらいい?』という質問の「どんな時」の意味が分からない子どももいた。指導員が日課に沿って場面を出していくと答えることができていた。 ・“あわあわてあらいのうた”は初めて歌を聞く子どもが多かったが、指導員が動画に合わせて一緒に手を動かすと見よう見まねでできていた。 ・まとめでは、『今までの自分の手洗いと違っていた。』という声が聞かれた。
---	---



図1 手洗いの手順

表2 うがい講座

うがい講座「うがいしてる?」	
内容	子どもたちの様子
①導入として、手洗いだけでなく、『なぜうがいが必要なの?』と子どもたちに投げかける。 ②『こんなうがいをしていませんか?』という質問をし、子どもたちには○×で答えてもらう。 ③うがいの効果について『うがいをすることで鼻や口から入ったウイルスを外へ出し、病気を防ぐことができる。さらに喉などが痛い場合でも、うがいをする事でひどくならないようにできる。』ということを話す。	・『こんなうがいをしていませんか?』という質問は普段子どもたちがしているうがいを例に出したが、ばれたかといった様子で照れ笑いする子どももいた。

④正しいうがいの手順について話す。 うがいの前に手洗いをする→ブクブクうがい一回→ガラガラうがい二回 ⑤『正しいうがいをしても飲み込んでしまったらどうなる?』やうがいのときに気を付けることや吐き出す高さについて話す(図2)。 ⑥自分がうがいをしたときに周りにどれくらい水が散っているか、分かりやすいように色水を使い、高さを変えて実験を行う。 ⑦洗面所で、うがいの練習をする。 ⑧まとめとして、うがい講座をしてみてどうだったか、今までの自分のうがいはどうだったかの振り返りを行う。 図2 うがいのときに気を付けることの パワーポイント	・正しいうがいの手順は、最初はブクブクうがいからだ知らない子どもが多く、『初めて知った。』という声が聞かれた。 ・色水を使つての実験では『こんなに散るがや。』と驚く子どもが多かった。 ・洗面所でのうがいの練習では、手順通りにうがいができ、高さに気を付けて上手にできていた。 ・吐き出す高さについては、低すぎる子どももいた。
--	--

(イ) 手洗い・うがい講座振り返りの会

講座後、手洗い・うがい講座についての振り返りの会を行った。子どもたちは、全体的にうがいよりも手洗い講座が印象に残っている様子だった。特に子どもたちから反響が大きかったのは、“あわあわてあらいのうた”だった。『覚えやすかった。』や『楽しかった。』といった言葉が聞かれ、楽しく手洗いの手順を学べたようだった。しかし、『なぜ手洗いやうがいは大事なの?』という質問には『ウイルスなどが付いているから。』と話す子どもは何人かいたが、その手で人や物に触ること、感染を広げるかもしれないということの理解には至らなかった。うがい講座についても聞くと『(うがいをする)高さを意識し始めた。』『今まで自分の吐き出す高さが低すぎたと思った。』など自分のうがいを振り返る言葉が聞かれた。他にも『周りの友達の様子や良いところはどんなところだったと思う?』と聞くと、『〇〇ちゃんは手洗いやうがいが上手。』や『みんながんばっちゃう。』、『自分のことしか見てなかった。今度友達の手洗い、うがいも見てみる。』など友達のことも意識した意見もあった。

振り返り会のまとめとして、マスクについても少し触れた。マスクは付けているだけでは大丈夫ではないこと、マスクをしていても大きい声を出すとマスクの隙間からウイルスが出ていることを話した。最後に手洗い・うがいの手順を子どもたちと指導員で復習した後、『手洗い・うがいは一人一人が正しい方法ですることみなさんの命を守ることにつながる。だから自分ができていても周りの友達が忘れていたら声を掛けてあげてほしい。これからも続けていこう。』と子どもたち一人一人に再度伝えた。

a 成果と課題

手洗い・うがい講座ではパワーポイントや実験を合わせた学習会をした。成果として、子どもたちは分かりやすく主体的に取り組めていたように感じた。手を洗う前にうがいをする子どもは少なくなり、洗面所に手洗いの手順を示した掲示物を見ながら、丁寧に手洗いをする姿が多く見られるようになった。また、自分の手洗いが途中で不十分だと気付く、再度洗い直すこともできるようになり、ごみ箱を触った後も手を洗うことを意識できるようになってきた。

特に今まで介助がないと手洗いが難しかった子どもが手洗いを楽しめる工夫をしたことで、蛇口の下にきちんと手をもってきて洗えるようになったことは成果である。その後、指導員が洗う箇所を教え洗う動作をし、一緒に10秒数えながら洗い流すことで上手にできるようになってきた。

そしてうがい講座ではうがいをする高さを実験したことで、自分の吐き出した水が予想以上に周りに散ることに驚き、講座終了後もうがいをする高さに気を付けている姿が見られている。

課題としては、時間が経つにつれて洗う箇所や手を洗う場面が多いということもあり、丁寧に欠けたり、うがいについても指導員が見ていないと簡単に終わらせたりしているところがある。そこで、できるだけ意識付けするように、朝の登校前に全体に向けて手洗い・うがいの大切さについて呼び掛けをしてきた。今後も手洗い・うがいの大切さを伝え、継続できるように支援していきたい。

ウ まとめ

今回は、コロナ感染予防のための新しい生活様式を踏まえ、子どもたち自身が寄宿舍の中で主体的に実践していけるきっかけとなるよう、手洗い・うがいを丁寧にする講座の一つを開き、少しずつ日々の習慣となっている。講座のグループ分けについては、手洗い講座の際に意見が出にくい様子があり、うがい講座ではメンバー構成に配慮し、グループを再度見直した。お互いの意見を否定しない会の雰囲気をつくったことで、日頃はあまり会話が見られない子ども同士が話す新たな場面も見られ、対話をする中で、周りの人を意識し、自分が気を付けることが相手に対する思いやりであることを理解する機会になったと思う。

今後も友達や指導員との適度な距離感をもった関わり方や仲間づくりのために、引き続き様々な工夫した支援が必要だと考える。ホーム会や登校前の時間を利用して、子どもたちには、お風呂や食事の場面の具体的な行動を示し、自分を守ることが相手を守ることにつながることや、コロナ禍の今だからこそ一人一人がお互いを大切に思い、行動していくことが大切であることを伝えていきたい。

また、すももホームの子どもたちは、コミュニケーションのとり方として、日頃スキンシップを求めていることが多い。指導員側の工夫として距離感を保ちながらも、よりゆっくりと時間をとり、子どもたちの話を聞き、気持ちに寄り添う支援が必要となる。余暇の時間についても一人一人が楽しむことができるよう過ごし方を工夫していきたい。

これからも「新しい生活様式」の中で、子どもたちの気持ちに寄り添った言葉掛けや支援をさらに工夫し、お互いを大切にする仲間づくりをしていきたい。

3 おわりに

今年度も昨年度に引き続き「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」を研究テーマとし、それぞれのホームが課題を挙げて取り組んだ。

つばめホームは、「新しい生活様式」の中で今までと違った集団づくり仲間づくりが必要となり取り組んだ事例を報告している。1学期にホーム会で集中的に行った感染予防・対策についての取組では、命に関わることであるという強いメッセージを込めて子どもたちに伝えることで、感染症対策の徹底につながっている。年間を通して指導した、人との距離の取り方についての取組は、お互いに相手を大切にし思いやるために必要な距離であることを伝え、仲間を大切にする気持ちにつなげている。そして舎内放送を使った「FMスワロー」の取組は、寄宿舍生活で友達や指導員との関係を深める新しい形とな

り、子どもたちの楽しみとなって根付いている。

はとホームは、「新しい生活様式」の中でも、社会性や思いやりの気持ちを育てようと取り組んだ余暇時間の過ごし方について報告している。自閉症スペクトラムの2名の子どもへの支援として、写真付きの遊び道具リストを作成し活用したことで、自分の好きなことを選んで遊ぶことができる力につながった。遊びの幅が広がることで友達との関わりも増え、似顔絵作りなど輝ける場を経験したことで、社会性も育ってきている。

すももホームは、「新しい生活様式」の中で、お互いを大切にする仲間づくりを目指し取り組んだ「手洗い・うがい講座」について報告している。手洗い・うがいの徹底だけではなく、それが周りの人を大切にする、思いやりにつながることも合わせて伝え支援している。それによって手洗い・うがいは、自分だけでなく周りの人を守ることにつながることが理解できるようになっていった。また、歌を取り入れた手洗いの取組は、生活の中で楽しみながら感染症対策ができる大きなきっかけとなった。

3 ホームの実践で共通しているのは、「新しい生活様式」の中で、感染症対策だけにとどまらず、友達との「関わり」や「つながり」を大切にしたい仲間づくりを大きな柱とし支援していることである。それによって、自分で考えたり（主体的）、友達と言葉を掛け合ったり（対話的）、寄宿舍以外の場所でも感染症対策を心掛けたり（深い学び）する力につながっている。

今年度の実践を通して考えると、寄宿舍は楽しく生活できることを大切にしている「生活の場」である。そのため、日頃のコミュニケーションとして友達との距離が近くなってしまう場面が多いことが課題である。

新型コロナウイルス感染症対策は、今後も続くと思われるが、友達を思いやる気持ちを育てながらも距離感に注意し、安心して生活できる寄宿舍にしていきたい。そのためには、子どもたち一人一人の「つながり」を大切にする視点を持ち、「新しい生活様式」に合ったコミュニケーション手段を用いて支援していくことが必要であると考えます。

VII 本年度の研究のまとめ

本年度は、「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」をテーマに取り組んだ2期目の1年目（1年次／3年計画）となる。

本年度はまず、研究部を中心に学習過程分析表の改善と新しい学習指導略案の導入に取り組んだ。

昨年度の実践集録で出された意見をもとに、学習過程分析表の「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の各項目について見直すとともに、学習過程分析表から新しい「学習指導略案」に、授業後の分析・評価に活用できるよう「注目してほしい学習活動」「注目してほしい児童生徒の評価」の欄を移した。

6月に開催した第1回校内研修会では、外部講師である高知県立大学石山貴章教授より、どのように学習過程分析表を活用するのか、また研究・公開授業の事後協議の在り方について指導・助言をいただいた。これを受けて全校で統一した事後協議の進め方を設定し、各学部の研究・公開授業後に実施した。

こうした取組を通して、学習過程分析表にある「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の各項目が、授業作りや改善の際に役立ったとの報告が各学部より出された。しかし、各項目の改善はもちろんのこと、特に「深い学び」の視点をどのように授業者がとらえ学習活動を設定すべきか、また発達年齢や支援度との関連からどのように整理すべきか等について引き続き検討していく必要があるとの意見が出た。

事後協議では児童生徒の評価について、「新・学習過程分析表(2020)」と新しい「学習指導略案」と連動させ活用しながら確認することができたとの意見があった。

令和2年度の取組の成果としては、「学習過程分析表(2019)」の項目及び内容を見直すことで、「新・学習過程分析表(2020)」を完成させたことにより、シンプルで分かりやすく支援度の低い児童生徒から支援度の高い児童生徒まで幅広く対応できるようになった。また、「新・学習過程分析表(2020)」では、「生活単元学習」だけではなく、「教科」「作業学習」においても活用することができることが確認された。

本年度、導入した「学習指導略案」（本校独自の様式）における、児童生徒の変容を見る「注目してほしい児童生徒の評価」（児童生徒の変容）から、授業そのものが「主体的・対話的で深い学び」の授業となっていたのかを検証していくことができるようになった。「学習指導略案」に「新学習指導要領」との関連の項目や「注目してほしい学習活動」を加えたことにより、第三者や初心者が見ても授業の内容が分かりやすく、授業のポイントをイメージできるようになった。

「事後協議用シート(2020)」の内容は、「学習指導略案」の項目と連動させ、「学習活動に関する分析」や「児童生徒の目標達成度の評価」に的を絞った。また、小・中・高の系統性を考え、縦割りの編成のグループ協議とした。その結果、事後協議の内容を整理し、焦点化することができ、小・中・高の学習の系統性を学校全体で考える機会となった（カリキュラムマネジメント）。

今後の検討課題として、「新・学習過程分析表(2020)」改善に向けて、特に支援度の高い児童生徒に対し、深い学びの項目の内容まで結び付けられるかどうかという点ではまだまだ不足している。どの活動が深い学びの項目と結びつくのか、どこを深い学びと捉えるのか、より達成可能な項目を設定してはどうかなど、どこをどう改善していけばよいかを今後も継続して検討していく必要があると考えられる。

実際の生活の場面の「応用」「般化」の確認については、今年から取り組んだ全教科の授業を通して、各学部、各学年、各クラスとも「主体的」「対話的」「深い学び」の取組が授業の中で学び得た知識や技能を実際の日常生活の場面でも「応用」「般化」ができたという願いを込めて授業に取り組んできたと思う。今後、全教科の授業以外の実際の生活の場面でも児童生徒が力を発揮した良い事例があれば、それを記録しまとめていくことも大切であるとする。

寄宿舎からは、本年度も昨年度に引き続き「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」を研究テーマとし、それぞれのホームが課題を挙げて取り組んだことが報告された。

報告内容は、3ホームの実践で共通しているのは、コロナ禍による「新しい生活様式」の中で、感染症対策だけにとどまらず、友達との「関わり」や「つながり」を大切にした仲間づくりを大きな柱とし支援していることである。それによって、自分で考えたり（主体的）、友達と言葉を掛け合ったり（対話的）、寄宿舍以外の場所でも感染症対策を心掛けたり（深い学び）する力につながっていると考える。

本年度「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」の研究を継続して4年間目が経過した。コロナ禍の中、4月、5月に思うように授業研が実施できなかったが、6月から、通常通り授業研が実施できるようになり、全教師が「全教科」での授業研の取組を行った。本年度の各学部の実施状況は、小学部では、（研究授業研2回、公開授業研16回）その内訳は、生活単元学習13回、音楽1回、国語・算数科4回の授業研を実施できた。

中学部では、（研究授業研2回、公開授業研16回）その内訳は、生活単元学習4回、音楽1回、国語・数学科5回、保健学習2回、体育4回、美術科1回、総合的な学習の時間1回の授業研を実施できた。

高等部では、（研究授業研2回、公開授業研24回）その内訳は、生活単元学習5回、音楽2回、国語・数学科5回、保健学習1回、体育5回、美術科2回、総合的な探究の時間1回、作業学習5回（受注サービス作業1、リサイクル作業1、農産園芸作業2、コンクリート・ブロック作業1）の授業研を実施できた。

各学部の授業研の取組から、「学習過程分析表(2020)」を活用し、新しい「学習指導略案」を使って、授業づくり、授業改善、授業反省会を行ってきたことで、どの教師も「主体的・対話的で深い学び」を取り入れ、授業の質の向上につながってきていると強く感じる。本来は、生活単元学習の授業改善で作成した「学習過程分析表」を本年度は、どの「教科」でも活用したところ、生活単元学習の授業と同様に「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について学習活動を整理して考えることができ、さらに、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点が学習活動に含まれているかチェックすることもできた。「学習過程分析表」の効果は、どの「教科」でも確認され、授業改善におけるツールとして活用できることが証明された。

以上のように全校一丸となって「全教科」での授業研を実施できたことは、本校の大きな知的財産となった。

最後に「学習過程分析表」については、各項目の改善はもちろんのこと、特に「深い学び」の視点をどのように授業者がとらえ学習活動を設定すべきか、また発達年齢や支援度との関連からどのように整理すべきか等について引き続き検討していく必要性が課題として残された。

以上、各学部・寄宿舍からの報告を受け、今後もより良い実践につながるように継続した取組を進めつつ、明らかになった課題について来年度も検討を進めていきたい。

令和 2（2021）年 3 月 発行

高知県立日高特別支援学校

〒781-2151 高知県高岡郡日高村下分 60 番地

T E L 0889 - 24 - 5306

F A X 0889 - 24 - 5308

E-mail hidaka-s@kochinet.ed.jp

<http://www.kochinet.ed.jp/hidaka-s/>